松本市文化財調査報告 No.38

松本市島立南栗遺跡

——緊急発掘調査報告書——

信州大学附属図書館
受入
雑誌

1986・3
長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

松本市島立南栗遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1986・3
長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

序

この遺跡調査は中央自動車道長野線の建設と共に高速道関連ほ場整備事業島立地区が区画整理工事を施工するに先立ち緊急発掘調査し記録保存することゝなったものであります。

調査の実施は松本市教育委員会に全面的に委託し発掘調査が行なわれました。

この間ほ場の実施箇所の追加等もあり真夏の炎天下での調査から霜の下りる頃までの発掘とその労苦は並々ならぬものでございました。その結果古墳時代から平安時代に亘る数多くの遺構・遺物が出土し地区の歴史を知るうえで貴重な資料となることゝ思います。

この発掘調査が計画どおり完了できましたことは、県・市・教育委員会の適切なご指導とお忙しい中、調査団に参画され、発掘調査にあたられた皆様のご尽力のたまものと感謝しております。

なお遺跡発掘にあたり、5月より支障なく調査が行なわれましたことは、島立土地改良区の役員、地元関係者のご協力とご理解によるものであり衷心より感謝の意を表します。

昭和61年3月

長野県中信土地改良事務所長　大山忠清

序

島立南栗地区は隣接する北栗地区とともに島立のなかでも南栗・北栗遺跡、水田としての条里的遺構など遺跡の集中する一帯として知られておりました。昭和58年以来行なわれてきた圃場整備事業も徐々に整い当地における調査も３回目を迎え、前回同様緊急発掘調査を実施し記録保存を図る事となりました。

調査は中信土地改良事務所から松本市教育委員会に委託され、市教委職員を中心に地元考古学者、地区の皆様の協力により７月16日から10月４日迄の２ヶ月半に亘り行なわれ、多大な成果をおさめ無事終了することができました。その結果、古墳時代から奈良、平安時代の住居、中世の墓等が多数発見され１昨年以来の調査内容と同様のものではありますがより広範囲に拡がる当時の村のようすの一端をうかがう事ができました。折りしも周辺では中央自動車道工事も大規模に行なわれており、近い将来には地区の様相も一変してしまう時その歴史的記録をとどめておくことは私達に課せられた責務と考えております。又今回の成果と今後の周辺調査とにより一層の島立地区の歴史的解明がなされる事と信じております。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました島立土地改良区をはじめ、島立公民館、南栗公民館、地元のみなさまに心から感謝いたしまして序といたします。

昭和61年３月

松本市教育委員会

教育長　中島俊彦

例　言

1．本書は昭和60年７月16日より10月４日にかけて行なわれた松本市島立南栗遺跡の緊急発掘に関する報告書である。

2．本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。

3．本書の執筆は高桑俊雄を中心として、各調査員が分担し、文責を文末に記した。

4．本書作成に関する作業の分担は次のとおりである。

遺構図トレース：石合英子、高桑俊雄

遺物・図整理：乾　靖子

遺物実測・トレース：竹原　学、小口妙子、山下泰永、直井雅尚（土器）、土橋久子、赤羽包子（鉄器、石器等）

拓影：牒島八重子

写真撮影：神沢昌二郎

一覧表作成：山田真一

5．本書の編集は事務局が行なった。

6．各遺構・遺物の一覧表、観察表は各本文の後に掲載した。

7．調査地周辺では、財団法人長野県埋蔵文化財センターが発掘調査をしており、各種情報を頂いた。記して感謝申し上げる。

8．出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目　次

第1章　調査経過

第1節　事業の経緯と文書記録……3

第2節　調査体制……3

第3節　作業日誌……5

第2章　遺跡の環境

第1節　調査地の位置……9

第2節　地形と地質……9

第3節　周辺遺跡……13

第3章　調査結果

第1節　調査の概要……15

第2節　遺構

1　住居址

① 1号住居址……16　⑧ 8号住居址……25　⑮ 15号住居址……34
② 2号住居址……16　⑨ 9号住居址……25　⑯ 16号住居址……36
③ 3号住居址……18　⑩ 10号住居址……27　⑰ 17号住居址……37
④ 4号住居址……20　⑪ 11号住居址……27　⑱ 18号住居址……37
⑤ 5号住居址……20　⑫ 12号住居址……30　⑲ 19号住居址……39
⑥ 6号住居址……22　⑬ 13号住居址……32　⑳ 20号住居址……39
⑦ 7号住居址……25　⑭ 14号住居址……33

2　建物址・ピット・柵列・礎石……41

3　土壙……57

4　溝……68

5　近世・近代遺構……71

第3節　遺物

1　土器……72

2　銅製品・鉄器・銭……120

3　土製品・石器・石製品……125

第4章　調査のまとめ……129

付　図　　全体図

挿図目次

第1図　調査範囲図……4
第2図　調査地の位置……8
第3図　試掘地点層序……11
第4図　溝と断面……11
第5図　周辺遺跡図……12
第6図　遺構配置図……14
第7図　第1・2号住居址……17
第8図　第3号住居址……18
第9図　第4号住居址……19
第10図　第5号住居址……21
第11図　第6号住居址……23
第12図　第7号住居址……24
第13図　第8・9号住居址……26
第14図　第10号住居址……28
第15図　第11号住居址……29
第16図　第12号住居址……31
第17図　第13号住居址……32
第18図　第14号住居址……33
第19図　第15号住居址……34
第20図　第16号住居址・同遺物出土状況……35
第21図　第17号住居址……36
第22図　第18号住居址……38
第23図　第19・20号住居址……40
第24図　建物址1……46
第25図　建物址2……47
第26図　建物址3……48
第27図　建物址4・5・6……49
第28図　建物址7……51
第29図　建物址8・9……52
第30図　建物址10……53
第31図　建物址11……54
第32図　柵列1・2，礎石……55
第33図　土壙(1)……64
第34図　土壙(2)……65
第35図　土壙(3)……66
第36図　土壙(4)……67
第37図　溝配置図……69
第38図　溝断面図……70
第39図　近世・近代遺構……71
第40図　土器実測図(1)……98
第41図　土器実測図(2)……99
第42図　土器実測図(3)……100
第43図　土器実測図(4)……101
第44図　土器実測図(5)……102
第45図　土器実測図(6)……103
第46図　土器実測図(7)……104
第47図　土器実測図(8)……105
第48図　土器実測図(9)……106
第49図　土器実測図(10)……107
第50図　土器実測図(11)……108
第51図　土器実測図(12)……109
第52図　土器実測図(13)……110
第53図　土器実測図(14)……111
第54図　土器実測図(15)……112
第55図　土器実測図(16)……113
第56図　土器実測図(17)……114
第57図　土器実測図(18)……115
第58図　土器実測図(19)……116
第59図　土器実測図(20)……117
第60図　土器実測図(21)……118
第61図　土器実測図(22)……119
第62図　銅製品・鉄器……123
第63図　銭……124
第64図　土製品・石器……127
第65図　石製品……128

第1章　調　査　経　過

第1節　事業の経緯と文書記録

昭和59年 7 月25日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は中信土地改良事務所花岡主事、市教委神沢外。

昭和60年 1 月 7 日　昭和60年度補助事業計画書提出。

4 月 5 日　昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。

5 月16日　昭和60年度県営ほ場整備事業島立地区南栗遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。

4 月24日　昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

4 月24日　昭和60年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

5 月18日　島立南栗遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

6 月17日　昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

7 月25日　昭和60年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

12月 7 日　島立南栗遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。

昭和61年 1 月17日　昭和60年度県営ほ場整備事業に伴う島立南栗遺跡発掘調査委託契約の変更。

2 月14日　文化財保護事業執行状況調査。調査者は県教委文化課太田喜幸指導主事。

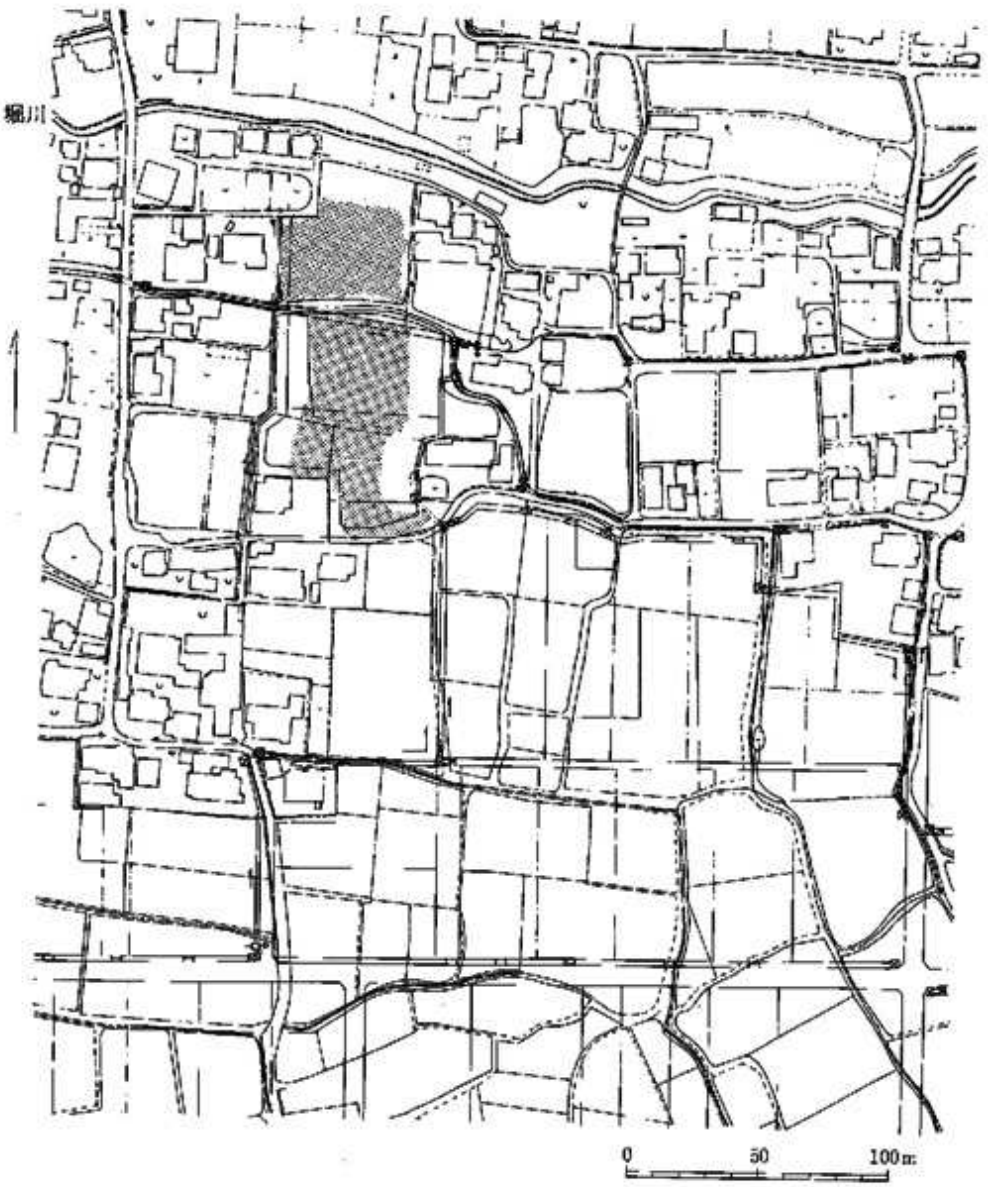
2 月18日　島立南栗遺跡埋蔵物の文化財認定通知。

第2節　調査体制

団長：中島俊彦（教育長）　　担当者：神沢昌二郎

調査員：太田守夫、大久保知巳、西沢寿晃、三村肇、山越正義、横田作重、森義直。

協力者：逢沢浩司郎、赤羽包子、足立佳代、石合英子、石合左千子、市川今朝男、一之瀬充美、乾靖子、上杉明子、上原政子、鵜飼千左子、遠藤悦子、遠藤康子、大久保幸子、大久保静弥、大沢俊孝、太田健、太田新市、大谷成嘉、奥原美和子、小野いつ美、小野勝近、小野まさ子、面手勝仁開嶋八重子、金子かおり、上條勝義、上條豊子、上條真、上條喜子、川鳩恵理子、小島健一、小林悦造、小林周治、小林敏男、小林美知子、佐々木繁司、沢柳秀利、塩野恵子、下川和男、関沢聡、瀬黒セツ子、田口吉重、田中百合子、田渕光章、忠地美智子、橋爪仁、外山晶代、内藤達雄、中島



第1図　調査範囲図

新嗣、中村繁正、萩原愛子、長谷川安子、長谷川由美、浜清和、東雅彦、平田美恵子、福西啓太、穂苅真己、細口嘉則、丸山恵子、丸山直之、丸山正喜、三沢元太郎、三村竜一、牟禮かおり、百瀬一子、山田真一、山辺守孝。

事務局：浜憲幸（社会教育課長）神沢昌二郎（文化係長）岩渕世紀（係長）柳沢忠博、熊谷康治、直井雅尚（主事）高桑俊雄、阿久沢昌子。

第3節　作業日誌

昭和60年7月16日　火　晴　作業開始。1区より重機による検出（26日迄継続）鶴川他4名

7月17日　水　晴　作業員による検出作業開始（29日迄継続）鶴川他11名

7月18日　木　晴　溝1、ピット検出。半割作業開始。鶴川他11名

7月19日　金　晴後雨　プレハブ組立。午後雨のため中止。鶴川他15名

7月22日　月　曇　畝状遺構検出。　鶴川他15名

7月23日　火　曇　検出作業継続。　佐々木他7名

7月24日　水　晴　土壙、ピット多出。　鶴川他20名

7月25日　木　晴　検出作業継続。　佐々木他22名

7月26日　金　晴　重機による作業終了。　鶴川他15名

7月27日　土　晴　土堅く検出作業困難。　鶴川他20名

7月29日　月　晴　散水しながら生居址検出。　佐々木他31名

7月30日　火　晴　土壙1～12、ピット半割継続。　佐々木他30名

7月31日　水　晴　測量杭設定。土壙27迄半割。　佐々木他30名

8月1日　木　晴　杭打継続。土器洗作業開始（9月19日迄継続）　鶴川他30名

8月2日　金　晴　1、2住、畝状遺構掘り下げ。　鶴川他29名

8月3日　土　晴　1、2住継続。3住掘り下げ。土壙44迄半割。建2、溝1土層図作成。　佐々木他35名

8月5日　月　晴　1、2住、建2継続。建1土層図作成。　中島他34名

8月6日　火　曇時々雨　1～3住、建1、2継続。　佐々木他32名

8月7日　水　晴　1～3住継続。5住掘り下げ。　佐々木他34名

8月8日　木　晴　2、3、5住継続。4住掘下げ。土壙、ピット土層図作成。　佐々木他32名

8月9日　金　晴　1～5住継続。1住、建1、土壙41写真。　佐々木他34名

8月10日　土　晴時々雨　2～5住継続。6住掘り下げ。建1平面図作成開始。　佐々木他31名

8月12日　月　雨　雨の為作業中止。午後土器洗。　面手他4名

8月13日　火　晴　3～6住、土壙、ピット継続。2住写真。　佐々木他40名

8月19日　月　晴　6、7、9住継続。敷状遺構遺物取上げ。1区平面図開始。　佐々木他36名

8月20日　火　晴　4～7、9住、1区平面図継続。8住掘り下げ。　鶴川他37名

8月21日　水　晴　4～9住、1区平面図継続。10住掘下げ。2区再検出。　中島他36名

8月22日　木　晴　4～10住継続。土壙写真。　佐々木他37名

8月23日　金　晴　5～10住継続。1住遺物取上げ。3住土層図作成。　佐々木他36名

8月24日　土　晴　3～10住継続。1、2住床面精査。4、5住土層図作成。　佐々木他35名

8月26日　月　晴　7～10住、土壙、ピット継続。3住床面精査。4～6住写真。　鶴川他35名

8月27日　火　晴　3、4、6住遺物取上げ後精査。土壙、ピット継続。11住掘下げ。1、2住写真。2区平面図作成開始。　鶴川他35名

8月28日　水　晴　10、11住継続。9住遺物取上げ。3、5住精査。8住写真。　佐々木他35名

8月29日　木　晴　10、11住継続。4住精査。2区配石遺構土層図、写真。　鶴川他37名

8月30日　金　晴　6～8住遺物取上げ。4、5住写真。　鶴川他35名

8月31日　土　晴　台風の余波で風強く作業中止。午前中測量。　佐々木他30名

9月2日　月　曇　10、11住、土壙、ピット継続。3～5、7住精査。　佐々木他27名

9月3日　火　晴　11住、土壙、ピット継続。6、9住精査。10住土層図作成。　佐々木他28名

9月4日　水　晴　6、8住、3住カマド精査。5住土層図作成。　佐々木他28名

9月5日　木　晴　5、6、9住ピット掘下げ。1区カマド土層図、溝2～8平面図作成。11住南西床面上より編物用石錘出土。　佐々木他28名

9月6日　金　曇　11住、土壙、ピット継続。12住掘下げ。10住遺物取上げ。　鶴川他28名

9月7日　土　曇後雨　10住継続。2区再検出。午後雨のため作業中止。　鶴川他29名

9月9日　月　曇　12住、2区平面図、土層図継続。10住精査。7、11住土層図。　鶴川他27名

9月10日　火　晴　12住、土壙、ピット継続。13住掘下げ。　鶴川他22名

9月11日　水　雨　雨の為作業中止。遺物、図面整理

9月12日　木　曇時々雨　12、13住継続。6、7住、土壙土層図。　鶴川他23名

9月13日　金　曇　11住平面図作成。建3～5ピット半割。　鶴川他25名

9月14日　土　曇　建3～5継続。11住遺物取上げ。12住土層図作成。　鶴川他24名

9月16日　月　雨　雨の為作業中止。遺物、図面整理

9月17日　火　曇　15、16住掘下げ。建3～5土層図作成。　鶴川他22名

9月18日　水　曇時々雨　15、16住、土壙、ピット継続。溝3、5土層図作成。　中島他17名

9月19日　木　曇　17住掘下げ。12住遺物出土状況図、15住土層図作成。　佐々木他18名

9月20日　金　晴　12住遺物取上げ。土壙、ピット平面図作成。　赤羽他2名

9月21日　土　曇　16、17住土層図作成。建3写真。　鶴川他20名

9月23日　月　雨　雨の為作業中止。遺物、図面整理。

9月24日　火　雨　雨の為作業中止。

9月25日　水　曇　18住掘下げ。15、16住遺物取上げ。建6、7土層図作成。建3、4写真。　鶴川他15名

9月26日　木　晴　18住継続。19住掘下げ。12～16住床面精査。　鶴川他20名

9月27日　金　曇　13、16住ピット全掘。11住精査。18住土層図、土壙80平面図。　佐々木他21名

9月28日　土　曇後雨　19住継続。　鶴川他19名

9月30日　月　曇　18、19住、2区平面図継続。5～18住カマド半割。　鶴川他20名

10月1日　火　晴　14住掘下げ。18住遺物取上げ。カマド半割、土層図継続。　佐々木他7名

10月2日　水　晴　19住遺物取上げ、写真。カマド半割、土層図、2区平面図継続。14住を竪穴状遺構となるか。　鶴川他8名

10月3日　木　晴　カマド半割、土層図、2区平面図継続。テント移動。　鶴川他13名

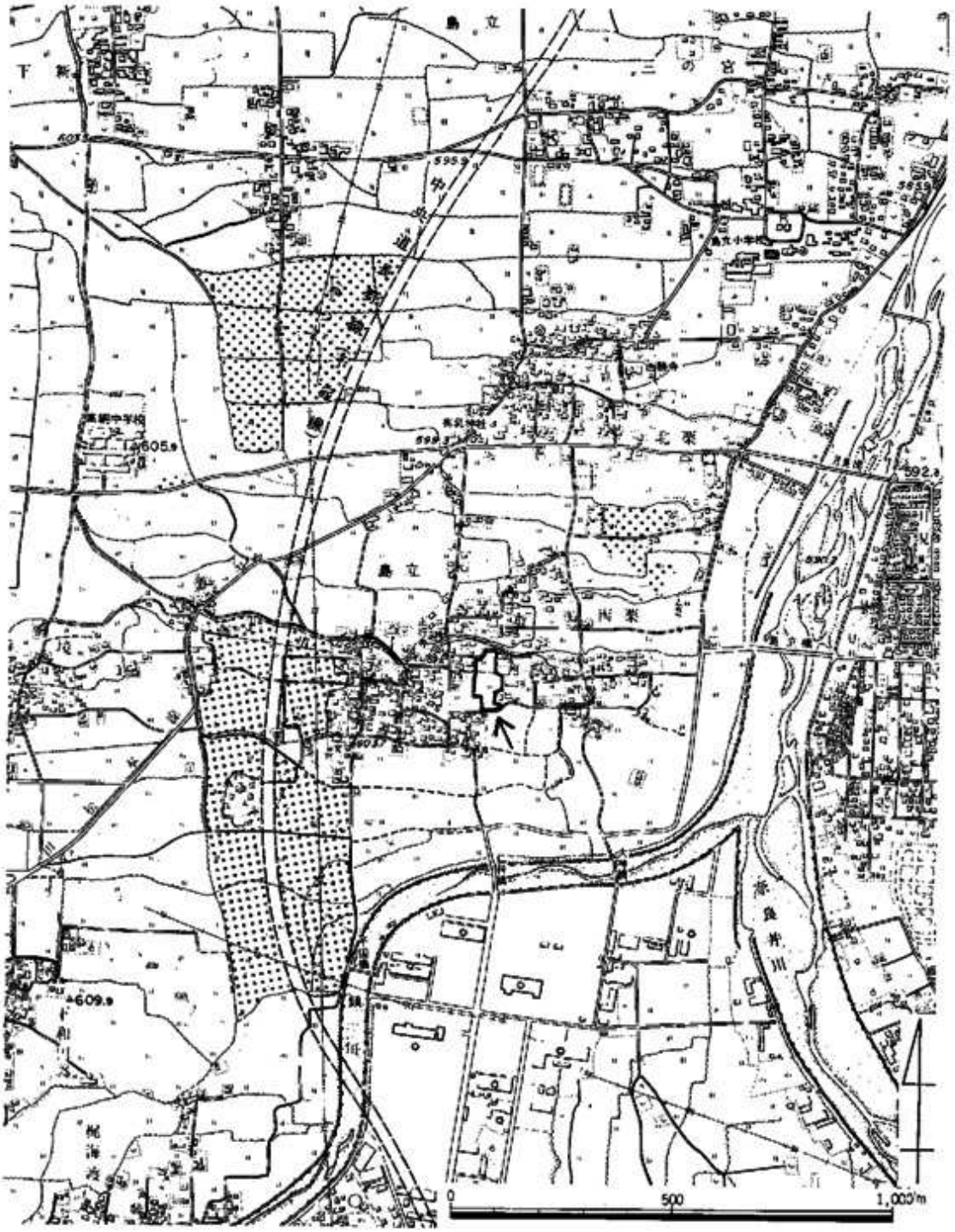
10月4日　金　晴　カマド半割、土層図、2区平面図継続。資材運搬、調査終了。　鶴川他7名

10月9日　水　晴　本日より整理作業に入る。

遺跡遠景（南より）
2地区検出中
1地区掘込開始

調査地（西より）
2地区検出中
2地区掘込中

表土剥ぎ
1地区遺構配置状況
近世・近代遺構



第2図　調査地の位置

第2章　遺跡の環境

第1節　調査地の位置

島立地区は松本平のほぼ中心にあり、以前の調査からもわかる様に、梓川・鎖川等により発達した扇状地上に展開し、以前は野菜の産地として、現在も島内と共に松本平の主たる米作地となっている。今回の調査は南栗遺跡としては3年目であり、圃場整備事業が南栗地籍内にとどまるため、その中央部人家に囲まれた約6000 m²を調査対象地と決定した。ここは以前から堀川添いの地区で縄文土器が出土しているのを見聞きしていたため、北に東下する堀川とは生活道路一つを隔てたのみの場所で、用地内では最も堀川に近い。位置的には南栗遺跡1次調査地(1984年)の東へ500 m、同2次調査地(1985年)の南西400 mにあたり、すぐ西には通称二科道、そして千国道が南北に通じている。

第2節　地形と地質

1　位置と地形

本遺跡は島立南栗集落内に位置している。周辺が人家に囲まれた水田地域で、北側は堀川に沿っている。南栗集落は、北東～東方に緩やかに傾く平たんな地形面（$\frac{5.8}{1000}$）にのっているが、集落内に堀川が次第に河床を深めて（1～2 m）いるため、南北に二分されている。堀川の縁には小段丘が形成され、平たんな地形面に変化を与えている。遺跡は海抜600～601 mで、堀川の南岸沿いに、微地形的には下段（1地区）、上段（2地区）の地形面に分けられ、上段面と下段面との間にはせぎが東流している。上段面は南栗平たん面の高い部分の延長に当る。

もともと南栗集落ののる地形面は、梓川と鎖川によるはん濫原で、扇状地性の堆積である。この堆積の経過については、松本市文化財調査報告 No.32、No.35の南栗・北栗遺跡で述べておいた通りである。広大な梓川扇状地の末端と、これも広大な鎖川扇状地の末端とが接する地域である。その下層は波出礫層・森口礫層、上層は押出面に当る沖積層である。南栗の押出面は、島立地区では最も南にあって古く(梓川は東から北東、北へと流れを移動)、後になって鎖川のはん濫原の堆積に一部覆われた。この接触状況は、上下あるいは交指状と考えられるが、現在一部でしか発見されていない。南栗では集落の南西部（栗林神社付近）に鎖川の堆積物がみられるが、接触状況はまだ不明

な点が多い。

このような状態を後に、奈良井川の浸食の復活により、集落の東側（比高２～３ｍ）を、更に頭部浸食を始めた鎖川により南側（比高１ｍ）を切られ、段丘化した。そのため現在、笹部側からみれば台地状に、和田側からみれば平たん面にみえる。

２　遺跡の地形と堆積層・礫

昭和58年発掘の寄栗遺跡、昭和59年発掘の寄栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、島立条里的遺構はすべて同じ地形面にある。その中で本遺跡と58年南栗遺跡の北部・東部、59年南栗遺跡とは、土層の厚さ、土層の層位と層理、土層中の溝（流れ）と含まれた小・細礫の存在状態、溝（流れ）の東西性などに共通点が多い。58年南栗遺跡は本遺跡の西方500ｍにあり、現在も用水せぎの上流に当り、明らかに連続した地形面を示している。59年遺跡は本遺跡の北東500ｍにある。堀川を消去すれば、その南半分は地形的に連続し、土層や溝の方向などに共通点が多い。調査報告 No.35に述べたように、これらの地域はいずれも、扇状地の堆積の末端の状態を示していると考えられる。すなわち、土層と砂礫層の分帯が明りょうで、土層の深さ・幅が増大し、砂礫層は一般に薄く、小・細礫からなっている。流れは蛇行の形をとっている。

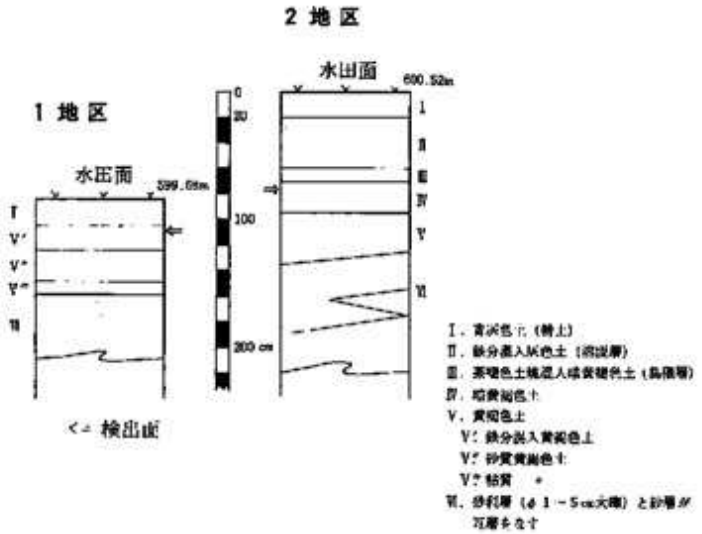
本遺跡でも基底の土層は厚く、黄褐色ローム質混り土で、１地区の北端、２地区の南東端の試掘により、厚さ２ｍの土層（黄褐色～褐色土）と、その下部に小・細礫層がみられた。（第３図）

また２地区の南西～西部では、時代を異にすると思われる、二種類の溝が数条発見された。古墳時代・奈良時代と考られる住居跡・遺構の下位にあるものと、明らかに上位にあって、住居跡・遺構を切っているものとである。方向はいずれも南西・西南西～北東～東北東で大体同じく、蛇行性をもっている。ただ大きな違いは、上位の溝は礫を含まない、砂質の灰色土（青色の部分もあり下部に鉄分が沈着）の堆積物からなっているのに対し、下位の溝は黄褐色土層を薄く覆った砂礫層と、溝の中に砂、小・細礫が交指状あるいは互層になった堆積物とである。

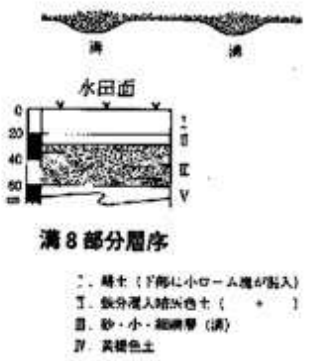
下位の溝の状況を更に述べると次のようである。溝の方向は、ＮＥ70°・60°・40°・80°で蛇行性をもっている。溝の深さは15～70 cm、溝の幅は150～340ｍで黄褐色土層に、椀状の溝をつくっている。溝と溝との間隔は３ｍ前後で、礫の薄層が広がっている。断面は耕土の下に砂・小礫・細礫（礫径0.2～３ cm）が互層あるいは交指状の堆積を示し、明らかに流れとみられる。（第４図参照）

含まれた礫の種類は、梓川と鎖川とに共通する砂岩（硬砂岩）・チャート・粘板岩（頁岩）・けい岩で、花こう岩・安山岩のような礫（梓川）はない。このことから鎖川系とも考えられるが、前述の59年南栗遺跡にも、同様な状態がみられるので断定はできない。

以上の状況から、上位の溝は古墳・奈良時代以後に掘られたものと考えられ、下位の溝（流れ）はそれ以前の地形形成時に関係をもった自然流と考えられる。



第3図　試掘地点層序



溝8部分層序

第4図　溝　と　断　面

3　遺跡の立地

堀川を挟んだ南栗地域は、藤沢宗平氏や地区の人々から、縄文時代遺物の出土地として指摘されてきたところである。2 mに及ぶ黄褐色～褐色土層から遺物の出土が報告されている。本遺跡内も当然その中に入るが、今回の発見は古墳・奈良・平安時代の住居跡等の遺構と中世の遺構である。

既に調査報告No.35で述べたような経過により形成された地形面で、洪水性やはん濫性の状況は認められない。恐らく居住地としての条件を十分に備えていたものと考えられる。

しかし時代により気象をはじめ諸条件が異ってくるから、当然地形や居住条件も変化あるいは変遷があったものと考えられる。堀川は押出面（沖積面）の初期と集落が発達したり、水田が開発された時期の形態とは違ってきたであろう。段丘化の規模もその時代の気候変化に応じ、形成されてきたと思われる。これらを細分して考えることは、現在はできていない。本遺跡に平安時代中～後期を欠いたり、中世の遺構にピットや墳墓しか発見されないなどの環境は、この辺の事情を解明できる資料となるかもしれない。

とにかく本遺跡は、59年南栗・北栗遺跡のIII・IV・V地区とは、堀川を消去して考えると極めて共通性をもつ地形面（地層）で、ある時代（縄文期）には堀川に深く切られていなかった可能性がある。中世近くなって、その変化が次第に大きくなったものと思われる。段丘化についても、鎖川による集落南側の段丘は、最も新しいものであるが、東側の段丘は比高が増加したものか、減少したものかは分かっていない。対岸に広がる低湿地と奈良井川の浸食活動とが深くかかわる問題で、多くの発掘や試掘資料が待たれる。

（太田守夫）

発掘地点
1．南荒遺跡（1983・84）
2．高綱中学校遺跡（1984・85）
3．北栗遺跡（1985）
4．二の宮遺跡
5．新村畠立条里的遺構（1984・85）
6．梶海渡遺跡（1985）
7．下神・町神遺跡（1983）
8．秋葉原遺跡（1982）
9．安塚古墳群（1978）
10．新村遺跡
11．西和田遺跡
12．和田町遺跡
13．畠内遺跡群（1984～1986）
14．下二子遺跡
15．中二子遺跡
16．くまのかわ遺跡（1981）
17．神戸遺跡群（1979）
18．南荒井遺跡
19．太子堂遺跡
20．川西遺跡
21．川西開田遺跡
22．三間沢川左岸遺跡
23．境窟遺跡
（　）内は調査年度
0　500　1,000　2,000m

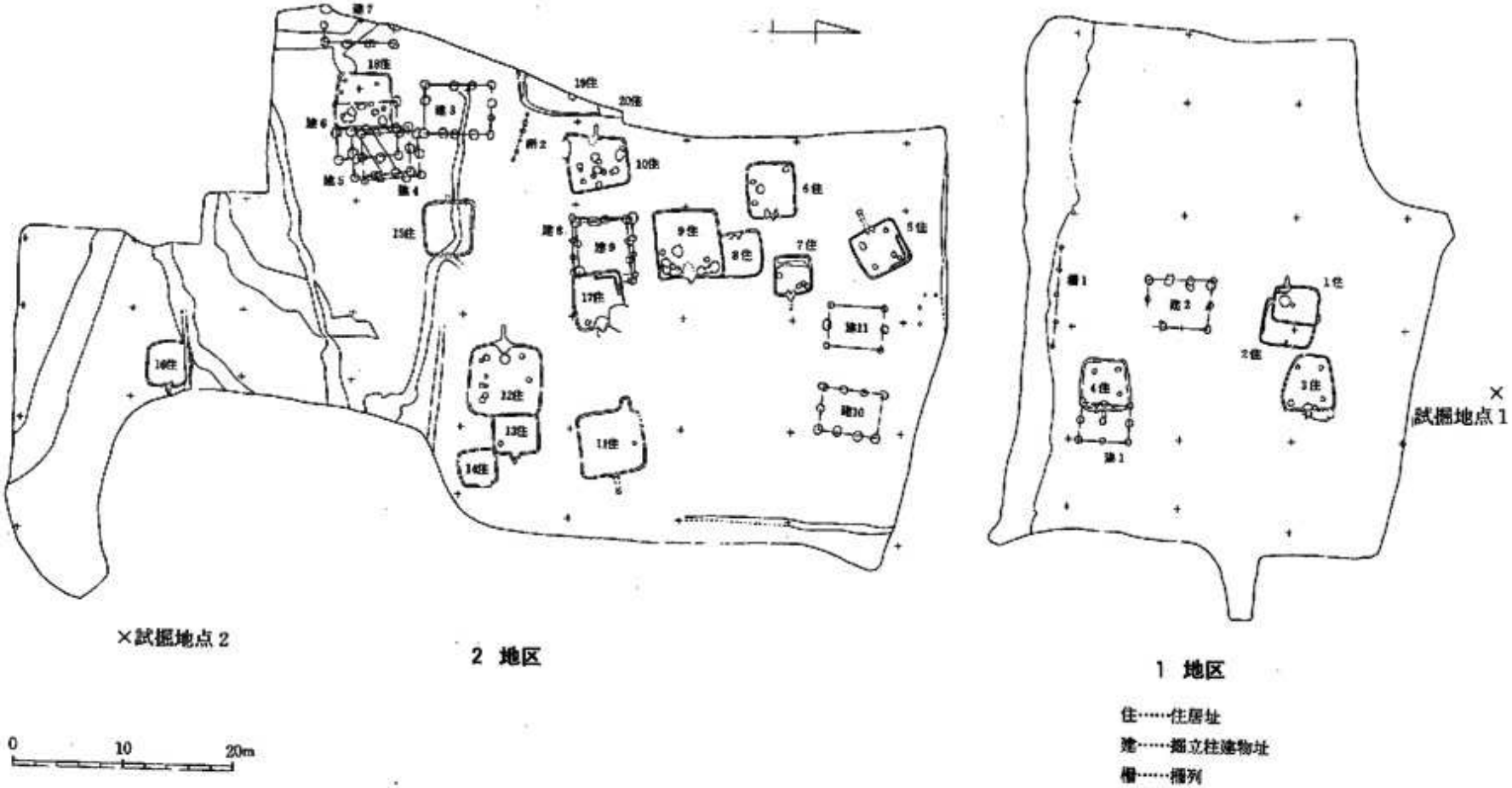
第5図　周辺遺跡図

第3節　周辺遺跡

梓川、鎖川の扇状地奈良井川の河岸段丘上にはいくつもの遺構が発掘され、報告されている。まず縄文時代では昨年度南栗で中期初頭・中期後葉までの遺物を出土し(註1)その範囲は北の三ノ宮辺り迄続くと思われる。ここより南、鎖川を渡て神林、笹賀地区に入ると牛の川、神戸、くまのかわ(註2)等の遺跡がありいずれも中期後葉を中心とした遺物を出土する。弥生時代では昨年埋文センターが堀川左岸で島立では初めての中期の住居址を検出した。古墳時代に入ると三の宮周辺では広い範囲にわたって遺物の出土を聞いており、昨年そして今回も末期ではあるが生居址を検出した。西側の新村では安塚、秋葉原(註3)で末期の古墳から調査されており、地理的にそれに関係する集落がこの島立ではないかとも予想される。奈良、平安時代に入っても島立地区では遺構遺物等に衰えを見せず、むしろ増加さえしており1983・84年と市教委調査分だけでも、高綱中学校、北栗、南栗遺跡島立条里的遺構等で住居址180軒以上、建物址45棟等の遺構を発掘している。近隣の地区でも下二子、中二子、くまのかわ、神戸、そして奈良三彩の小壺を出土した下神、町神(註4)の遺跡があり全般的に増加の傾向を見せている。只西へ行くと和三、新村等でも平安時代の遺物出土を聞いてはいるが、密度的には低いものと予想されそれだけ島立、神林、笹賀地区が生活の適地であると理解出来よう。これだけの集落の生活基盤を支えていたものは以前より新村島立の条里水田と云われ、その解明を行なってはいるが、まだはっきりとした条里としての性格をとらえる事はできないままである。中央自動車道の通過と、それに伴うほ場整備で発掘ラッシュとなっているここ奈良井川左岸地帯は調査すればする程遺跡の範囲が拡がり、古墳時代末～平安時代そして中世に至るまでの遺物が次々発見されている。

ちなみに現在埋文センターで調査している南栗・北栗・三の宮遺跡では、平安時代を中心として弥生時代～近世まで住居址220、建物址60以上を検出し(註5)、八稜鏡・和鏡等の遺物が得られており、今、島立に南北2 km余りの大きなトレンチが入れられている。　（高桑俊雄）

註：　1　松本市教育委員会『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』(1985)
2　松本市教育委員会『牛の川』(1980)・『神戸』(1981)・『くまのかわ』(1982)
3　松本市教育委員会『松本市新村安城古墳群』(1979)・『松本市新村秋葉原遺跡』(1983)
4　松本市教育委員会『松本市下神・町神遺跡』(1984)
5　昭和60年度、埋蔵文化財センターの松本島立地区現地説明会資料等による。



第6図 遺構配置図

第3章　調　査　結　果

第1節　調査の概要

今回の調査において、実際に除土し、遺構検出を行なった実質面積は約4000 m²である。中央やや北寄りに東へ向かって堰が流れており、その北側を1地区、南側を2地区とした。1地区側は以前客土の為土取りをしたとの事で、両地区の比高差は40～70 cmにもなっている。又検出面迄もそれぞれ20～30 cm・50～70 cmと2地区側が深く、1地区は耕作土直下が検出面となった。遺構には古代と中世のものがあるが、両者は厳密には検出可能な面が若干異なり、注意しながらも古代の面迄下げた為一部の浅い中世遺構がほとんど消失してしまった（2地区）事も事実である。

検出した遺構は、住居址20、掘立柱建物址11、土壙130、礎石1、柵列2、溝9、他にピットが524である。切り合い関係が非常に多く、特に中世の遺構同志では土層断面から見ても新旧関係がなかなか把みにくかった。

住居址は遺物より見て7世紀初頭～8世紀初頭—10、9世紀初頭—5、10世紀中頃以降—3と今迄調査した南栗遺跡の内では比較的古いものが多い。掘立柱建物址も切り合い関係からして、住居址と同時期の範囲内にあろう。ところが土壙は130基のほとんどが中世に属し、規模、遺物等から大半が墓地と推測する。その中には3基の火葬墓も見えている。礎石、柵列は共に中世のものと考える。溝は2本が住居址を切っている。

出土した遺物は土器、銅・鉄製品、銭、土・石製品等である。土器には土師器、須恵器、陶器、土師質土器、磁器等があり各器種が見られる。又16号住居址出土遺物はほとんどが床面から得られたもので良好な一括資料となろう。鉄器には斧、刀子、火打金具、釘等が見られる。銭は一点を除き、他は土壙からのものである。土・石製品には砥石、石臼、石製鉢等があり、特に石製の鉢には胴部に梵字らしきものが刻まれており特異な遺物である。

以上のことから今回の調査地は古墳時代末期から奈良時代を中心として、平安時代中期頃まで、断続的に集落が営まれ、中世に至って墓域の中心地となったものと考える。これは住居址の隆盛の時期は異なるが、昨年の調査地とほぼ同様の傾向を示している。　　（高桑俊雄）

第2節　遺　　構

1　住居址

第1号住居址

本址は1地区の中央やや北寄り、3住の西に位置する。他遺構との重複関係は、本址が2住を切り、また土壙41・土壙106、近世近代の落ち込みに切られている。住居プランは4.2×3.5mの南北に長軸をとる長方形で、主軸方向はN－87°－Wである。遺構は全体に良好に残存している。壁は垂直に近くしっかりと掘り込まれ、約40cmの深さを測る。床面は黄褐色土中に設けられ、部分的に良好な堅い面を有する。カマドは西壁南端に設けられているが、原形をとどめていない。80×55cmの若干凹む火床面には焼土塊・炭化物を多量に含む暗灰色土が10cm近く堆積していた。煙道は基底部が残存し、長さ100cm幅40cmを測る。深さは壁際で25cmを測り、外方に向かうに従い浅くなる。ピットは2基検出された。P_1は西南コーナー、カマドに接してあり、径55cm、深さ10cmの円形を呈する。内部はカマドの焼土混りの土が覆っている。P_2は床面中央やや西寄りにあり、径35cmの円形の掘り方である。深さは4cm足らずで浅い。この他主柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

遺物は土師器・須恵器があり、カマドからP_1にかけてまとまって出土した。器種は土師器坏・甕小形甕・甑・須恵器坏・蓋・甕・壺がある。量的には土師器甕・小形甕・須恵器坏が多い。

本址は土器よりみて、南栗III期の遺構と推定される。

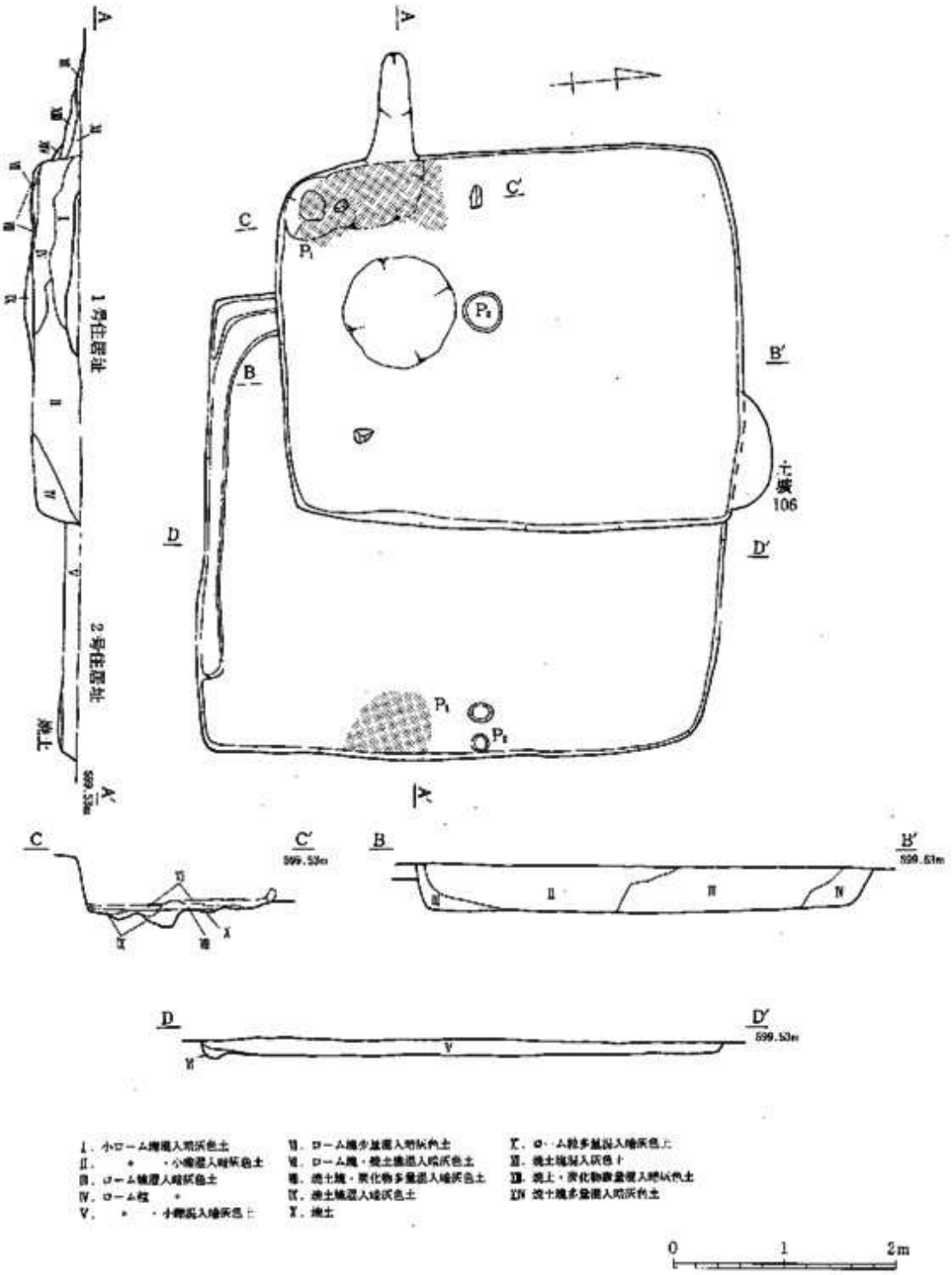
第2号住居址

本址は1地区中央北寄りにあり、1住に西半分を切られている。住居プランは4.7×4.2mのやや南北に長い方形で、N－37°－Wに主軸をおく。壁は切り合い部分を除き完周するものの、削平によりわずか13cmの深さを残すのみである。床面は平坦に掘り込まれ、南壁から北壁にかけて幅15～20cm、深さ5cmの周溝がめぐる。西壁では、周溝と壁の間に幅10cmの面をもつ。

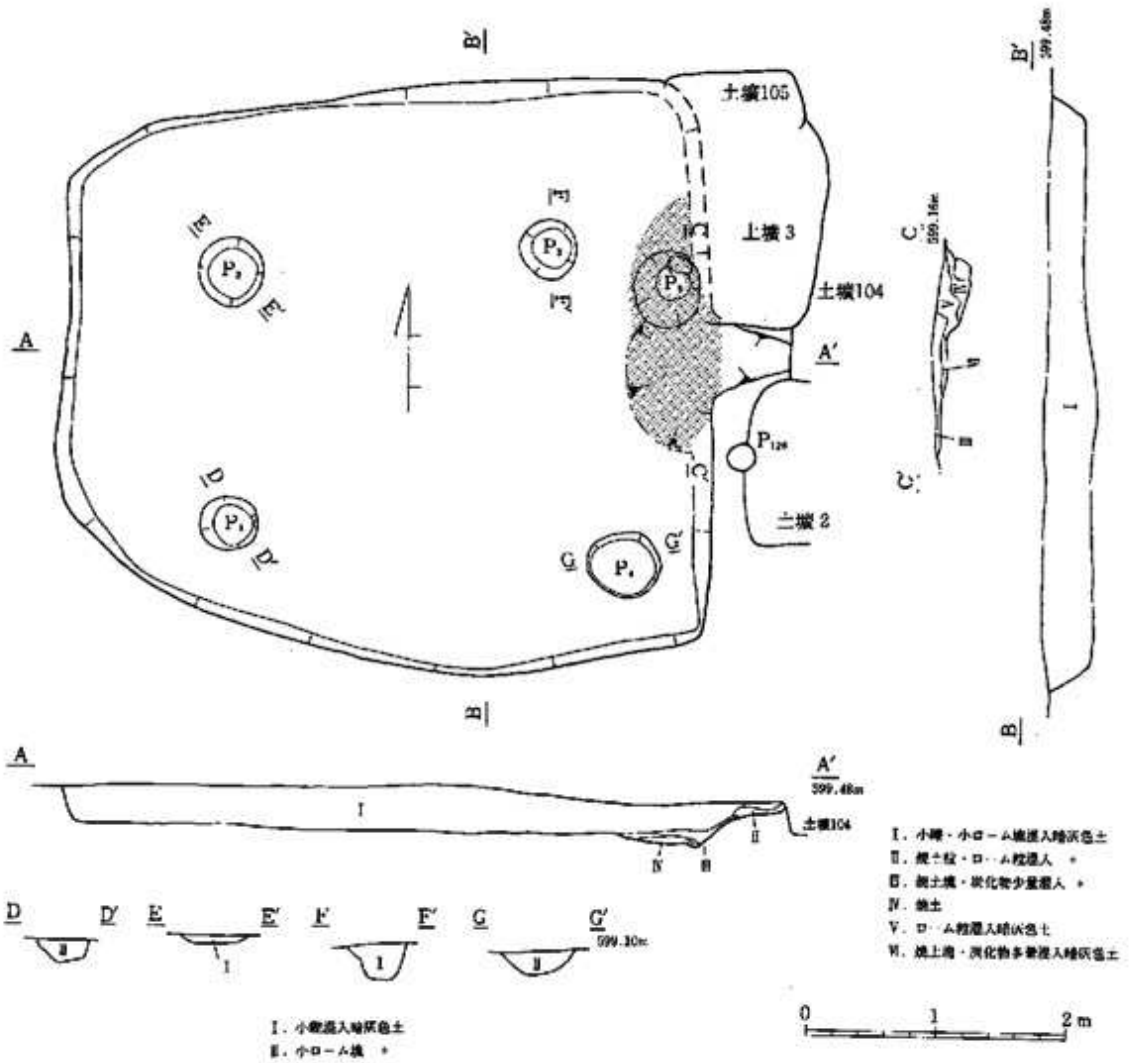
カマドは東壁中央やや南寄りに存在するが、70×55cmの範囲内に焼土が認められるのみで、構造等一切不明である。主柱穴は全く検出されず、カマド北側の壁下に小形のごく浅い円形ピット（P_1、P_2）が東西にならんで掘り込まれているだけであった。

遺物は大変少なく、床～覆土にかけて土師器甕・須恵器坏・甕の破片が出土したのみである。図示できるものは存在しない。

出土遺物及び切り合い関係からみて、本址は南栗III期以前の遺構と考えられる。



第7図　第1・2号住居址



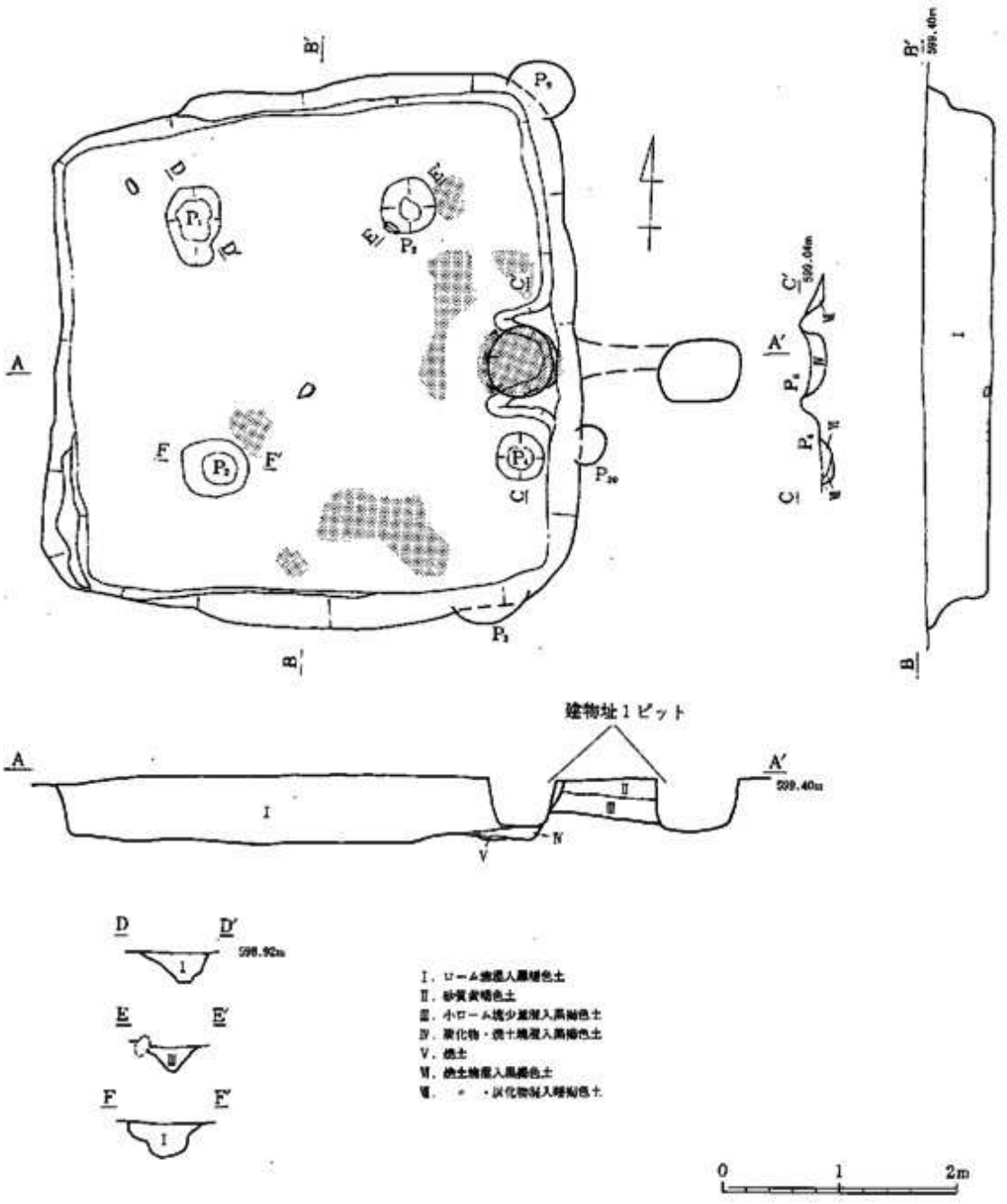
第8図　第3号住居址

第3号住居址

本址は1地区の中央やや北寄りに位置し、西側に隣接して1・2作が存在する。他遺構との切り合いは、本址が土壙2・3・104・105・P_{76}・P_{77}に切られている。住居プランは5.1×4.6 mの東西に長い方形で、主軸方向はN−89°−Eである。

壁は完周し、残存高約30 cmを測る。概して直線的に掘り込まれるが、南壁のみ「く」の字形に屈曲している。床面は平坦で、周溝は検出されなかった。

カマドは東壁中央に構築されているが、原形をとどめていない。火床面は良く焼け、炭化物を多量に混入する暗灰色土が100×50 cmの範囲を覆っていた。煙道は基底部が残存し、壁際で幅60 cm・深さ10 cmを測る。先端は土壙104に切られ、残存長は60 cmである。



I．ローム塊混入黒褐色土
II．砂質黄褐色土
III．小ローム粒少量混入黒褐色土
IV．炭化物・焼土塊混入黒褐色土
V．地山
VI．地山塊混入黒褐色土
VII．　〃　・炭化物混入暗褐色土

第9図　第4号住居址

ピットはP_1～P_6の5基が検出された。このうち主柱穴はP_1からP_4の4本で、P_4のみややコーナーに寄っている。柱間寸法は、P_1—P_2が2 m、P_2—P_3が2.5 mを測る。掘り方は全て円形で、直径45～55 cm、深さ15～20 cmを測る。断面形はすり鉢状を呈する。P_5はカマドの北に接して掘り込まれており、底面には礫1ケがあり、窯土が見られた。

遺物は、P_4周囲の床面より、土師器甕・須恵器坏・甕が出土している。図示できるものは少ない。その他の遺物として溶滓が1点存在する。

本址の帰属時期は遺物よりみて、南栗IV期と考えられる。

第4号住居址

本址は1地区中央やや南東寄りに位置し、建1・P_{30}・P_{57}～P_{60}・P_{144}に切られている。遺構は砂質黄褐色土層中に構築され、良好な保存状況であった。平面形は4.5×4.5 mの方形を呈するが、奥壁がやや長く、台形気味の形態を呈する。主軸方向はN—86°—Eである。

側壁は四方ともやや膨張り気味で、垂直に近く掘り込まれるが、西壁を除き上端は崩れている。床面は凹凸が顕著だが、堅く良好であった。なお、東南部を中心に、焼土・炭化材が薄くみられたが、量は少なく火災住居とは断定しがたい。

カマドは東壁の中央よりやや南に設置されている。上部は建1の柱穴に破壊されるものの、基底部は完存している。構造は粘土カマドで、袖部は地山削り出しにより構築される。燃焼空間は焚口幅60 cm、奥行60 cmを測り、炭化物と焼土塊を多量に含む黒褐色土が堆積している。火床面は水平に近く、住居床面と同じレベルである。そのため、焚口前庭部を5 cm程高め、燃焼空間を仕切っている。奥壁は垂直に立ち上り、火床面より20 cmの高さで煙道が取り付く。煙道は煙出し部が建1に破壊されているものの、天井部が完存し良好である。直径15 cmの筒状掘り方は、煙出しに向って低く傾斜している。

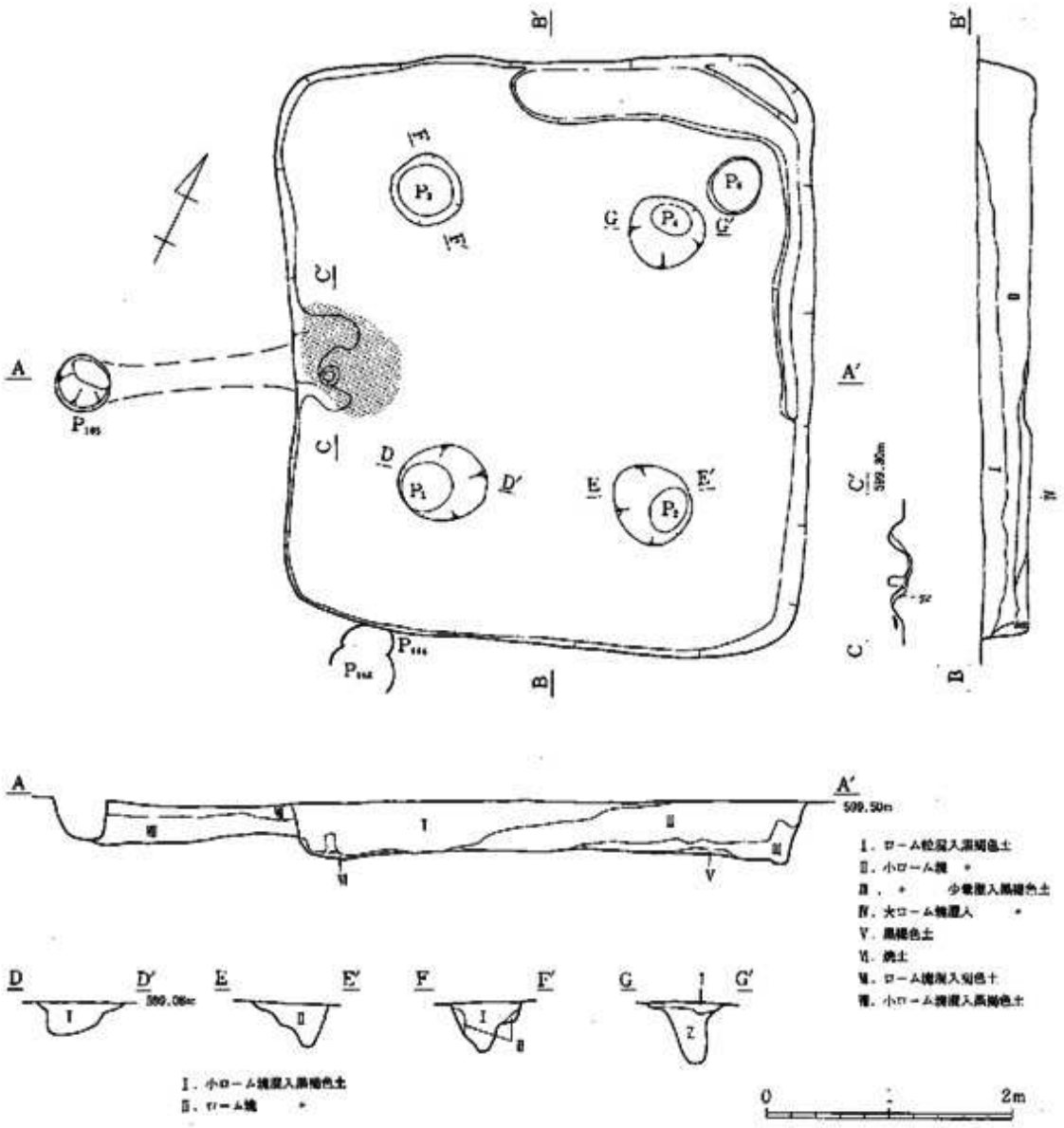
ピットは4基が検出された。このうち、主柱穴はP_1～P_3の3本で、南東側の柱穴は検出されなかった。掘り方は円形を呈し、直径50 cm前後、深さ25 cm程を測る。断面形は、すり鉢形を呈している。P_4はカマド右側にあり、深さは10 cmを測る。その位置、深さから、主柱穴とは考え難い。

遺物は土師器・須恵器が多量に出土している。器形別には、土師器甕・小形甕・小形壺・須恵器坏・蓋・甕・短頸壺・高坏がある。これらのうち、床面遺物としては、P_2付近で須恵器坏が完形で出土した他、カマド周辺により土師器甕・須恵器甕・短頸壺の破片が得られている。

本址の所属時期は、遺物よりみて南栗III期と考えられる。

第5号住居址

本址は2地区の北西隅、建11の西に位置し、P_{444}を切っている。住居プランは主軸をN—64°—Eにとる長方形で、4.9×4.4 mの規模を有する。四壁はまっすぐに掘り込まれ、45 cm程の深さを測る。床面は黄褐色の砂質土中に設けられ、全般に軟かい。P_1からP_2にかけての壁寄りの床面は、当初掘り込んだ面にさらに土を貼り、床面を平坦にしている。P_3から北東コーナーにかけても同じよ



第10図　第５号住居址

うに土を貼っていた。なお北壁中央から東壁中央にかけ、幅15～40 cm、深さ 3 cm の周溝が設けられている。

東壁中央には粘土カマドが設置されている。左右の袖基底部は良好に残存し、焚口幅40 cm、奥行45 cm の燃焼空間を有する。火床面は周囲の床面より 5 cm 程凹み、よく焼けていた。また中央よりやや左に偏して、土師器小形甕（26）が逆位に立っていた。土器はさほど火を受けていないが、支柱に用いられたと考えられる。カマド奥壁は急角度で立ち上り、火床面より20 cm の高さで煙道が取り付く。煙道は全長 2 m を測る。カマド奥壁より一旦緩く上昇した後、再び下降して、直径45 cm、深さ35 cm の煙出しに至る。

床面より検出されたピットは 5 基あり、そのうち主柱穴に P_1～P_4 が該当する。いずれも円形プランで、斜めに掘り込まれる。直径60～70 cm、深さ25～50 cm を測る。

遺物は全般に少ない。土器は土師器甕・須恵器杯・甕・横瓶があるが、須恵器は量的に少ない。その他の遺物としては、紡錘車 1 点・溶滓 2 点がある。このうち紡錘車は、カマドの袖外側に接してあり、溶滓は、南壁中央付近の床面～覆土より出土している。

本址は遺物よりみて、南栗III期の遺構と考えられる。

第 6 号住居址

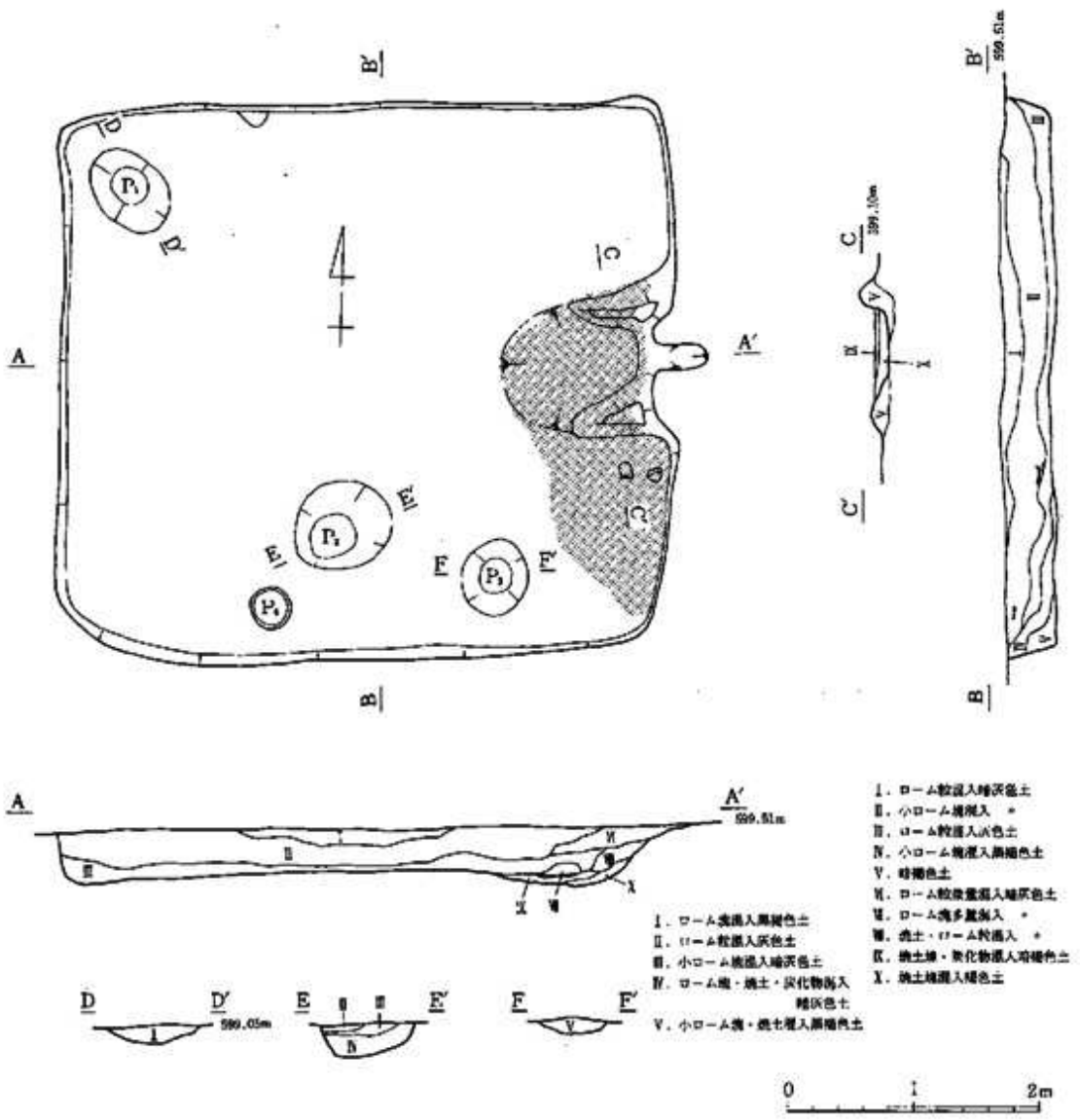
本址は 2 地区西端、7・8 杢の西に位置する。平面形は4.8×4.4 m の方形で、主軸をN—88°—E にとる。壁はまっすぐに掘り込まれ、深さ約35 cm を測る。床面は黄褐色土中にあり、中央部で堅い良好な面をなしていた。

カマドは東壁中央に位置する。黒褐色土で袖部を設けており、焚口幅90 cm、奥行60 cm の燃焼空間を有する。焚口の前庭は広く凹面をなし、火床面に至っている。煙道は基底が長さ40 cm 残存していた。奥壁から緩やかに傾斜して立ち上る。

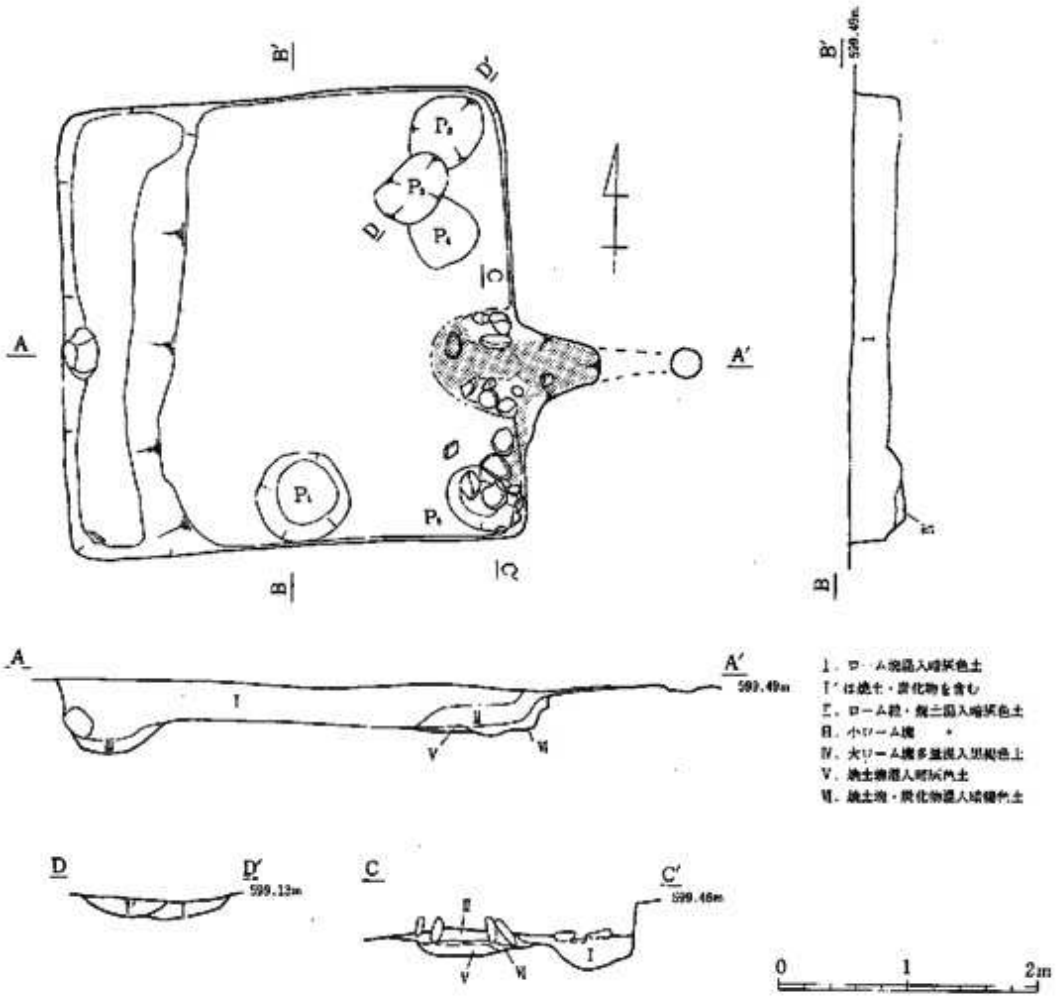
ピットは全部で 4 基検出された。P_1・P_3は径約55 cm の円形ピットで、浅い皿状の断面形を呈する。また P_4の覆土には焼土が混入していた。P_2も前二者と同様なプランを有するが、断面のみやや深く25 cm を測る。覆土下層には焼土・炭化物が混入していた。P_4は径33 cm、深さ 4 cm でごく浅い。この他、明確に主柱穴といえるものは検出されていない。

遺物は覆土上層から床面にかけて多量の土器が出土した。それらの器種としては、土師器杯・埦・皿・甕・小形甕・須恵器杯・盤・灰釉陶器皿・瓶がある。量的には土師器が大半を占め、灰釉陶器は 2 片のみである。また、土師器杯・埦はほとんど全てが内黒であった。なお床面遺物は、カマド両側の床面を中心に、土師器杯類が完形で出土している。この他の遺物としては、不明鉄器 2 点、砥石 3 点、羽口 1 点、土錘 1 点、鉄滓 1 点、溶滓 1 点がある。土錘は覆土下層、鉄滓は南壁下床面より出土している。

遺物よりみて、本址は南栗IX期の遺構と考えられる。


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
P1
P2
P3
P4
599.51m
599.10m
599.05m
I．ローム粒混入暗褐色土
II．小ローム塊混入 〃
III．ローム粒混入灰色土
IV．小ローム塊混入黒褐色土
V．暗褐色土
VI．ローム粒微量混入暗灰色土
VII．ローム塊多量混入 〃
VIII．焼土・ローム粒混入 〃
IX．焼土線・炭化物混入暗褐色土
X．焼土塊混入褐色土
I．ローム塊混入黒褐色土
II．ローム粒混入灰色土
III．小ローム塊混入暗灰色土
IV．ローム塊・焼土・炭化物混入暗灰色土
V．小ローム塊・焼土塊混入黒褐色土
0
1
2m

第11図　第6号住居址



第12図　第７号住居址

第7号住居址

本址は2地区中央北寄り、6住の東に位置する主軸方向N－86°－Eの竪穴住居址である。プランは形の整った方形で、3.5×3.5mの規模を有する。四壁は垂直に掘り込まれ、残存壁高35cmを測る。黄褐色土中に設けられた床面は、中央部で堅く良好であった。また、西壁下には幅70～90cm、床面からの深さ25cmを測る溝状の落ち込みが存在し、内部には焼土を混入する暗灰色土が堆積していた。この落ち込みは床面側からはダラダラと掘り込まれ、壁際には大きな石が落ちこんでいた。周溝にしてはやや大きく、その性格は不明である。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。石芯カマドと考えられ、基底部が残存していた。焚口幅30cm、奥行60cmを測り、火床は若干凹む。奥壁は直に立ち上り、両側袖は20cm大の扁平な礫を2列に立てている。煙道は基底がわずかに残存し、その長さは1.4mを測る。

床面上で検出されたピットはP_1～P_5の5基があるが、皆掘り込みが浅く、明確に主柱穴と言えるものはない。P_5の覆土は焼土を含み扁平な礫が上面よりやや浮いて検出された。

遺物は量的に少ない。床面遺物は、カマドとP_5の間で土師器坏が1点、P_3の西に鉄滓1点があった程度である。土器類は土師器坏のほか、土師器坏・皿・甕・小形甕・須恵器坏・蓋・四耳壺があるが、ほとんどが破片である。本址の帰属時期は遺物よりみて南栗IX期と考えられる。

第8号住居址

本址は2地区西北寄り、7住の南に位置し、南壁を9住に切られている。プランは1辺3.9mの方形を呈し、主軸をN－87°－Eに振っている。覆土は大半を削平され、わずかに残存する壁は深さ12cmを測る。床面は黄褐色土中に掘り込まれ平坦である。また周溝・ピット等は検出されなかった。

カマドは西壁中央にあり、焼土カマドと考えられる。袖部はわずかに残存し、土師器甕片が多量に含まれていた。燃焼空間の大きさは焚口幅約60cm、奥行65cmを測る。火床面は周囲の床より5cm程凹み、奥壁に向って緩やかに立ち上る。煙道は削平により検出されていない。

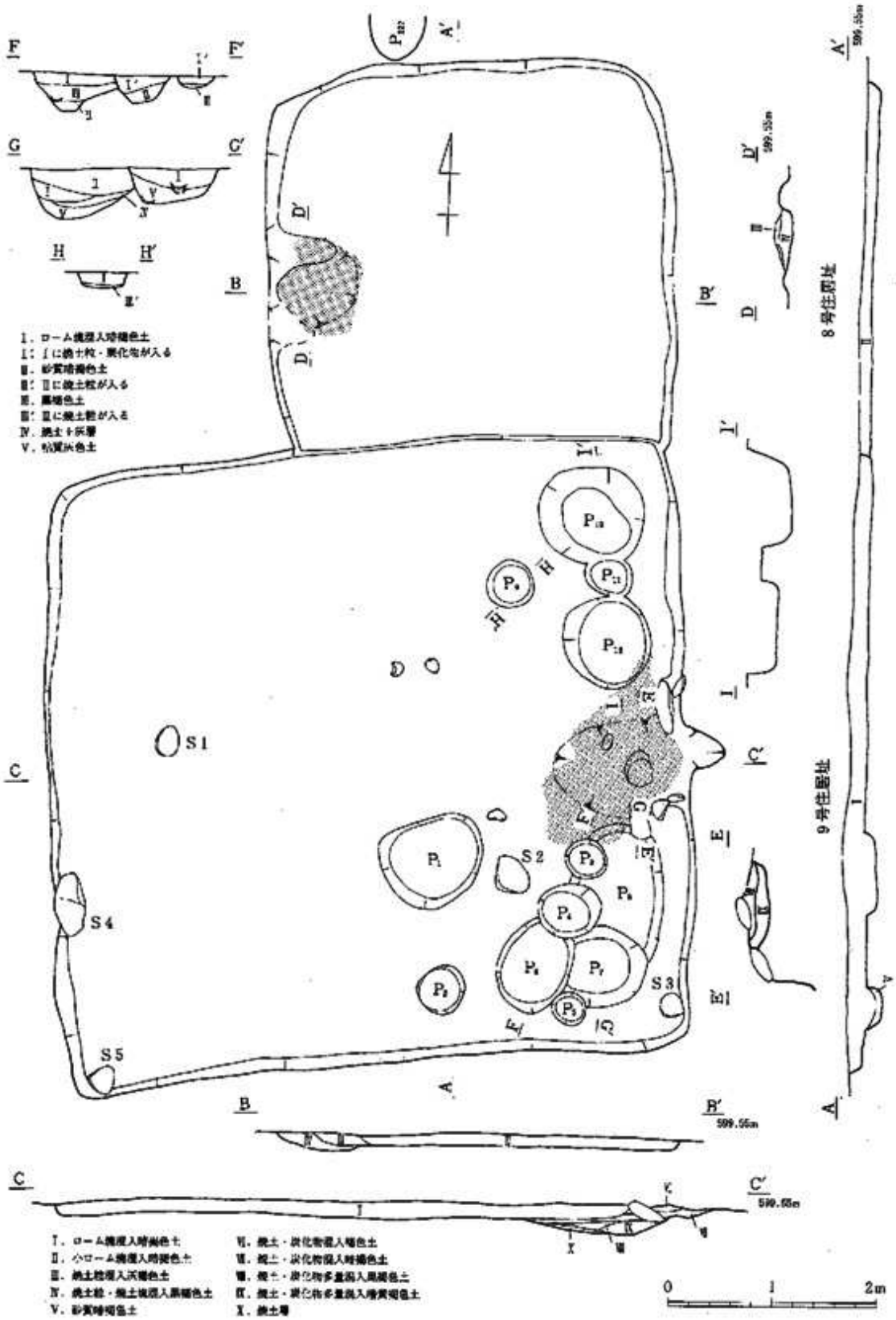
遺物は土器類のみで、量も少ない。東半床面より土師器甕・須恵器坏が出土したほか、土師器小形甕・須恵器蓋が得られている。これらの遺物から本址は南栗III期の遺構と考えられる。

第9号住居址

本址は2地区中央やや西寄り、建9の北にあり、8住を切って構築されている。住居は大形で、6.2×6.0mの方形を呈する。主軸方向はN－85°－Eで、東壁にカマドが取り付く。壁は13cm程しか残さないが、床面は非常に堅く良好であった。

カマドは壁中央に設置されている。石芯カマドかと考えられる。袖には扁平な礫が残存している。火床面は幅80cm、奥行130cmを測り、深さ15cm程の凹面をなす。煙道は立ち上りがわずかに残る。

ピットはすべて床面東半、特にカマドの周辺から多く検出されたが、主柱穴と捉えられるものは見当たらない。プランは長楕円形のP_8を除き、すべて円形を呈する。規模は径80～90cm、深さ30～40cmを測る大形のもの（P_1・P_4・P_6～P_8・P_{10}・P_{12}）と径30～50cm、深さ10～25cmの小形のもの



第13図　第8・9号住居址

(P_2・P_3・P_5・P_9・P_{11}）に分けられる。前者はその大きさ、位置から貯蔵穴と考えられ、後者はそれに付随するものと捉えられよう。これらのピットは切り合いが多く、数回掘り直されたと思われる。その他住居内の施設としてＳ１～５がある。これらの石は上面が平らで、床面をやや掘り凹めて据えられているようであった。配置はＳ１・３が南壁両コーナー、Ｓ４が西壁下に存在し、Ｓ１・２は壁から離れている。これらの石の性格は、Ｓ３・５については前年度調査の75住のように、礎石の可能性もあるが、北壁に対応する石がなく不明である。

遺物はピット内・床面より多量に土器が出土しており、土師器坏・埦・皿・鉢・甕・小形甕・須恵器坏・四耳壺・甕が見られる。特にピット内の遺物は多く、P_8からは完形の坏類が重なって出土している。その他、紡錘車１点がP_{10}より出土し、不明土製品（151）は床面に転がっていた。また鉄製品の出土も多く、床面北西隅より鉄斧、覆土中より鉄鏃が出土した他、刀子・鉄滓が得られている。

本址は、その豊富な遺物より、南栗IX期の遺構と考えられる。

第10号住居址

本址は２地区西端、19住の東に位置する主軸方向Ｎ－85°－Ｅの竪穴住居址で、土壙91・92・P_{295}に切られている。プランは不整方形を呈し、5.5×5.2ｍ（４ｍ）の規模を有する。周壁は30 cm程残存し、床面は概して軟弱であった。

西壁中央に構築されるカマドは、80×70 cmの範囲が焼けて凹面をなしている。煙道は基底が残存し120 cmの長さを測る。

ピットはP_1～P_{12}が検出された。ほとんどが円形を呈する。P_6・P_7は径も大きく、30～40 cm垂直に掘り込まれている。尚、覆土に焼土を含むピットが５基みられた（P_1・P_4・P_5・P_6・P_8）。特にP_4・P_5は、覆土上層に多量の焼土が堆積しており、注意される。

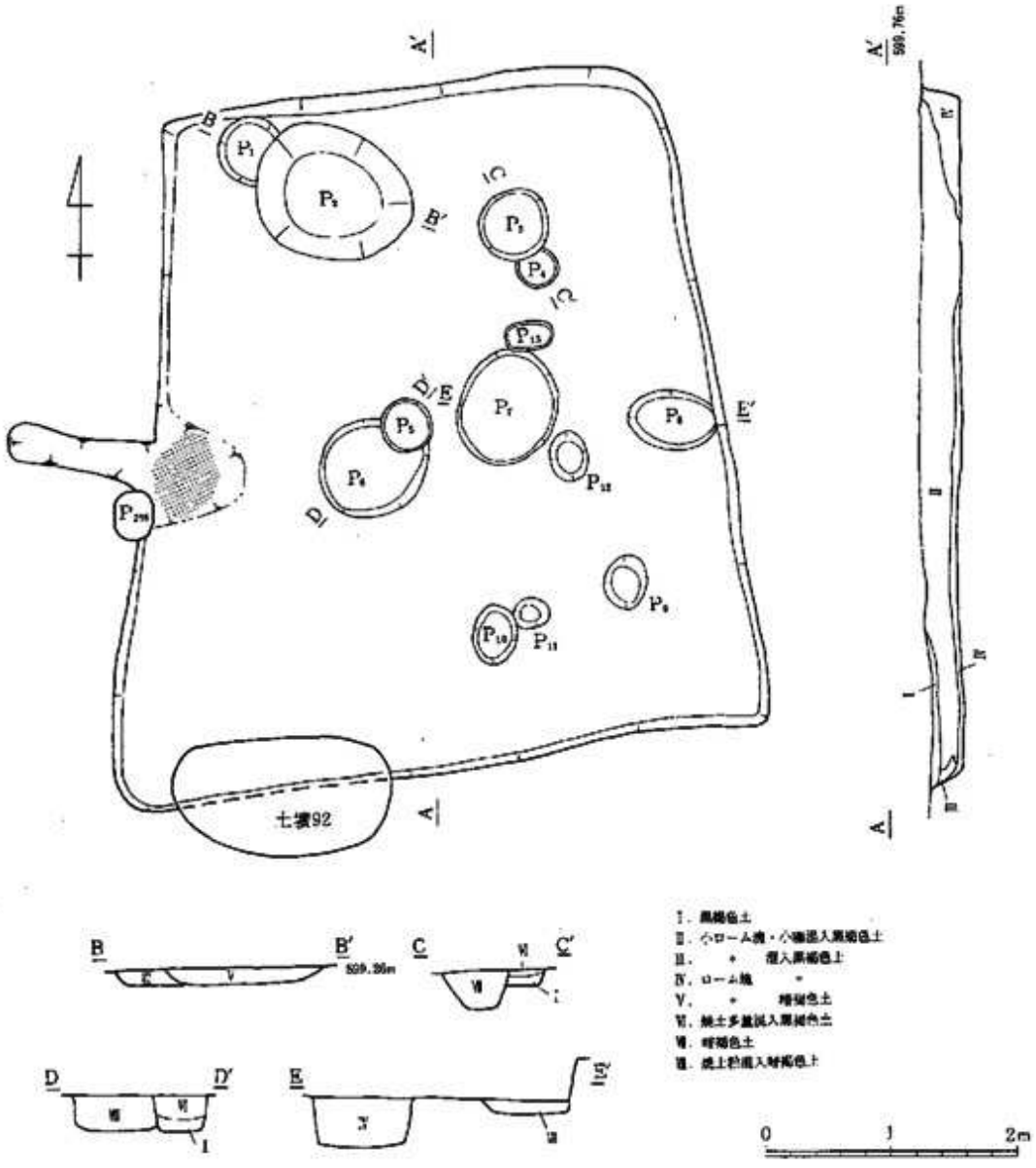
遺物は覆土上層から床面にかけて均一に出土している。土師器坏・甕・須恵器坏・蓋等、土器類に加え、鉄製品６点（刀子・火打金具・針・角釘等）銅製品３点（帯金具？）砥石１点がみられる。このうち銅製品は北東寄りの覆土中より出土している。

遺物より本址は、南栗VI期の生居址と考えられる。

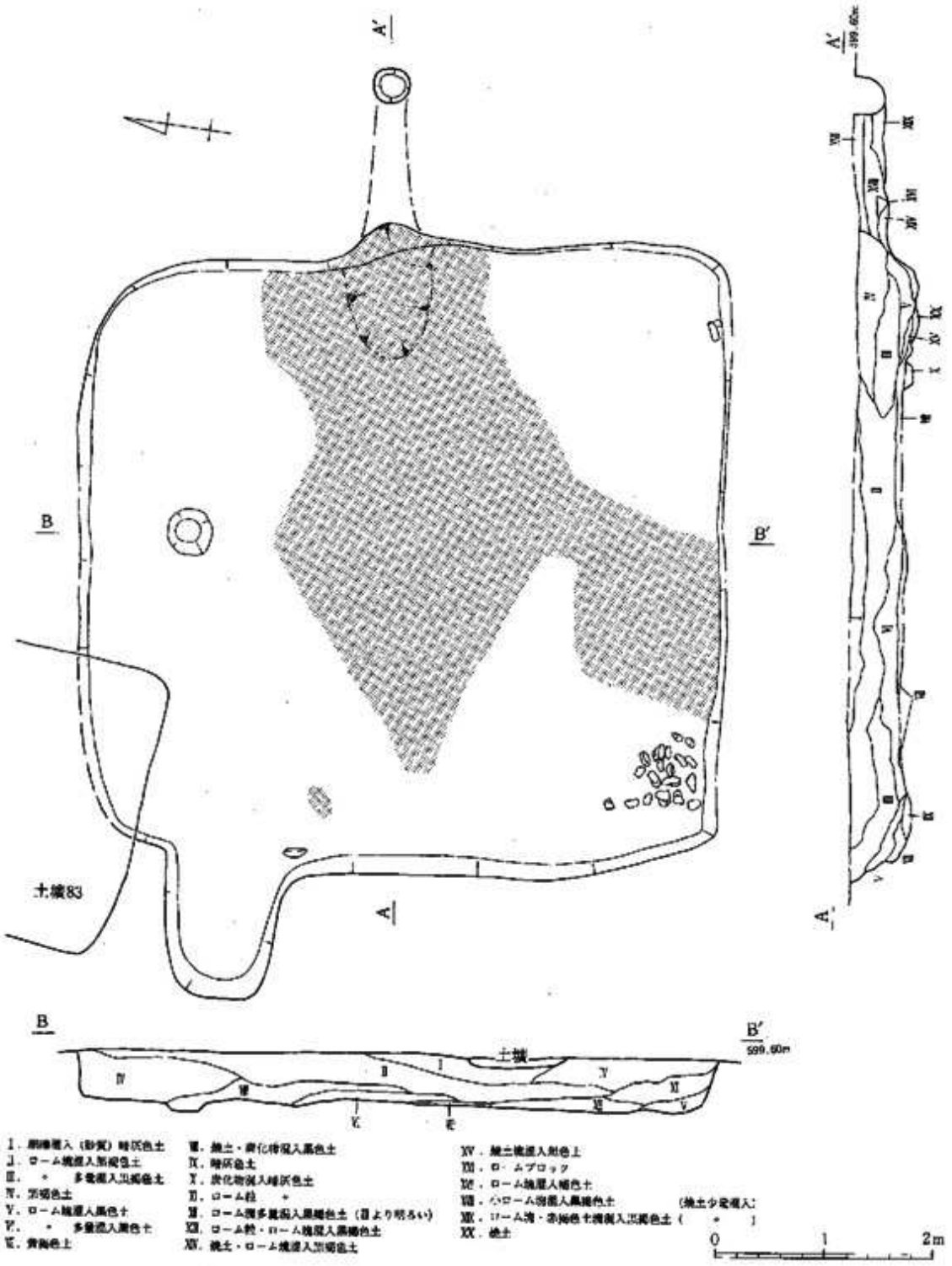
第11号住居址

本址は２地区東寄りに位置し、主軸をＮ－82°－Ｅにおく竪穴住居址である。遺構は土壙83に北西隅を切られるほか、覆土上面にも別の土壙（無番）が掘り込まれている。プランは5.8×5.0ｍを測る大形の方形で、北東隅は他より丸味をおびている。壁は直に立ち上り、現存高40 cmを測る。西壁北端近くには幅1.1ｍ・長さ1.25ｍの方形の張り出しがある。床面は軟弱な砂質土中にあり、高さは住居床面とかわらない。壁は垂直に掘りこまれている。住居床面は中央部で良好な面をなし、カマドから南壁にかけて焼土が広がっている。

カマドは東壁中央に存在するが、原形をとどめていない。100×80 cmを測る火床面は真赤に焼け、



第14図　第10号住居址



第15図　第11号住居址

奥壁は斜めに立ち上っている。煙道は天井・煙出しともに完存し、長さ160 cm を測る。

ピットは検出を行ったが、明確に捉えられるものはなかった。

遺物は土師器坏・甕・把手付甕・須恵器坏・蓋・甑等の土器類がみられる。このうち把手付甕はカマド脇より出土している。また覆土中出土の須恵器坏(191)は、15住出土の1片と接合した。土器以外の遺物では、南西隅より編物用石錘が22個かたまって出土した。

遺物よりみて、本址は南栗Ⅰ期の遺構と考えられ、今回検出の住居址の中では、古い段階に属する。

第12号住居址

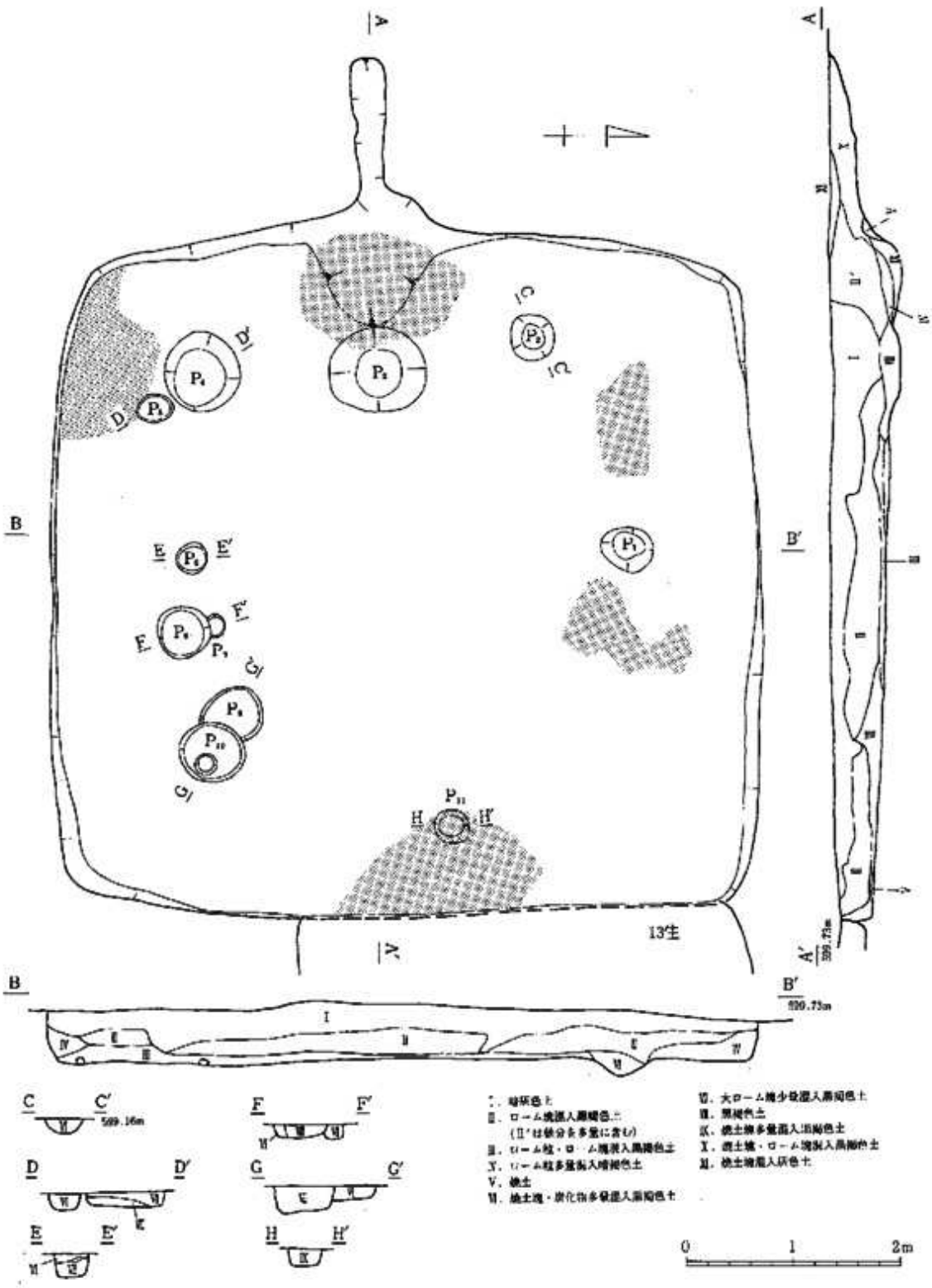
本址は2地区の東寄り、11住の西南に位置する竪穴生居址である。プランは主軸方向N—90°—Wの方形で全住居址中最大である。6.6×6.4 m の規模を有する。他の遺構との切り合い関係をみると、13住が本址東壁上部を切っている。壁は直に掘り込まれ、深さ50 cm を測る。床面は中央部で堅い良好な面をなし、東壁下には1.6×1.0 m の範囲に焼土面が広がっていた。また、南西隅及び北壁寄りの覆土中～下層にも焼土面が3ヶ所検出されている。

西壁の中央に位置するカマドは、石材等全く見られず、皿状に10 cm 程凹む火床面のみ残存していた。煙道は基底部が1.4 m 残存し、カマドに向って緩かに傾斜する。煙道内には土師器の甕数片が貼り付いていた。

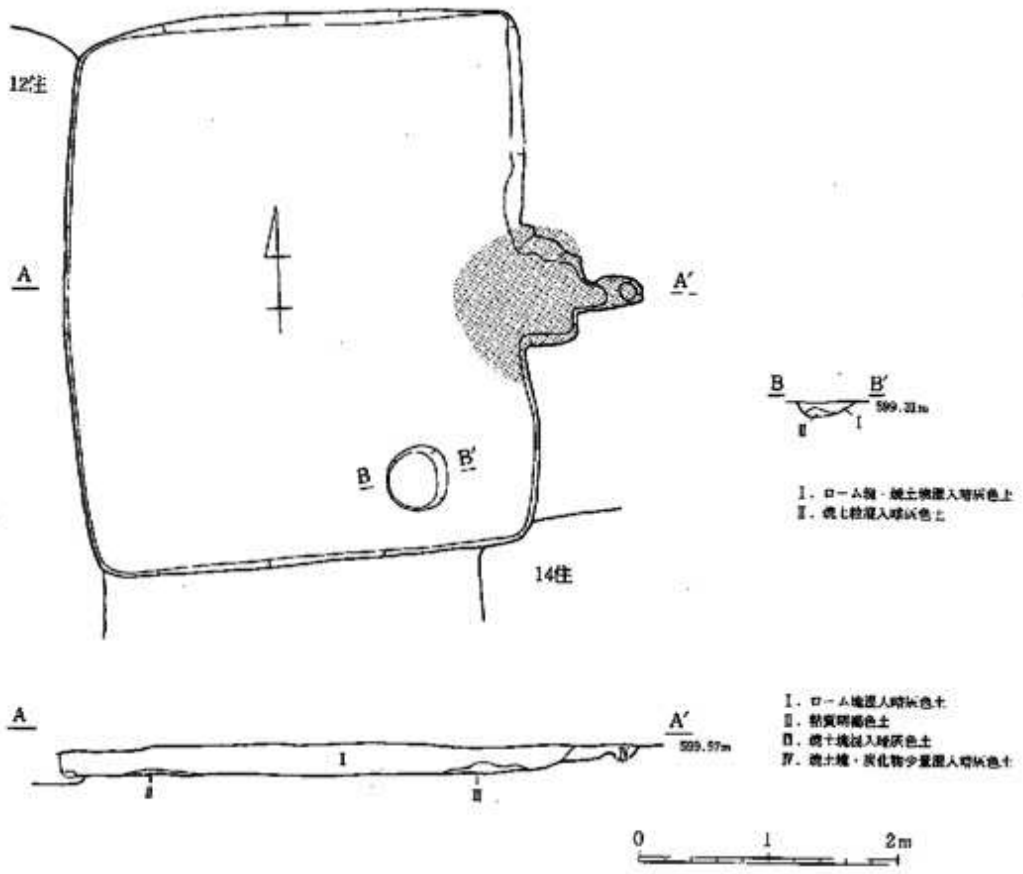
床面より検出されたピットは、総数10基を数える。このうち P_9・P_{10}・P_4は、位置的にみて主柱穴の可能性もあるが、やや浅く、対応する北側のピットが確認されていない。P_3はカマド焚口の正面にあり、一部にカマドの焼土が及ぶ。その他、ほとんどのピットに焼土が混入している点が注意された。

遺物は、土器類が極めて多量に出土している。土師器高坏・甕・小形甕・須恵器坏・蓋・鉢・高坏・横瓶があり、特に高坏は3点が北寄り床面～カマド右側にかけて転がっていた。量的には土師器甕が多く、須恵器は小形品を中心に出土している。その他の遺物としては砥石が2点ある。

本址の帰属時期は、遺物よりみて南栗Ⅰ期と考えられる。11住に続き、古い段階の住居址と言えよう。



第16図　第12号住居址



第17図　第13号住居址

第13号住居址

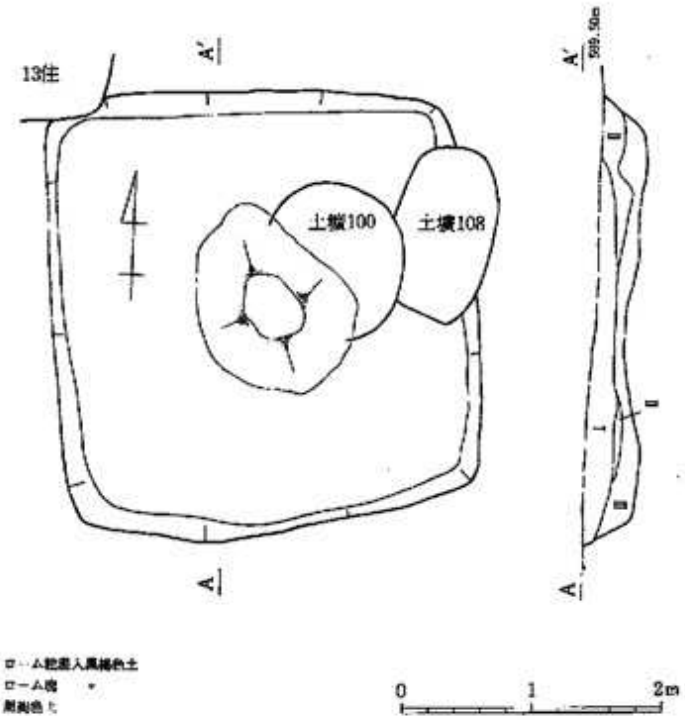
本址は2地区東端に位置し、12住および14住の一部を切って構築されている。主軸をN—90°—Eに振るプランは小形の方形を呈し、4.2×3.5mを測る。四壁は削平により下部を20cm程残すのみであったが、床面は黄色土中に設けられ比較的良好に遺存し、12住との重複部分には貼床がみられた。

東壁中央に存在するカマドは、煙道の下部と火床面が確認された。燃焼部は壁外に張り出し、幅80cm、奥行50cm以上を測る。焼土は火床面から床面にかけて広がっている。煙道の長さは50cmを測り、先端には径20cmでやや深く掘り込まれる煙出しが取り付く。

他の床面施設は、焼土混入暗灰色土を覆土にもつ径47cm、深さ10cmのピットが東西コーナー寄りにあるほか、主柱穴等一切検出されなかった。

遺物もごくわずかで、図示できるものは皆無である。

本址の時期は、わずかに得られた土器片と切り合いより判断して南栗IV期以降と考えられる。



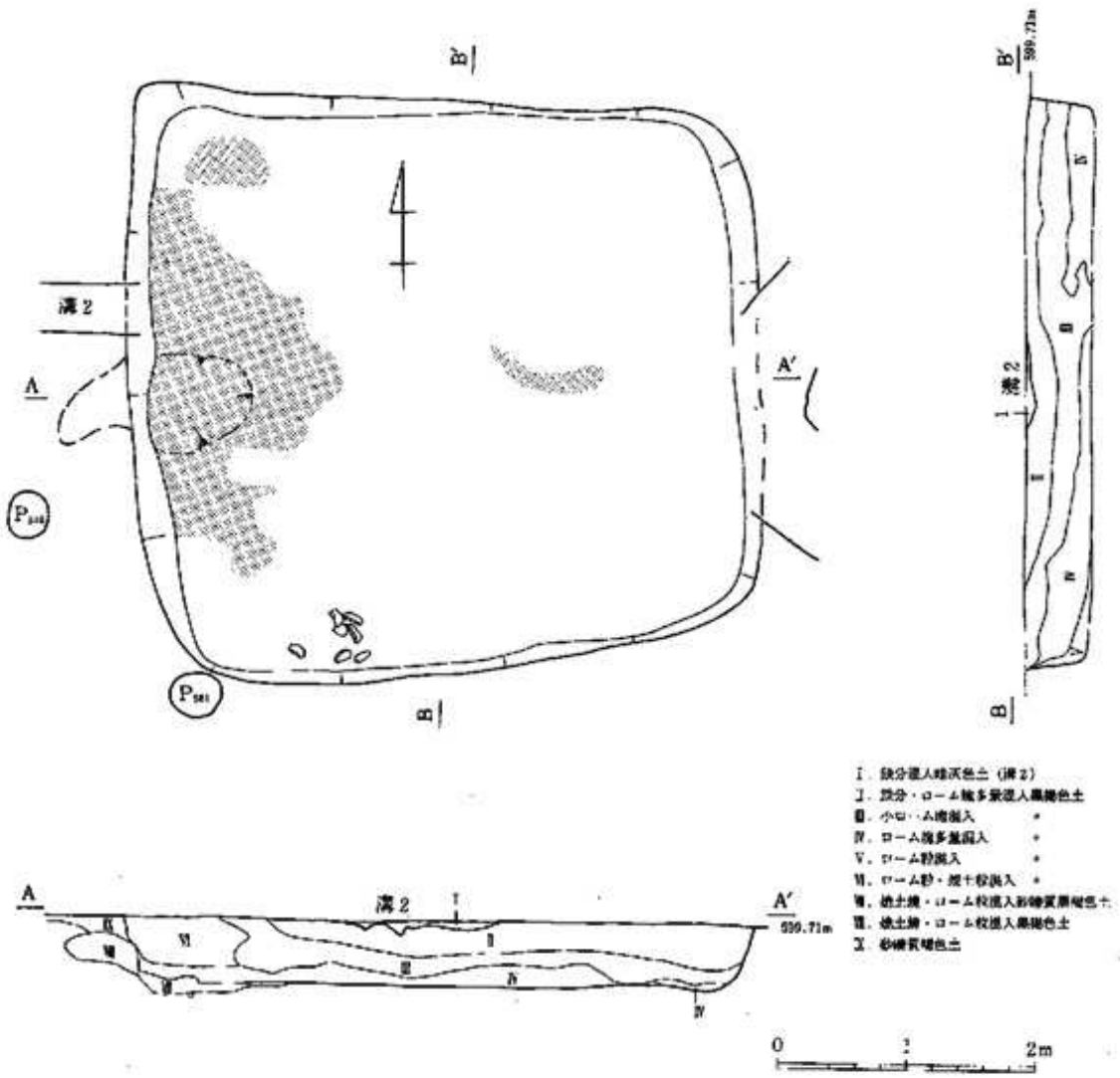
第18図　第14号住居址

第14号住居址

本址は2地区東端に位置し、土壙100・108・13住と重複している。これらの前後関係は、すべて本址に先行し、土壙は床面下まで掘り込まれている。プランは3.5×3.3mの方形を呈し、長軸をN—5°—Wに振っている。四壁は斜めに掘り込まれ、深さ約35cmを測る。黄色土中に設けられた床面は中央部が高く山状に掘り残され、非常に軟弱であった。またピット・カマド等の施設は全く検出されていない。

遺物は量的に少ないが、5点が図示できた。須恵器坏・蓋・土師器脚台？がある。このうち須恵器坏1点は、床面より完形で出土している。

本址は検出当初、その輪郭から小形の住居址とみられた。しかし床面の状態は住居址のそれとは異なり、何らの生活施設も見当たらない。最終的には、南栗IV期に属する大形の土壙と判断するに至った。同様な遺構としては、土壙125があり、形態・規模等類似点が多い。



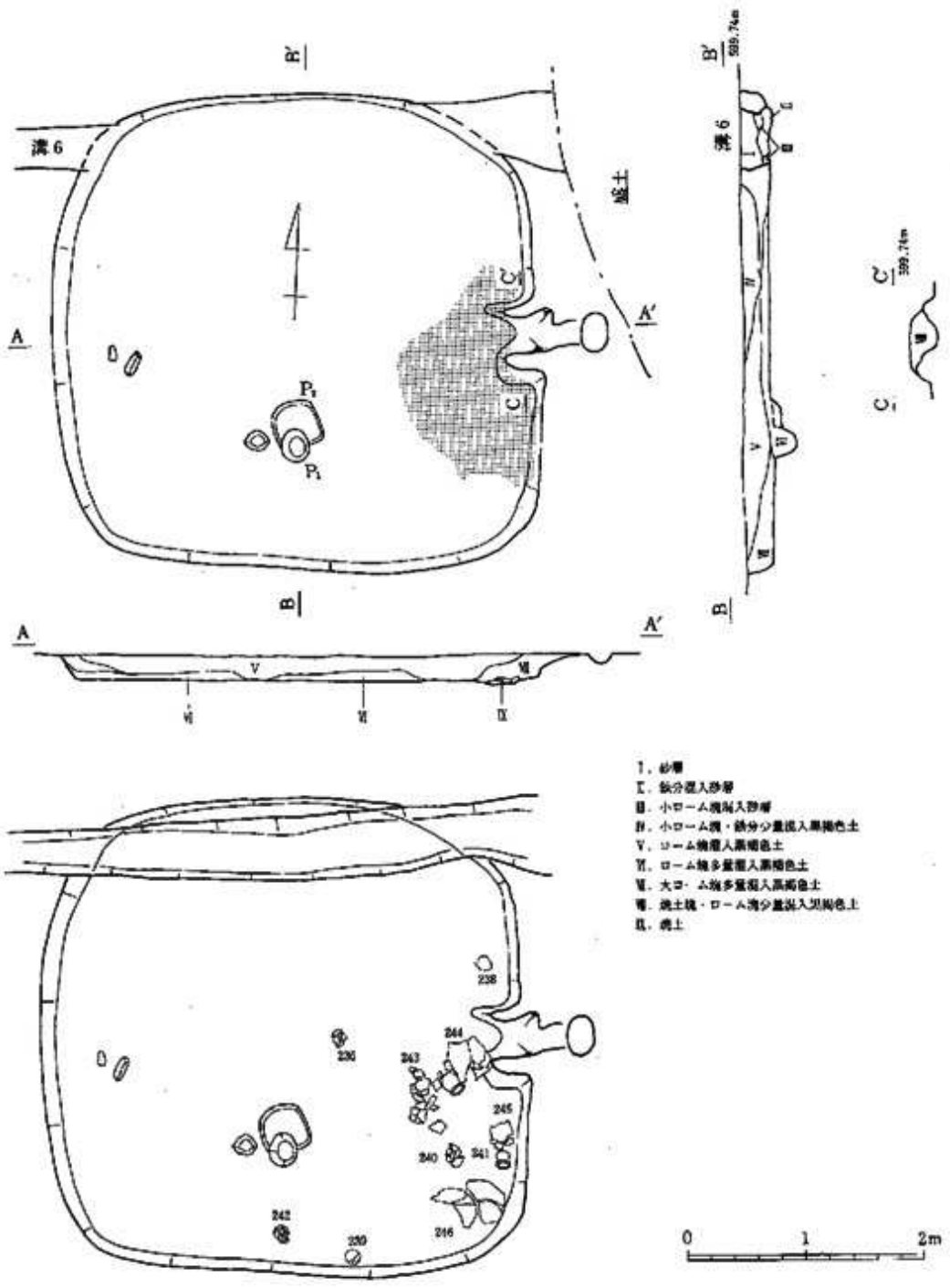
第19図　第15号住居址

第15号住居址

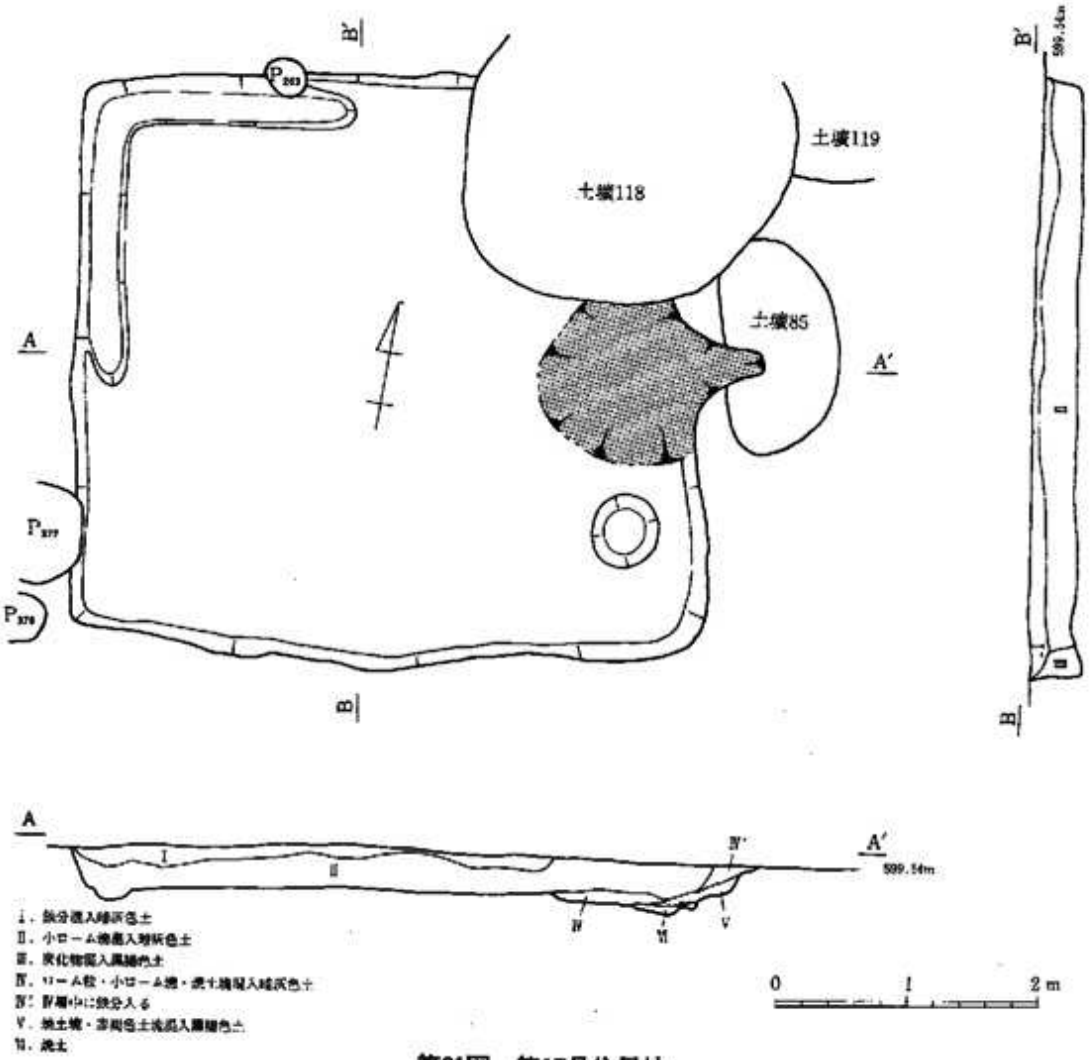
本址は2地区の中央やや南寄りに位置する住居址で、上面を溝2に切られている。プランは4.9×4.5mの方形で、東壁のみやや短い。主軸方向はN—90°—Wで、西壁にカマドを有する。壁は良好に検出されたが、北壁東半のみ崩れによりやや不明瞭であった。残存壁高は50cmを測り、ほぼ直に掘り込まれている。小砂利質の土層中に設けられた床面は、粘質白色土に薄く覆われ、比較的良好な面をなす。また主柱穴等のピットは明確には捉えられなかった。

壁中央のカマドは浅く凹む床面のみ確認され、周囲の灰上まで広く焼土の散布がみられた。煙道は壁中ほどの高さに取り付くが、なぜか奥行50cmのところで止まっている。

遺物は土師器坏・甕・須恵器坏・蓋等の土器類の他、西寄り南壁下より織物用石錘が7個出土している。本址は土器よりみて、南栗II期の遺構と推定される。　（竹原　学）



第20図　第16号住居址・同遺物出土状況



第21図　第17号住居址

第16号住居址

2地区南部に位置する。ここは東側を排土置き場とした為詳しくは分らないが、南側に集中する40ケ程のピットとともに他の遺構とは断絶している。規模は4.1×4.0 m と小形で方形を呈する。主軸方向はN—86°—Eを示す。住居址は溝5の一部を切り、北側を西から東へと溝6が切っていた。検出面は褐色土でローム塊を含む黒褐色土が落ち込んでいる。床面は黄褐色を呈し、中央部はやや固くなってはいるが、周囲は軟弱な状態であった。壁は現高で20～25 cm を測りやはり軟弱である。

カマドは東壁中央にあり、壁の一部を袖として利用している。焚口部はほとんど掘り込まれていない。焼土はカマド袖周囲から南側にかけて床面上に広く見られ、煙道は煙出しと思われるピットまでゆるやかに外へ立ち上がる。

ピットは中央南寄りに2個を検出するが新旧関係があると思われる。

出土遺物は図示したものがほぼ全部であり、他の破片は小片で約20点程しかない。覆土中層からの237の1点を除き、すべて床面上から得られたものである。これらの出土範囲はカマド周囲及び南東四半部分に集中する。まず長胴甕はいずれもカマド前に横転し大破した状態であった。カマド南側には小形甕2点と壺がみられる。又、南東隅には須恵器の大甕がはじけるように広がって割れており、接合した以外の部分は見られず、まるで破損後胴部の一部を容器として使用していたかの如くであった。2点の土師器坏はカマド北側と、南壁際にある。甑も南壁際より得られており、これらは壁際に何らかの所蔵施設があったものと思われる。又、ほかに須恵器蓋が1点中央部より出土した。以上の出土状態などより本址は廃棄の様相と云うより生活状況をそのまま埋没させたものと考える。なお土器以外の遺物は見られなかった。

これらの一括資料より本址は南栗II期の遺構と考える。（高桑俊雄）

第17号住居址

2地区中央、10住の東に位置する竪穴住居址である。他遺構との重複関係は、本址が土壙85を切り、さらに建9・土壙118・P_{169}・P_{377}に切られている。主軸方向N－81°－Eを示す住居のプランは方形を呈し、4.9×4.5mの規模をもっている。土壙118に切られる北東コーナーを除き、壁の遺存は良好で、30cmの高さを残す垂直な面を有する。床は暗褐色土中に設けられるが、北西部のみ黄褐色土中にありやや堅い面をなしていた。またこの部分、すなわち西壁中央～北壁中央にかけては、幅30cm・深さ8cmの周溝がL字形に巡る。カマド右側の浅い円形ピットの他、主柱穴等の施設は検出されていない。

東壁中央にはカマドがあり、一部を土壙に切られている。1.1×0.8mの浅く凹んだ焼土面のほか、煙道が60cm程残存しているだけであった。

遺物の量は全体に少なく、土師器坏・甕・須恵器坏・蓋・甑等の土器類のみ出土している。

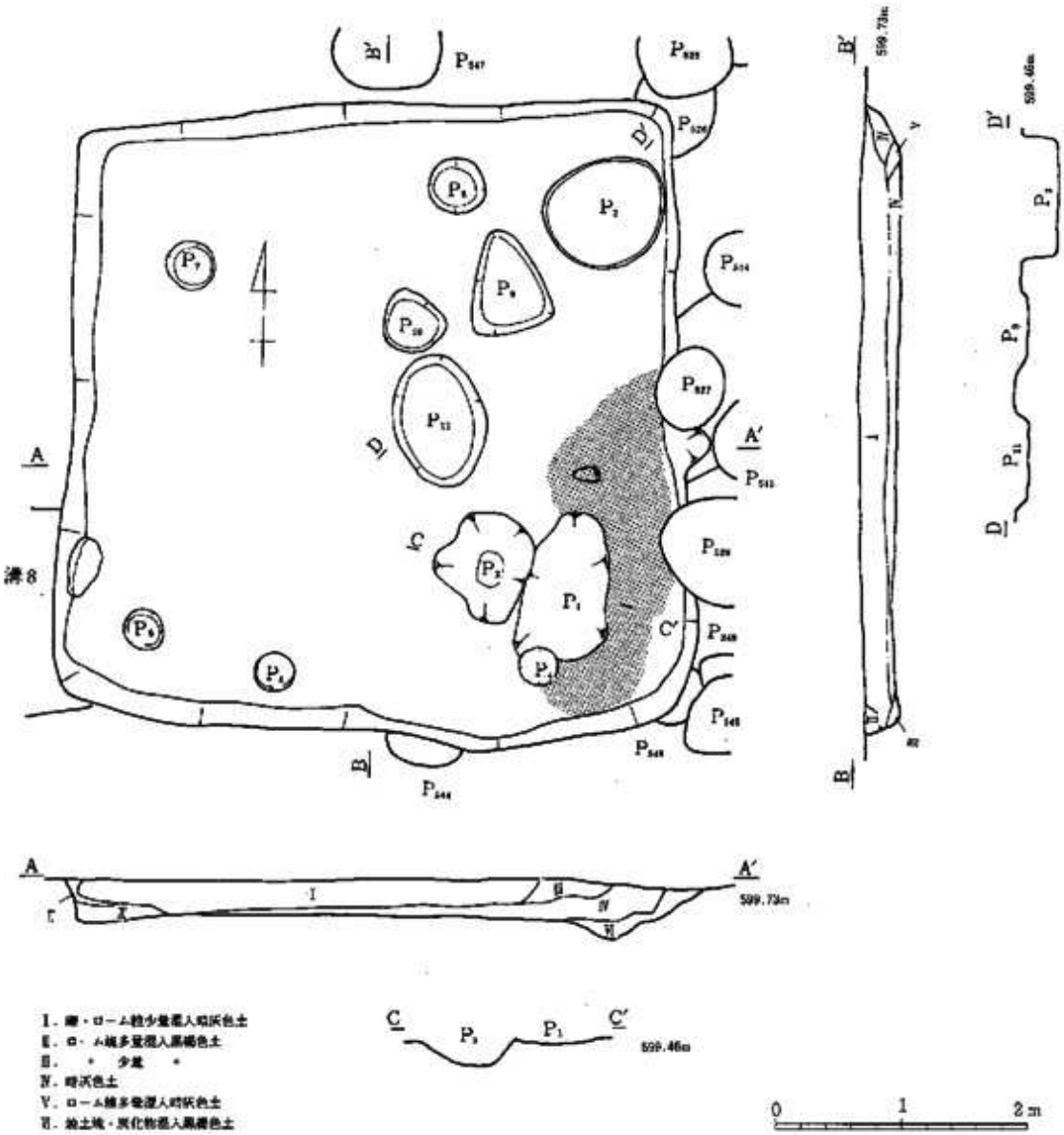
本址は遺物よりみて、南栗VI期の遺構と推定される。

第18号住居址

本址は2地区西南端、建物址の集中する一角に位置する竪穴住居址で、建5・6・溝8と重複している。その前後関係は、本址が建6・溝8を切り、建5に先行する。方形を呈するプランは5.1×5.0mを測り、主軸をN－88°－Eに向けている。壁は特に南側でややなだらかに掘り込まれ、残存高約30cmを測る。黒褐色土中にある床面は、全体に堅く良好である。

カマドは東壁中央にあり、ほとんど原形をとどめていない。わずかに煙道の立ち上りと、13cm程凹んだ床面が認められただけであったが、焼土の散布は南壁下まで及んでいた。

床面より検出されたピットは、大小11基あり、東半部に集中している。このうちP_1・P_3は不定形を呈し、浅くダラダラと掘り込まれている。その他のものはP_9・P_{11}を除き、ほぼ円形を呈し直に掘り込まれている。しかし、深さはP_2が30cmを測るほかは、10cm前後かそれより浅く、主柱穴と言えるものは見当たらない。



第22図　第18号住居址

遺物は、土師器坏・甕・小形甕・須恵器坏・蓋・長頸壺・甕等の土器類に加え、不明鉄器3点・砥石1点が出土している。

本址は遺物よりみて、南栗VI期の遺構と考えられる。

第19号住居址

本址は2地区西端に位置する竪穴生居址で、東方1mには10住が存在している。遺構は大半が盛土下にかかり、また北端は20住に切られている。従ってわずかに東壁～南壁の一部を調査できただけであった。プランは1辺7.5m以上の方形または長方形と考えられ、12住を上回る大形の生居と推定される。主軸の方向は、ほぼ南北にとるものと思われる。壁は深さ60cm近くを測るが、東壁は内側に大きく崩れかかり、床面が壁下にもぐり込むような形で検出された。床面は東壁沿いに1～2mの範囲が調査できた。ゆるやかに西へ傾斜し、南寄りには焼土が100×90cmの範囲に散布していた。また南壁下には、幅25～40cm・床上25～31cmを測るテラス状の高まりがあり、西側盛土下へとのびていた。そのほか焼土面の北より直径50cm・深さ20cmの円形ピットが検出されている。

カマドは東壁には存在していない。他の住居址をみると、東壁か西壁のいずれかにあり、本址の場合は西壁にあるものと考えたい。

遺物は、調査面積の割には多い。土器は覆土下層～床面を中心に、土師器坏・甕・小形甕・須恵器坏・蓋・甕があり、そのほか不明鉄製品が1点出土している。

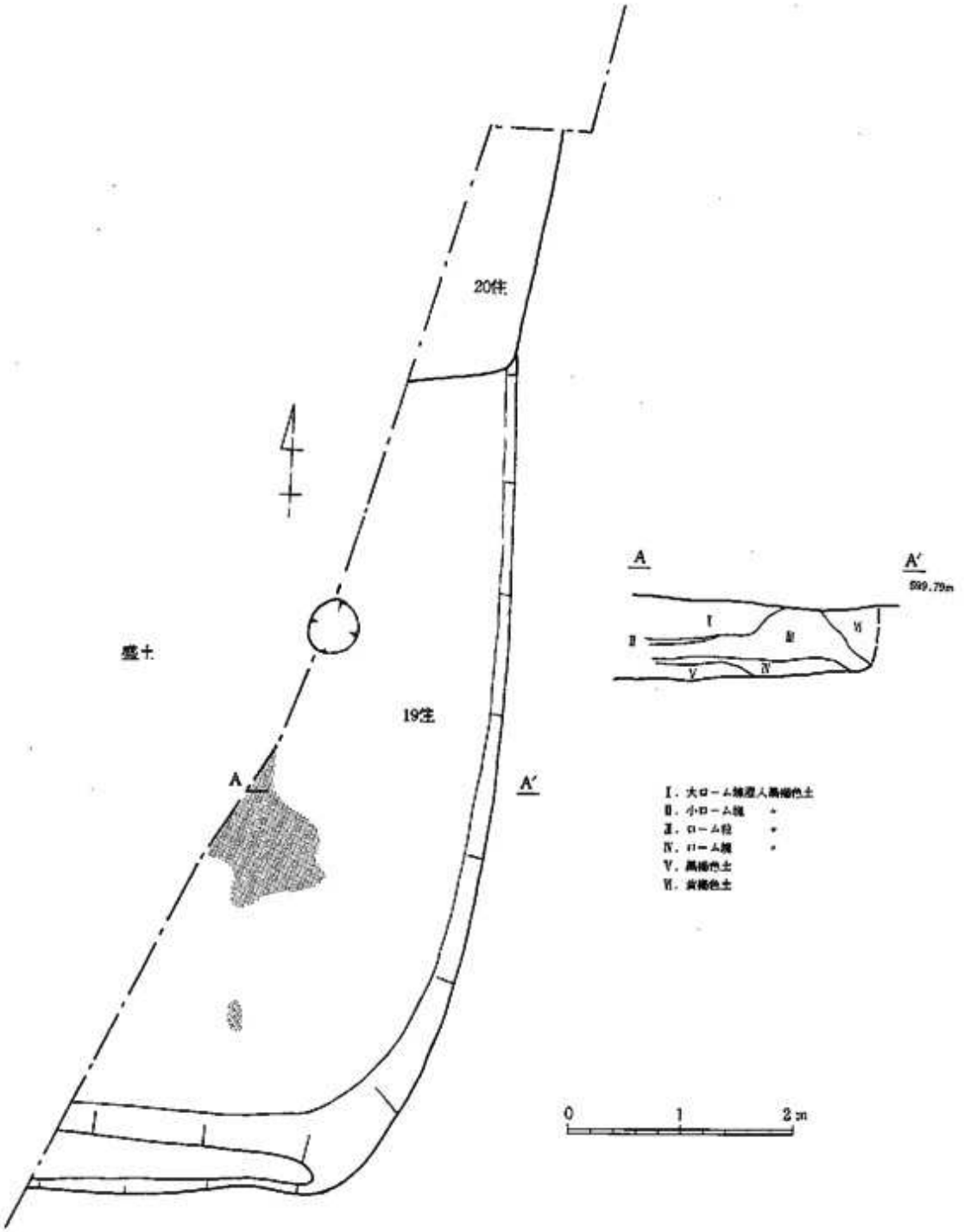
本址の時期は遺物よりみて、南栗V期と考えたい。

第20号住居址

本址は2地区西端、19住の北端を切って存在している。遺構は大半が盛土下にあり、わずかに南東コーナーを露呈しただけであった。よって本址の調査は、検出のみにとどめ、掘り下げは行わなかった。プランは方形ないし長方形で南北または東西に主軸をとるものと思われる。本址の覆土は暗灰色を呈し、周囲の住居址とは若干異なっていた。あるいは大形の土壙に含まれるかも知れない。

遺物は検出面より、数片の灰釉陶器を得たのみであり、図示不可能である。

本址は19住を切っていることのほか、所属時期等不明である。　　（竹原　学）



第23図　第19・20号住居址

2　建物址・ピット・柵列・礎石

(1) 建物址

今回の調査により検出された掘立柱建物址は、1地区2棟、2地区9棟の計11棟である。本項では、個々の建物址の詳細は一覧表に譲り、建物の構造・規模・配置等について簡単にまとめておく。

まず建物址の規模についてみると、2間×1間(建11)、2間×2間(建1)、3間×1間(建8)、3間×2間(建2・4・5・6・9・10)、3間×3間(建7)、4間×3間(建3)が存在する。これらの面積は全て30 m²以下で、15 m²前後(建1)、20 m²前後(建2・4・5・10・11)、25～27 m²前後(建3・6～9)に大別される。それぞれ小形・中形・大形とすると、大形の建物址は3間×1間以上の建物にみられ、最も検出数の多い3間×2間の建物址には中形・大形の両者が存在する。柱間寸法は、建3・5・8を除けば、桁・梁それぞれの方向でほぼ等間隔にとられている。全体に1.3×2.2 mをとるものが多く、より詳細にみると1.5 m前後、1.8 m前後、2 m前後に分けられる。それぞれA・B・Cとして桁・梁での組合せをみると、A×Cが各大きさの建物に存在し(建1・4・7等)、B×Cは3間×2間の中形建物に多くみられる(建2・10他)。この他、建8・11のように、桁・梁どちらか一方が1間で、柱間寸法が5 m前後と大きいものも存在する。

このような傾向は、今回柱痕の検出例が少なく、また全般に柱間寸法のバラつきが多い(むしろ一般的な傾向と考えられるが)ため、建物や尺等の規格性を速断することはできない。しかし、柱間の寸法は桁・梁方向でそれぞれ異なるものが多く、その差にも大小が存在することが指摘できる。この他、建物址の柱穴について見ると、明らかに円形掘り方といえるものは建8・9・6・7・10・11の6棟で、他は方形掘り方か、それに近いものである。規模は概して方形が大きいといえる。

次に集落内での建物の位置と、その帰属時期について若干の見解を述べておこう。今回の調査区内での建物址の分布は、6～8住を境に南北に群別される。すなわち北群は建1・2・10・11の4棟、南群は建3～9の7棟で構成される。この2群の建物址を比較すると、いくつかの異なる傾向を示すことがわかった。まず建物の主軸方向であるが、北群の建物址が全て南北よりやや東に軸を振る(N－2～3°－E)のに対し、南群は建7を除き、逆に西よりに軸を振っている(N－5°－W前後)。次に建物の規模をみると、北群の建物址はいずれも小形か中形で、大形の建物は南群にのみみられ主体となっている。さらに南群の建物址は建8と9、建4～6のように、同一地点での切り合いが認められる。

最後に時期の検討であるが、建物址出土の時期決定可能な遺物は無に近い。そこで切り合い関係から新旧を判断すると、建1は第III期の4住を切り、P_6内より出土の須恵器片(317)も4住より若干下るものと考えられる。建4～6については、第VI期の18住をはさんで建4→建6→18住→建5の変遷がたどれる。さらに建8・9に先行して17住(第VI期)が営まれている。以上の関係から本遺跡の建物址群は、おおよそIII～VI期の間に構築されたものと捉えてよいと思われる。さらに先述

の北群・南群のあり方をみると、北群の建物址はIII期1・3・5住の分布と一致し、南群はVI期の10・17・18住の分布と重なっている。これらのことから、北群の建物址は第III期の住居址に伴う、古い段階のものと考え、南群は第VI期に属する新しい段階のものとみることが可能である。また、建物址の規模は、小・中形から大形主体へと移行してゆくと言えよう。

以上今回検出の掘立柱建物址について、その性格を概観してきた。その結果、従来不鮮明であった建物址の帰属時期について、状況証拠によりながらもおおよそ特定することができた。今後は他遺跡の資料も含め、より詳細な調査・分析を進めてゆく必要があろう。（竹原　学）

(2)　ピット

建物址と柵列を除いた数は計531である。遺構全体図を見ると場所によりかなり疎密の差が明瞭である。1地区の3から4号住居址の間、2地区の北東部は中世の土壙が多くその周辺のピットは直径30 cm前後、深さ20 cm程で土壙と同様の覆土を見せる中世のピットが多い、これらは15号住居址以南ではほとんど検出されない。これに対し17号及び18号住居址周辺と16号住居址南側に多いピットは直径50～60 cm、深さ30～40 cmと前のものより大きく深く付近の住居址と同様の覆土を持ち、それらの遺構に近い時期があてはめられよう。このことは周囲の遺構との関わりを示し時期的な占地の傾向を示すものと理解する。

これらのピットより出土した遺物は少なく、図示可能なものとして須恵器坏、蓋がある。このうち坏にはB（320・322）・C（319）・D（321）の3器種がありそれぞれの帰属時期は322が8世紀代、他は8世紀末～9世紀に比定される。また蓋はA（311）・C（312・313・315）があり311が7世紀後半、他は8世紀代の様相を呈している。これらの遺物は住居址と同様の埋土をもつピット（P239・303・359・450・528・616）より出土しているがすべて小片であり、確実に遺構に伴なうと言えるものはなく個々に把えたピットの上限を示すものとして捉えておきたい。これに対して中世のピットからの遺物は皆無であり、今後はピット群として、或いは組み合わせ等をとらえた上で調査をすすめてゆく必要性を感ずる。（高桑俊雄）

表1　建物址・構列一覧表

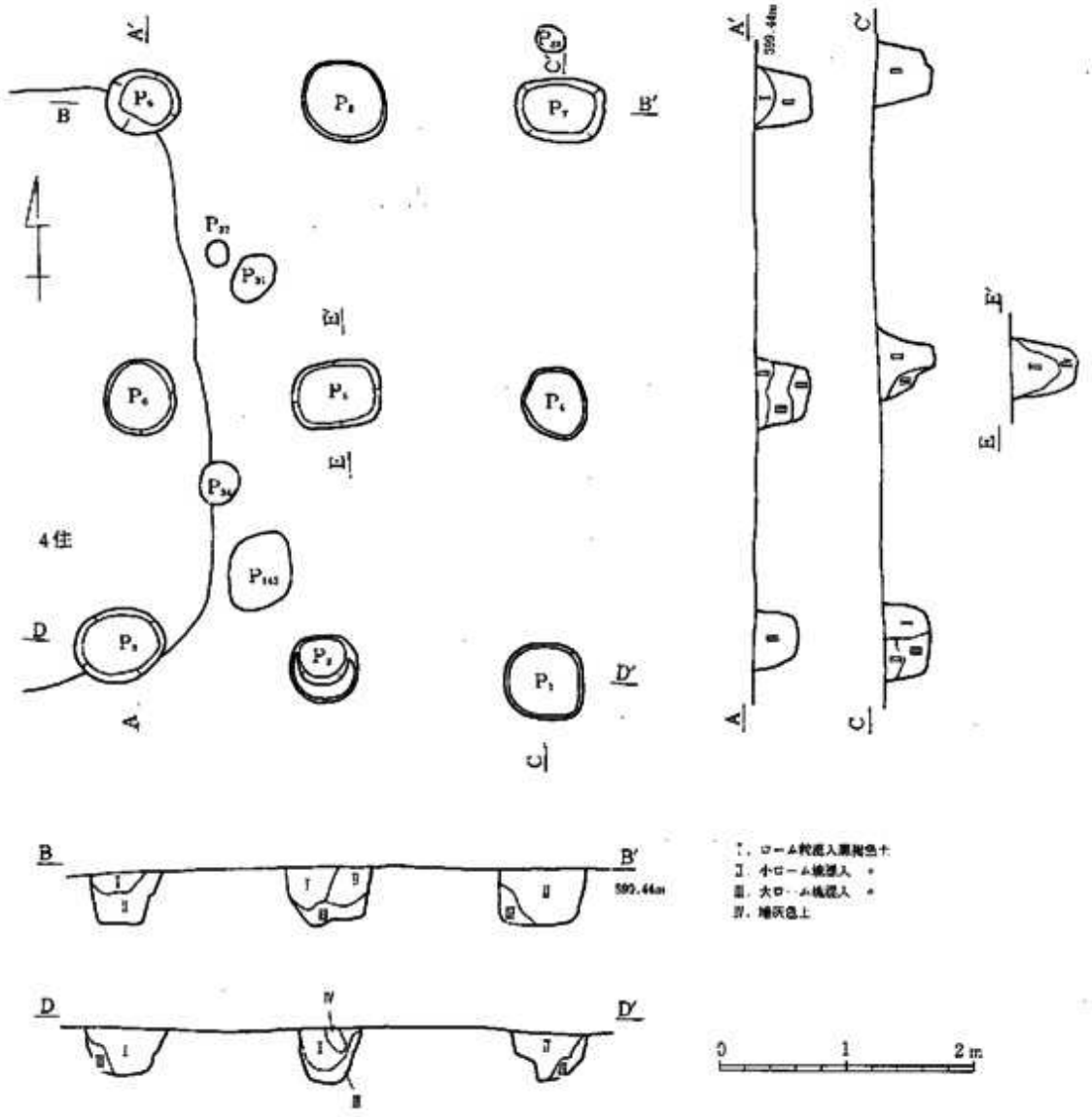
址	平面形	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm) 址	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
1	長方形	N 2° E	2間×2間 4.3×3.3	桁 2.15 梁 1.65 ※ 柱間寸法はバラツキの特に大きいものを除き規模1間数で算出している。	1	64	60	40	円形	柱痕あり	1地区中央やや南東に位置し，4住を切る。 総柱式の建物で，柱穴掘り方は方形ないし方形に近いものが多い。 柱痕はP1で確認されたのみである。 遺物は須恵器破片・土師器破片が出土している。
					2	56	52	45	円形		
					3	72	58	40	楕円形		
					4	60	48	46	不整円形		
					5	70	50	52	方形		
					6	60	55	44	円形		
					7	70	50	48	方形		
					8	64	64	46	円形		
					9	56	54	48	〃		
2	長方形	N 3° E	3間×2間 5.6×4.0	桁 1.85 梁 2.00	10	74	58	22	方形		1地区中央に位置し，中世土壙群に切られる。 側柱式の建物で，柱の掘り方は主として方形である。 P13・P12・P17はそれぞれP19・P15・P115を切り，1回の建て替えが考えられる。 柱痕は灰黒色を呈し，3か所確認された。
					11	110	72	28	〃	柱痕あり	
					12	66	62	26	不整方形		
					13	54	44	32	不整円形		
					14	64	46	20	不整方形		
					15	80	56	23	楕円形	柱痕あり	
					16	66	60	21	方形		
					17	58	40	18	不整方形		
					18	(88)	58	24	楕円形	柱痕あり	
					19	(82)	70	18	〃		
					115	72	(64)	22	不整円形		
3	長方形	N−S	4間×3間 6.0×4.5	桁 1.50 梁 1.50	500	78	64	30	不整方形		2地区西端近くに存在し，建4・溝2に切られる。 側柱式の建物で，方形の掘り方を有する。桁行柱間寸法はややバラつき，P506に対応する西側柱穴は確認されなかった。
					501	70	68	30	〃		
					502	80	72	28	方形		
					503	82	68	30	方形		
					504	80	75	30	円形		
					505	80	78	28	不整円形		
					506	82	68	40	方形		
					507	(72)	72	44	円形		
					508	88	76	50	不整方形	柱痕あり	
					509	74	50	32	方形		
					510	46	42	32	〃		
					511	78	66	22	〃		
4	長方形	N 2° W	3間×2間 5.0×4.0	桁 1.65 梁 2.00	512	(80)	78	38	楕円形		2地区中央やや西南よりに存在する。 道3を切り，建6に切られている。 側柱式の建物で，円形の柱穴を有する。 黒褐色の柱痕はP515・P517・P520で確認された。
					513	80	78	28	不整円形		
					514	60	54	16	〃		
					515	72	66	28	〃	柱痕あり	
					516	64	62	36	円形		
					517	52	52	48	〃	柱痕あり	
					518	60	50	16	楕円形		
					519	72	62	44	不整方形		
					520	80	60	54	不整円形	柱痕あり	
					521	60	72	40	不整方形		
5	長方形	N 5° W	3間×2間 5.2×4.1	桁 1.30~2.60 梁 2.05	524	78	68	46	方形	柱痕あり	建4・建6・住8住を切る。 側柱式の建物で，主として方形の柱穴を有する。桁行柱間寸法はバラつきが大きい。
					525	74	72	42	不整方形	柱痕あり	
					527	68	54	32	楕円形		
					528	86	74	48	不整円形	柱痕あり	
					529	80	80	36	不整方形		
					531	70	70	42	円形		

長	平面形	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm) 長	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
					532	(62)	52	52	不整楕円形		柱痕は P524・P526・P528 で確認され，黒褐色を呈する。
					533	48	42	22	楕円形		
					534	70	60	28	方形		
					535	74	74	34	不整方形		
					536	86	74	14	〃		
6	長方形	N 5° W	3間×2間	桁 1.75	516	64	62	36	円形		建4を切り，18住・5住に切られる。
			5.3×4.8	梁 2.40	522	70	64	45	〃		側柱式の建物で，柱穴は主として円形を呈する。
					523	78	68	32	不整円形		
					525	74	72	42	不整方形	柱痕あり	
					544	62	—	34	—		
					545	82	62	40	不整楕円形		
					546	76	74	36	不整方形		
					547	86	68	36	〃		
7	長方形	N 3° E	3間×(3間)	桁 2.00	537	98	—	33	—		2地区西南端に位置し，西半は調査区外にのびる。
			6.0×(4.5)	梁 1.50	538	72	64	32	不整円形		側柱式の建物で，柱穴は円形を呈する。
					539	(60)	52	42	円形		P533 と P565，P529 と P551 は切り合いが認められ，1回の建て替えが推定される。
					540	84	64	48	楕円形		
					541	62	(50)	16	楕円形		
					542	66	58	46	不整円形		
					543	96	76	38	〃		
					551	62	(50)	16	〃		
					555	58	52	48	円形		
8	長方形	N 87° E	3間×1間	桁 1.45	281	50	48	26	不整方形		2地区中央やや北側に位置し，建9を切る。
			5.0×5.5	2.10	340	106	74	40	楕円形	柱痕あり	側柱式の建物だが，梁間方向の柱穴は検出されなかった。また，P281 と P340，P436 と P384 の柱間寸法は他より大きい。
				梁 5.50	348	50	44	35	不整円形		
					372	48	48	29	不整円形		
					378	48	40	37	不整楕円形		
					380	38	34	30	円形		
					384	(64)	52	34	不整楕円形		
					436	52	40	44	〃		
9	長方形	N 83° E	3間×2間	桁 1.85	279	78	(58)	42	〃		建8に切られる。
			5.5×4.5	梁 2.25	341	66	62	34	不整円形		側柱式の建物で，柱穴は円形を呈する。建8より大形の掘り方である。
					342	66	54	32	〃	柱痕あり	P495 に対応する柱穴は検出されなかった。
					344	124	64	12	不整楕円形		遺物は，P279 より須恵器鉢片（第61区325）が出土している。
					349			22			
					370	72	54	26	〃		
					377	84	76	36	不整方形		
					381	80	60	32	楕円形		
					383	90	70	44	不整楕円形		
					495	82	56	24	楕円形		
10	長方形	N 8° E	3間×2間	桁 1.80	189	72	70	51	不整円形		2地区北端に位置し，中世土壙群に切られる。
			5.4×3.9	梁 1.95	201	82	58	34	不整方形		側柱式の建物で，主として方形の柱穴を有する。P189 に対応する柱穴は検出されていない。
					212	76	64	51	〃	柱痕あり	柱痕は P212 のみ確認された。
					213	70	50	40	不整楕円形		
					216	(78)	76	52	不整方形		
					223	86	80	46	不整円形		
					239	86	74	52	不整楕円形		
					492	78	74	46	不整方形		

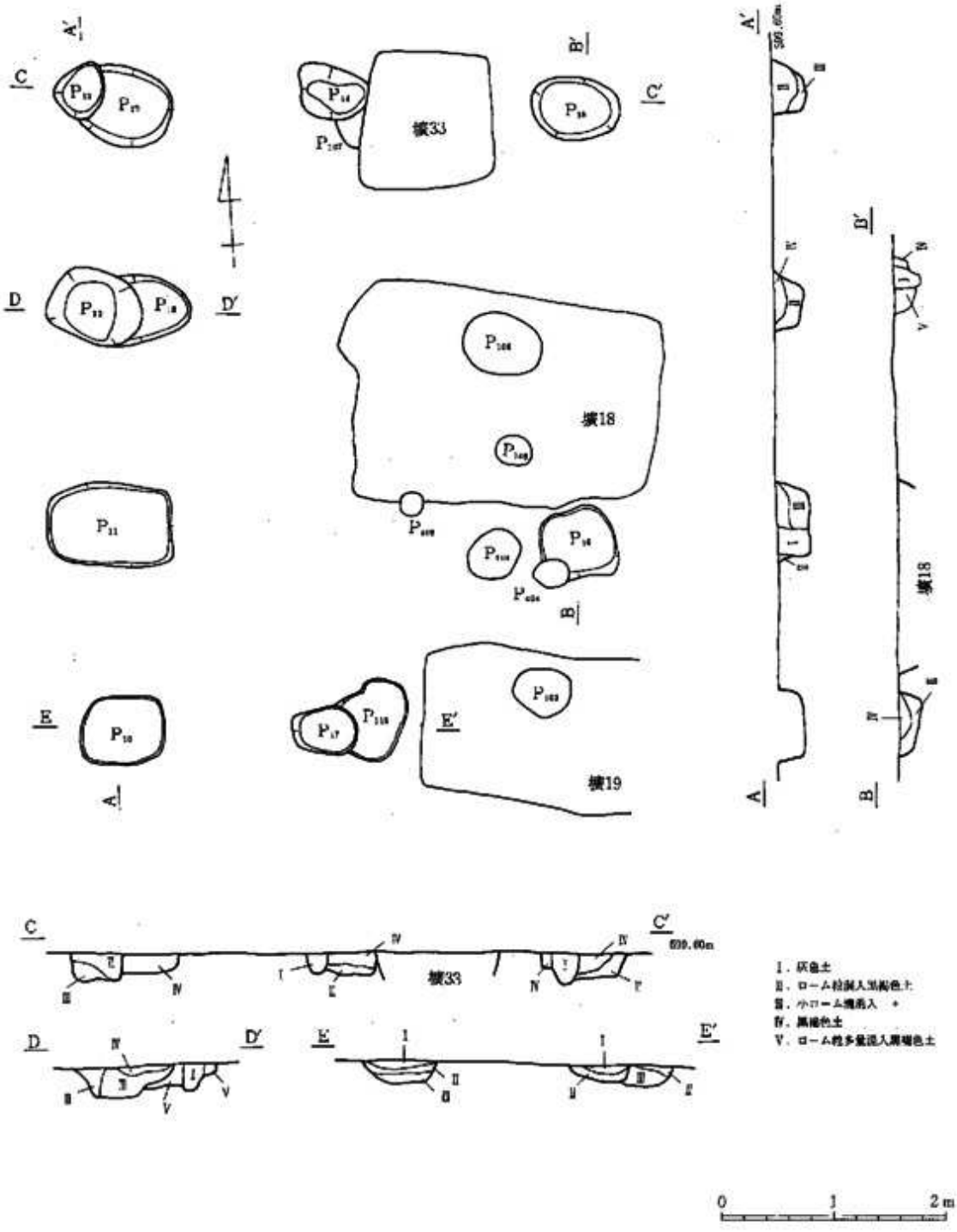
系	平面形	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm) 系	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
					648	78	54	38	不整楕円形		
II	長方形	N 3° E	2間×1間	桁 4.90	180	64	62	34	不整円形		2地区北端，建10の西に平行して存在する。
			4.9×3.7	梁 3.85	181	98	80	49	不整楕円形		側柱式の建物だが，桁行方向の柱穴は検出されなかった。柱穴は円形で，P207・P181は他より大きく，外よりに位置する。
					206	54	50	27	円形		
					207	74	68	43	不整円形		
					208	56	56	46	〃		
					241	52	52	40	円形		

柵列

系	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm) 系	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	柵列所見
1	N 84° W	4間	2.28	129	34	28	28	円形		1地区南端に位置する。
		9.1		130	38	36	15	不整円形		4間分が確認され，柱穴は円形を呈する。
				131	36	36	16	〃		
				133	50	40	25	不整楕円形	柱痕あり	
				134	36	30	17	〃		
2	N 74° W	5間	0.84							2次区西端，建3の北に位置する。
		4.2		417	28	26	22	円形	礎5	柱間寸法，柱穴大きさにややバラつきがある。
				420	28	28	15	〃		P430・P431・P432・P417・P429の掘り方には，10～15cm大の礫が入っている。
				428	36	34	12	〃		
				429	26	(24)	25	〃		
				430	26	26	15	不整円形	礎1・材	
				431	42	40	17	円形	礎2	
				432	32	29	18	〃	礎2	

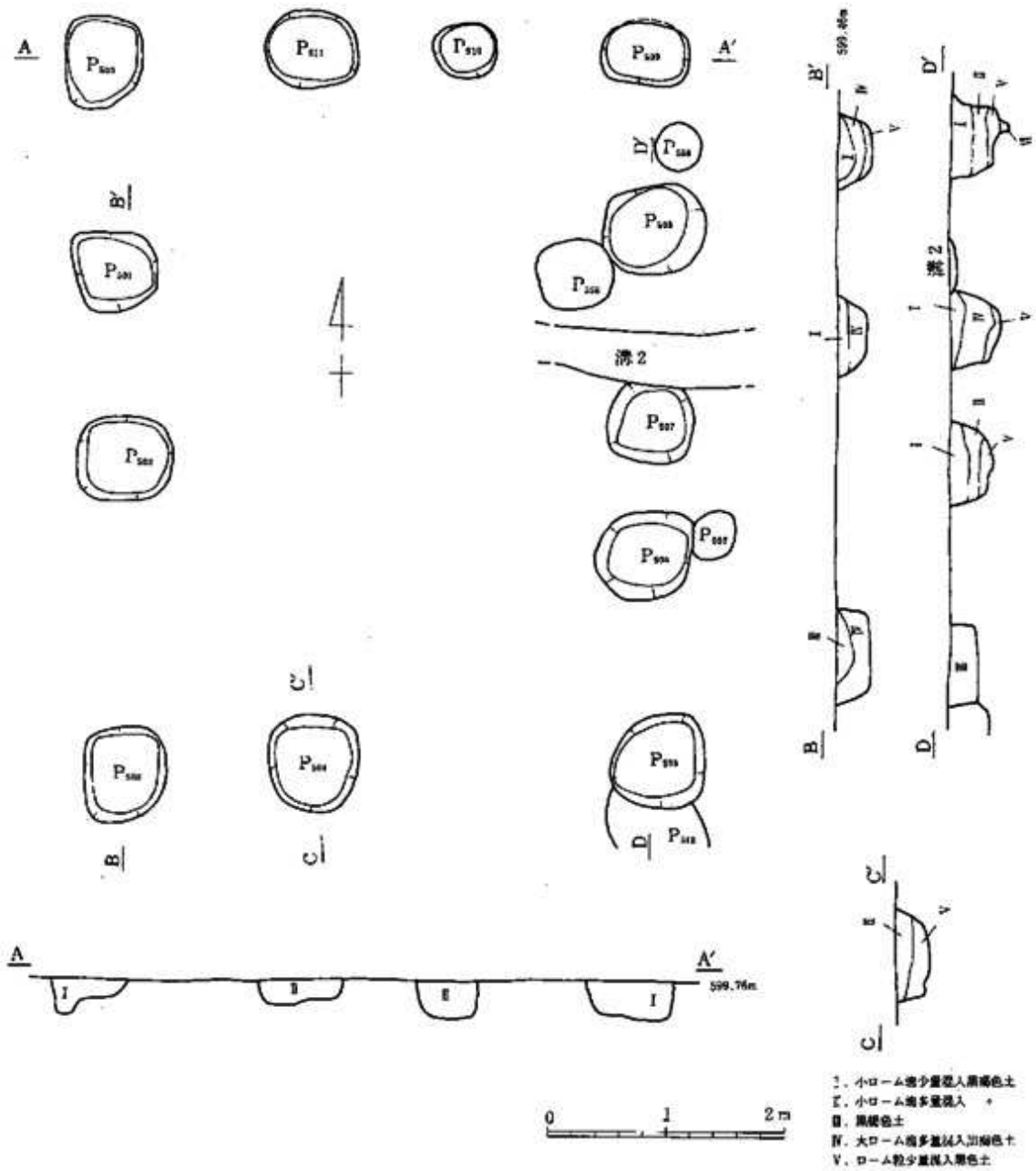


第24図　建　物　址　1

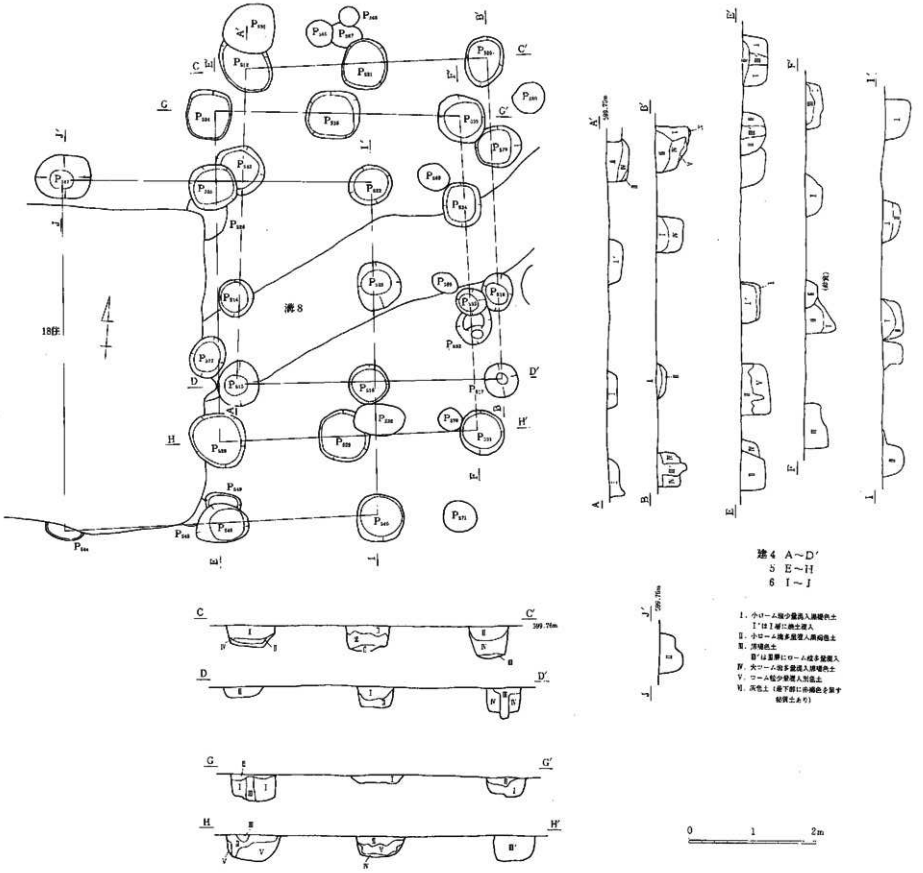


A'
C
B'
C'
D
D'
E
E'
A
B
壊33
壊18
壊19
I. 灰色土
II. ローム粒混入黒褐色土
III. 小ローム塊混入
IV. 黒褐色土
V. ローム粒多量混入黒褐色土
0
1
2 m

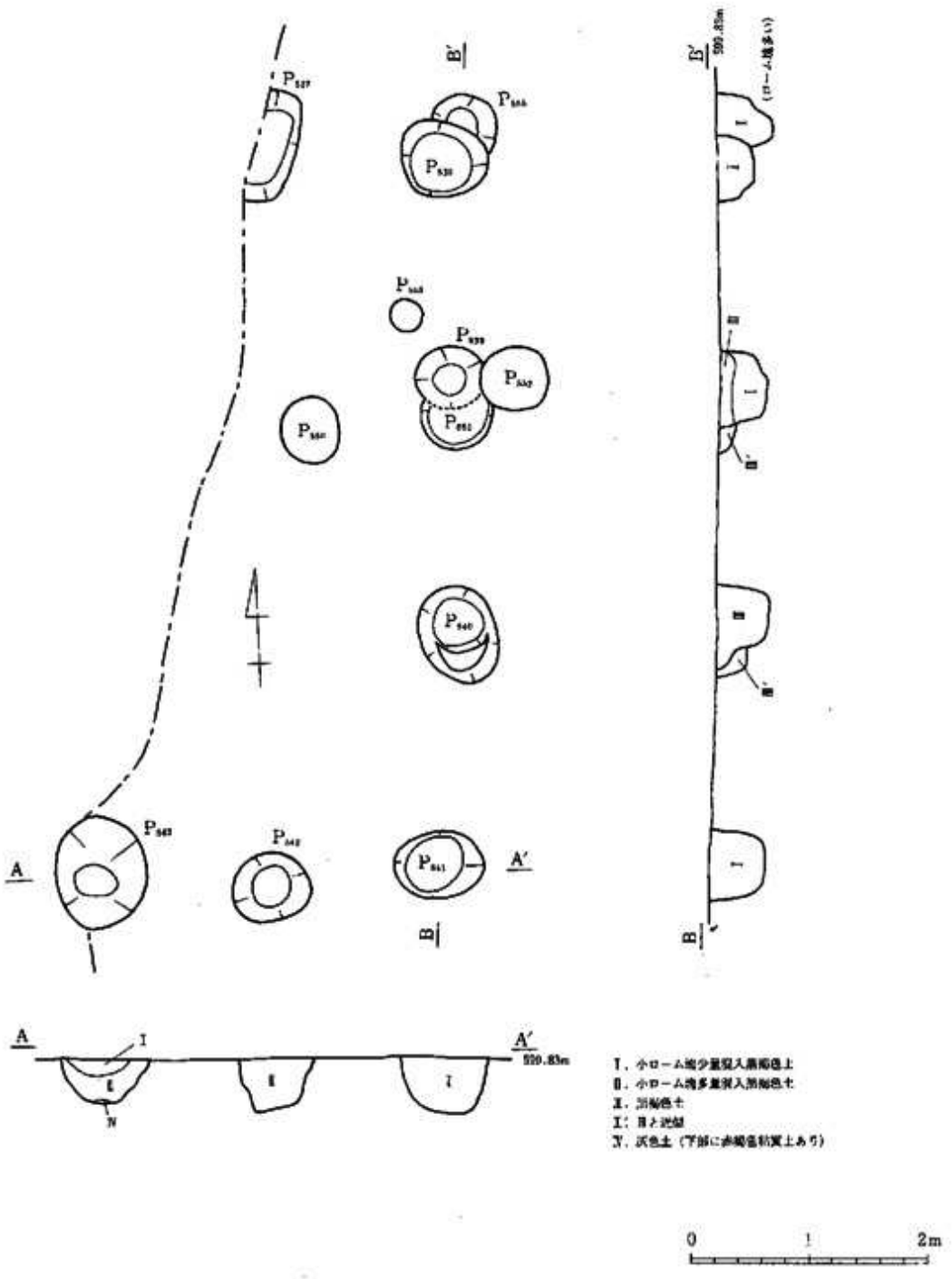
第25図 建 物 址 2


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
溝2
599.76m
0
1
2m
I. 小ローム塊少量混入黒褐色土
II. 小ローム塊多量混入
III. 黒褐色土
IV. 大ローム塊多量混入川褐色土
V. ローム粒少量混入黒色土
VI. 灰色土

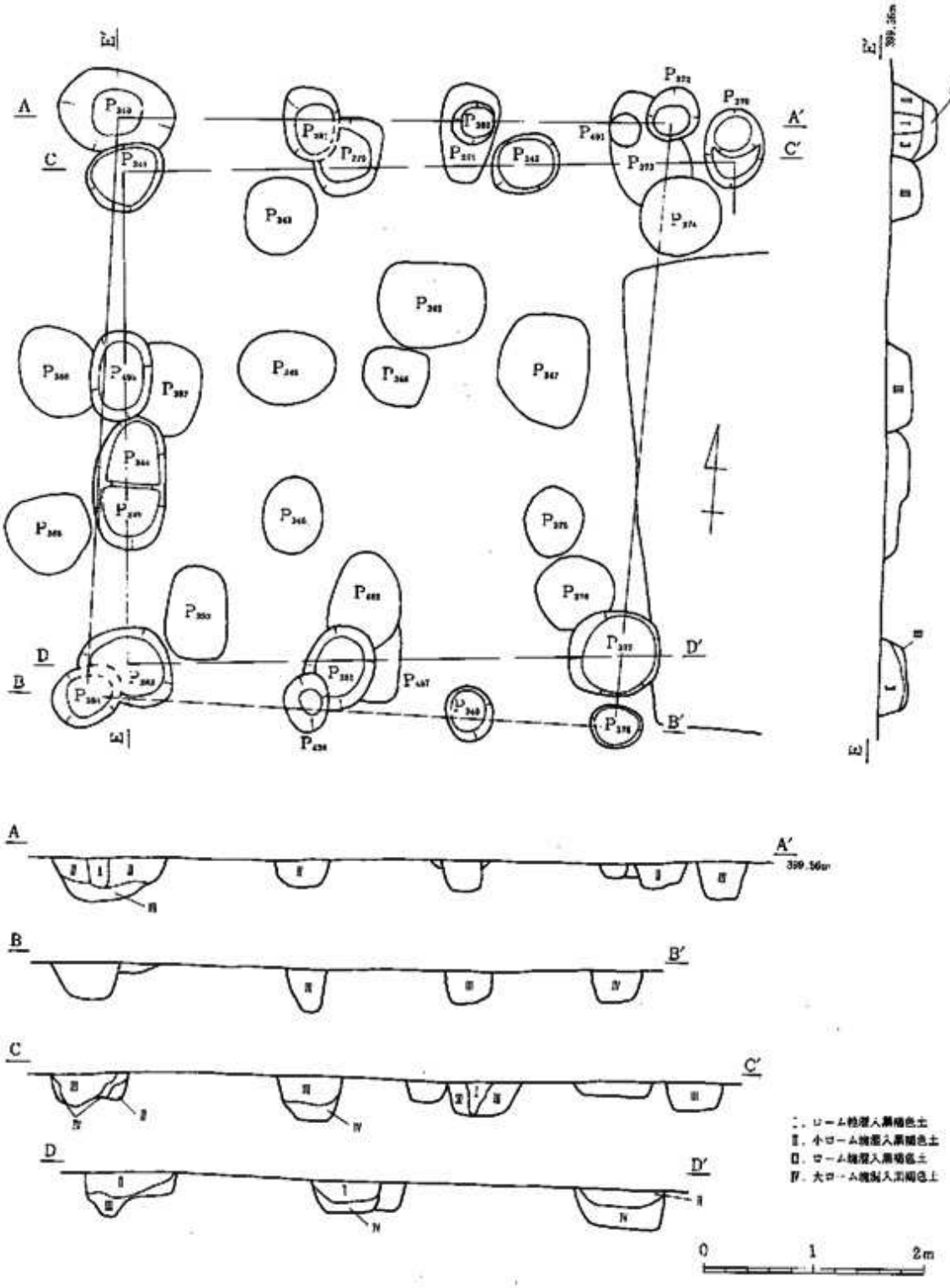
第26図 建 物 址 3


溝8
18住
建4 A～D′
5 E～H
6 I～J
I. 小ローム粒少量混入黒褐色土
I′はI層に焼土混入
II. 小ローム粒多量混入黒褐色土
III. 黒褐色土
III′はII層にローム粒多量混入
IV. 大ローム粒多量混入黒褐色土
V. ローム粒少量混入黒色土
VI. 灰色土（最下部に赤褐色を呈す
粒質土あり）
0
1
2m

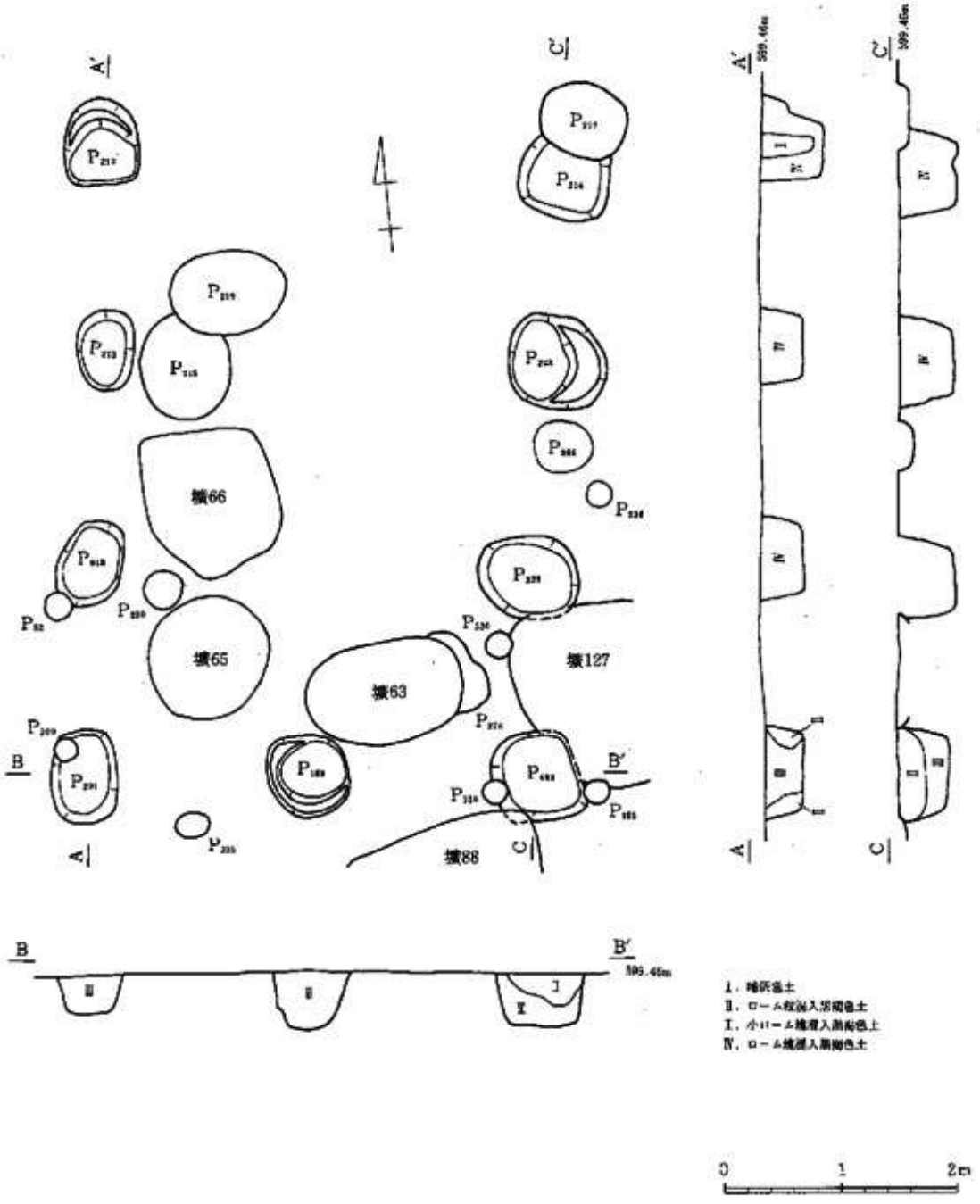
第27図 建 物 址 4・5・6



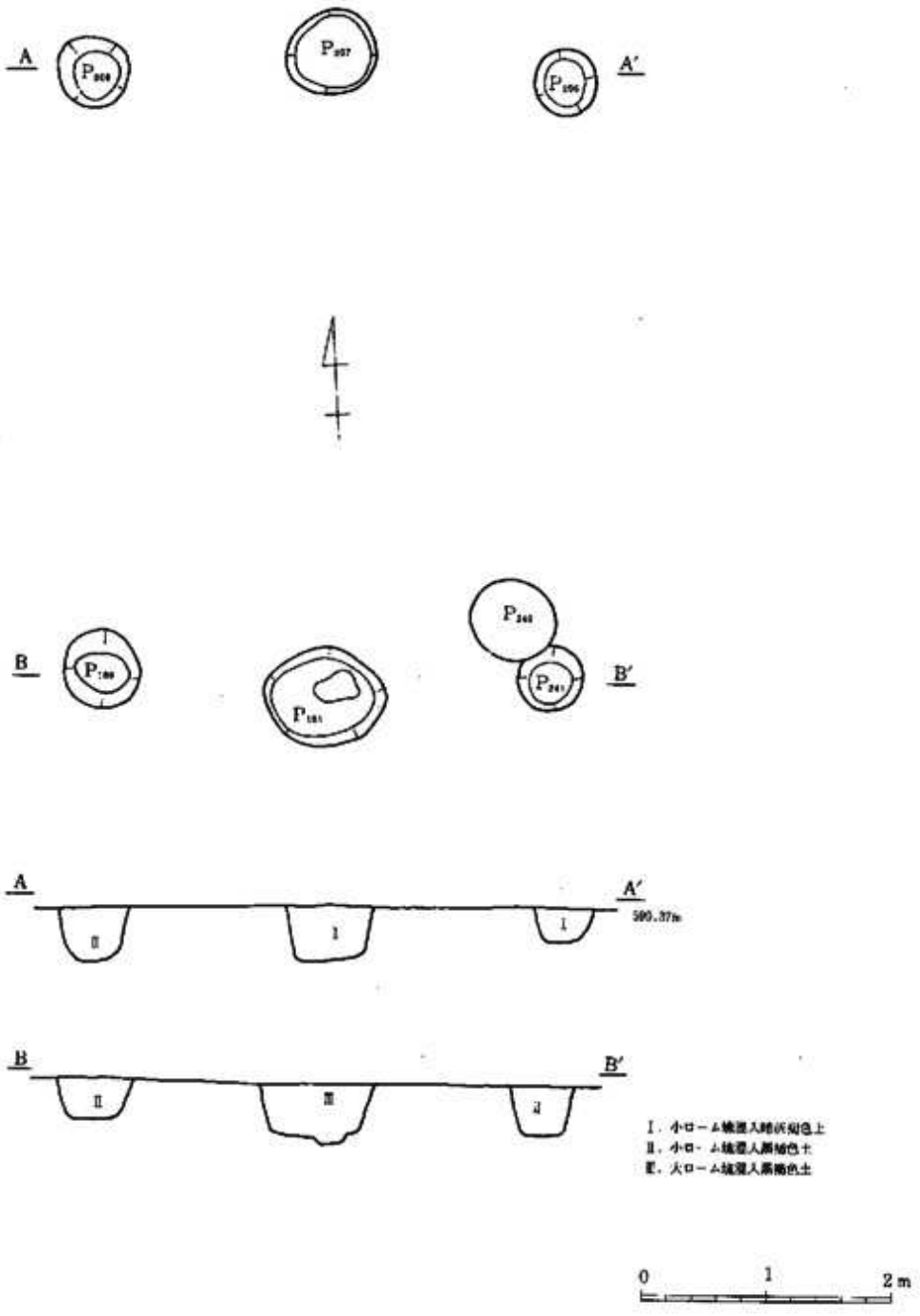
第28図　建　物　址　7



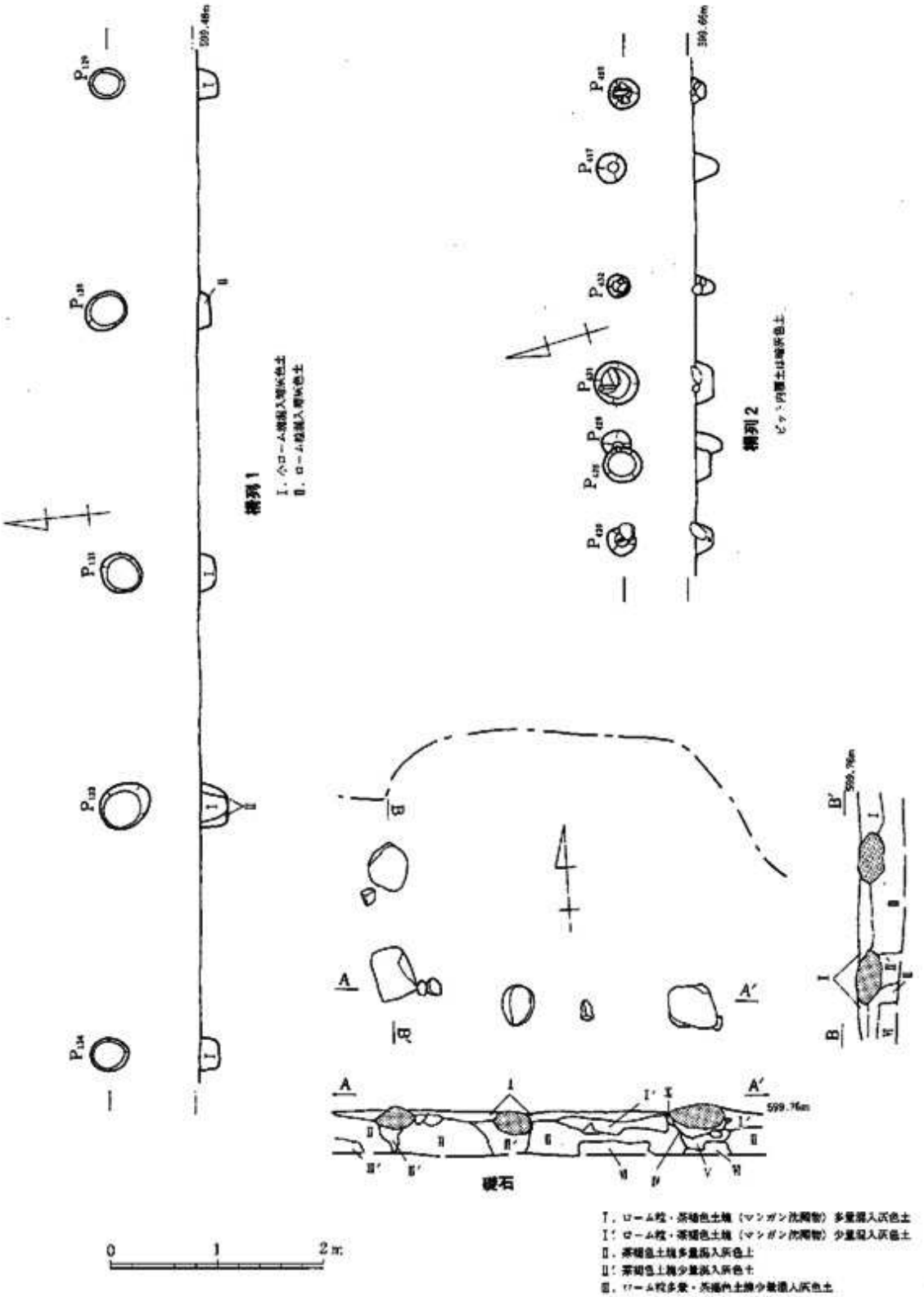
第29図　建　物　址　8・9


A'
C'
A
C
B
B'
壙66
壙65
壙63
壙127
壙88
599.46m
I. 暗灰色土
II. ローム粒混入黒褐色土
III. 小ローム塊混入黒褐色土
IV. ローム塊混入黒褐色土
0
1
2m

第30図 建 物 址 10



第31図 建 物 址 11



第32図　柵列1・2，礎石

—55—

(3) 柵列

ピットの内、覆土から見て同時存在したと思われる柱列を把えた。

1は1地区南部にあり、東西に伸びる5個のピットより成る。南側にはほぼ平行して溝1を検出した。柱間寸法はそれぞれ210～250 cm の間にあり、延長は9 m を測る。個々のピットは円形で直径28～50 cm、検出面よりの深さは12～25 cm とかなり浅い。覆土はいずれも暗灰色土である。位置から見て溝1が通じていた時のものであろう。

2は2地区中央西寄に検出した。1同様に東西に伸び6（7）個のピットより成る。付近には住居址、建物址等古代の遺構が多いが、その中でこれらのものは、いずれも暗灰色土を覆土としており、周囲の遺構とは明らかに時期が異なる。個々のピットは円形を呈し、規模は直径22～41 cm、深さは13～25 cm の範囲にある。柱間寸法は70～110 cm で延べ4 m20 cm と短い。これらの内4個のピットは、こぶし大以上の石を覆土上面に見せており、P_{430}の底には炭化材が、又 P_{428}と P_{429}の間には、生の材片が残っていた。ピット中に見られる石は木材固定用に入れたものと推測する。

(4) 礎石

2地区北端に位置する。計4個の自然石から成り、地表下40 cm より検出した。これは付近の中世検出面より10 cm 程浅い。配した石の距離、方向に若干のずれを見せるが周囲には全くこのような石が見当らず礎石として把えた。北側には生活用の堰があり検出不能、南側にも石は検出できなかった。並びより見て南西の石が隅となろう。礎石の間隔はそれぞれ南北100、東西120、160 cm を測る、石はいずれも堆積岩で35～50 cm、厚さ20 cm の方形、円形ないし楕円形を呈している。上面は比較的平坦でレベルもほとんど等しい、石の下には礫など見られず、土層を観察しても埋没後の堆積による影響を受けているのみである。遺物は本址に関わると見られるものは出土せず、検出面も高いことから中世、あるいはそれ以降の遺構であろう、ただ今回の調査地一帯は『屋敷添』という小字名もあり、比較的古くより現在まで連続しての生活の営みを見せている。あるいは、その初源のものかも知れない。（高桑俊雄）

3　土壙

今回検出した土壙は130基である。1地区に56基ありその大半が3～4号住居址の周辺に、2地区には74基が北東部を中心として検出された。狭い範囲に集中する為切り合い関係が激しく、上面ではむろん土層断面を観察してもなかなか新旧関係を把える事は容易でなかった。これらの平面形は長方形が48例と多く、次いで楕円形29、方形27、円形20、その他6の割合である。規模は直径或は長・短軸が2m以内に入ってしまうものがかなり多いが、中には一辺3mを超えるものが10例ある。覆土は灰色土、あるいはやや黒っぽい暗灰色土が圧倒的に多く両方で93例を数え全体の71%を占める。これらの土壙はプラン、覆土とも昨年調査したV地区によく似ており、遺物から中世のものと判断する。これら中世の土壙は検出面からは比較的浅いものが多く、底は平坦で特に固くもない。遺物には、土器に内耳（40基）、青磁（4）、中世陶器（8）を、銭（12）や釘・火打金具などの鉄製品（6）、砥石（3）、石臼（2）なども見ることが出来る。これらに対して黒褐色土を覆土とする土壙は9例ある。そのうちの1例（75）を除けば遺物には須恵器，土師器のみしか見られず古代のものと考える事が妥当であろう。

特徴的な土壙を概観してみよう。火葬墓は3基である。これらは土壙が集中する地区とは離れ、一基づつが独立している。いずれも南北に長軸を取り、うち2基は西側に突出部を設けていた。この様子は一昨年南栗で調査したものと同じ様相であるが、内部には石は置かれることなく中央を凹めており、この点が異なっていた。遺物は銭のみであり、2基（23、108）で9点と多い。土壙118は中央にピットを持っているものである。これは1本柱で上屋を考える一例である。内部に石が入っている土壙は多い。そのうち103は二隅にこぶし大～小児頭大の石を配置した様子を見る事ができる。この覆土中には焼土、灰、炭化物などがあるが骨は全く見られなかった。土壙80はやや様子が変っていた。規模は東西3m×南北約4mと大型で一部周囲と焼土のある中央部を除き多量の石が覆土上層から下層まで入っている。石の大きさはこぶし大～人頭大程度で埋没時に投げ入まれた状況と思われる。東西壁はほぼ垂直で、南北には段がある。検出面より80cm程掘り下げたが底まで検出できず中世の土壙の中では一番深い。結果的に時間的制約のため完掘する事はできなかった。遺物としては土師器、須恵器、内耳土器、灰釉陶器、中世陶器などの土器の他、火打金具、角釘、銭、石臼、それに梵字らしきものが書かれた石製の鉢等多彩である。また326の長頸壺は東壁際より出土したが時期的に本址のものとは認めがたく東側は古代の遺構と切り合っているものと思われる。

（高桑俊雄）

表2　土壙一覧表

番号	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の特徴	出土遺物	切合関係 ……を切る	切合関係 ……に切られる	備考	図版
1	楕円形 175×100	皿形 9	灰色土	N15 縄1		なし		○
2	方形 135×125	凹形 15	灰色土 ローム塊混入	S2 銭4	壙104, P412・411	P126		○
3	方形 235×175	皿形 15	灰色土 ローム塊混入		住3, 壙104・105 P136			○
4	方形 155×110	楕円形 32	灰色土 ローム塊混入	—		P151		
5	方形 245×165	六段台形 20	灰色土, 炭化物少量 ローム塊混入	S2, H4 縄1	壙6			○
6	不整長方形 285×210	不整長方形 33	灰色土 ローム塊混入	N4, S4, H3 縄1		壙5		○
7	楕円形 115×105	台形 29	灰色土 ローム塊混入	N4, S4, H4 鉄滓1, 銭1	P142			○
8	方形 185×160	長方形 50	灰色土 ローム塊混入	N3, S5, H10		なし		
9	長方形 160×110	皿形 20	灰色土 ローム塊混入	S3, H1		なし		
10	長方形 205×165	台形 25	灰色土 ローム塊混入	N1, S2 青磁		なし		
11	楕円形 215×130	長方形 28	灰色土 ローム塊混入	N3	P405・426との切合不明			
12	不整長方形 320×220	台形 25	灰色土 ローム塊混入	N15, S5, H2 青磁		なし	検出面に炭化物	
13	長方形 320×175	長方形 32	灰色土 ローム塊混入	S10, H3 銭1	壙49・104, P135			
14	楕円形 180×120	長方形 23	灰色土 ローム塊混入	N2, S5		なし		
15	長方形 145×105	皿形 16	灰色土 上層に焼土	N3	壙31, P137	P415・416		
16	不整円形 155×145	不整台形 39	灰色土 ローム塊混入	S1, H5		P80・81		
17	方形 130×113	凹形 14	灰色土 炭混入	—	壙50			
18	長方形+突出 270×195	長方形 39	灰色土 ローム塊混入	N1, S5, H5	壙80, P106	P105・409		
19	長方形 425×140	長方形 30	灰色土 ローム塊混入	N1, S2, H10 鉄滓1	P103			
20	方形 145×125	台形 33	灰色土	H2	壙28	なし		
21	方形 180×165	長方形 26	灰色土, ローム塊多量 炭化物混入	S2, H10		壙28		
22	不整方形 105×100	楕円形 18	灰色土 ローム塊混入	—		なし		
23	不整長方形 105×85	不整長方形 23	灰色土, ローム塊・ 炭化物・焼土混入	S1 銭4, 土製品1		なし	火葬墓 竹あり	○
24	方形 145×135	台形 27	灰色土 ローム塊混入	S4		なし		

番号	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	埋土の特徴	出土遺物	切合関係 ……を切る	切合関係 ……に切られる	備考	図版掲載
25	方形 170×160	台形 24	灰色土	N10, S1	壙58			
26	不整楕円形 185×125	台形 31	灰色土 ローム塊, 炭化物混入	N1, S1		なし		
27	不整長方形 285×160	不整皿形 12	灰色土 ローム塊, 炭化物混入	S2	P145	近現・近代遺構		
28	長方形 215×125	台形 28	暗灰色土 炭化物混入	— 丸釘1	壙21	壙20		
29	不整円形 100×90	長方形 15	灰色土 ローム塊混入	S1, H1		なし		
30	不整長方形 127×188	台形 23	灰色土 炭化物混入	N3, S2, H1, T1 銭1	壙34・5.	P98		○
31	不整形 290×285	長方形 41	暗灰色土 ローム塊混入	S2, H10		壙15, P38・147・415		
32	長方形 305×195	皿形 7	灰色土	N1		P102・413・414		
33	方形 120×123	長方形 41	灰色土 ローム塊混入	S4, H10 角釘1, 銭1	P107	P14		○
34	方形 245×210	長方形 24	灰色土, ローム塊・ 炭化物混入	S2, H2 角釘1, 銭1	壙51	壙30		○
35	長方形+突出 120×70	台形 20	灰色土			なし		
36	円形 145×—	長方形 11	灰色土	—	壙37			
37	長方形 260×160	長方形 13	灰色土	S1		壙35, P127		
38	長方形 90×—	長方形 14	灰色土 ローム塊混入	—		近世・近代遺構		
39	方形 —×—	長方形 12	灰色土 ローム塊混入	—		〃		
40	楕円形 160×110	不整台形 46	暗灰色土	T1		なし		
41	方形 115×110	台形 30	灰色土 ローム塊・鉄分混入	N3, S1	1住			
42	不整楕円形 280×238	台形 32	灰色土, ローム塊・ 炭化物・焼土混入	N10, S1, H3 銭2, 石臼2	壙43	壙44, P100	骨あり	○
43	長方形 —×115	皿形 20	灰色土 ローム塊混入	N5, S2 鉄滓1, 大打金具1		壙42, P100・431・402・ 410		○
44	方形 185×155	台形 33	灰色土 ローム塊混入	—	壙42			
45	円形 —×—	東側		—	P336	壙88・125		
46	不整形 465×320	不整台形 30	灰色土 ローム塊・鉄分混入	—	P120	P119 近世・近代遺構		
47	楕円形 ×—	楕円形 —	灰色土 ローム塊混入	—		近世・近代遺構		
48	不整形 155×—	皿形 17	灰色土 焼土・ローム粒混入	—		〃	全壊, 焼土	

番号	平面形 規模(m)	断面形 深さ(m)	埋土の特徴	出土遺物	切合関係 ……を切る	切合関係 ……に切られる	備考	図掲載
49	方形 120×—	台形 18	灰色土 ローム塊混入	S1		壁13		
50	長方形 160×125	長方形 40	灰色土	S1，H1		壁17，P6		
51	円形 —×—	台形 76	灰色土	—		壁30・34，P67		
52	楕円形 100×75	皿形 4	灰色土 炭化物混入		P139		骨あり	
53	不整形 —×183	台形 27	灰色土	—		壁25		
54	方形 170×145	皿形 11	暗灰色土 ローム塊混入	N1，S1		なし		
55	長方形 205×80	台形 27	暗灰色土 炭化物混入	N1，S1		なし		
56	楕円形 140×100	凹形 20	灰色土 ローム塊混入	N2，S6		なし		
57	方形 153×130	長方形 33	暗灰色土 ローム塊混入	N15，S1，T1		なし		
58	円形 130×125	長方形 19	灰色土	N4，S2		なし		
59	楕円形 150×110	長方形 15	灰色土	—		なし		
60	円形 120×115	台形 15	灰色土 ローム塊・炭化物混入	S3，H5	溝9			○
61	楕円形 140×105	長方形 19	灰色土 ローム塊・炭化物混入	N4，青磁 鉄滓1，銭1		なし		
62	長方形 350×230	長方形 23	灰色土 ローム塊混入	N30，S10，H10	P189・230			
63	楕円形 85×130	楕円形 35	黒褐色土 ローム塊混入	S3，H3	P276			
64	長方形 153×95	不整長方形 23	灰色土 ローム塊混入	H5	壁125・130・132			
65	円形 105×100	不整円形 35	暗灰色土 ローム塊混入	H3		なし		
66	不整方形 128×110	三角形 50	黒褐色土 ローム塊混入	S1，H1		なし		
67	円形 90×75	皿形 20	黒褐色土 ローム塊混入	H1		なし		
68	長方形 90×73	円形 45	褐褐色土 ローム塊混入	—	P379			
69	長方形 138×68	皿形 8	暗灰色土 ローム塊・焼土混入	N1，H4		なし		
70	方形＋突出 230×190	不整長方形 18	暗灰色土 ローム塊・炭化物混入	N5，S1，H2	壁121，P322			
71	円形 155×145	円形 38	灰色土 ローム塊混入	H5		なし		
72	方形 115×110	台形 29	暗灰色土 ローム塊・炭化物混入	S3，H3	壁73・116			

番号	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の特徴	出土遺物	切合関係 ……を切る	切合関係 ……に切られる	備考	図掲載
73	円形 110×110	皿形 20	灰色土 ローム塊混入			壊72		
74	不整方形 155×150	長方形 34	灰色土	N1, S2, H2	壊110			
75	長方形 220×193	台形 36	黒褐色土, ローム塊・ 焼土・炭化物混入	N10, S3, H10, T1 角釘1	壊112	P339		○
76	長方形 125×37	不明 20	暗灰色土			なし		
77	不整円形 123×114	不整長方形 35	暗灰色土 ローム塊混入	S1, K1	溝9 P459			
78	円形？ —×120	皿形 20	暗灰色土		P262	壊127		
79	長方形？ 307×187	皿形 20	灰色土 茶褐色土塊混入	N10, S10, H5, T1, K1 銭1	壊80	壊81・87		○
80	不整長方形 395×294	不明 80以上	暗灰色土	N60, S20, H50, T1, K5, T鉄1, 角釘1, 六行金具1, 袋1, 銭5, 石臼5, 鉄塊鉄1	壊79・87		石多し 竹あり	
81	不整長方形 190×150	皿形 20	暗灰色土 焼土・炭化物混入	N5, S10, H10	壊79			○
82	方形 110×90	長方形 23	灰色土 ローム塊混入	N3, S2		なし		
83	長方形 272×220	長方形 28	灰色土 ローム塊混入	S1, H4	11住			
84	方形 200×(170)	未掘			壊89	壊103		
85	楕円形 165×85	未掘		S2, H5		17住焼退		
86	長方形 224×168	長方形 19	暗灰色土	S3, H10	P494・497	壊87, P493		
87	長方形 —×213	長方形 36	暗灰色土, ローム塊・ 焼土・炭化物混入	N1, S3, H4, T1	壊79・80, P497	P303		○
88	台形 170×135	不整長方形 26	灰色土 ローム塊・炭化物混入	N10	壊45・125, P492	P327		○
89	方形 95×—	未掘				壊84		
90	円形 —×—	未掘		H10		壊121, P296		
91	長方形 98×57	不整台形 3	黒褐色土	H3	10住			
92	楕円形 174×95	楕円形 31	灰色土 ローム塊・茶褐色塊混入	S8, H8	10住		竹あり	
93	不整三角形 222×154	皿形 16	暗灰色土 ローム塊混入	H4	P424・426	P425・498		
94	長方形 235×45	未掘		S1, H6		なし		
95	楕円形 106×84	台形 24	黒褐色土 焼土・炭化物混入	S2, H30		壊96, P451・452		
96	楕円形 115×85	不整円形 24	黒褐色土 炭化物混入	H30	壊95		ピット2ケ あり	

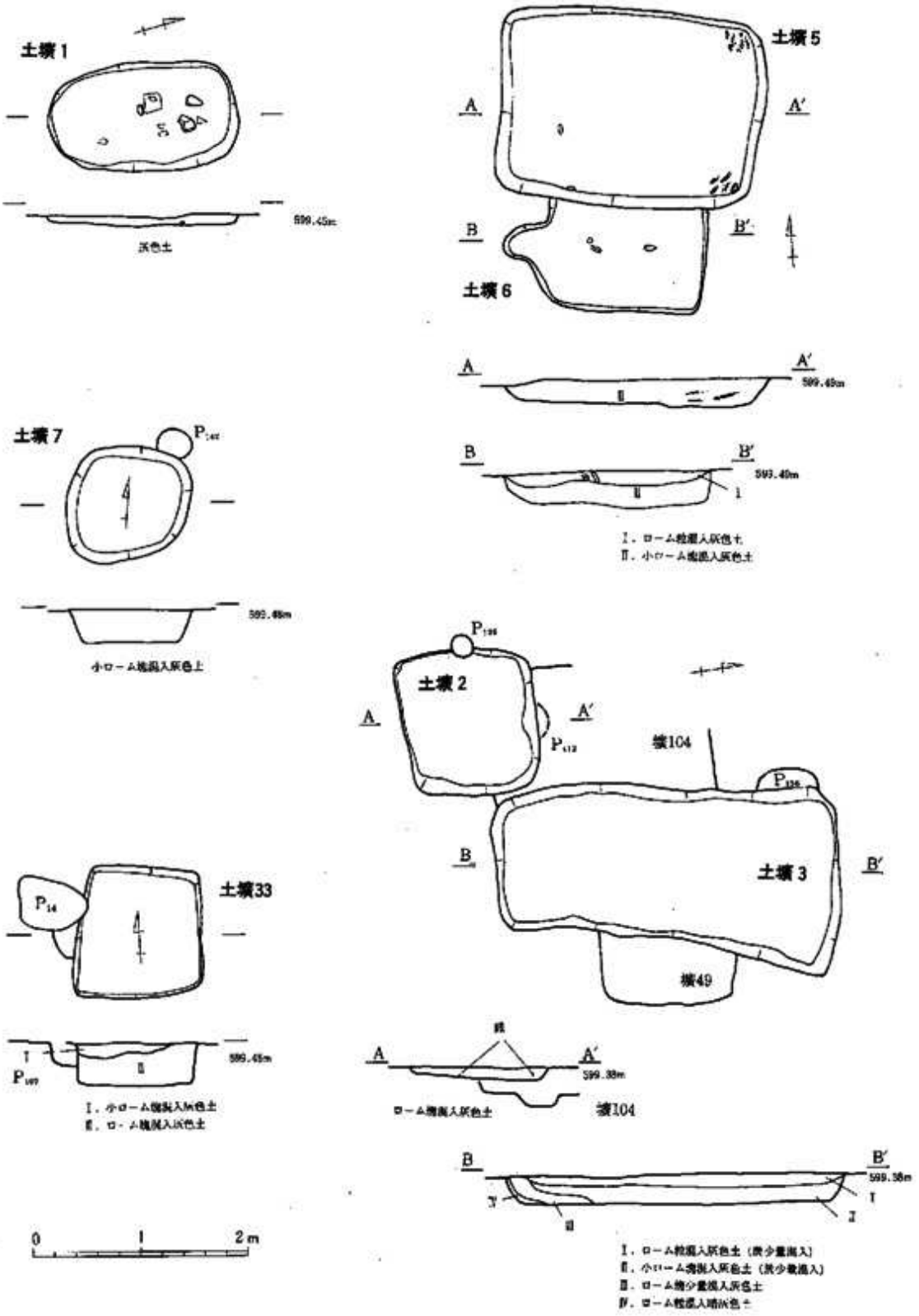
番号	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の特徴	出土遺物	切合関係 ……を切る	切合関係 ……に切られる	備考	図版
97	楕円形 93×60	円形 —	暗灰色土 ローム塊混入	—		なし		
98	楕円形 123×—	長方形 20	灰色土	S1, H2		壙99・129		
99	楕円形 97×73	円形 21	灰色土	—	壙98・129			
100	円形 123×108	楕円形 24	灰色土 茶褐色土塊混入	S1, H2	14住, 壙108			
101	長方形 175×134	未掘		H1	壙102, P595・640			
102	長方形 —×187	未掘		S6, H3	P597・643	壙101 P393・595・418		
103	不整長方形 204×167	皿形 14	灰色土 焼土・炭化物混入	N5, S2, H15, T1	壙84		石多く骨あり	○
104	長方形 213×—	不明 43		—	壙105	壙2・3・13, P412		
105	長方形 105×55	台形 22	灰色土	—	3住	壙3・104, P403		
106	楕円形 —×—	不明 10		—	1住			
107	方形 85×95	長方形 76	灰色土 焼土・炭化物混入	—		なし		
108	楕円形 136×80	円形 22	灰褐色土, ローム塊・ 焼土・炭化物混入	S2, H2 段5	14住	壙100	火葬墓 骨あり	○
109	楕円形 133×105	不明 23		N3, S1		なし		
110	円形 —×—	不整長方形 35		—		壙74		
111	楕円形 105×55	不明 —		—		なし		
112	長方形 493×155	未掘		—		壙75・121 P274・278・490		
114	長方形 186×29	不明 —		—		なし		
115	楕円形 80×47	円形 22	黒褐色土 ローム塊混入	S1		なし		
116	楕円形 —×102	円形 39		—		壙72		
118	円形 265×250	三角形 75	灰色土 ローム塊・炭化物混入	N50, S10, H20, K1, 青1 鉄滓1土製円板1	17住, 壙119		ピットをもつ	○
11	円形 153×—	台形 27	灰色土 炭化物混入	N5, S5, H5	P468	壙118		
120	長方形 203×153	三角形 17	灰色土 茶褐色土塊混入	—	P579			
121	長方形 565×240	不明 22		N20, S10, H10	壙90・112	壙70, P222・278・300		
124	円形 165×150	23		S15, H81	P275	P47・687		○

番号	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の特徴	出土遺物	切合関係 ……を切る	切合関係 ……に切られる	備考	図掲載
125	方形 —×295	台形 —		N15, S4, H5	壙46, P336	壙62・88・112・131 P192・270・271・273・327・328		○
127	不整長方形 200×153	未掘			壙78 P233・239・492・260	P155・330		
128	不整方形 90×78	三角形 30	灰色土 焼土・炭化物混入			なし	大保墓 骨あり	○
129	楕円形？ 88×—	円形 13	灰色土		壙98	壙99		
130	長方形 145×82	不明 32		S15, H20	溝2			○
131	不整長方形 160×—	未掘			壙125	壙64・132		
132	円形 105×—	未掘			壙131, P254	壙64, P266・458		
133	楕円形 130×90	不明 30				なし		
134	楕円形 127×90	不明 13				なし		
135	長方形 105×58	不明 19			溝7			
検出度				残1				

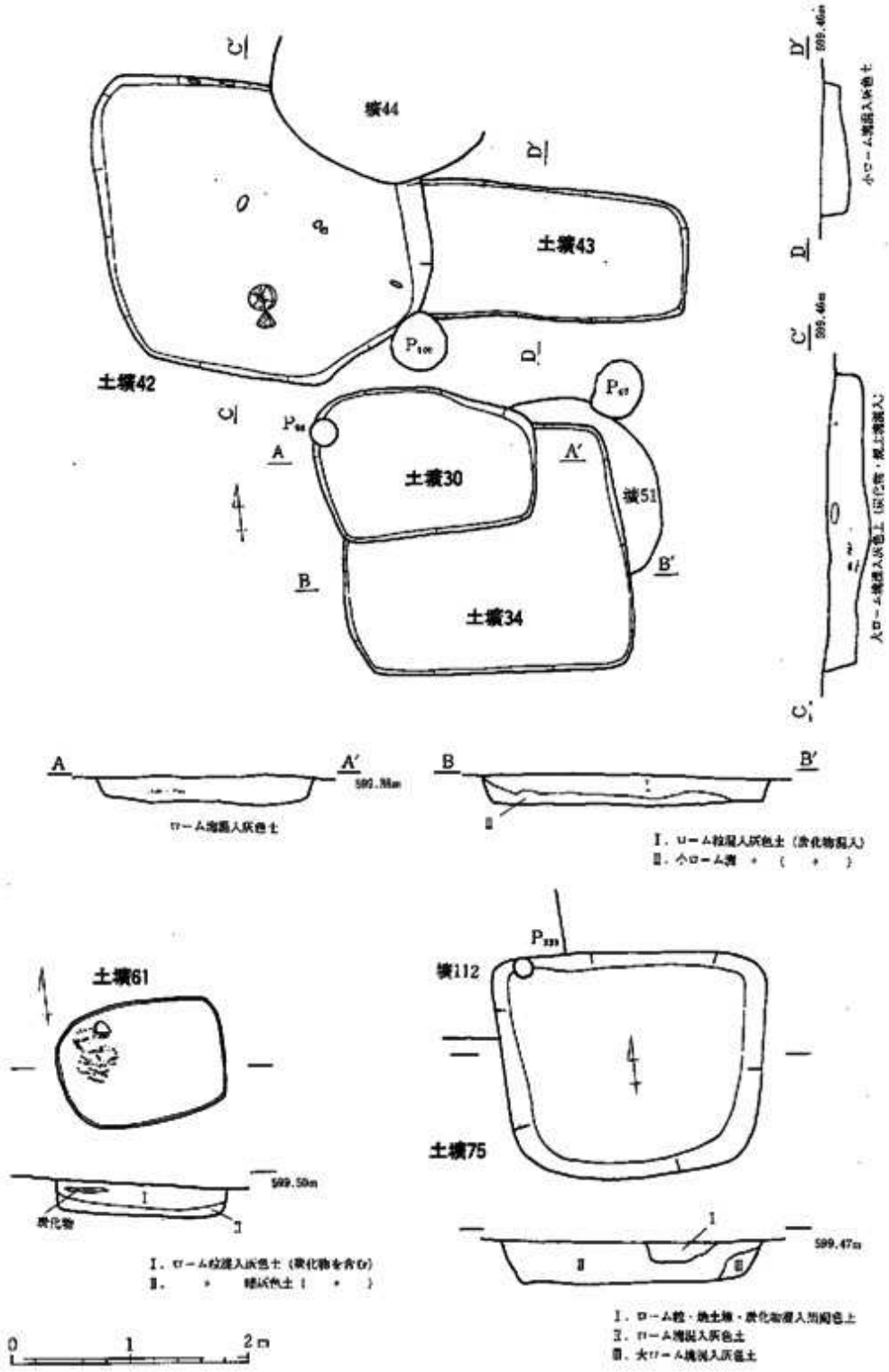
遺物凡例

N……内耳土器
S……須恵器
H……土師器
K……灰釉陶器
T……中世陶器

数字は破片数

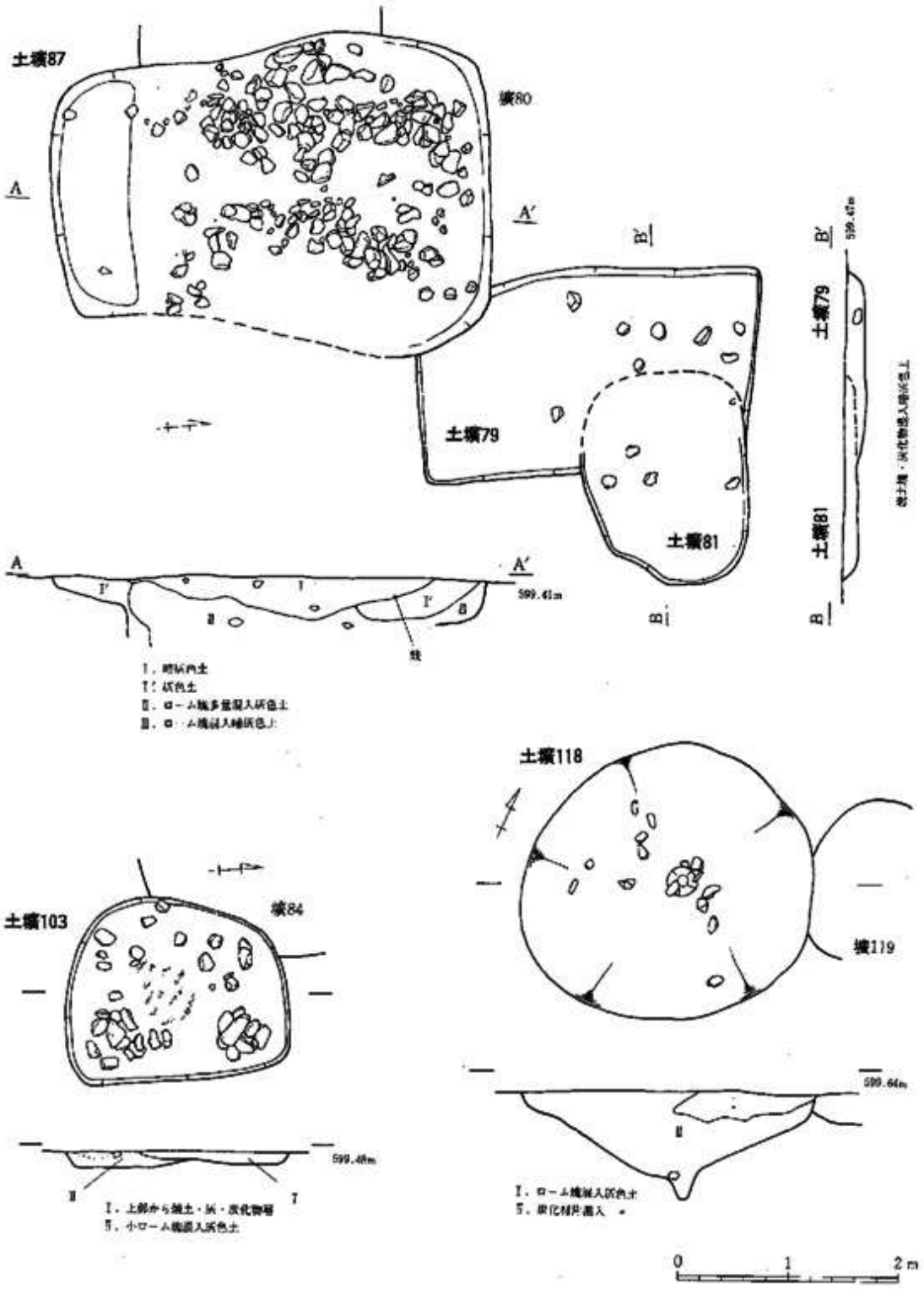

土壙1
599.45m
灰色土
土壙5
A
A′
B
B′
土壙6
A
A′
599.49m
B
B′
599.49m
Ⅰ. ローム粒混入灰色土
Ⅱ. 小ローム塊混入灰色土
土壙7
599.48m
小ローム塊混入灰色土
土壙2
A
A′
壙104
B
B′
土壙3
壙49
土壙33
599.45m
Ⅰ. 小ローム塊混入灰色土
Ⅱ. ローム塊混入灰色土
A
A′
599.38m
ローム塊混入灰色土
壙104
B
B′
599.38m
Ⅰ. ローム粒混入灰色土（炭少量混入）
Ⅱ. 小ローム塊混入灰色土（炭少量混入）
Ⅲ. ローム塊少量混入灰色土
Ⅳ. ローム粒混入暗灰色土
0
1
2m

第33図　土　壙（1）

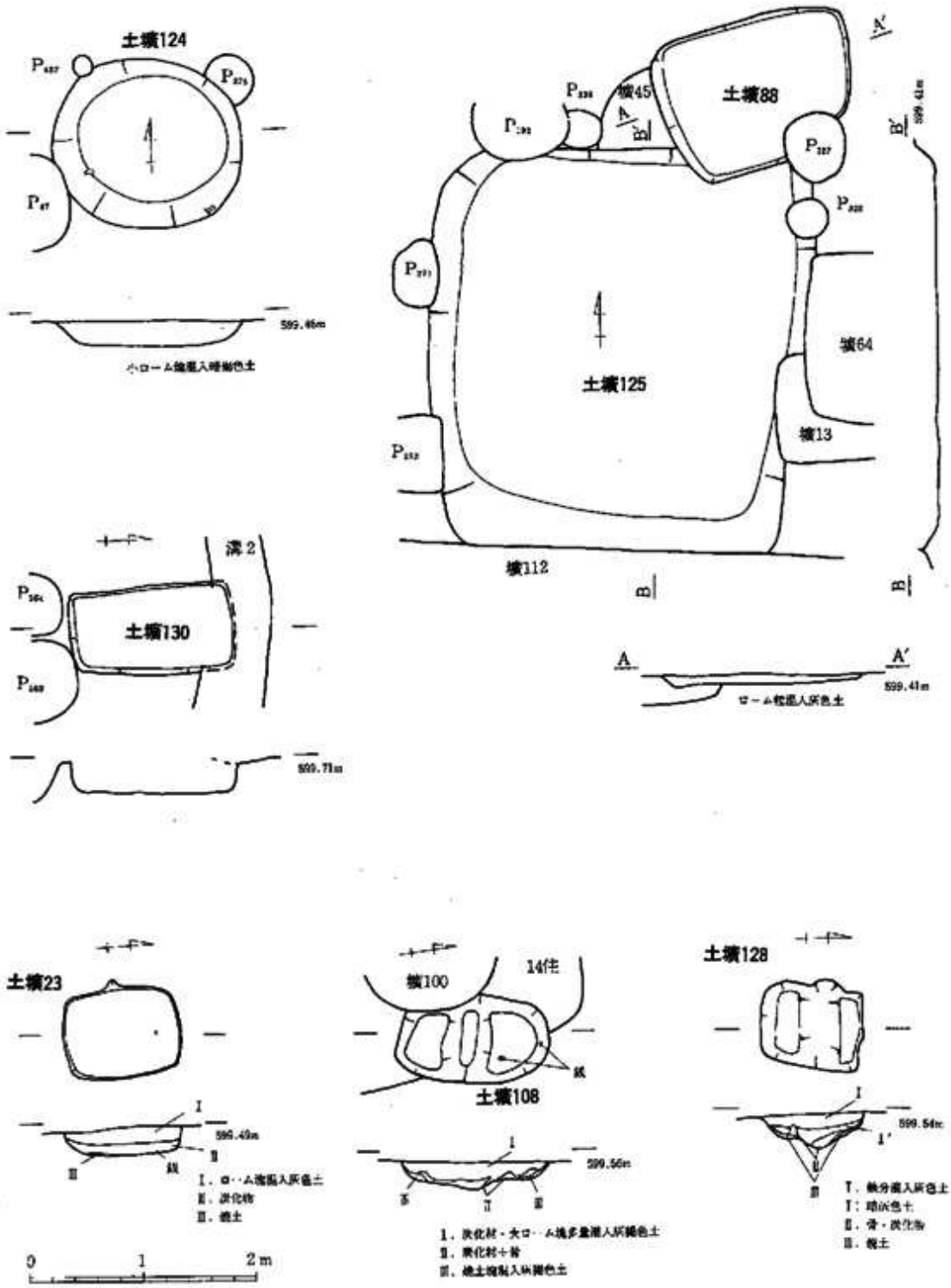


C'
D'
D
C
A
A'
B
B'
壙44
土壙43
土壙42
土壙30
土壙34
壙51
599.46m
小ローム塊混入灰色土
大ローム塊混入灰色土（炭化物・焼土塊混入）
ローム塊混入灰色土
Ⅰ．ローム粒混入灰色土（炭化物混入）
Ⅱ．小ローム塊 〃 （ 〃 ）
土壙61
599.50m
炭化物
Ⅰ．ローム粒混入灰色土（炭化物を含む）
Ⅱ． 〃 暗灰色土（ 〃 ）
壙112
土壙75
599.47m
Ⅰ．ローム粒・焼土塊・炭化物混入黒褐色土
Ⅱ．ローム塊混入灰色土
Ⅲ．大ローム塊混入灰色土
0
1
2m

第34図　土　壙（2）


土壙87
壙80
土壙79
土壙81
土壙103
壙84
土壙118
壙119
599.41m
599.47m
599.44m
599.64m
0
1
2 m

第35図　土　壙 (3)


土壙124
土壙88
土壙125
土壙130
土壙23
土壙108
土壙128
壙45
壙64
壙13
壙112
壙100
14住
溝2
599.46m
599.41m
599.71m
599.40m
599.56m
599.54m
小ローム塊混入暗褐色土
ローム粒混入灰色土
I. ローム塊混入灰色土
II. 炭化物
III. 焼土
1. 炭化材・大ローム塊多量混入灰褐色土
2. 炭化材＋砂
3. 焼土塊混入灰褐色土
I. 褐分混入灰色土
I'. 暗灰色土
II. 骨・炭化物
III. 焼土
0
1
2m

第36図　土　壙 (4)

4　溝

今回の調査で検出した溝は9本である。これらは第2章、2節でもふれているように、2種類に大別される。つまり、覆土直径0.1～3 cm大の砂或いは小礫のみのものと、それが全く見られず灰色系粘土質土が入るものである。

2地区の4、5、7、8は前者に属する。幅1.5～3.5m、蛇行し、東部分では浅い為か検出できなかったもの（4・8）もある。レベルから概して西から東へ向かっていたものである。これらは切り合ったすべての遺構に先行する。溝8底より出土のヘラミガキされた壺口縁小片が唯一の遺物である。

後者は1地区に1、2地区に2、3、6、9の計5本である。特に幅の広い1は一部が2地区にも見えている。1．2地区の間には現在使用中のセギがあり、調査できなかったが、最大幅10 m・深さ50 cm程で、徐々に幅をせばめ現在のセギになったと推測する。他の4本は幅40 cm～1 mと狭いもので、9を除きやはり西から東へ向かっている。3、6は底部に鉄分が沈澱し、厚い鬼板状を呈していた。又6は大きな傾斜をもち、底部を測ると2.3 mで23 cmの比高差をもち西側は急激に浅くなっている。

2は丁度現水田に用いていた水路下に当たる場所でもある。蛇行し、中央で北へ分流、或いは北側に平行する溝に合流するように見え、鉄分はほとんど沈澱していない。

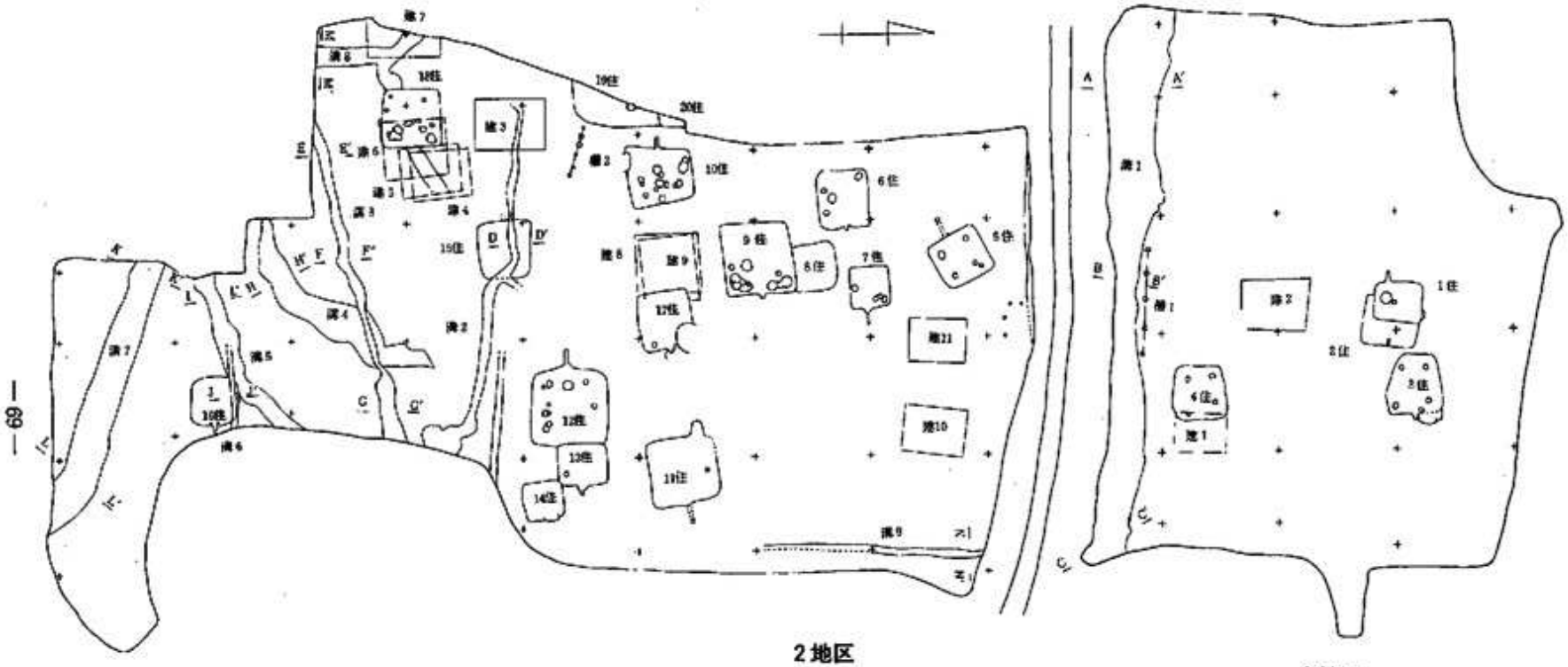
9のみは南北に伸びたものである。土層観察地点では2段底を呈し、北で現水路に合流するものとも考えられる。

いずれも全掘しなかったため、遺物が少なく、若干の遺物と切り合い関係から埋没時期を推し測ると砂礫を含む4、5、7、8はほぼ同じと考え、その時期を古墳時代頃、又、3、6は奈良時代以降、9は中世迄に、1からは近世陶磁器も得られており、徐々にせばめられてきたらしい、2は中世以降のものと考えている。

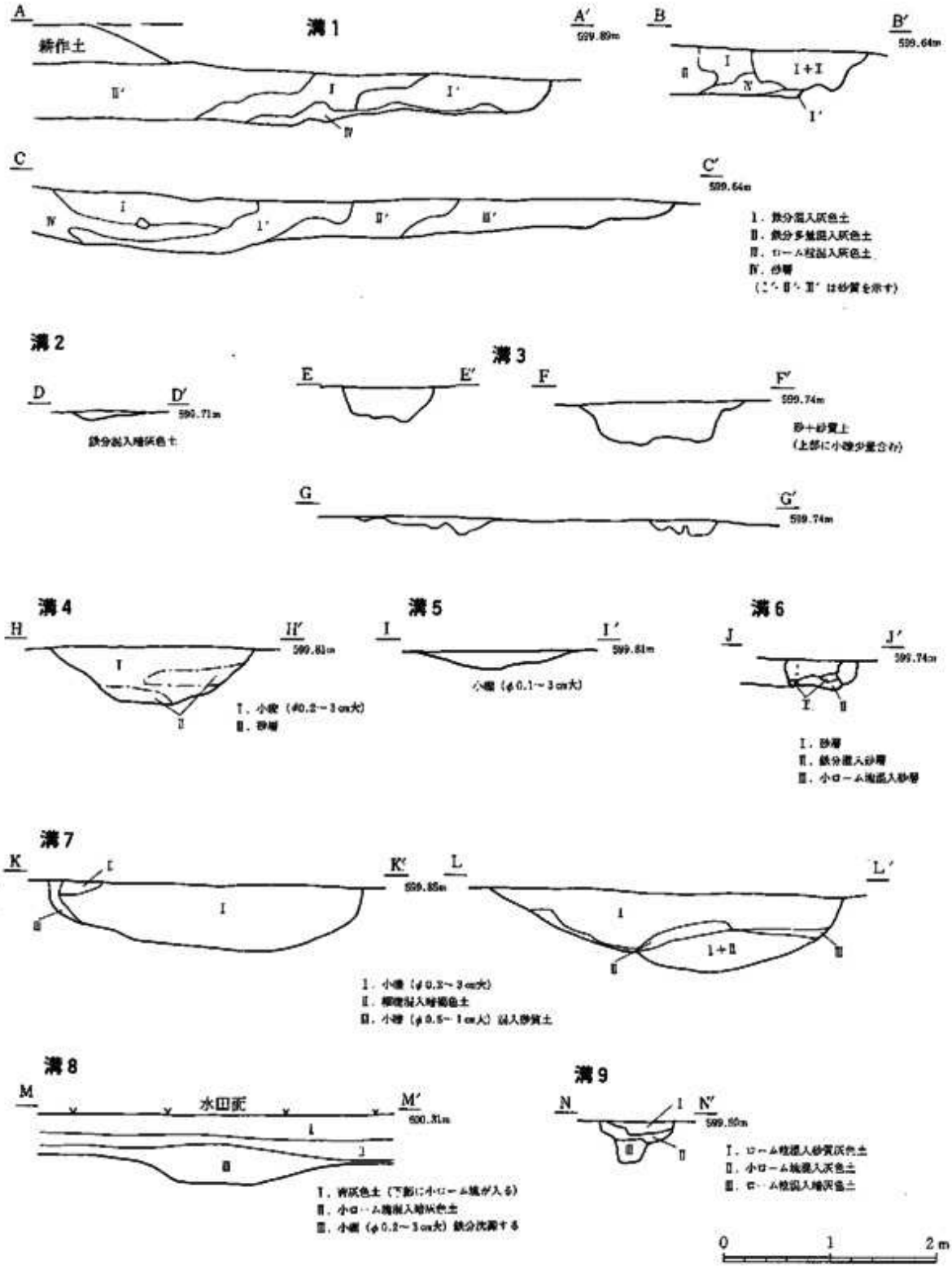
（高桑俊雄）

表3　溝一覧表

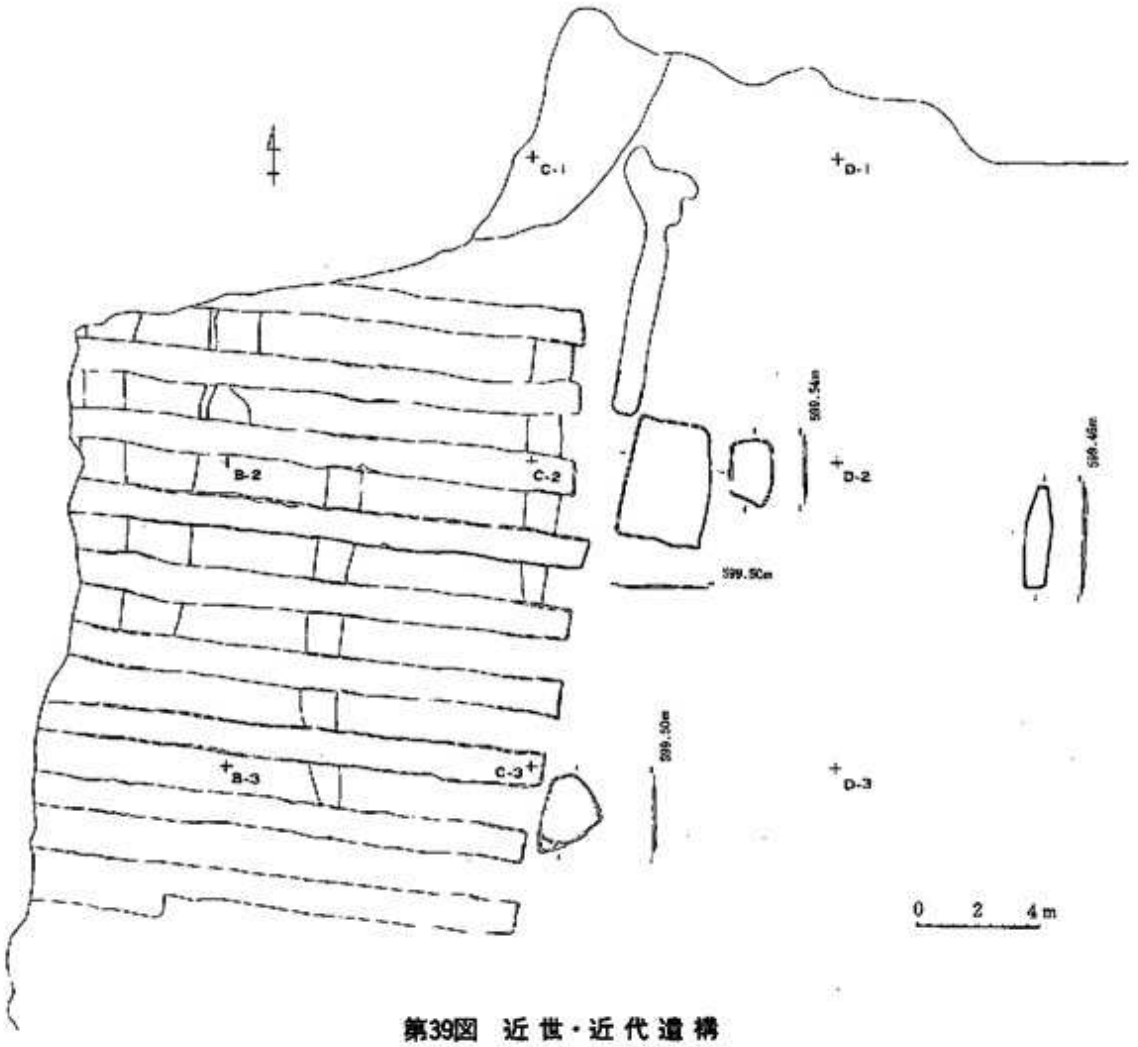
番号	位置	方向	最大幅(m)	断面形	遺物	切り合い関係	備考
1	1地区 南側	西一東一(北)	約10.0	U字形	陶器・磁器・鉄片	覆土中にP135あり	一部2地区北側にある
2	2地区 中央北側	西一東	0.9	浅いU字形		15住・建物址3・土壙130・P507を切る	西側検出できず 北側に同様な細い溝あり
3	〃 中央	〃 東	1.7	U字形		溝4を切る	
4	〃 〃	西一北東	2.5	U字形		溝3・P596に切られる	北東検出できず
5	〃 中央南側	西一東	2.4	浅いU字形		16住・溝6・P600・601に切られる	
6	〃 〃	西一東	0.5	U字形		10住を切る	西側検出できず
7	〃 南側	西一東一南	3.3	U字形		土壙135・P604・607・612・618・614 617・622に切られる	
8	〃 中央北側	南・西 東	2.0	浅いU字形	土師器	18住・建物址4・5・6・7に切られる	東側検出できず
9	〃 北東隅	南一北	0.7	U字形	〃	土壙60・77・P459に切られる	



第37図 溝 配 置 図


溝1
A
A′
599.89m
耕作土
B
B′
599.64m
C
C′
599.64m
Ⅰ．鉄分混入灰色土
Ⅱ．鉄分多量混入灰色土
Ⅲ．ローム粒混入灰色土
Ⅳ．砂層
（Ⅰ′・Ⅱ′・Ⅲ′は砂質を示す）
溝2
D
D′
599.71m
鉄分混入暗灰色土
溝3
E
E′
F
F′
599.74m
砂＋砂質土
（上部に小礫少量含む）
G
G′
599.74m
溝4
H
H′
599.81m
Ⅰ．小礫（φ0.2～3cm大）
Ⅱ．砂層
溝5
I
I′
599.81m
小礫（φ0.1～3cm大）
溝6
J
J′
599.74m
Ⅰ．砂層
Ⅱ．鉄分混入砂層
Ⅲ．小ローム塊混入砂層
溝7
K
K′
599.85m
L
L′
Ⅰ．小礫（φ0.2～3cm大）
Ⅱ．褐鉄混入暗褐色土
Ⅲ．小礫（φ0.5～1cm大）混入砂質土
溝8
M
M′
600.31m
水田床
Ⅰ．青灰色土（下部に小ローム塊が入る）
Ⅱ．小ローム塊混入暗灰色土
Ⅲ．小礫（φ0.2～3cm大）鉄分沈着する
溝9
N
N′
599.80m
Ⅰ．ローム粒混入砂質灰色土
Ⅱ．小ローム塊混入灰色土
Ⅲ．ローム粒混入暗灰色土
0
1
2m

第38図　溝　断　面　図



第39図　近世・近代遺構

5　近世・近代遺構

1地区の西半分に検出した畝状の溝（畝的遺構）と周囲の同じ覆土（青灰色）を落とす落ち込みを指す。覆土は除土した耕作土と同色を呈し、他の遺構とは明らかに時代の隔たりがある。

畝状のものは東西に9本平行に並ぶ。それに切られ南北に3本、これらの東に1本の計13である。東西に長いものは長さ17 m、幅1～1.2 m で未だ用地外の西へ伸びる。深さは10 cm 前後、黄褐色土に掘り込んでおり、底面も立切りも固く良好に残る。畝間は120～150 cm と、落込み部の幅よりやや広い。全掘した2本からは、ボルト・丸釘・楽ビン・石筆等が出土、土器としては陶・磁片が少量あった。他の落込みは平面形が長方形2、三角形1、北西に大形円形の一部と見えるもの等がある。このうち、大形円形は当時の標高線に合致し、1枚の田にする際、西側の床を下げ、一部北側を拡張したとも考えるが、このように遺構的に残るものだろうか。類例を待ちたい。　（高桑俊雄）

第3節　遺　　物

1　土器

(1)　器種の分類

土師器、須恵器、灰釉陶器を従来使用されている呼称（坏・甕など）で大枠に分け（形式）、それらが更にいくつかの群により構成されていると見なせた場合は細分した（小形式）。分類・細分の基本的な視点は、主に外形と、観察できる成形・調整痕（註1）の比較とに基づいている。（昭和58、59年度当遺跡調査の出土品を用いた際は、58年度を一次、59年度を二次、断りなしは今回とした。）

①　土師器

大別される器種は、坏・椀・皿・鉢・高坏・甕・小形甕・壺・小形壺・甑などがある。坏・椀・皿・高坏・鉢には、「黒色土器」（註2）と呼称される、内面が黒色処理（註3）されるものを含む。

坏　　ロクロ使用の有無、及びロクロ使用のものは底面・内面調整によりA～Dを、また特殊な外形によりEを設定した。

A：ロクロ使用のないもの。丸底・平底気味で、体部中位の稜の有無で2種に分かれる。前者は当遺跡では稜より上が僅かに内湾しながら外開するもの（二次1・8）、大きく外反するもの（193）の2形態が認められるのみである（註4）。体部下半・底面に手持ちヘラケズリの後、器面内外にヘラミガキが施される。内面黒色は有無がある。さらに以上とは全く異なり、内面に斜放射暗文をもつ良好な胎土で橙色のもの（一次6住4）もある（註5）。いずれも出土例は少ない。

B：ロクロを使用、底面のロクロ切離し痕の一部またはすべてをヘラケズリによって消し去るもの。外形は平底の底部から内湾気味に大きく外開する体部が続く、概ね逆台形。土師器坏Cに似るが器高に対する口径の比、或いは口径に対する底径の比が若干大きい。内面は丁寧なヘラミガキ・黒色処理である。出土例は少ない（182・183・305）。

C：ロクロを使用、底面に糸切り痕をのこし内面をヘラミガキされる。外形はいくぶんあげ底平底の底部から、直線的またはやや内湾しながら外開する体部が続く逆台形で、土師器坏B・D、須恵器坏D・Eに通じるところがある。内面黒色処理されるものが多く、そうでないものを見るのはきわめて希である。口径のちがいによりI（口径12 cm未満）・II（12 cm以上16 cm未満）・III（16 cm以上20 cm未満）・IV（20 cm以上）の規格があるようだ。出土例はきわだって多く、当遺跡を代表する坏といえる。

D：ロクロを使用、底面に糸切り痕をのこし、内面をヘラミガキされないもの。即ち坏C内面のヘラミガキがみられないもの。外形は概ね坏Cに似るが、若干小形のもの、体部中位に僅かな稜をもつものがある。内面はロクロナデ・仕上げなでのままで、黒色処理されるものは全くない。出

土例は少ない（一次14住2、二次227）。

E：ロクロ使用、体部外面中位以下と底部外周部または全面にヘラケズリ、内面に鋸歯暗文・界線が施され、外形は体部外傾度の小さい逆台形を呈す。色調赤褐～橙色、焼成・胎土とも良好な特殊な土器で、他の坏類との差異は明瞭である。他遺跡で甲州型坏・赤色胎土暗文坏として指摘されるものである(註6)。当遺跡にあっては客体的で出土例は少ない（280・281、二次67・91）。

境　土師器坏C・Dに高台を付した形態をとるが、灰釉陶の模倣品が祖形と推定される(註7)ため坏類とは分離される。調整の差異により細分される。

A：内面にヘラミガキが施されるもの。外形はまさに土師器坏C底面外周に、やや外方へ開く高台が付される形態をとる。内面の黒色処理は有無があり、前者が圧倒的に多い。底面に糸切り痕がのこる。ある程度の出土量がある（66・67・137・138）。

B：内面にヘラミガキが施されないもの。従って黒色処理もない。外形は境Aに準ずるが、若干体部が小さく高台が高くなるものがある。出土例は少ない（一次6住25～28）

C：内外面すべてが黒色処理されるもの。ヘラミガキは内面すべてから外面に及ぶものもある。外形は境Aに似るものと、半球状の体部に直立または外反する高台を有すものがある（59）。

皿　ロクロ使用、外形は高台のつくものである。A：内面ヘラミガキ・黒色処理（41・44・45）、B：内面ヘラミガキ・内外全面黒色処理（42・43・114）の2種がみられる。土師質土器の中で皿とされるものは今回は扱わない。

鉢　口径に対する器高の比が坏類より大きいものを一般には指す。

高坏　外形が判明するものは脚部の出土しかないが、他遺跡での成果(註8)を参考に細分する。

A：脚部が円筒状の上半部から急にラッパ状に下方へ外反する器壁の厚いもの。脚内面中位以下に横ヘラケズリ、同上半には成形時のしぼり痕を残し、外面にヘラミガキを施す。弧状に内湾する坏部がつくと推定。出土例は少ない（209・二次32）。

B：脚部が上半部からラッパ状に外開する器壁の薄いもの。坏部には中位ににぶい稜をもって外開する形態のものがくると推定。出土例は少ない（208）。

甕　外形と手法により8種に細分したが全形を知り得るものは少ない。長胴形と胴の張るものに大別される。ヘラミガキが施され、胴の張るものは壺として分離した。小形のものも、その系統などを考慮して小形甕として分離した。

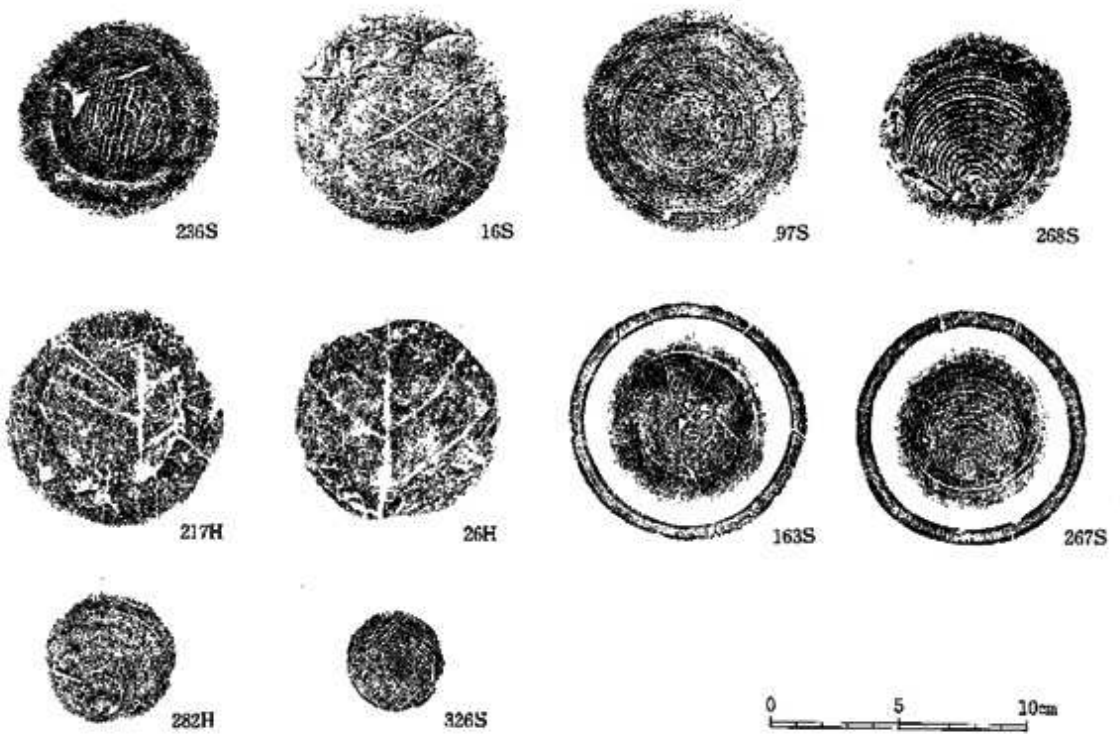
A：長胴形、背の高い厚手の甕で、口縁部が大きく外反外開し、最大径が口縁端へくるもの。底部は平底、胴部上半が張るものは頸部「く」の字をなす。調整は、口縁部に強いよこなで、胴部は外面がなで・ヘラ状のものによる縦のなで（ヘラナデと呼称）・稀に斜ハケメ、内面がなでとヘラナデ。底面には木葉圧痕が残るもの、なでにより消したものがある。成形・調整とも雑で、外形は歪み、巻き上げ成形の状況をよく残すものが多い。出土例は多い（29・30・244）。

B：長胴形、厚手の甕。口縁部が緩やかに外開し、胴部上半からなだらかに底部へ集約する外形を

呈す。口縁部はよこなで、胴部は内外面ともハケメとなでで調整される。甕Aよりいくぶん小形で胴部下半の形態が異なる。

C：円筒形の胴部に、ほとんどくびれない頸部から強く外反する口縁部がつくもの。丸底で、著しく器肉が厚い。口縁部をよこなで、胴部外面を縦のハケメ、内面を縦横のハケメまたはなでで調整する。器高が口径に等しい竝のずん胴のものもある。出土例はあまり多くない（102）。

D：長胴形、やや厚手で、胴部上半の内外面にカキ目（または横ハケメ）をもつもの。口縁は「く」の字状に頸部から外開、胴部上半が張ってそこからなだらかに底部へ集約する外形をとる。底部は当遺跡例では不明だが丸底になるらしい(註9)。調整は胴部外面は全面縦ハケメの後上半部にカ



須恵器・土師器の底部調整

236S・16S（Sは須恵器・Hは土師器）は回転ヘラ切りによる切り離しの後、軽くナデを行うほかは未調整の例である。236Sは蓋A・16Sは杯Bである。97Sは底部切り離しの後、外周から中心へと左回りの回転ヘラケズリを行っている。217H・26Hは丸底部で、木葉の圧痕が明瞭に残る。以上、本遺跡ではやや古手の手法である。

次に163S・267Sは杯C底部で、両者とも回転糸切りによる切り離しの後、外周に回転ヘラケズリを行い、高台を貼り付けている。268S・282H・326Sはそれぞれ杯D・小形甕F・長頸壺で、いずれも回転糸切りの後は未調整である。これらはいずれも糸切り手法の初現期の資料である。

尚236S・326Sは、最後に櫛歯状の工具（ハケとはやや異なる）により調整を行っているようである。また、16Sにはヘラ記号が見られる。

（竹原　学）

キ目、内面は斜ハケメまたはなでの後上半部から中位までカキ目、口縁部はよこなでかカキ目後よこなでがされる。甕Eに本類に似るものがあるが器厚が異なる。出土例は少ない（260・一次17住13）。

E：長胴形、比較的薄手（薄い部分は器厚約5 mm）、胴部外面に縦または縦に近い斜ハケメが密に施されるもの。外形・調整の差より3種に細分する。E－1種は胴部内面にもハケメをもち、ハケメは斜・横位が中心。口縁部は頸部から「く」の字に外開し内面に横ハケメをもつことがある。胴部上半かなり高い位置に最大径があり、そこから底部へ直線的につぼまる外形を呈す（186）。E－2種は短く強く外反する口縁部が特徴で、口縁端に最大径がくるもの。内面調整は口縁部にのみ横ハケメ、胴部はなでによる（289、二次97）。E－3種は口縁内面にカキ目があるもの。頸部から「く」の字状に開く口縁部は直線的なもの（145）、内湾するもの（79）などがある。最大径は胴部上半から中位の間にあるものが多く、前2種より胴部に丸味をもつ。内面調整は口縁部のカキ目が胴部上半へ及ぶことがある他はなでによるが、頸部下5～10 cm位から底部近くまで、浅いなだらかな断面形をもった幅1 cmほどの溝状の調整痕が横2 cm位の間隔をおきながらまっすぐ下っているのを認める個体も多い。外面の縦ハケメと連動して器壁を薄くするための痕跡と考えられる。本類は当遺跡の主体をしめる甕の1つで出土例は多い。

F：小さい底部と砲弾形に近い形態の胴部で、胴部外面全面を強くヘラケズリされる、非常に器壁の薄い甕。口縁部は、「く」の字状または「コ」の字状にくびれる頸部から外開し、端部に最大径をもつ。調整は胴部外面を上の方から横・斜・縦のヘラケズリ、口縁部を強くよこなでする。出土例は少ない（290）。関東地方において武蔵型と呼ばれる甕に類似する（dE10）。

G：胴部中位やや上方に最大径があり、「く」の字に近い形で胴が張るもの。外反気味に開く口縁をもち、器肉は厚い。口縁部はよこなで、胴部はハケメ・なでで調整されるが、内面に雑なヘラミガキを伴うものもある。出土例は少ない（200、二次20）。

H：平底で球形に近い胴部をもつ厚手胴張りの甕。口縁部は頸部から「く」の字に外開し、厚手につくられる。胴部外面はハケメ・なで、内面は雑なヘラナデやハケメで調整される。出土例は少ない（216、二次21）。

小形甕　若干の大小はあるが甕より小さく、外形と調整で明らかに類似する一群となる。大小2者があり、さらに後者はロクロ使用の有無により細分できる。

A：平底で非形の体部をもつやや大きめのもの。なで・部分的なヘラケズリ・ハケメで調整される（6・18）。

B：丸底で、くびれの少ない頸部から僅かに外開する口縁部をもつ、やや大きめのもの。器壁がきわめて厚く、器面はヘラ状のものでなでられている。出土例は少ない（99・100）。

C：小形で、胴部外面をハケメ調整されるもの。平底と丸底の2者があり、前者は外面に木葉圧痕を残す。調整は口縁部よこなで、胴部内面ハケメのものとヘラナデのものがある（26・240）。

D：小形で、胴部外面をなでやヘラケズリ調整されるもの。底部は平底で木葉圧痕がのこり、内面調整はハケメかヘラナデである（212、一次6住15）。

E：ロクロ使用、小形で、胴部外面すべてと口縁部内面にカキ目があるもの。底面に回転糸切り痕を残し、胴部内面はロクロナデの痕跡が観察できる。外形は、E－1種：最大径が胴部の上半にあり口縁が強く外反し、底径が口径の½以上と大きいもの、E－2種：胴部中位に最大径があるため丸味が強く、口縁部が「く」の字状に外開し、底径が口径の½位と比較的小さいもの、の2種がある（1種：81・147、2種：285・二次94）。

F：ロクロ使用、小形で、ロクロナデの痕跡を明瞭に残すもの。E類のカキ目がないものといえる。外形の特徴もE類に似るが、いくぶん口径の大きいものもある（282・二次72）。ロクロ使用がなく、内面に指おさえ痕とカキ目に模したと思われる横ハケメをもつあげ底の個体も少数みられ、本来は1種に分類されるべきものであるが、今回は、本類を模したものではないかという推定から便宜的にここへ含める（F′：286）。

G：胴部外面が強くヘラケズリされきわめて薄い器壁をもつもので、胴部は球形に近く丸底となる。口縁部は強くよこなでがなされ、胴部内面にはなでと指おさえの跡がみえる。甕Fとよく似た手法で調整されており、対をなすものと推定される。出土例は少なく図示できるものはない。

壺　胴張り甕と類似するが、内外両面またはそのどちらかにヘラミガキが多用されるもの。出土例はきわめて少ない（245、二次38）。

小形壺　小形甕の調整がヘラミガキになっているものを便宜的に本類で捉えた。この分類が適切かどうかまだ不明であり、出土例はきわめて少ない（19・20）。

甑　甕または小形甕の底部に複数の貫通孔を有するもので、出土例は少ない（7・242）。

②須恵器

大別される器種は、坏・蓋・高坏・盤・鉢・長頸壺・𤭯・四耳壺・甕などで、ロクロ使用の痕跡を明瞭にのこすものが多い。

坏　一般に坏身・坏と呼称されているものを包括したため著しく外形が異なるものが含まれる。外形、調整、焼成の状態によりA～Eの5類を設定。ロクロにより調整される。

A：立ち上がり部と蓋受けを有する形態のもの。蓋Aと組合せが想定されている。出土例は少ない（191・192・204）。

B：底面にヘラ切り痕やヘラケズリ痕をのこすもの。底部はいずれも厚い。外形によりさらに細分でき、B－1：比較的平らな底部から外傾度の弱い体部が直線的に外開する箱形に近いもの、B－2：比較的平らな底部から体部が大きく外開するもの、B－3：丸底の大きな底部から外傾度の弱い体部に緩やかに移行していくもの、B－4：底面が、切り離し痕をもつ部分（基本的底部面）とその外周のロクロナデが施されている部分（二次底部面）の二段からなる(註11)もの、の4種がある。出土量は多い（1：16・24、2：1・2・207、3：23、4：9・22）。

C：底面外周に高台が貼り付けられる有台のもの。口径により大中小と器高の高いものの4規格がある。底面の切り離し痕が回転ヘラケズリにより消されているものが多いが、糸切り痕を中央部に削り残すものもみられる。出土例は多い（162～173・263～267）。

D：底面に糸切り痕をのこす無台のもの。僅かに上げ底の底部から直線的またはいくぶん内湾しながら大きく外屈する体部をもつ。底部の外周際に、糸切り部分とは段により区分されて、一上、二次底部面状に横方向へひろがる部分をつくったのち上方へ外開する体部を有するもの(註12)もあるがこれらとそうでないものの境界は不明確である。稀に底面外周をヘラケズリするものもみられるが、全体的に口径など規格のばらつきが少ない。焼成形態にも特徴があるようで、火ダスキ状焼成痕を残すものが多く、口端外面のみが濃色に変わっている。出土例は多い（174～181・268～275）。

E：外形・調整は須恵器坏Dとほとんど変わらないが、胎土が粗悪で焼成があまく非常に軟質なもの。色調は黄灰～暗灰色を呈し、土師器と区別し難いものもある。出土例は多い(34・35・103～107)(註13)。

蓋　坏類の蓋が4形態．その他壺の蓋と考えられるもの少量が存在する。ロクロ使用。

A：坏蓋でつまみのつかない器高の高いもの。丸味をもった天井部の端部が沈線や稜をなして、外開する口縁部へ続く外形を呈す。口縁部に直線的なもの、僅かに内湾、外反するものがある。口縁端部の内側に僅かな凹部を一周させるもの（202・227）や、天井部端に沈線・稜をもたない小形のもの（236）もみられる。天井部外面にはヘラ切り痕、ヘラケズリが観察される。出土例はあまり多くない（189・190・201）。

B：天井部に宝珠形のつまみがつき、端部の内面にかえりをもつもの。天井部中央には回転ヘラケズリ痕が観察できる。小形のものが多く、坏Bの小形のものと組み合わさるといわれる。出土例は少ない（12・203・二次12）。

C：天井部につまみがつき、端部を下方へ小さく屈曲させたもの。調整は天井部に回転ヘラケズリ痕が観察できる。口径に大小があり坏Cの大小に対応して組み合わさるといわれる。つまみや端部などに微妙な差異が認められるが今回は細分には至らなかった。出土例は蓋では最も多い（157～161・262）。

D：天井部に環状のつまみがつくもの。出土例はきわめて少ない（二次43）。

高坏　大きくラッパ状に外反する脚に須恵器坏B・2種に似る坏部がつく。脚端部は短く下方へ屈曲し、脚部上半の最もくびれる部分に沈線がまわるものもある(一次6作12)。出土例はきわめて少ない。

盤　大きく平らな底部から短い体部が屈折して立ち上がり、背の高い高台がつく。出土例はきわめて少ない（二次65）。

鉢　須恵器坏B類よりも口径に対する器高の割合が高く、内湾気味に大きく外開する体部が端

部近くで一層内湾しておさまる外形をとる。底部は平底になるものとそうでないものがあるようだが、出土例が少なく、詳細は不明である（二次247、211）。325は金属製容器を模したものと考えられる。

長頸壺　肩部が丸味を帯び底部に高台を有するものと、口縁端部が段をなさずに素直に外反し肩部に稜をもつものの2者がある。稀に後者と同様の口頸部をもちながら胴部が著しく細身で底面に糸切り痕をのこすもの（326）もみられる。

甕　底部に高台をもつもの（258）ともたないものがある。口頸部はくびれる胴部ぎわから長く立ち上りながら大きく外反し、口縁端部下2～3 cmのところで一旦稜をつくって受け口状になる。高台をもたないものは肩部を刺突文などで飾られる（二次2）。

四耳壺　大形の壺で、丸味をもって張る肩部に最大径があり、その半分位にくびれる頸部から全器高の⅓をしめる大きな口頸部が外反しながら上方へ開く外形を呈す。口縁端部は面取りされ上へつまみ上げられている。肩部のやや上に一条の突帯を巡らせ、それを四分割する形で突起（耳）が付けられる。器面調整はタタキ（胴部）、ロクロナデ（口頸部）による。出土例はかなりあるが全形がわかるものは少ない（二次220）。

甕　概観して、大形（口径40 cm以上）、中形（同30～40 cm）、小形（30 cm以下）に分けられるが、全形を知り得るものは非常に少ない。大形・中形のものは大きく外反する背の高い口頸部を、小形のものは短く外反または受け口状に外開する口頸部をもつ。胴部にはタタキ目が明瞭にのこり、内面にあて具痕がのこるものも多い。タタキは胴部上半でみる限りでは、器面に対して右回りで上方へ向う螺旋状になされている（246・291・292）

その他の器種　短頸壺（21・184・288）・横瓶（220）・フラスコ型瓶（144）・擂鉢（二次248）などが出土しているが、いずれも数が少ない上に小破片のものが多くて類型を把握し得ない。

これらの他に特殊なものとして陶硯がある（327）。円面硯の脚部破片で、縦の深い刻線が等間隔で配されるものと推定される。当遺跡では初見である（註14）。

③灰釉陶器

大別される器種は碗（341）・皿（75）・段皿（二次234）・長頸瓶（77）・短頸壺（153）小瓶（二次196）・平瓶・壺（脚台のつく双耳壺と推定される）などがある。出土例は今までのところあまり多くない。

(2) 住居址出土の土器

住居址およびそれ以外の遺構から土器の出土をみているが、量的な重心は住居址出土品にある。図示できた土器については出土土器観察表（表4）を、また出土土器の総体（器種と量）については挿図2に示したので個別には述べない。ここでは出土状態を中心にみてみたい。

①　一括遺物

第16号住居址出土土器の内訳と量は挿図2の通りであるが、本址は覆土中からの土器片が極めて

少なく、床上に一括品が10点発見された。これらの一括性を裏付けるのは、これらに接合せず図示できなかった土器小片が、出土総量の7％（537g）のみであったということである。覆土中にあった1点（237）を除き、他の図示したもの（236・238～246）は住居址廃絶時点に近い頃の、廃棄における同時性をもった一括遺物に準ずるものと認定し得る。

第9号住居址は覆土・床面上の土器については他の住居址と同じであったが、カマド南のP_6～P_8から供膳形態の土器が重なるようにまとまって出土した。図示できたものは、P_6：土師器坏C（120・135）・同皿A（111）、P_7：同坏C（117・118・121・124・126・133）・同皿A（110・112）・同皿B（114）、P_8：同坏C（129・130・134）・同埦A（138）・須恵器坏E（105・106）である。142はP_6とP_7で接合した。この他、P_{10}からも同様な出土があった：土師器坏C（127・131・132）・同埦A（139・140）・同皿A（109）・須恵器坏E（104）。これらは同様の出土状態から推定して、すべてを包括して住居址廃絶に前後する時期にこのピット群一帯に置かれていたか棄てられた、廃棄における同時性をもった一括遺物に準ずるものと考えられる。

② 覆土出土の土器

前述以外の住居址は覆土中から床面にわたって散発的に遺物を出土していて、床面上または覆土中に一括して遺物が遺棄された状態は観察されなかった。特に第6・10号住居址にあっては覆土上層から下層までかなりの密度をもって土器片が含まれている状態であった。この様な住居址出土品は、それが床面近くにあったか覆土上層にあったかは、さほど重要なことではなく、更に、完形品に近いか破片であるかも、問題とにならないと考える(註15)。すなわち住居址の覆土はある時代のひとつの層位にすぎず、従ってそこからの遺物も一軒の家でもっていた道具のセットを示すものでも、また住居内の道具の位置を示すものでもないということである。覆土中に包含されるすべての土器の中での各器種の出現頻度を数量的に示すことの方が、住居址出土の遺物を総体でみる時は適切であろう(註16)。挿図2の数字は重量（g）であるが、円グラフの面積は百分率で、各器種が全体の中で占める割合（頻度）を示している。

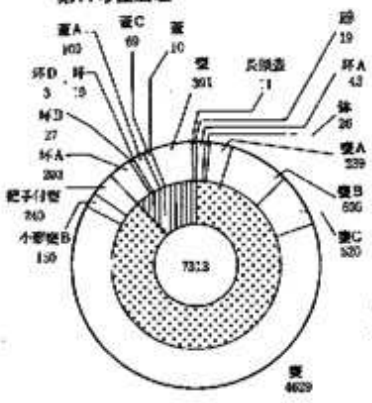
(3) 土器の系統

① 型式の変化について

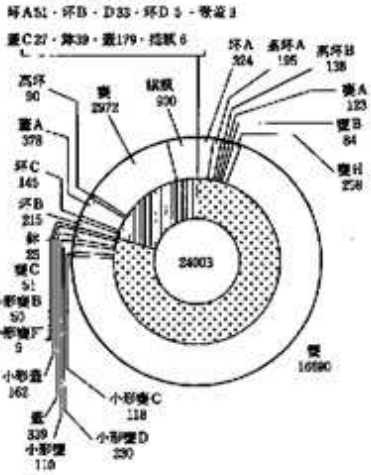
土師器坏　B・C・D類について調整手法からみると、ロクロ使用は共通だが、B類にみられる、底面（・体部下半）ヘラケズリ—(1)、内面ヘラミガキ—(2)、内面黒色処理—(3)の3手法が、C類では(1)の手法、D類では(2)、(3)の手法までが行われなくなる。手法が省略される方向へ変化していくとすれば、B→C→Dという組列の図式が想定できる。B類に先行するものは直接には捉えられない。しかしロクロ使用という条件を除くと(2)、(3)の手法はA類においても認められ、A・B類間には大きな隔たりがあるものの、大枠では同一の系譜上に位置づけることは可能とみたい。

次に外形からみると、B・C・D類は基本的には同形となる。ただし、細かく寸法の比でみていくと、底径÷口径の数値がB類では0.5以上になる（平均0.56）のに対し、C類では0.5以下（6住

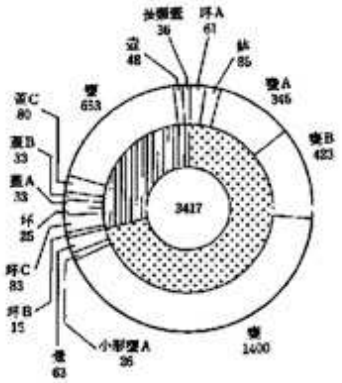
第11号住居址



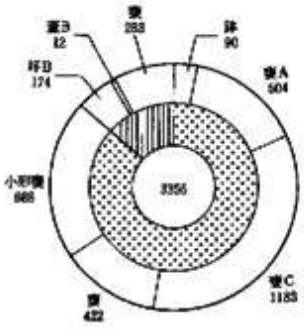
第12号住居址



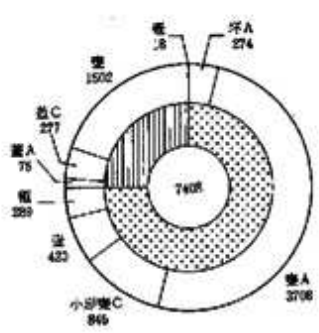
第15号住居址



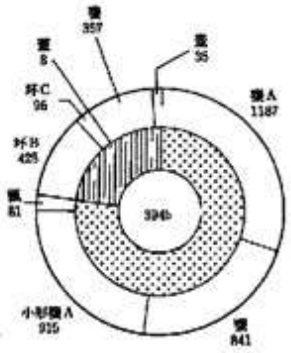
第 8 号住居址



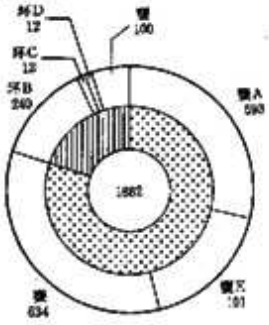
第16号住居址



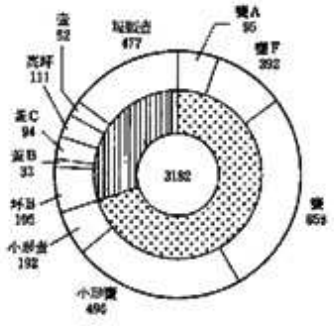
第 1 号住居址



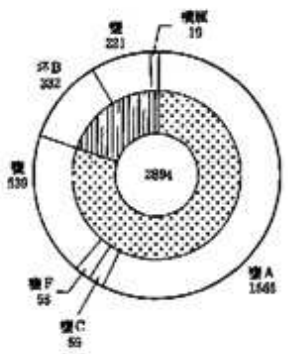
第 3 号住居址



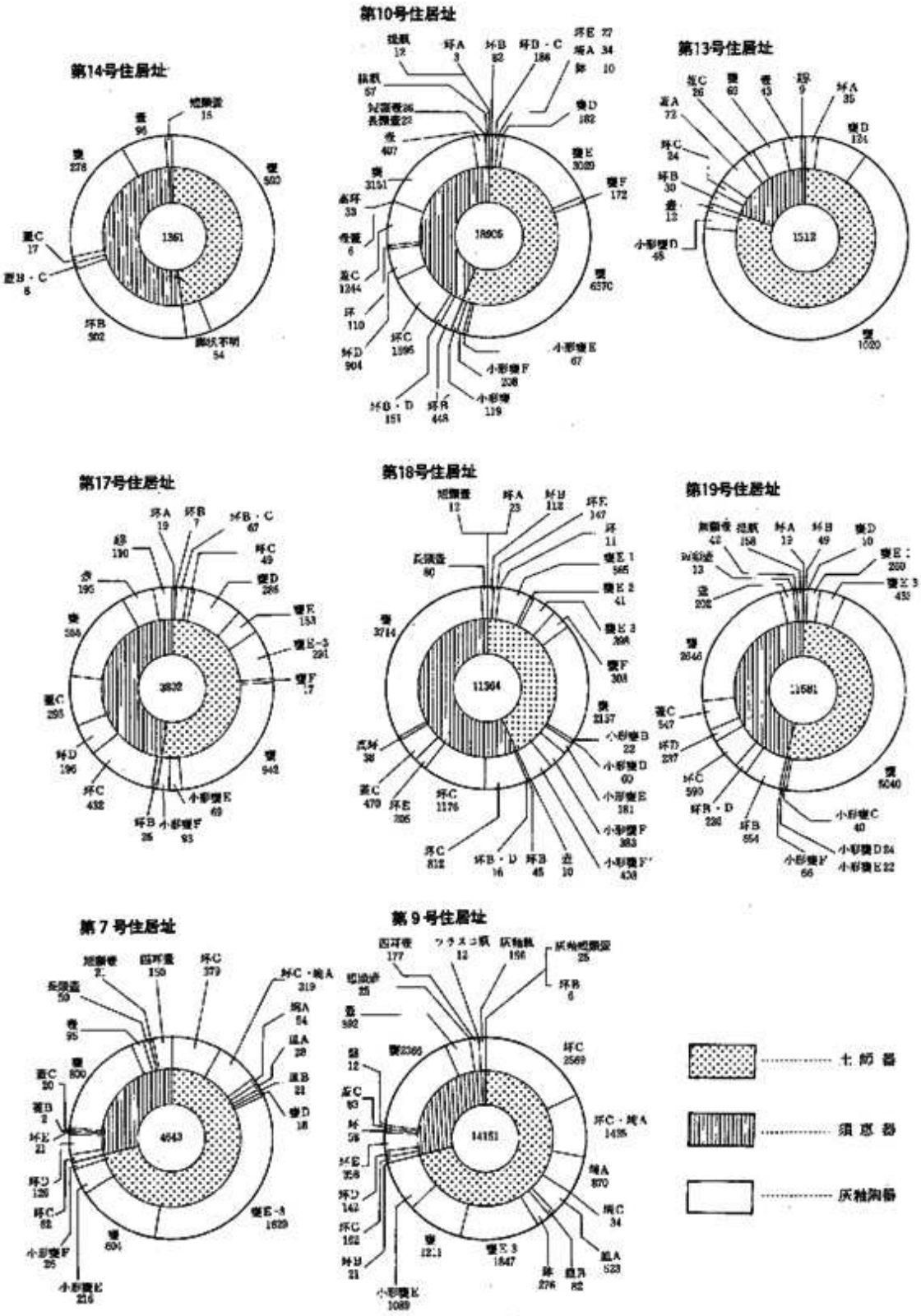
第 4 号住居址



第 5 号住居址



挿図 2 (1)


第14号住居址
第10号住居址
第13号住居址
第17号住居址
第18号住居址
第19号住居址
第 7 号住居址
第 9 号住居址
土師器
須恵器
灰釉陶器

挿図2 (2)

C類平均0.42)、また器高÷口径の数値はB類がC類よりやや小さく、B類はC類に較べて、底径の比率が大きく浅い平らな感じをうける外形を呈す。D類はC類（CII種）よりも規格が小さくなる（6住CII種口径平均13.0cm、一次6住D類口径平均11.8cm）が、底径÷口径の数値はB・C類間ほどの差はない（一次6住D類平均0.45)。また体部の外形線が、B・C類ではなめらかに外開するのに対し、D類では中位に鈍い稜を有するものが現れる。以上の外形の差異は製作技術の変化で理解される。即ち底面の切り離し部分を小さくしていくこと、体部のロクロナデ・よこなでの回数を減らすことという手間の省略が進むためと考える。

A類（体部に稜のないもの）とB類をつなぐ資料は一次17住4が相当すると推定している。

須恵器坏D　外形からみると、分類で述べた様に、二次底部面状の部分をもつもの（便宜的にD－1種とする：174・270・271）とそうでないもの（D－2種）があり、両者に前後関係が想定できる。ただしD－1・2種の境界が不明確なものもある。これはD－1種の二次底部面状の部分は、本来意図的に作られたものではなく、外形に今までどおり膜の張りをもたせながら（口径および体部の外傾度を変えないで)、底面切り離し部を小さくしようとした製作技術上の要因に由来するものだったためと考える。このため厳密にみると二次底部面状の部分の有無よりは、D－1種ではその部分も底部に含めて、底径と口径の比や体部外傾度で比較を行うべきであろうが、二次底部面状の部分から体部への移行は漸移的なので現実的ではない。曖昧ではあるが、二次底部面状の部分の有無やこれに準ずると考えられる底面からの立ち上がり（177）に着目した方が確実だろう。ともあれD類の外形は、腰の張りを少なくし、より小さい底部から直接体部が外開していく形へと、製作の手間を短縮していく形で移行する（範型の変化が技術の変化を追いかけている)。

手法上からみると、底面糸切り部の外周から体部下端に回転または手持ちヘラケズリを行うという、余分に手間をかけたものが若干ある（176・178・181)。これらの原形はD－1種に近いものと思われ、同種の中の亜種として古い段階に置かれると推定する。

D類に先行するものはB類の中にみられる。しかしB類は底部の厚さからみてすべてヘラ切りによっており、糸切り手法の導入という点でB・D類間には断絶がある。しかし前述した、D－1種の底面外周をヘラケズリするもの(178・181)は、底部の厚さという点を除けば外形がB－2種（9・223・224）に類似しているので、これも技術の変化が外形の変化に先行した一現象と捉え、B－2種がD類と同一系譜上にあるものと考えたい。（前田遺跡(註17)では寸法、外形があまり異ならない坏が、B類とD類に分かれる例があり、両者の近親性を示している。)

土師器甕E　調整は基本的に4つの部分、①口縁内面、②同外面、③胴部内面、④同外面に分けられる。E－1種は、①よこなで・横ハケメ、②よこなで、③斜・横ハケメ、④縦ハケメ、という構成。E－2種は、①横ハケメ、②よこなで、③なで、④縦ハケメ、E－3種は①カキ目、②よこなで、③なで・溝状調整痕、④縦のハケメ、となる。即ち①と③に違いがみられる訳である。E－3種のみが調整の一部にロクロを使用していると認められ、これを3種のうち最も新しいものと

考える。すると、①の部分ではE－1・2種の横ハケメがカキ目に置き代わり、③の部分ではE－1種のハケメが省略され(必要なくなり)、E－3種になって溝状調整痕が現れる、というE－1・2・3種の順序での変化が想定できる(註18)。

外形では、全形がわかるものが少ないが、胴部最大径の位置と形態に変化が認められる。即ち、E－1種は元来かなり器高があり、胴部最大径はそのだいぶ高い位置に来て、張りも強い（当遺跡出土品に好例がないので前田遺跡(註19)6住358を参照）のに対し、E－3種では器高が低くなって胴部最大径の位置がやや下がる上に胴部全体が僅かに丸味をもってくる。口縁部については、E－1・2種は強く外開・外反するものばかりだが、E－3種には内湾気味のものも現れている。口縁の内湾はよこなでの技術の変化として理解できるが、胴部最大径の移動は原因が不明である。

土師器小形甕E　E類はロクロが使用されているので、土師器坏・甕Eと同様のことが考えられる。即ち、底径の減少・胴部最大径の下降（それによって胴部の丸味増）・口縁部の内湾、である。これはE－1種からE－2種への変化と等しい内容と言える。底径の減少・口縁部の内湾については技術的な側面からの理解が可能だが、胴部最大径の下降については前述した土師器甕E同様、今のところ不明である。範型の変化として片付けられない問題と思う。小形甕F類の一部もE類と同様な変化をたどる。

E－1類（またはF類の一部）に先行するものとしては、E・F類の古い段階に位置づけられそうな、二次72・94に、今回のC類の一部（26）が外形のみを見れば極めてよく似ている点から、C類の中に求められると予想しているが、調整手法の格差が大きい上に資料数が少なく、確証はない。

② 模倣

供膳形態の土師器の中には、須恵器・灰釉陶器の器種の外形を模倣することによって登場したと推定されるものがある。埦A、皿Aなどがそうであり(註20)坏Bにもその要素がある。

埦Aは表面的にみると坏Cに高台をつけただけのものであるが、実際は同時期の灰釉陶器の碗を模してつくられたものである。外形細部ではかなり違う部分もあるが、高台の形態の模倣などに特徴が表れている。具体的にみると、67・139などは猿投窯の黒笹14号窯式の碗にみられる、いわゆる角高台を模したものであろう。ただし体部は、前記窯式の灰釉碗が大きく端部を外反させているのに、この特徴をほとんど写していない。

皿Aも、この器種に先行するものが全くみつけられない点からみて、灰釉陶器の皿を模したものであることは明らかである。主観的な見方だが、44・45などはやはり高台の形態が黒笹14号窯式の皿に似せてあるようだ。第6・9号住居址出土の埦A・皿Aは全体的にみて黒笹14号窯式、同90号窯式の灰釉陶器碗・皿類に似せているような気がする。緑釉陶器との関連は不明である。

坏Bについては、坏Aの手法を受け継いでいる部分もあるが、その外形は大きく変化している。これは須恵器坏BまたはCの影響をうけていることが考えられる。確証はあまりない。

(4) 住居址出土土器群の段階

先に型式変化を考えた器種を軸にすえて、生居址覆土層（この語は(2)—②で述べた内容に従うもの。ただし以下では「覆土層」に略す）ごとにそこに含まれる土器群の相対的な時期の比較を試みたい。

① 土師器坏Aを含むグループ

供膳形態の土器（坏・埦・皿）の中で、土師器坏Aが10%以上を占める生居址に着目する。第11号生居址（15%）、12住（38%）、13住（39%）、15住（33%）、16住（100%）*がこれに相当する。他の生居址は2%以下である。上記の5つの住居址は坏A以外の土師器供膳形態をもたない。坏Aを介してみる限り時期的な共通性をもつ可能性が高い。これを須恵器蓋Aを介してみると、やはり蓋Aをもつのは上記5つのみであり傍証となる。第11～13・15・16号住居址は時期的な相似性をもつグループと認められる。土師器坏Aは土師器坏類の中では最も古いものであり、上記のグループは土師器坏類を介してみると今回調査地で最も古いものと言える。（*16住は一括遺物である）

ただし13住については上記の結論を保留しなければならない。それは第1に13住は12住の一部を破壊して作られていること、第2は17住出土の図示した土器と13住出土品に遺構間接合があったことが理由である。

② 須恵器坏Bを含むグループ

供膳形態の土器の中で、須恵器坏Bが占める比率が高い住居址に着目する。5・8・14・2・4住（100%）、3住（91%）、1住（82%）が相当する。数字が示すとおりこのグループにおける坏Bの比率は異状な程高い。その反面の現象として供膳形態の土師器はこのグループでは0%である。坏Bを介してみる限り、上記7つの住居址は時期的な共通性をもつ可能性が高い。この他、19住も坏Bが46%という数値を示し、もっとも多い器種となっているため、このグループに一応含める。

グループ内の時期差は、坏Bが手法の面では共通するが外形では差が大きい（B—1～4種）ため、当然存在すると考えられるが、ここでは不明である。

③ 須恵器坏Dを含むグループ

供膳形態の土器の中で、須恵器坏Dが20%以上を占める住居址に着目する。10住（29%）、17住（25%）、18住（47%）が相当する。このグループの特徴は、同坏Cも坏D同様あるいはそれ以上に高率であることで、坏C・D両者だけで供膳形態の70%以上を占める。他の生居址でこのような例はない。時期的な相似性をもつグループと認められる。

グループ内の時期差は、坏C・Dの比率により前後関係がみられる。それは坏C：坏Dが47：29(10住)、54：25（17住）と前者が多いもの、32：47（18住）とその逆なもの、である。

④ 土師器坏Cを含むグループ

供膳形態の土器の中で、土師器坏Cが50%以上を占める生居址に着目する。7住（66%）、9住（60%）*が相当する。このグループでは供膳形態に占める土師器の比率が他のグループをはるかに凌ぐ（7住：80%、9住：89%）。坏C以外の土師器供膳形態も構成が類似している。時期的な相似

性をもつグループと認められる。（＊9号ピット内出土一括遺物も含まれる）

グループ内の時期差を認める要素はない。なお、6住は遺物全体の整理が終了していないが、図示した土器の構成が9住に類似しており、土器の組成も9住に準ずるものと予想できるため、一応ここへ含める。

⑤ 各グループの段階と器種の変遷

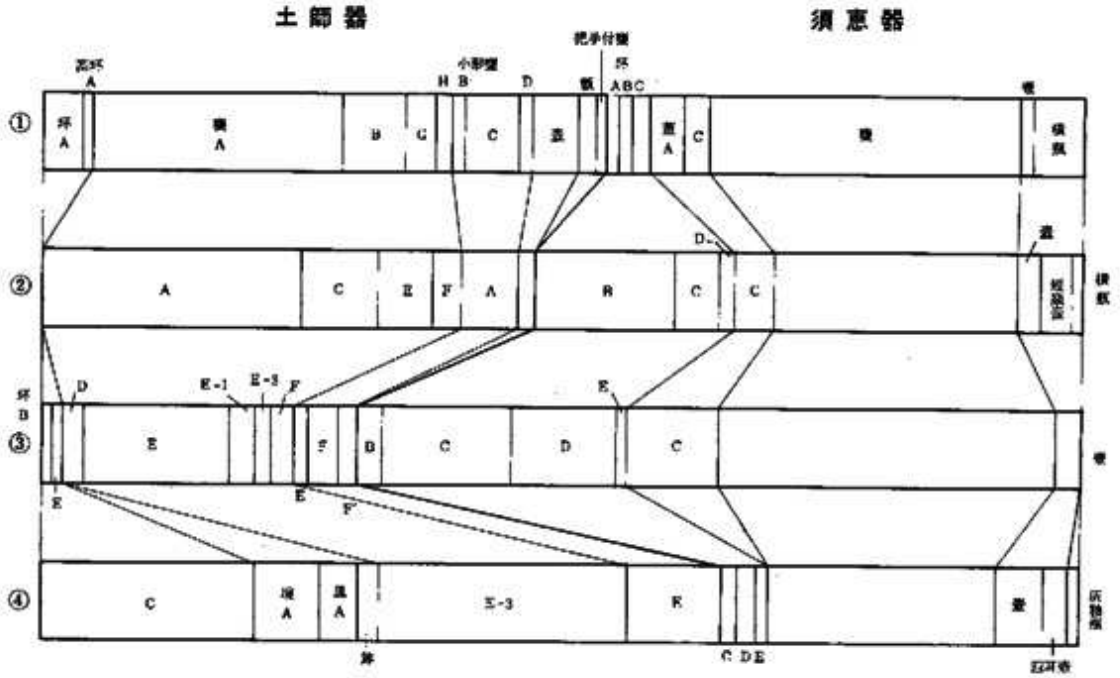
上記①～④の各グループ内での器種の比率と、グループ間の前後関係、および器種の比率の変遷を示したのが挿図3である(註21)。グループ間の前後関係の設定についてまず説明する。③と④の関係は供膳形態の土師器の比較に基づく。即ち、③には土師器坏Bの存在が認められる一方、同坏Cはない。これに対し④はその逆である。また型式変化でみると坏Bの方が古く位置づけられる（前述）。さらに④には同坏A・皿Bが新たに現れている。以上から③が④に先行すると判断した。②と③の関係は供膳形態の須恵器の比率に基づく。即ち、②では須恵器坏Bが主流をしめるが③では坏Bの比率は急減し、代って同坏C・Dが主流をしめている。ところが坏Bは坏Dに先行する型式と考えられる（前述）ため②が③より古いと判断した。①が最古であることは、須恵器坏A・同蓋Aがここにしか存在しないことに基づく。即ち、土師器甕などに比して供膳形態の須恵器各器種は息が長く存在しているが、坏A・蓋Aのみは①にしかなく、従って①は4つのグループ中、最初か最後に来る可能性が高い。その上で土師器甕Aの比率からみて最初においた方が妥当であると判断した。以上により①・②・③・④という段階の順序が設定できた。

次に各グループの段階を追いながら器種の変遷をみていきたい。①のグループの段階は、それ以後に較べて供膳形態の土器が著しく少ない。その中で土師器坏Aが主体となっているが須恵器坏A・B・C、同蓋A・Cが少量づつ揃っている。土師器坏A、須恵器坏A・同蓋Aは本段階にしかない。土師器甕はAが主体となりB・G・Hが伴う。土師器小形甕はCが主体でB・Dが伴っているが次段階ではいずれも姿を消してしまう。須恵器の甕類は多量にあり少量の壺・横瓶が伴う。②の段階になると土師器甕・小形甕が大きく内容を変える。甕では依然Aが主流を占めるが、前段階のB・G・Hは姿を消し、新たにC・E・Fが現れる。しかしこれ以後息が長く続くのはEのみである。Aも次期には姿を消す。この土師器甕の大変動は①と②の段階の間に時間的落差があるためと解釈するよりは、①・②の段階はなんらかの理由で土師器甕の範型や生産が定形化できなかったためではないかと考えている。小形甕もAのみとなる。供膳形態の須恵器は前段階に較べて量が増え坏ではBが、蓋ではCが主流となる。須恵器甕類は前段階と同様安定してある量を占める。③の段階になると、供膳形態では須恵器坏C・Dが主流になりBは著しく減って本段階で姿を消す。一方供膳形態に土師器が復活する。土師器坏Bは次段階で盛行する同坏Cの前駆をなすものである。須恵器の蓋は前段階同様Cのみであるが、本段階までで消え去る。土師器甕は前段階で現れたEが主流となり定形化してくる。小形甕はロクロを使うE・Fが現れ、以後盛行する。須恵器甕類は前段階同様安定していて一定の量を占めている。本段階は須恵器の総量が最も多くなっている。④の段

階は供膳形態の土師器が急激に量を伸ばす。前段階の土師器坏Bに続く瓦坏Cが以前になかった多量さで土流をなす他、新しく現れた同境A・ⅢAがかなりの量でこれに加わる。供膳形態の須恵器はC・D・E・と前段階から続くものだが量は非常に少なくなっている。土師器甕は前段階に続きE類が占め、E－3種と認められるものが多くなっている。土師器小形甕はEが占める。須恵器甕類は変わらず一定の量を保っている。灰釉陶器が現れる。本段階と③段階では供膳形態の土師器と須恵器の量的な逆転が急激すぎ、中間的な段階が今回調査資料では欠落している可能性が強い。

最後に昨年度の調査で設定した南栗遺跡の時期区分Ⅰ～Ⅷに今回の①～④段階をあてはめてみる。昨年度調査（二次調査：文献1）の時期区分は膨大な資料をなんとか活用するための応急的に設定したもので今後の成果により修正が必要なのは言うまでもないが大枠としては有効と考えている。①段階にⅠ・Ⅱ期、②段階はⅢ・Ⅳ・Ⅴ期、③段階はⅥ期、④段階はⅧ・Ⅸ期に比定できる。細分するとⅠ－11・12住、Ⅱ－15・16住、Ⅲ－4・5・8住、Ⅳ－3・14住、Ⅴ－19住、Ⅵ－10・17・18住、Ⅷ・Ⅸ－6・7・9住（Ⅷ・Ⅸ期の細分は見直しが必要と思われる）となる可能性が高い。

（直井雅尚）



挿図3　時期別の器種比率

註1　成形・調整手法の名称は文献4・5・15を参考にした。

2　県内において該期に詳しい論考である文献4・5・6では黒色土器として土師器から分離して扱っている。

3　土器の表面をいぶすことによって炭素を吸着させたものと理解されている（文献7）。

4　他では4形態（文献5）、8形態（文献9）に分類している。

5　畿内地方から招来されたものを模倣したものの可能性がある。

6　文献4・6・8

7　文献4

8　文献9・10

9　大町市前田遺跡18号住居址出土品が参考となる（文献5）

10　試蔵型については文献11・12、県内での指摘は文献4・5

11　類似品が松本市秋葉原古墳群から出土している（文献10）

12　この部分の形成については文献13が論及している。

13　一般に酸化炎流成須恵器といわれるものに等しいと考える。

14　松本市内でも初見

15　実際に松本市内の沖積地における一連の調査では、覆土の分層は詳細な断面観察の結果、なされることが多く、覆土層の差を平面的に捉えるのは困難かつ作為に堕する危険が大きい。

16　一括遺物と認定できない住居址出土土器による編年などの場合、層位学的な側面はこのような操作によらないと充足できないのではないだろうか。

17　松本市前田遺跡（文献3）

18　内面ハケメの省略の傾向は島田哲男氏がすでに示唆している（文献14）

19　註17と同

20　埼A・皿Aについては既に笹沢浩氏の指摘がある（文献4）

21　総正量で各器種の重量を割って出した数字をもとに、小さい数値の器種を除外し、残った器種で再度百分率を出した。

参考文献

1　松本市教育委員会　1985『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』

2　松本市教育委員会　1984『松本市島立南栗遺跡』

3　松本市教育委員会　1984『松本市前田木下遺跡』

4　笹沢　浩　1976「奈良・平安時代土器の器種分類」「奈良・平安時代の土器について」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――諏訪市その4――』長野県教育委員会

5　島田哲男　1981「出土土器の分類」『後馬遺跡III、浜分遺跡、前田遺跡、南原遺跡』大町市教育委員会

6　岡田正彦　1977「平安時代土師器等の編年試論――特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として――」『横浪』III・29－9

7　小笠原好彦　1971「月塗土師器と黒色土師器――土師器における二次的表面加工の問題について――」『考古学研究』18－2

8　末木　健　1976「山梨の土師式土器」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――北口岸部須玉町地内――』山梨県教育委員会

9　板野和信　1976「古墳時代後期土器の手法と器種分類」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――諏訪市その4――』長野県教育委員会

10　松本市教育委員会　1983『松本市新村秋葉原遺跡』

11　河野喜映　1976「塚本市鳶尾遺跡出土の土器編年試論――歴史時代を中心として――」『神奈川考古』1

12　福田健司　1978「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』64－3

13　小川貴司　1979「同転糸切り技法の展開」『考古学研究』26－1

14　島田哲男　1983「土器について」『香田向井』塩尻市教育委員会

15　田辺征夫・安田電太郎・興津一郎　1982「土器」『平城宮発掘調査報告XI』奈良国立文化財研究所

表4　出土土器観察表

番	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(底部)残存度	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考
1	1住	須恵器	杯B	13.5	(7.2)	4.6	完	暗灰	灰白	ロクロナデ，底面外周回転ヘラケズリ，底面ハケメ状痕跡	焼成甚く軟質
2	〃	〃	〃	14.0	7.2	4.5	2/3	黄灰	黄灰	ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ	
3	〃	〃	坏C	13.9	10.2	4.3	2/5	青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面同様ヘラケズリ	
4	〃	土師器	甕A	22.1			1/8	淡黄褐	淡黄褐	よこなで，胴部内外面ヘラナデ	
5	〃	〃	〃				1/3	暗褐～黒褐	暗褐～黒褐	胴部内外面ヘラナデ	
6	〃	〃	小形甕A	12.8	7.2	19.6	完	茶褐～黄褐	茶褐～黄褐	よこなで，外面なで・ヘラケズリ，内面なで・ハケメ	
7	〃	〃	甑					茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	直径1～2.5mmの焼成前穿孔	
8	3住	須恵器	坏B		(6.9)		(1/2)	暗褐	暗褐	ロクロナデ，底面に沈線	
9	〃	〃	〃	14.5	7.9	4.8	2/3	淡黒～淡褐	淡橙	ロクロナデ，底面回転ヘラ切り・なで・布目圧痕状のもの？	
10	〃	土師器	甕A	18.4			1/2	淡橙褐～暗褐	橙褐	よこなで，外面なで・ヘラナデ	
11	〃	〃	〃	23.0	8.0	(45)	1/4	赤褐～淡橙	明赤褐	よこなで，内外面なで・ヘラナデ，底面木葉痕	
12	4住	須恵器	甕B	14.0	—		1/2	暗灰	淡灰	内面頸部かえり，ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
13	〃	〃	蓋C	14.0	—		1/8	暗灰	青灰	頸部屈曲，ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	降灰自然釉
14	〃	〃	〃	14.5	—		1/8	灰褐	灰褐	頸部屈曲，ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
15	〃	〃	〃	19.5	—		1/6	灰	灰	頸部屈曲，ロクロナデ	
16	〃	〃	坏B	12.2	(7.1)	4.0	4/5	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，底面回転ヘラ切り	底面にヘラ記号
17	〃	〃	高坏	14.8				暗灰	暗灰	ロクロナデ，坏部外面回転ヘラケズリ	
18	〃	土師器	小形甕A		7.6			暗褐	暗褐	ロクロナデ，なで	
19	〃	〃	小形壺	11.9	—	(12.7)	1/3	褐～暗褐	褐～暗褐	よこなで，外面ヘラミガキ，内面なで・ヘラナデ	
20	〃	〃	〃		—			暗褐	暗褐	外面ヘラミガキ，内面なで	
21	〃	須恵器	短頸壺	20.7	(11.1)	(15.0)	1/4	淡青灰	淡青灰	なで，外面平行タタキ目，よこなで	
22	5住	〃	坏B		3.6		(2/3)	明灰	明灰	ロクロナデ，底面回転ヘラ切り未調整	
23	〃	〃	〃	13.3	3.4	4.5	1/6	灰	暗灰	ロクロナデ，底面回転ヘラ切り未調整	
24	〃	〃	〃	11.7	8.1	4.2	1/2	淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ，底面回転ヘラ切り（不明瞭）	焼成不良，きわめて軟質
25	〃	〃	横瓶？	10.8			1/4	明灰	明灰		
26	〃	土師器	小形甕C	13.6	7.5	14.7	完	茶褐～赤褐	茶褐～赤褐	よこなで，外面粗ハケメ・ヘラケズリ，内面なで・ヘラナデ，底面木葉痕	
27	11住	〃	把手付壺	(9.8)	5.7	(9.1)	(1/3)	茶褐	茶褐	よこなで，なで，ヘラナデ	
28	5住	〃	甕A	24.5			1/8	茶褐	茶褐	よこなで，内外面ヘラナデ	
29	〃	〃	〃	22.7			1/3	灰褐～暗褐	灰褐～暗褐	よこなで，内外面なで	
30	〃	〃	〃	21.8			1/2	茶褐	茶褐	よこなで，外面斜ハケメ，内面ヘラナデ	
31	6住	須恵器	坏E	11.8	3.6	3.5	1/5	暗灰白	暗灰白	ロクロナデ	
32	〃	〃	〃	13.6	5.3	3.9	3/10	暗灰白	暗灰白	ロクロナデ，底面回転糸切り	
33	〃	〃	坏D	11.4			1/8	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ	
34	〃	〃	坏E	13.1	5.4	4.1	2/5	暗灰褐	暗灰褐	ロクロナデ，底面回転糸切り	
35	〃	〃	〃	13.2	5.9	3.7	2/5	灰褐	灰褐	ロクロナデ，底面回転糸切り	体部外面に墨書

番	出土地点	器 別	器 形	寸 法 (cm)			口縁(底部)	色 調		成形・調整・形態の特徴	備 考
				口径	底径	器高	残存度	外 面	内 面		
36	6住	須恵器	坏B		4.9		(1/6)	緑黄灰	暗青灰	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ	
37	〃	〃	坏E	13.9			1/4	淡灰褐	淡灰褐	ロクロナデ，底面回転糸切り	
38	〃	〃	〃	3.9	3.4	3.9	1/4	明 灰	明 灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
39	〃	〃	盤?		11.2		(1/8)	灰	灰	ロクロナデ，付け高台	
40	〃	土師器	皿A	12.4			1/6	暗灰褐	黒	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
41	〃	〃	〃	13.4			1/8	暗 灰	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
42	〃	〃	皿B	13.6	6.0	2.5	1/4	黒	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ，全面黒色処理	
43	〃	〃	〃	13.8	5.9	2.8	1/4	〃	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ，全面黒色処理	
44	〃	〃	皿A	14.2	5.5	3.1	7/10	灰 褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
45	〃	〃	〃	13.7	6.1	3.3	1/2	淡灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
46	〃	〃	坏C	12.7	5.2	3.6	1/4	暗灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
47	〃	〃	〃	13.3	5.6	4.1	4/5	暗赤灰	〃	ロクロナデ，底面切り離し不明，内面ヘラミガキ・黒色処理	
48	〃	〃	〃	12.9	6.7	3.3	1/3	赤 褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り・外面沈線(高台を付けようとした痕?)，内面ヘラミガキ・黒色処理	
49	〃	〃	〃	13.2	4.0	4.3	3/5	灰 褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り・一部ハケメ?，内面ヘラミガキ・黒色処理	
50	〃	〃	〃	12.6	5.0	3.8	3/5	赤 褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り・一部凹部，内面ヘラミガキ・黒色処理	
51	〃	〃	〃	12.2	4.6	3.8	1/4	〃	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
52	〃	〃	〃	13.9	6.6	3.8	2/5	明赤褐	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理，底面調整不明	
53	〃	〃	〃	13.3	(4.1)		2/5	淡灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り・一部ヘラ状痕状の痕，内面ヘラミガキ・黒色処理	
54	〃	〃	〃	13.5	6.0	4.1	3/5	〃	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
55	〃	〃	壺A	14.8			1/5	明赤褐	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
56	〃	〃	坏C	14.1	6.2	4.0	1/3	淡灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
57	〃	〃	壺A?	14.6			1/5	明 橙	明 橙	ロクロナデ，内面ヘラミガキ	
58	〃	〃	坏C	13.1	6.1	3.8	1/3	明赤褐	明赤褐	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ	
59	〃	〃	壺C	13.6			1/4	黒	黒	ロクロナデ，内面ヘラミガキ，全面黒色処理	
60	〃	〃	坏C	13.5	6.8	3.9	3/4	黄灰～黄橙	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
61	〃	〃	〃	14.0	6.6	4.4	3/4	橙黄橙	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
62	〃	〃	〃?	13.3			1/4	灰 褐	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
63	〃	〃	〃		5.9		(2/5)	灰 褐	灰 褐	ロクロナデ，底面回転糸切り・板状の圧痕	
64	〃	〃	〃		4.8		(3/5)	灰 黄	黒	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
65	〃	〃	〃?	11.7			1/5	灰 褐	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
66	〃	〃	壺A	15.7	7.9	4.8	1/4	淡赤褐	暗 褐	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ	
67	〃	〃	〃		5.8		(9/10)	灰 褐	黒	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
68	〃	〃	坏C	17.3	6.8	5.8	2/5	暗赤灰	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
69	〃	〃	〃	16.8	6.7	6.5	1/3	明灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
70	〃	〃	〃	17.6	7.8	6.0	1/8	淡灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り・一部ヘラ描沈線状痕，内面ヘラミガキ・黒色処理	

版	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(底部) 残存度	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考
71	6住	土師器	坏C	18.1	6.9	6.1	1/2	淡黄褐	黒	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	体部外面墨書
72	〃	〃	〃	18.6	7.6	6.6	3/5	赤褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
73	〃	〃	〃	16.7	6.8	6.4	1/5	明赤褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
74	〃	〃	坏C Ⅱ	25.5	8.9	11.1	1/6	灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
75	〃	灰釉	皿	13.8	6.0	2.9	(完)	灰	淡緑～黄灰	ロクロナデ，底・外面下半回転ヘラケズリ，付け高台，釉薬刷毛ぬり	
76	〃	〃	〃	14.0			1/10	灰白		ロクロナデ，外面下半回転ヘラケズリ	
77	〃	〃	長頸瓶	10.8			1/10	〃	淡緑	ロクロナデ	
78	〃	〃	瓶	17.0			1/8	〃	〃	ロクロナデ	
79	〃	土師器	甕E	20.4			2/5	暗赤褐	暗赤褐	口縁ロクロナデ，内面ヵキ目，胴外面縦ハケメ・内面縦ヘラナデ	
80	〃	〃	〃		9.6		1/5	赤褐	赤褐	外面横ハケメ，内面なで，底部なで・指おさえ	
81	〃	〃	小形甕E	12.4			1/10	淡赤褐	淡赤褐	口縁内面・胴部外面ヵキ目，ロクロナデ	
82	〃	〃	〃		6.5		3/5	暗褐	暗褐	胴部外面カキ目，内面ロクロナデ，底面回転糸切り	
83	〃	〃	?	29.9			1/8	淡赤褐	暗雲褐	ロクロナデ	須恵器に似る
84	〃	須恵器	甕	36.6			1/10	暗青緑	暗青黒	よこなで，外面平行タタキ目	
85	7住	〃	坏C	9.3	4.4	3.1	1/3	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
86	〃	土師器	皿A	12.3			1/4	薄黄橙	黄	ロクロナデ，内面放射暗文状ヘラミガキ・黒色処理	
87	〃	〃	皿B	10.8	4.4	2.3	1/8	黄	〃	ロクロナデ，付け高台，内面横ヘラミガキ，全面黒色処理	
88	〃	〃	坏C	12.6	5.6	4.2	1/2	橙	暗赤橙	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ	
89	〃	〃	〃	13.3	5.2	3.6	2/3	黄褐	黒	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
90	〃	〃	〃	13.3	5.2	3.6	1/6	薄黄灰～黄橙	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・放射状暗文風・黒色処理	体部外面墨書
91	〃	〃	不	12.0			1/6	黄橙	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
92	〃	〃	境A		5.8		(完)	黄灰	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
93	〃	〃	甕E		7.7		1/4	赤橙	薄橙	外面縦ハケメ，内面横の浅い凹状痕・指おさえ痕	
94	〃	〃	〃		8.5		4/5	〃	橙～黄橙	外面縦ハケメ，内面横ヘラナデ・なで・指おさえ痕	
95	〃	〃	小形甕E		6.8		(完)	褐	褐	外面カキ目，内面ロクロナデ，底面回転糸切り	
96	8住	須恵器	甕B	15.8	—		1/8	淡青灰	淡青灰	頸部内面にかえり，ロクロナデ	
97	〃	〃	坏B	12.2	8.0	4.1	4/5	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，底面回転ヘラケズリ	
98	〃	土師器	鉢					茶褐～赤褐	茶褐～赤褐	よこなで，ハケメ	
99	〃	〃	小形甕B		—		(1/4)	橙褐	赤褐	ヘラケズリ，ヘラナデ，なで	
100	〃	〃	〃		—			茶褐	〃	ヘラケズリ，ヘラナデ，なで	
101	〃	〃	甕A	20.6			1/3	暗褐	暗褐	よこなで，なで	
102	〃	〃	甕C	20.0	--	17.5	1/3	褐～茶褐	赤褐	よこなで，内外面ハケメ	
103	9住	須恵器	坏E	12.6	5.4	3.7	1/4	灰白	灰白	ロクロナデ，底面回転糸切り	
104	〃	〃	〃	13.5	4.4	3.6	1/2	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
105	〃		〃	13.1	6.1	4.9	1/3	灰橙	灰橙	ロクロナデ，底面回転糸切り	

点	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(胴部) 残存度	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考
106	9住	須恵器	坏E	13.1			1/5	暗灰白	暗灰白	ロクロナデ	
107	〃	〃	〃	13.3			1/8	〃	〃	ロクロナデ	
108	〃	〃	坏C	15.9			1/8	灰白～淡灰	灰白～淡灰	ロクロナデ	
109	〃	土師器	皿A	13.4	6.3	2.8	1/8	灰褐	黒	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
110	〃	〃	〃	13.4	6.3	3.0	1/7	暗灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
111	〃	〃	〃	13.6	6.6	3.4	3/5	灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り・爪形圧痕，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
112	〃	〃	〃	12.5	6.5	2.5	1/8	淡黄灰	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
113	〃	〃	〃	14.2	6.8	3.3	1/4	灰褐	〃	ロクロナデ，底面調整不明，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
114	〃	〃	皿B	13.9			3/5	黒	〃	ロクロナデ，外面雑なヘラミガキ，内面ヘラミガキ，全面黒色処理	
115	〃	〃	皿A	13.6			1/5	淡灰白	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
116	〃	〃	〃	12.4			1/4	淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ，内面ヘラミガキ	
117	〃	〃	坏C	13.6	5.9	5.1	完	灰褐	黒	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面放射状ヘラミガキ・黒色処理	
118	〃	〃	〃	13.8	6.4	4.2	9/10	明黄褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
119	〃	〃	〃	12.9	5.5	3.9	2/5	淡褐灰	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
120	〃	〃	〃	12.8	5.5	4.0	1/6	暗黄灰	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
121	〃	〃	〃		6.0		(2/5)	褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
122	〃	〃	〃	12.7	5.6	4.4	1/4	淡灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
123	〃	〃	〃	13.0	4.8	3.8	1/4	灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
124	〃	〃	〃	14.0	5.0	3.7	1/2	〃	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
125	〃	〃	〃	13.7	5.6	4.1	1/3	淡赤褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
126	〃	〃	〃	12.1	5.5	4.3	4/5	暗黄灰	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面斜放射状ヘラミガキ・黒色処理	
127	〃	〃	〃	13.8	5.7	3.7	1/2	淡灰橙	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
128	〃	〃	〃	13.3	5.1	4.3	2/5	暗灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	体部外面黒斑
129	〃	〃	〃	12.7			1/4	灰白	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
130	〃	〃	〃	12.4	4.4	4.3	完	橙褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，体部下半手持ちヘラケズリ，内面放射状ヘラミガキ・黒色処理	
131	〃	〃	〃？	14.9			1/2	赤褐	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ	
132	〃	〃	〃？	15.3			1/2	暗褐灰	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ	
133	〃	〃	〃	15.0	5.9	5.0	3/4	橙～黄橙	暗赤～明赤橙	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ	
134	〃	〃	〃	16.0	6.9	5.2	1/4	淡赤褐	黒	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
135	〃	〃	〃？	18.3			1/5	〃	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
136	〃	〃	〃	19.8	7.8	6.3	1/4	黄橙～赤褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	体部外面刻書
137	〃	〃	坏A	14.7	6.6	5.2	7/10	灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
138	〃	〃	〃	15.5	7.1	5.5	1/2	〃	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
139	〃	〃	〃	15.3	6.7	5.5	3/5	赤褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	
140	〃	〃	〃	15.6	6.7	5.9	3/5	灰褐	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り，付け高台，内面ヘラミガキ・黒色処理	

番号	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(底部)残存度	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考
141	9住	土師器	甕	12.5			1/6	淡灰褐	黒	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理，付け高台	
142	〃	〃	鉢	15.6	6.0	9.4	1/8	黒	〃	全面ヘラミガキ・黒色処理，巻き上げ成形？	
143	〃	〃	？	11.5			1/6	赤褐～明褐	赤褐～明褐	ロクロナデ，内面ヘラミガキ，付け高台？	
144	〃	須恵器	瓶	12.4			1/8	灰白	灰白	ロクロナデ	自然釉
145	〃	土師器	甕E	22.5			1/4	橙褐	橙褐	口縁部ロクロナデ・内面カキ目，胴部外面斜縦ハケメ・内面なで・指おさえ	
146	〃	〃	〃					赤褐	赤褐	口縁部ロクロナデ・内面カキ目，胴部外面斜ハケメ・内面横ハケメのちなで	
147	〃	〃	小形甕E	14.0			1/10	〃	〃	ロクロナデ，口縁内面・胴部外面カキ目	
148	〃	〃	〃		6.8		(完)	暗褐	暗褐	ロクロナデ，外面カキ目，底面回転糸切り	
149	〃	〃	〃	12.6			1/4	暗赤褐	暗紫褐	ロクロナデ，口縁内面・胴部外面カキ目	
150	〃	〃	〃		6.3		1/2	明赤褐	明赤褐	ロクロナデ，胴部外面カキ目のち下半のみヘラケズリ，底面回転糸切りのちなで	
151	〃		？	22.4			1/3	明橙褐	明橙褐	外面（上から）よこなで・カキ目・よこなで・縦ハケメ，内面（同）横ヘラケズリ，なで，胴部	器種不明，上下不明
152	〃	須恵器	四耳壺					暗灰青	暗灰青	外面タタキ目，内面なで	
153	〃	灰釉	横瓶壺	12.8			1/6	灰白	淡緑白	ロクロナデ	
154	〃	須恵器	壺	27.5			1/10	〃	灰白	ロクロナデ	
155	〃	〃	〃	34.2			1/15	黒灰	黒灰	よこなで（ロクロナデ），波状文（6本歯）	
156	〃	〃	〃	36.7			1/6	赤紫	赤紫	よこなで	
157	10住	〃	甕C	14.3	—	2.8	9/10	青灰	青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
158	〃	〃	〃	13.6	—	2.9	1/2	濃青灰	薄青灰～黄灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
159	〃	〃	〃	12.4	—	3.6	1/3	灰褐	暗青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
160	〃	〃	〃	15.9	—		1/3	灰白	灰白	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	内面外面環状に自然釉
161	〃	〃	〃	13.7	—		1/4	青灰～暗青灰	青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ，天井部むしろ薄くなる	
162	〃	〃	坏C	11.7	8.0	3.9	1/6	暗青灰	暗紫灰	ロクロナデ，付け高台	
163	〃	〃	〃	12.5	9.2	3.9	5/6	青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
164	〃	〃	〃		6.8		(完)	暗灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
165	〃	〃	〃		7.8		(完)	赤灰	赤灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
166	〃	〃	〃		9.7		(2/3)	青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
167	〃	〃	〃	11.4	7.8	3.5	1/8	茶～茶灰	茶～茶灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
168	〃	〃	〃	12.9	8.8	3.5	1/5	暗灰～青灰	暗灰～青灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
169	〃	〃	〃	12.9	9.5	4.1	1/10	青灰～濃青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
170	〃	〃	〃		9.1		(2/3)	灰白	灰白	ロクロナデ，付け高台，底面外周雑な回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
171	〃	〃	〃	13.8	8.9	3.7	1/10	暗青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面雑ななで・回転ヘラ切り	高台接合位の調整痕
172	〃	〃	〃		5.6		(1/4)	青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
173	〃	〃	〃	15.4			1/4	灰	灰	ロクロナデ	
174	〃	〃	坏D	12.3	6.0	3.4	3/5	青灰	青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	体部に糸切りの傷
175	〃	〃	〃	12.3	6.5	3.7	1/2	濃青灰	濃青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	

番	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(底部) 残存度	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
176	10住	須恵器	坏D	12.8	4.4	4.2	1/4	青灰	青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り，底面外縁手持ちヘラケズリ	
177	〃	〃	〃	13.7	6.0	3.7	1/4	〃	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り	
178	〃	〃	〃	14.4	5.7	4.3	2/5	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り，底面外縁回転ヘラケズリ	
179	〃	〃	〃	13.2	7.6	4.4	1/6	青灰	古灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
180	〃	〃	〃	14.2			1/6	〃	〃	ロクロナデ	
181	〃	〃	〃	14.1	5.7	4.5	1/3	灰白	薄青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り，底面外縁回転ヘラケズリ	
182	〃	土師器	坏B	12.4	7.1	3.5	(完)	橙～黄橙	黒	ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
183	〃	〃	〃	13.9			1/3	黄白	〃	ロクロナデ，体部下半弱い回転ヘラケズリ？，内面放射状ヘラミガキ・黒色処理	
184	〃	須恵器	短頸壺	8.0			1/3	暗灰	青灰	ロクロナデ	
185	〃	土師器	小型甕	(12.8)	(8.6)	(11.6)	1/4	黄橙～橙	黄橙～橙	内面ロクロナデ，外面器剥して調整不明	各部の成形不正確
186	〃	〃	壺E	21.0			1/8	橙 褐	橙 褐	よこなで，外面斜ハケメ，内面横ハケメ	
187	〃	〃	甕		9.0		(2/3)	橙～暗橙灰	暗 褐	外面ハケメ・なで，内面なで・指おさえ，底面なで	
188	〃	〃	〃		9.0		(2/3)	黒 褐	橙	外面・底面なで，内面横ハケメ	
189	11住	須恵器	蓋A	9.4	—	2.9	1/2	暗灰	暗灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ，胴部に沈線	15住出土品と接合
190	〃	〃	〃	12.9	—		1/5	灰白	灰白	ロクロナデ，頸部に稜	焼成悪く器面剥滅
191	〃	〃	坏A	8.3	2.9	3.1	4/5	黄灰	黄灰	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ	外面自然釉
192	〃	〃	〃	8.4	3.9	2.5	完	暗灰	薄青灰	ロクロナデ，底部外周回転ヘラケズリ，切り離し痕は自然釉厚く観察不能	
193	〃	土師器	〃	11.8	4.4	4.0	1/8	茶褐	茶褐	口縁よこなで，外面ヘラケズリのちヘラミガキ・内面ヘラミガキ	
194	〃	須恵器	蓋	8.7			1/4	明灰	明灰	ロクロナデ	内面自然釉
195	〃	土師器	甕		6.5		(2/3)	明黄褐	明灰褐	外面ハケメ・なで，内面なで・指おさえ，底面木葉痕	
196	〃	〃	〃	21.1			1/3	明赤褐	明褐	外面縦ハケメ・なで，内面横ハケメ・なで，口縁よこなで	
197	〃	〃	〃		7.4		(1/2)	茶褐	暗褐	外面なで，内面ヘラナデ，底面あげ底気味・木葉痕	
198	〃	〃	〃		5.3		(1/2)	茶褐	茶褐	内外面なで	
199	〃	〃	〃		8.5		(1/2)	暗褐	明橙褐	内外面なで，底面木葉圧痕	
200	〃	〃	甕G	29.3			1/4	明褐～暗褐	明褐～暗褐	口縁よこなで，胴部外面縦ハケメ，頸部内面横ハケメ，胴部内面粗いヘラミガキ	
201	12住	須恵器	蓋A	(12)	—	4.6	(2/3)	黄灰～橙灰	暗灰～黒灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラ切り未調整，胴部に沈線2本	
202	〃	〃	〃	10.0	—		1/8	灰白	灰白	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ，胴部に沈線，口縁端部内側に凹部	
203	〃	〃	蓋B	16.7	—		1/3	灰白～暗灰	薄青灰	端部折曲にかえり，ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
204	〃	〃	坏A	9.0	3.1	2.3	1/6	青灰	青灰	ロクロナデ，底部一部回転ヘラケズリ	
205	〃	〃	坏C		9.8		(1/4)	橙～暗橙	暗赤灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
206	〃	〃	〃		9.0		(1/4)	青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
207	〃	〃	坏B	13.2	6.1	3.8	1/6	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，底面ヘラ切りのちなで	
208	〃	土師器	高坏B		11.3		(完)	橙	橙	器面荒れていて調整不明，脚部内側に稜	
209	〃	〃	高坏A		12.4		(完)	〃	黒褐・橙	脚部外面縦ヘラミガキ・接合横ヘラミガキ，内面こぼり痕・横の弱いヘラケズリ	
210	〃	須恵器	高坏	12.5			1/4	黄灰	黄灰	ロクロナデ，器面磨滅風化著明，坏部中位に稜	

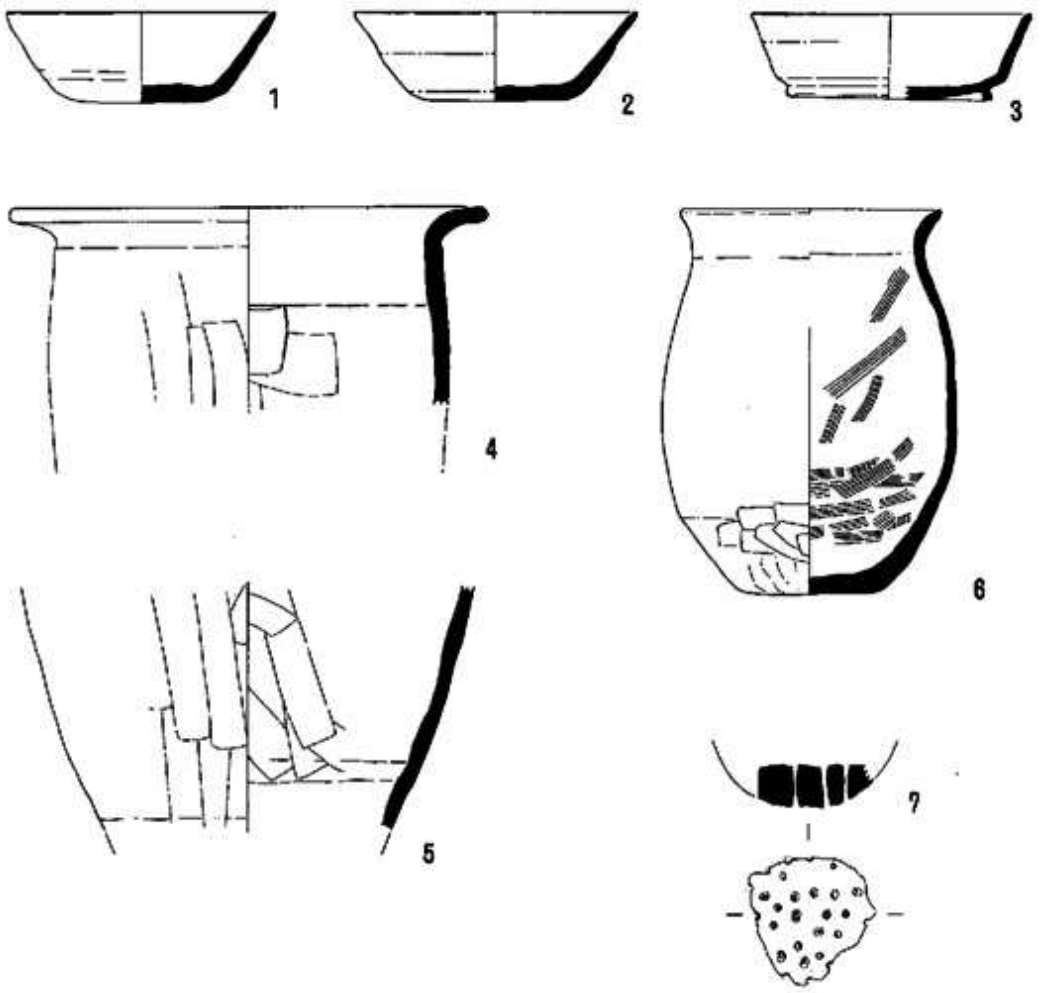
番号	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(底部) 残存度	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
211	12住	須恵器	鉢	14.1			1/4	灰白	灰白	ロクロナデ	
212	〃	土師器	小形壺D		6.1		(完)	橙	黄白	外面なで・ヘラケズリ，内面なで・ヘラナデ，底面木葉圧痕	
213	〃	〃	小形壺C	12.5			1/3	赤橙	黄褐～赤橙	口縁よこなで，胴部外面ハケメ・なで，肩部内面なで，器面整形して調整痕不明瞭	
214	〃	〃	壺A		6.1		(完)	橙～暗橙	褐～暗褐	外面なで，内面なで・ヘラナデ，底面ヘラケズリ，外面に二次的に粘土塗布	
215	〃	〃	〃	21.5			1/5	橙	橙 褐	口縁よこなで，胴部なで	
216	〃	〃	壺H	21.5			1/6	黄 橙	橙	外面荒れていて調整不明，内面ヘラナデ・なで	
217	〃	〃	壺		8.6		(完)	橙褐～褐	暗 褐	内外面なで，底面木葉圧痕	
218	〃	〃	〃		5.8		(完)	暗黄褐	暗 褐	外面縦ヘラナデ，内面横ヘラナデ，底面粗いヘラケズリ	
219	〃	〃	〃		5.3		(完)	橙～暗橙	黄 褐	内外面なで，底面木葉圧痕	
220	〃	須恵器	横瓶					灰青灰	青 灰	外面カキ目・タタキ目，内面巻き上げ痕・粘土板貼り付け痕	
221	〃	〃	甕	45.0			1/10	灰	灰～黒灰	よこなで，外面沈線（3本1組と2本1組）・波状文（上下2段）	
222	14住	〃	壺C	14.0	—		1/6	暗 灰	暗 灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
223	〃	〃	坏B	15.7	6.4	4.5	2/5	灰褐～淡橙	灰褐～淡橙	ロクロナデ，底面回転ヘラケズリ	
224	〃	〃	〃	14.9	7.9	(4.3)	1/10	灰 白	灰 白	ロクロナデ，底面回転ヘラケズリ，口縁内面回部	
225	〃	〃	〃		10.0		(1/4)	淡青灰	淡青灰	ロクロナデ，底面回転ヘラケズリ	底面にヘラ記号
226	〃	土師器	?		5.0		(1/3)	褐	褐	外面なで，内面横ヘラケズリ	器種不明
227	15住	須恵器	壺A	10.5	—		1/4	灰	灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ，肩部に櫛・沈線2本，端部内側に凹部	
228	〃	〃	蓋B	9.7	—		1/3	黒 灰	明青灰	端部内側にかえり，ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリのちなで	
229	〃	〃	蓋C		—			青 灰	青 灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
230	〃	〃	坏C	12.9	9.2	3.7	1/3	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
231	〃	土師器	鉢	15.6			1/8	淡 褐	淡 褐	外面なで，内面ヘラミガキ・黒色処理	
232	〃	〃	壺B	19.6			1/8	淡橙褐	淡橙褐	外面口縁よこなで・胴部斜ハケメ，内面口縁横ハケメのちよこなで・胴部横ヘラナデ	
233	〃	〃	〃	19.0			1/8	淡茶褐	淡茶褐	外面口縁よこなで・胴部縦ハケメ，内面口縁横ハケメのちよこなで・胴部横ヘラナデ	
234	〃	〃	甕	20.8			1/6	〃	〃	ハケメのちなで	
235	〃	〃	〃		7.6		(1/3)	暗 褐	暗 褐	外面なで，内面ヘラナデ，底面木葉圧痕	
236	16住	須恵器	蓋A	9.0	—	3.9	5/6	暗青灰	青 灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラ切りのちハケメ状の調整，端部内側に凹部	
237	〃	〃	壺C	18.2	—	5.2	1/2	灰青灰	灰青灰	ロクロナデ，天井部丁寧な回転ヘラケズリ，背の高い宝珠つまみ	
238	〃	土師器	坏A	13.0	—	4.5	1/2	橙 褐	暗橙～暗褐	口縁よこなで，体部外面手持ちヘラケズリのちヘラミガキ，内面ヘラミガキ	
239	〃	〃	〃	13.0	—	4.9	2/3	暗橙～暗褐	黒	口縁よこなで，体部外面手持ちヘラケズリのちヘラミガキ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
240	〃	〃	小形壺C	13.1	—	13.7	完	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	口縁よこなで，胴部外面縦ハケメ・内面なで・ヘラナデ	
241	〃	〃	〃	10.5	—	10.0	完	茶 褐	茶褐～赤褐	口縁よこなで，胴部外面縦ハケメ・内面横ヘラナデ	
242	〃	〃	甕	9.4	—	10.2	完	橙 褐	橙 褐	口縁よこなで，胴部外面ハケメ・内面ヘラナデ・ハケメ，底部4孔	
243	〃	〃	壺A	18.8			完	茶褐～赤褐	茶褐～赤褐	口縁よこなで，胴部外面縦ヘラナデ・内面横ヘラナデ，胴部中位に接合痕	
244	〃	〃	〃	18.4	7.6	38.6	完	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	口縁よこなで，胴部外面縦ヘラナデ・内面横ヘラナデ，底面なで，胴部中位に接合痕	
245	〃	〃	壺	21.3			1/4	〃	〃	口縁内面・胴部内外面放射ヘラミガキ，口縁外面暗文風縦ヘラミガキ	

表	出土地点	器別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(底部)残存度	色調 外面	内面	成形・調整・手法の特徴	備考
246	16住	須恵器	甕					暗灰～黄灰	暗灰～黄灰	胴外面平行タタキ目，内面同心円文あて具痕，タタキの順は下から上へ右回り螺旋状	
247	17住	〃	甕C	13.8	—		1/6	灰白	灰白	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	天井部内面墨書
248	〃	〃	〃	13.3	—	2.5	1/5	青灰	青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
249	〃	〃	〃	13.3	—		1/6	〃	〃	ロクロナデ	
250	〃	〃	坏C	12.6	9.0	3.7	1/4	暗赤灰	暗赤灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
251	〃	〃	〃		9.3		(1/2)	青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
252	〃	〃	〃		8.0		(5/6)	赤灰～暗赤灰	赤灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ・中央部僅かに回転糸切り痕残る	
253	〃	〃	〃？		11.2		(1/3)	暗青灰	灰白	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
254	〃	〃	坏D	13.1	7.1	4.1	1/8	暗灰	青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
255	〃	土師器	坏C？	13.0			1/6	赤褐	黒	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
256	〃	〃	〃	13.2			1/6	〃	〃	ロクロナデ，内面ヘラミガキ・放射状ヘラミガキ・黒色処理	
257	〃	〃	〃	12.6			1/6	赤橙～橙褐	赤橙～橙褐	ロクロナデ，内面ヘラミガキ	
258	〃	須恵器	甑		5.5		(1/2)	灰白	灰白	ロクロナデ，付け高台，外面胴部回転ヘラケズリ・胴部手持ちヘラケズリ	
259	〃	〃	蓋		7.5		(1/4)	青灰	薄青灰	ロクロナデ，胴部外面下端ヘラケズリ，底面回転糸切り	
260	〃	土師器	甕D	20.6			1/3	橙～黄橙	橙～黄橙	口縁部・胴上部カキ目，それ以下外面横ハケメ・内面横横ハケメ	13住出土品と接合
261	18住	須恵器	蓋C	14.1	—		1/7	灰白～薄青灰	灰白～薄青灰	ロクロナデ	内面外側に自然釉
262	〃	〃	〃	16.0	—	4.6	2/5	暗灰	暗赤灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
263	〃	〃	坏C	14.4			1/6	青灰	緑青灰	ロクロナデ	
264	〃	〃	〃	14.2			1/6	暗橙	暗灰	ロクロナデ	
265	〃	〃	〃	15.5	11.1	4.2	1/5	薄青灰	灰白	ロクロナデ，付け高台，底面手持ちヘラケズリ	
266	〃	〃	〃	12.3	8.6	4.0	1/2	暗青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ・中央僅かに回転糸切り痕	
267	〃	〃	〃	11.7	8.0	3.8	完	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	ロクロナデ，付け高台，底面外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	火ダスキ
268	〃	〃	坏D	13.0	5.7	3.7	4/5	灰白	灰白	ロクロナデ，底面回転糸切り	底面墨書
269	〃	〃	〃	11.7	5.2	3.6	1/4	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
270	〃	〃	〃	10.9	4.2	3.9	1/3	〃	〃	ロクロナデ，底面静止糸切り？	
271	〃	〃	〃	12.5	6.0	3.9	2/5	青灰	青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
272	〃	〃	〃	11.0			1/6	〃	〃	ロクロナデ	
273	〃	〃	〃	13.5	6.6	3.6	1/8	薄橙～橙灰	薄橙～橙灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
274	〃	〃	〃	(12.3)	5.9	(4.1)	(1/6)	青灰	青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
275	〃	〃	〃	12.9	5.3	3.6	1/3	〃	〃	ロクロナデ，底面回転糸切り	
276	〃	〃	坏B	13.1	7.1	3.7	1/3	暗灰	暗灰	ロクロナデ，底面回転ヘラ切り未調整	
277	〃	〃	坏	13.2			1/4	灰白	灰白	ロクロナデ	
278	〃	土師器	坏B	12.2	7.2	3.3	1/6	赤橙	黒	ロクロナデ，底面・体部下端手持ちヘラケズリ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
279	〃	〃	〃		5.9		(1/3)	〃	〃	ロクロナデ，底面・体部下端手持ちヘラケズリ，底面中央僅かに糸切り痕，内面ヘラミガキ・黒色処理	
280	〃	〃	坏E		6.7		(1/2)	黄橙	黄橙	ロクロナデ，底面・外面手持ちヘラケズリ，内面底部外縁界線	

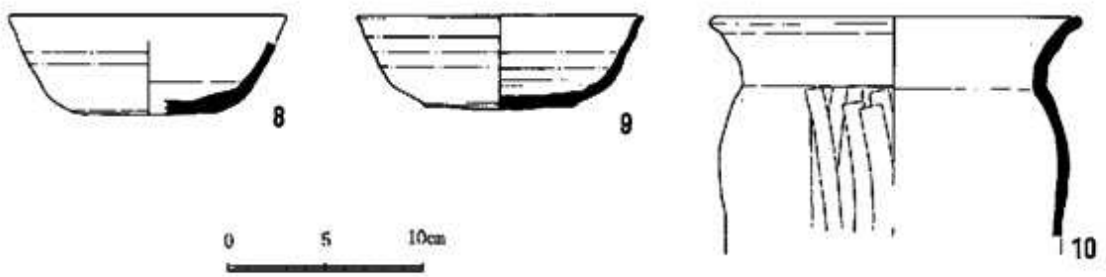
番号	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(底部)残存度	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
281	住休	土師器	坏E		6.0		(9/10)	黄橙	黄橙	ロクロナデ，底面・体部外面下半手持ちヘラケズリ，内面体部螺旋暗文・底部外縁沈線	
282	〃	〃	小形甕F	9.2	5.1	8.1	4/5	褐～橙褐	黄橙～黄褐	ロクロナデ，底面回転糸切り，胴部下端回転ヘラケズリ	
283	〃	〃	〃	13.1			1/6	暗橙褐	橙	ロクロナデ	
284	〃	〃	小形甕E	7.9			1/6	褐～橙褐	〃	ロクロナデ，胴部内外面ヨコ目	
285	〃	〃	〃	10.9			1/5	橙	褐～橙褐	ロクロナデ，口縁内面・胴部外面ヨコ目	
286	〃	〃	小形甕F'	12.0	7.1	11.0	7/8	橙褐～灰褐	暗黄褐	巻き上げ成形，胴部外面横ハケメのちなで，口縁・頸上半内面横ハケメのちよこなで，底面なで・上げ底	
287	〃	須恵器	長頸壺					黒灰	薄青灰	ロクロナデ，肩部・胴部下半回転ヘラケズリ	
288	〃	〃	短頸壺	14.8			1/10	灰白～薄青灰	灰白～薄青灰	ロクロナデ	淡緑～灰白の釉，灰釉？
289	〃	土師器	甕E	22.0			1/10	橙褐	橙褐	口縁内面ヨコ目，胴部外面斜ハケメ・内面なで	
290	〃	〃	甕F		7.0		(完)	灰褐～橙褐	薄黄橙～灰褐	外面・底面強いヘラケズリ，内面指おさえ・なで	
291	〃	須恵器	甕	21.3			1/10	灰白	灰白	よこなで，胴部外面平行タタキ目・内面同心円文あて具痕，タタキは上方へ右回りの螺旋状	
292	〃	〃	〃	30.3			1/3	青灰～暗灰	青灰～暗灰	よこなで，胴部外面平行タタキ目・内面同心円文あて具痕すり消し，タタキは上方へ右回りの螺旋状	口端・肩に灰白の自然釉
293	〃	〃	〃	44.6			1/10	黒灰	灰～黒灰	よこなで	
294	19住	〃	坏C		—			〃	青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
295	〃	〃	〃	15.8	—		1/6	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
296	〃	〃	〃		—			〃	〃	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
297	〃	〃	〃	15.9	—		1/7	灰白	灰白	ロクロナデ	
298	〃	〃	〃	17.0	—		1/8	茶褐	茶褐	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ後なで（ロクロナデ）	
299	〃	〃	坏C	12.2	9.0	3.4	1/10	灰	灰	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
300	〃	〃	〃	13.7	10.4	4.3	1/4	〃	〃	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
301	〃	〃	〃	15.2	10.0	3.8	1/3	黄褐	黄褐	ロクロナデ，付け高台	
302	〃	〃	坏B	15.5	7.0	3.6	1/3	灰	灰	ロクロナデ，底面回転ヘラ切り	
303	〃	〃	〃	14.7	5.9	4.2	1/4	〃	〃	ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ	
304	〃	〃	坏D	13.1	8.0	4.0	1/10	黄褐	黄褐	ロクロナデ，底面回転糸切り	
305	〃	土師器	坏B	11.7	6.1	3.2	1/4	茶褐～褐	黒	ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ，内面ヘラミガキ・黒色処理	
306	〃	〃	小形甕F	12.7			1/8	茶褐	黄褐	ロクロナデ	
307	〃	〃	〃	11.8			1/6	褐～暗褐	褐	ロクロナデ	
308	〃	〃	小形甕？	15.0			1/6	茶褐	茶褐	ロクロナデ，口縁内面僅かにヨコ目，胴部外面僅かに斜ハケメ	
309	〃	須恵器	無頸壺	16.9			1/6	灰	灰	ロクロナデ	黄色の釉
310	〃	〃	甕	27.1			1/8	茶	黒灰	よこなで，胴部外面平行タタキ目	
311	P450	〃	壺A	12.2	—		1/2	青灰	青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ，肩部に沈線，頸部内側に僅かに凹部	
312	P239	〃	壺C	16.6	—	3.4	1/6	〃	〃	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	天井部中央に自然釉
313	P308	〃	〃	15.4	—		1/6	灰白～緑	灰白～緑	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	天井部中央に自然釉
314	検 80	〃	〃		—			灰	灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
315	P359	〃	〃	14.0	—		1/4	濃青灰	濃青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	

版	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	口縁(底部)残存度	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
316	竪130	須恵器	蓋C		—			青灰	青灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
317	溝1 P6	〃	〃	14.5	—		1/7	青～緑	青～緑	ロクロナデ	天井部に自然釉
318	竪80	〃	坏C		9.0		1/2	青褐	青褐	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ・中央部に僅かに糸切り痕	
319	P528	〃	〃		8.7		2/5	黒灰	黒灰	ロクロナデ，付け高台，底面外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
320	〃	〃	坏B	13.0	7.3	4.0	1/6	灰	灰	ロクロナデ，底面回転糸切りのち手持ちヘラケズリ	
321	P616	〃	坏D	12.8	5.8	3.5	1/4	青灰	青灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	
322	〃	〃	坏B	11.7	7.1	4.4	1/4	〃	〃	ロクロナデ，底面回転ヘラ切りのちなで	
323	竪130	〃	坏D	14.1	7.7	4.1	1/4	灰白	灰白	ロクロナデ，底面回転糸切り	
324	竪124	土師器	高坏A					褐	黒	脚部外面ヘラミガキ・内面ヘラケズリ，坏部内面ヘラミガキ・黒色処理	
325	建9 P279	須恵器	鉢	14.3			1/10	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，体部外面中位に沈線2本	17生出土品と接合
326	竪80	〃	長頸壺	5.8	3.9	18.5	完	黒灰	黒灰	ロクロナデ，底面回転糸切り	完形品
327	竪125	〃	円面硯		19.1		(1/12)	〃	〃	よこなで，なで，浅い沈線	9生出土品に同一個体
328	竪1	土師質	内耳土器	26.4	22.8	17.0	1/7	茶褐	褐	ロクロナデ，回転ヘラケズリ？	
329	竪118	青磁	碗				(1/8)	灰白～茶灰	緑		
330	竪80		天目茶碗		4.7			灰	黒～黒褐	けずり出し高台	
331	竪108	陶器		9.4			1/6	灰白	淡緑	ロクロナデ，釉に貫入	
332	竪75	〃		29.1			1/20	暗灰	淡緑		
333	検出面1	須恵器	坏C	13.1	—		1/6	灰白～暗灰白	灰白～暗灰白	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	外面に黄灰乾状自然釉
334	〃 2	〃	〃		10.9		(1/5)	灰白	灰白	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
335	〃 2	〃	〃		9.3		(1/4)	〃	〃	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
336	〃 2	〃	〃	14.9	11.6	4.0	1/3	灰白～暗青灰	灰白～暗青灰	ロクロナデ，付け高台，底面手持ちヘラケズリ	
337	〃 1	〃	〃		11.2		(1/3)	灰白	灰白	ロクロナデ，付け高台，底面回転ヘラケズリ	
338	〃 2	土師器	坏D	14.9	6.9	4.2	2/3	黄褐	黄褐	ロクロナデ，底面回転糸切り	
339	〃 2	〃	坏C		4.9		(完)	黒灰	褐	ロクロナデ，底面回転糸切り，内面ヘラミガキ・黒色処理	
340	〃 1	須恵器	短頸壺	8.9			1/8	灰白	灰白	ロクロナデ	
341	〃 1	灰釉	碗	15.8			1/10	〃	緑灰	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ	
342	〃 1	須恵器	壺		6.2		(1/2)	〃	灰白	ロクロナデ，付け高台，胴部外面回転ヘラケズリ，底面回転糸切り	底面にヘラ記号

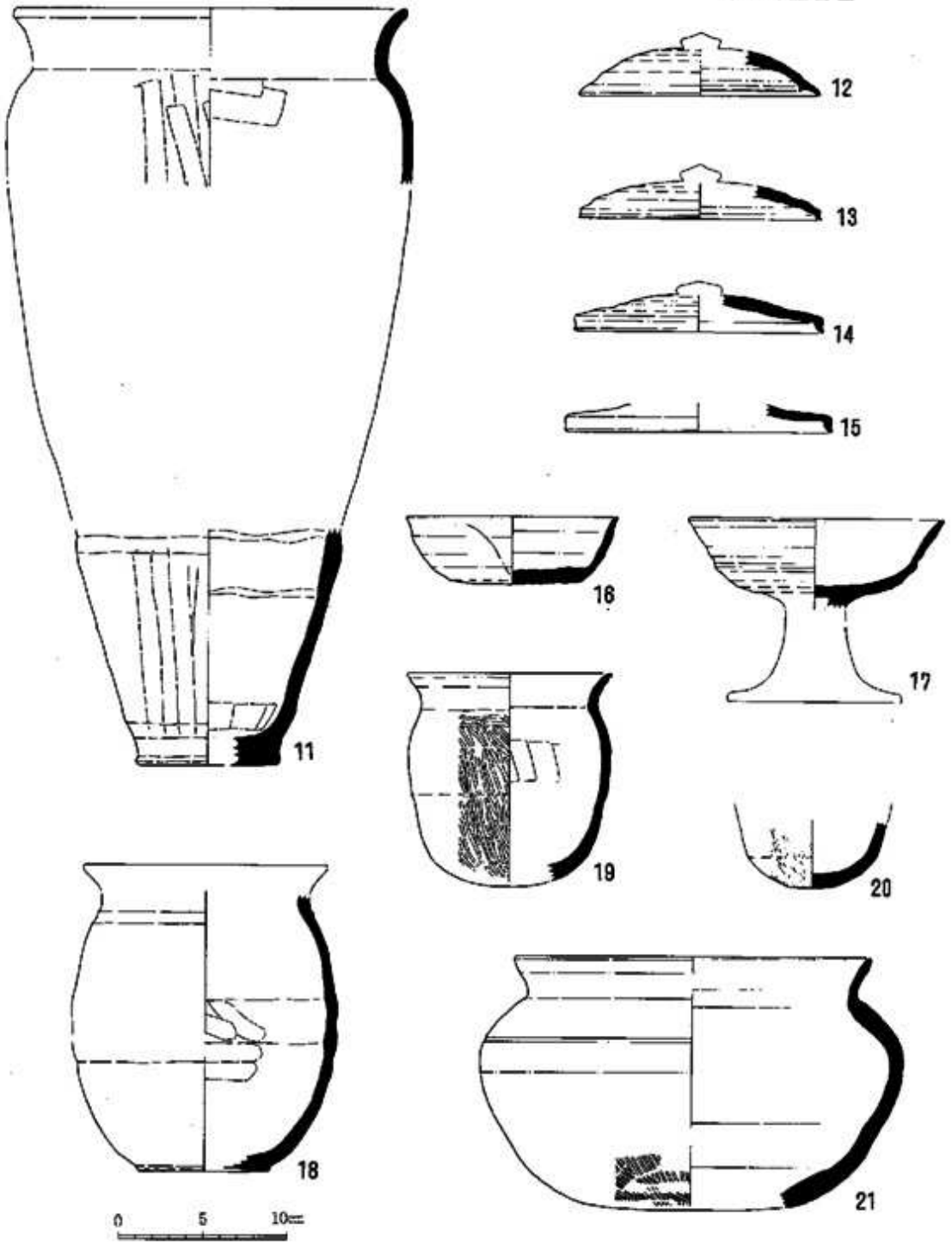
第1号住居址



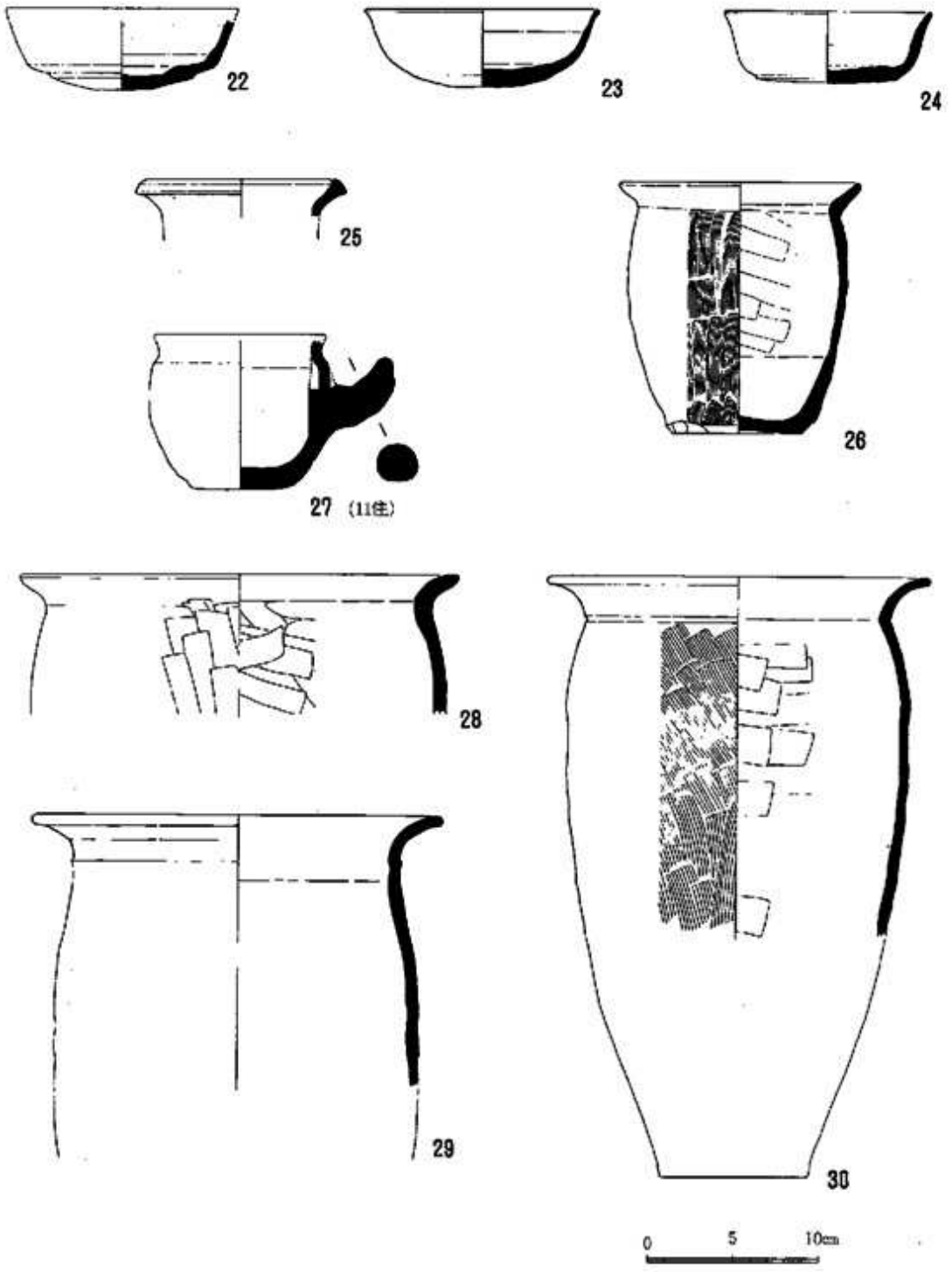
第3号住居址



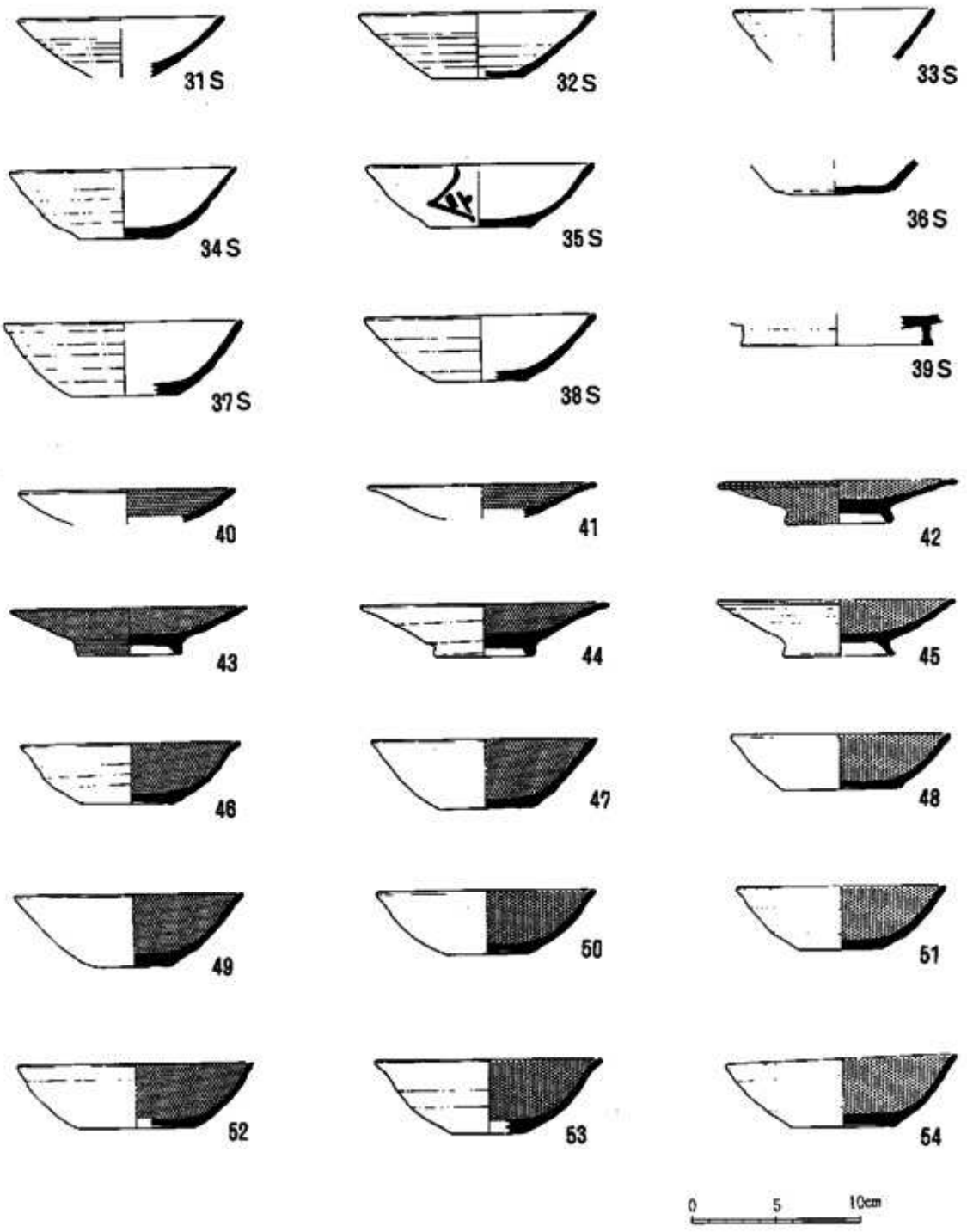
第40図　土器実測図(1)



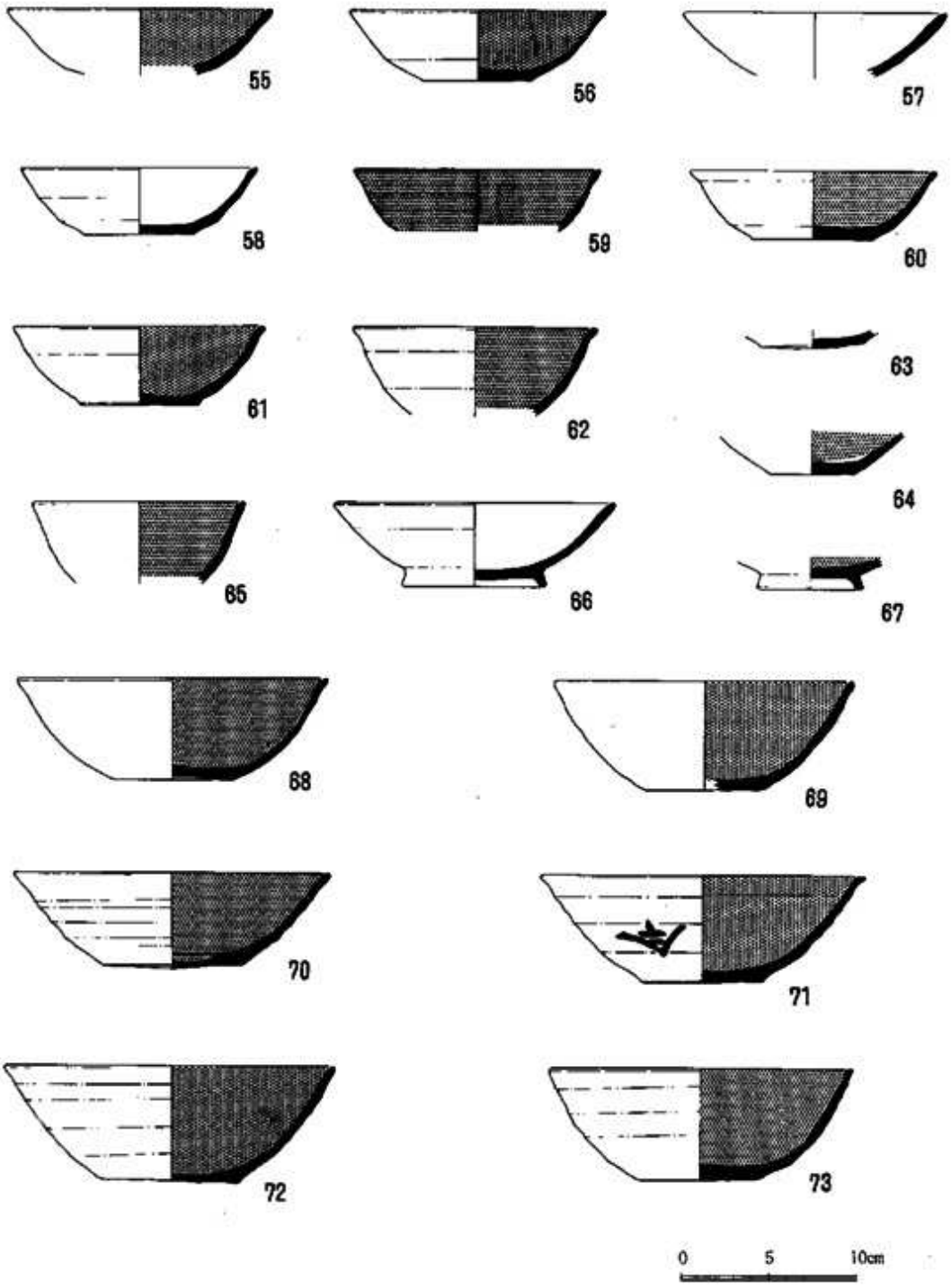
第41図　土器実測図(2)



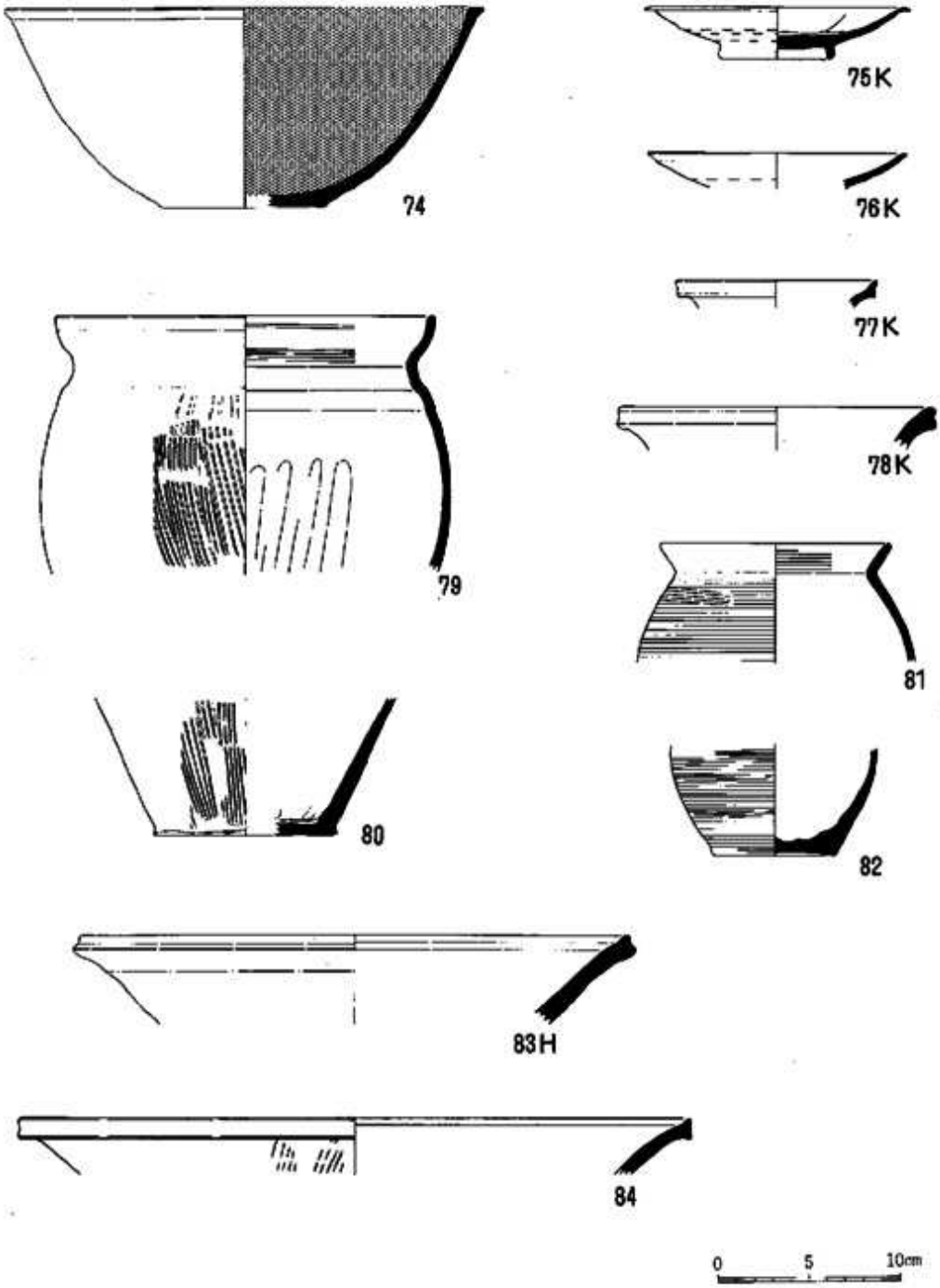
第42図　土器実測図(3)


31S
32S
33S
34S
35S
36S
37S
38S
39S
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0
5
10cm

第43図　土器実測図(4)



第44図　土器実測図(5)



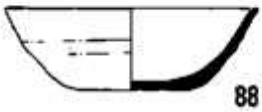
第45図　土器実測図(6)

第7号住居址

85S

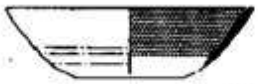
86

87

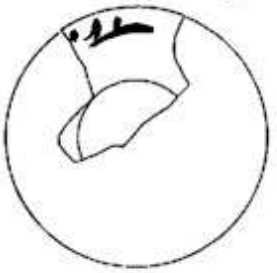

88

89

90


91

92



93

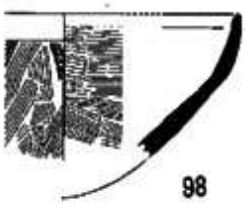
94

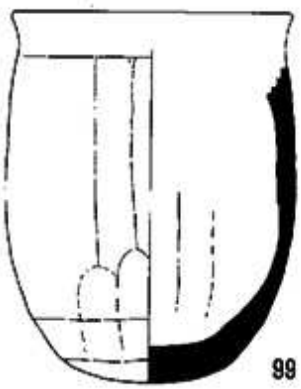
95

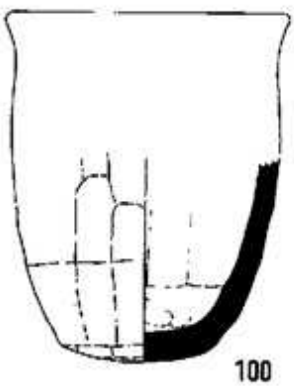
第8号住居址

96

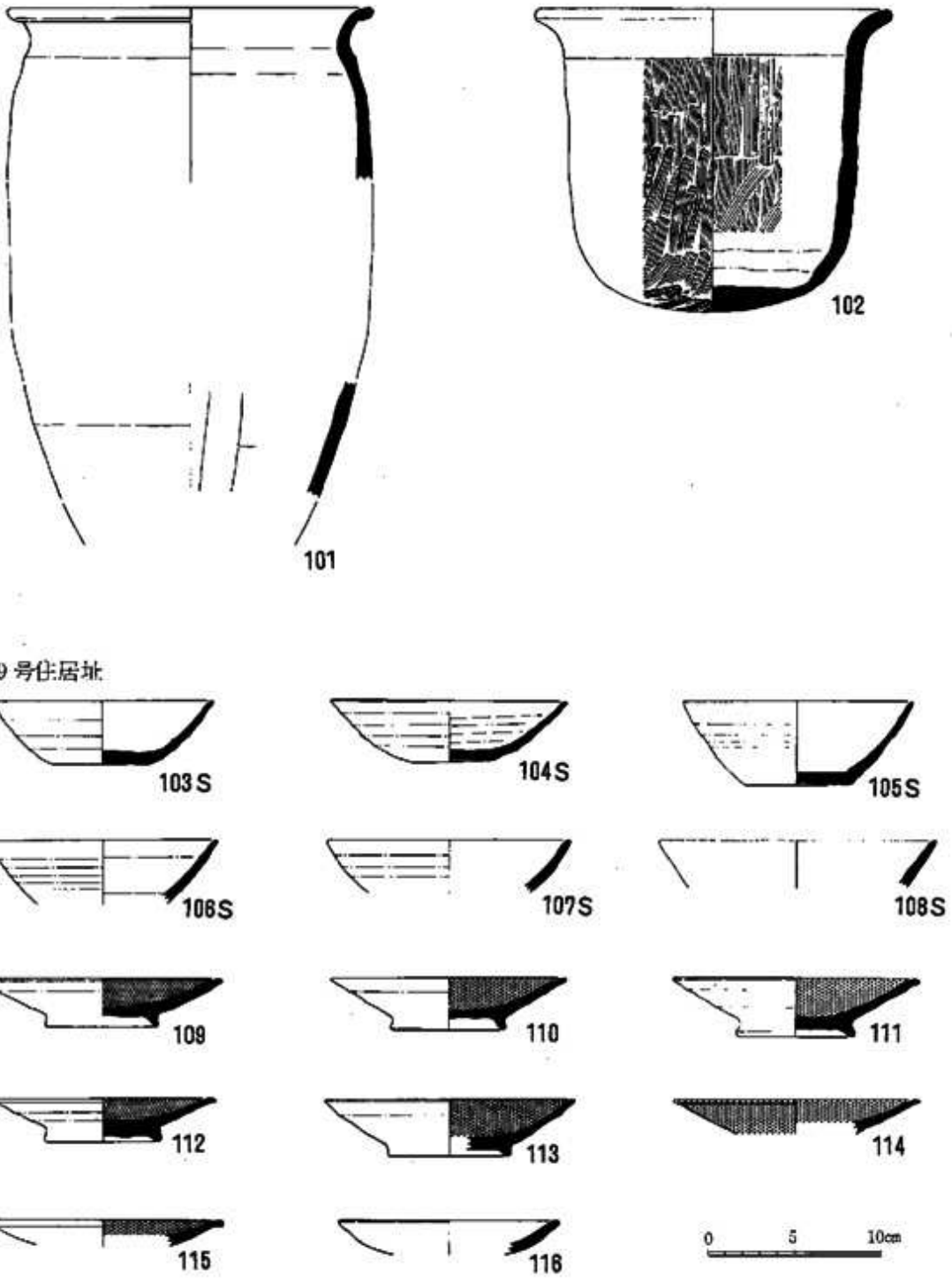
97


98

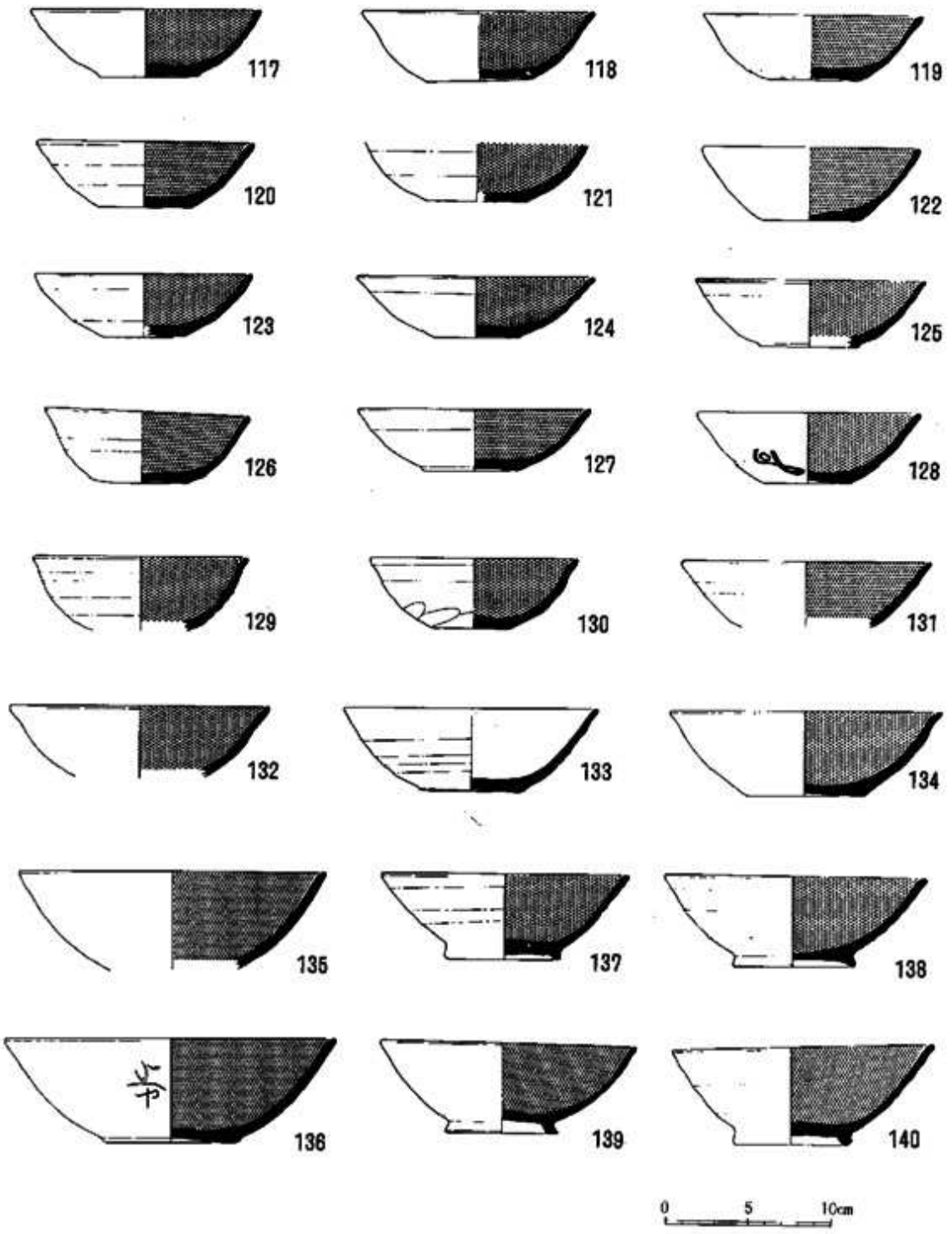

99


100

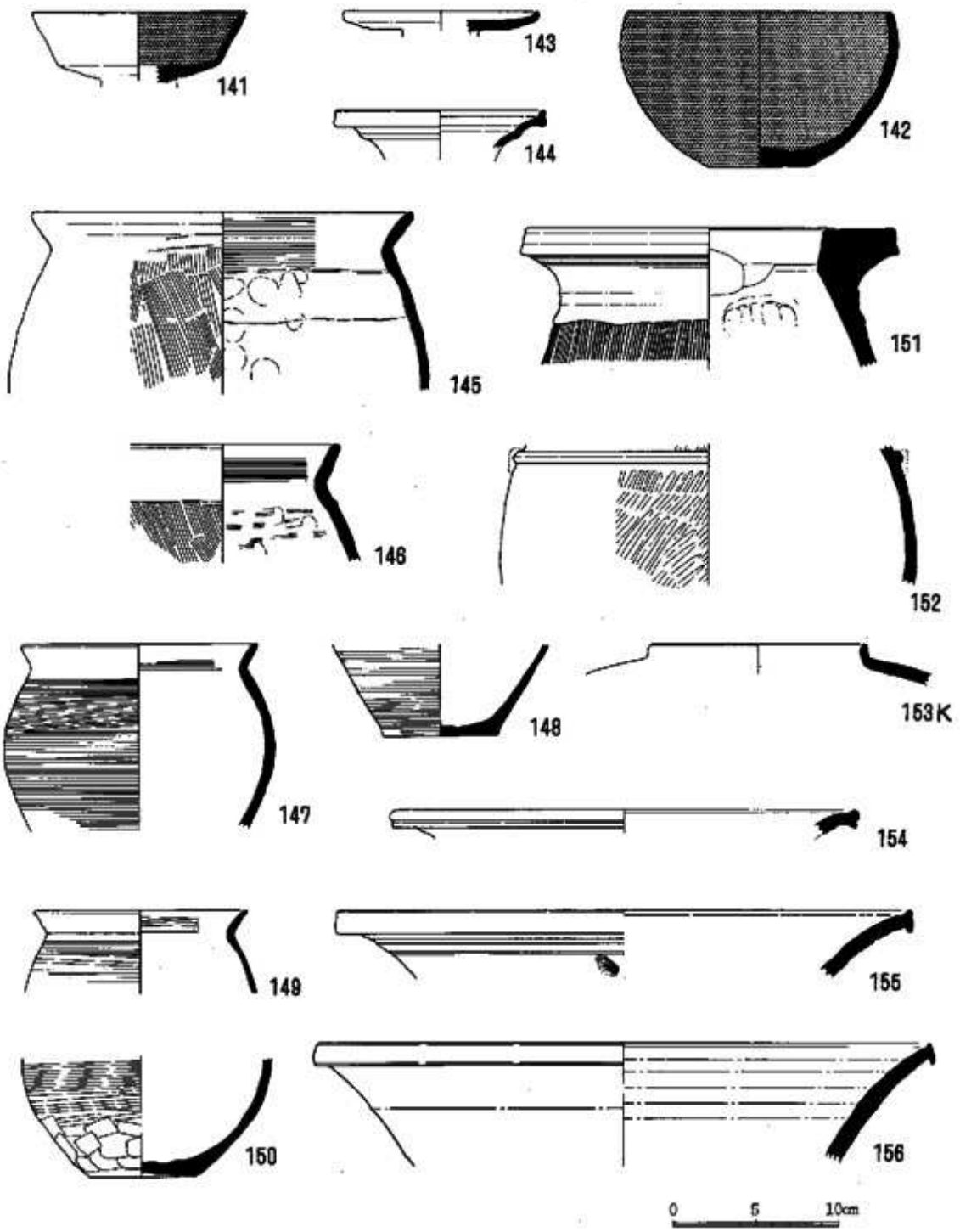
第46図　土器実測図(7)


101
102
第9号住居址
103S
104S
105S
106S
107S
108S
109
110
111
112
113
114
115
116
0
5
10cm

第47図　土器実測図(8)

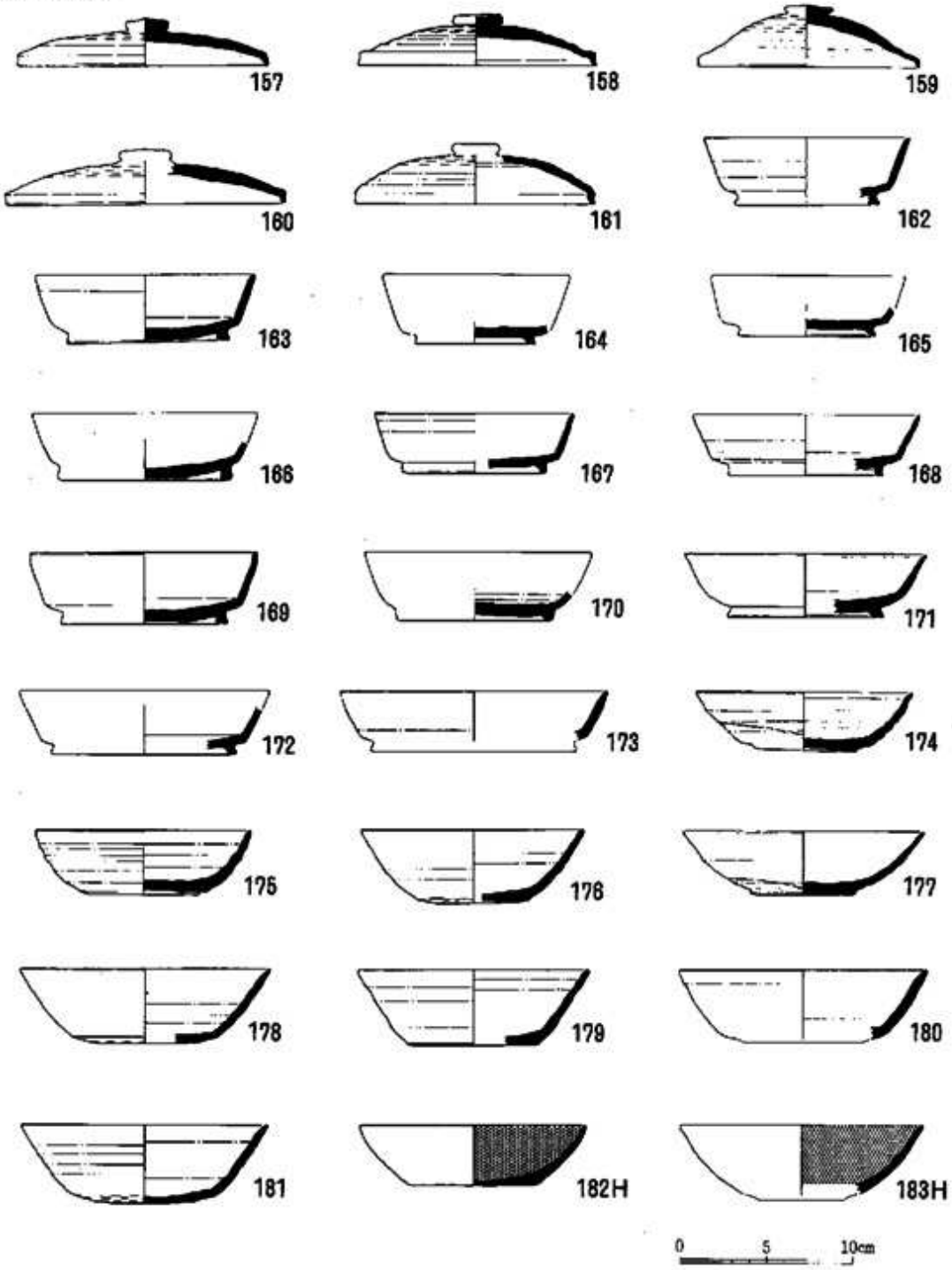

117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
137
138
136
139
140
0
5
10cm

第48図　土器実測図(9)

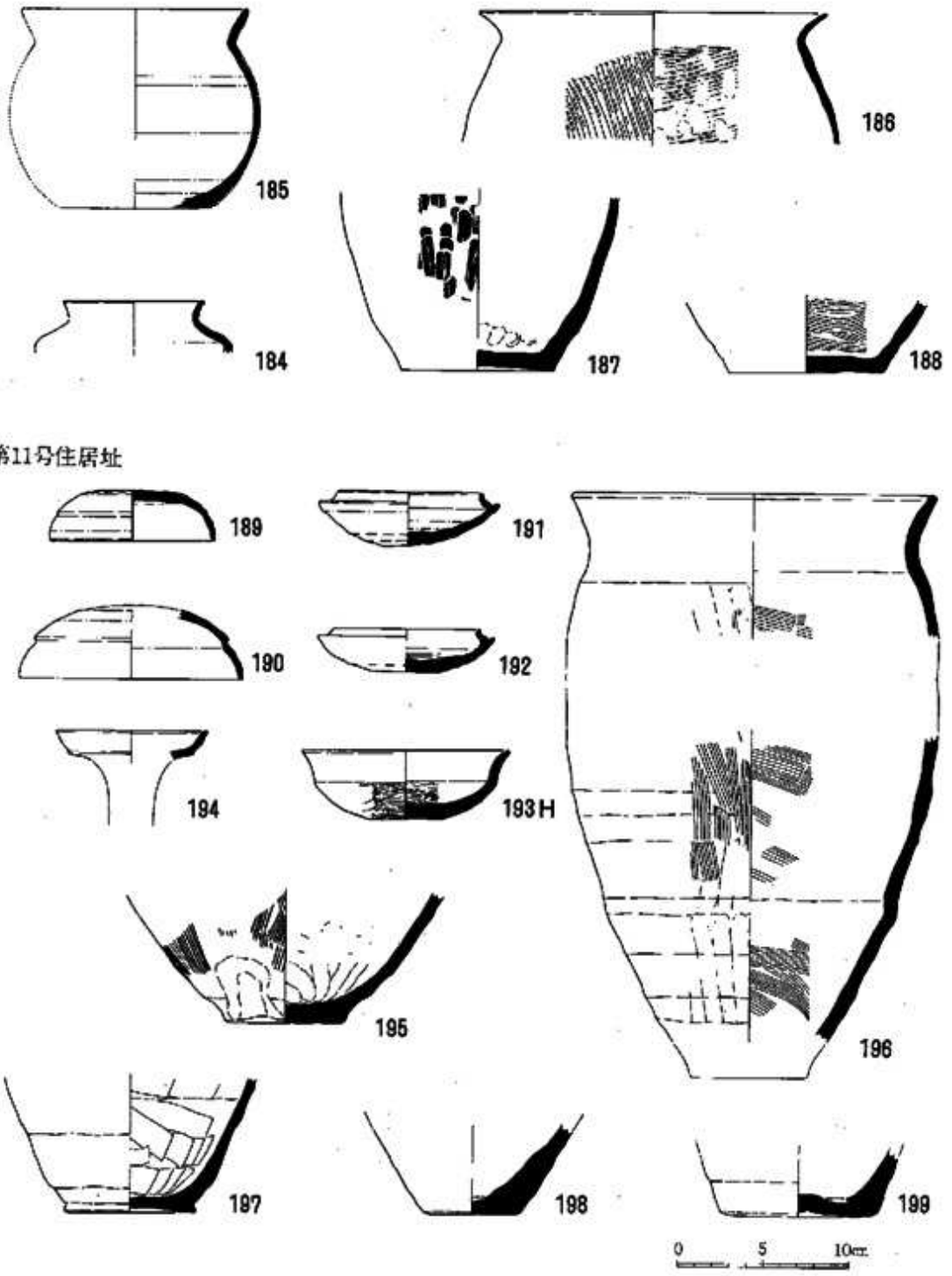


第49図　土器実測図(10)

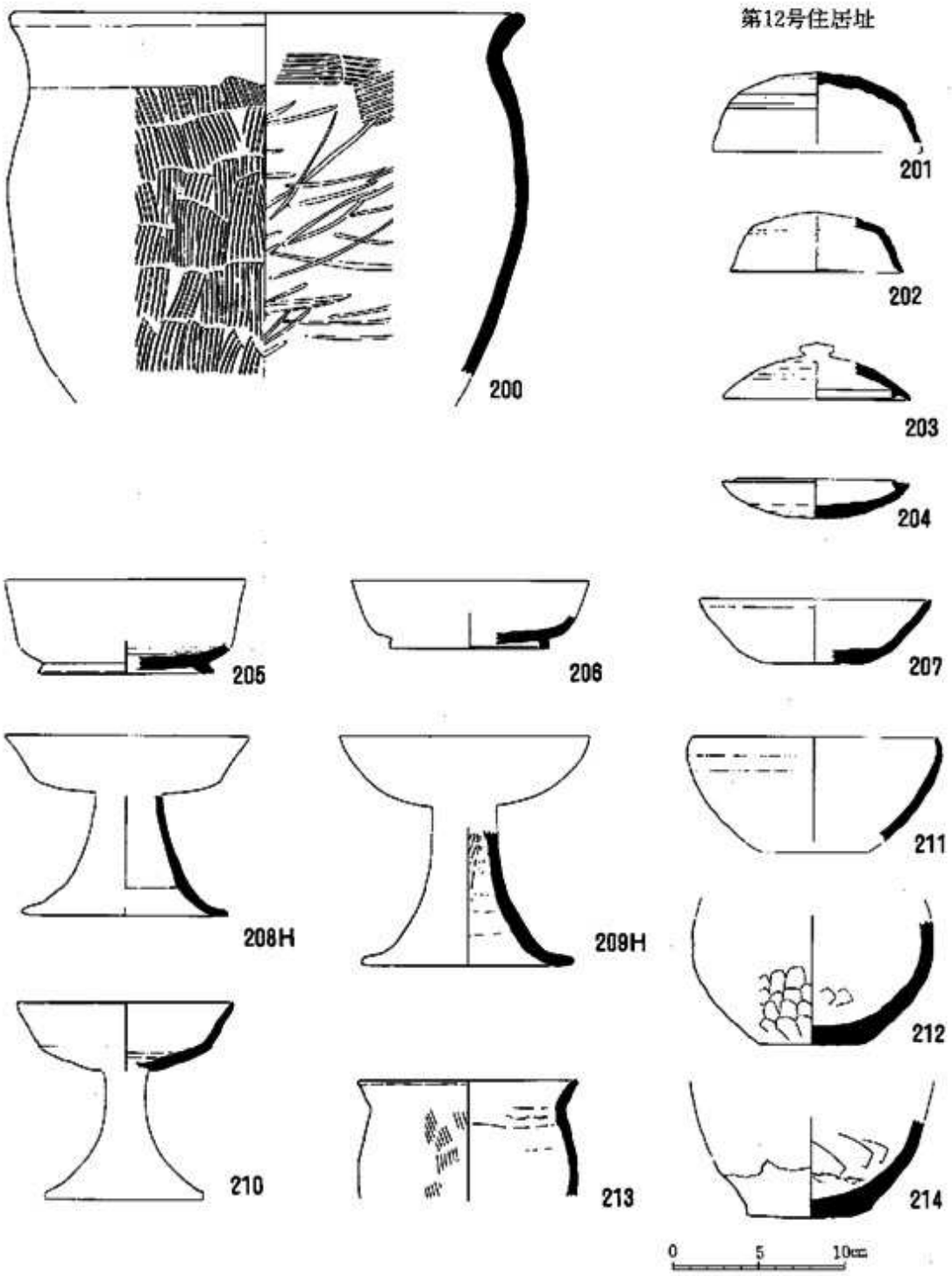
第10号住居址



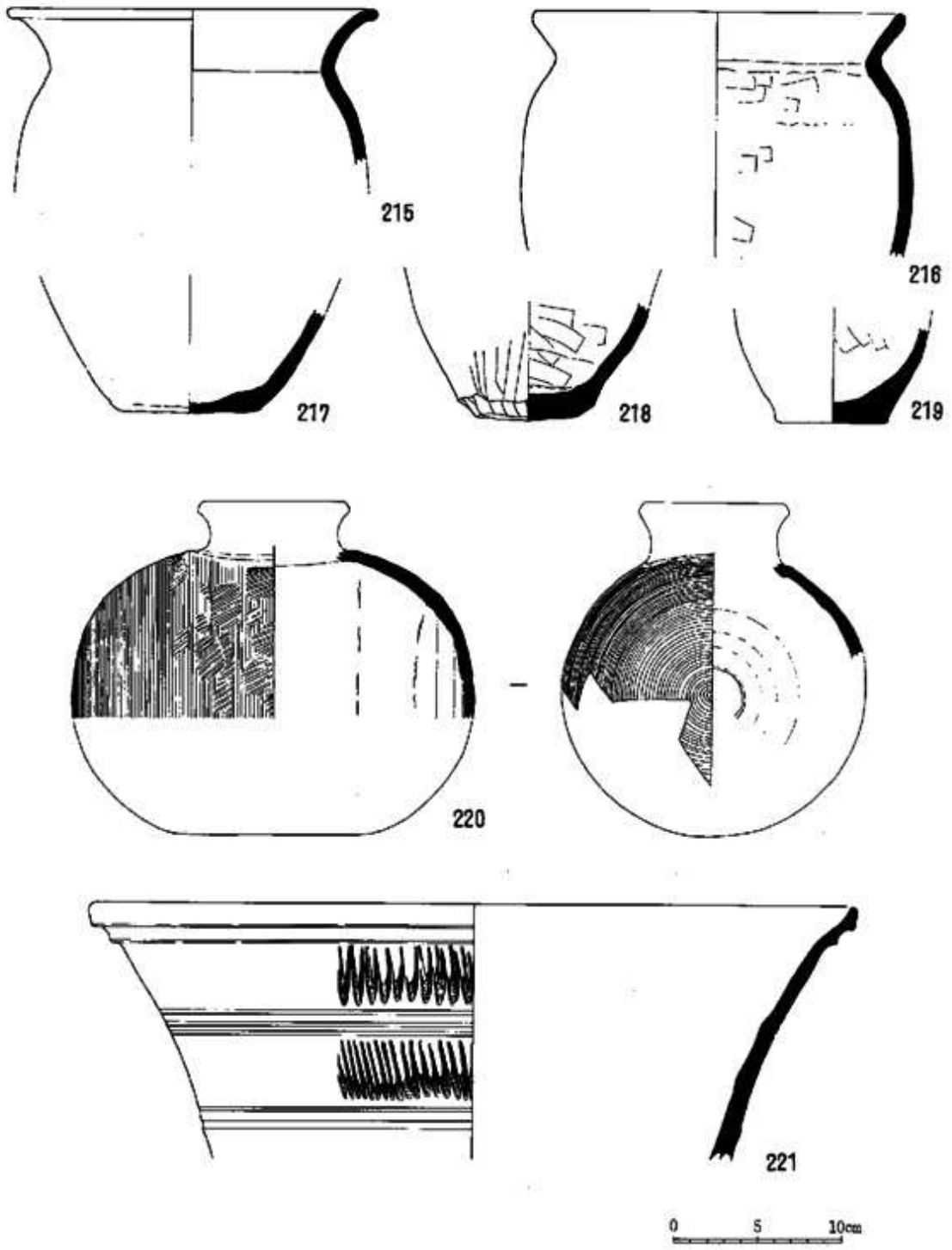
第50図　土器実測図(1)



第51図　土器実測図(12)



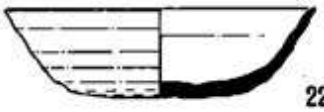
第52図　土器実測図(13)



第53図　土器実測図(14)

第14号住居址

222


223

224

225

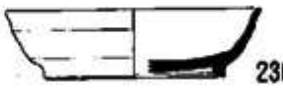
226

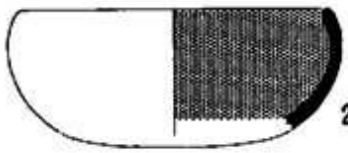
第15号住居址

227

228

229

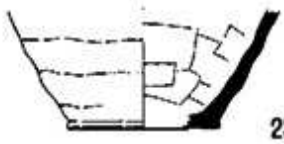

230


231

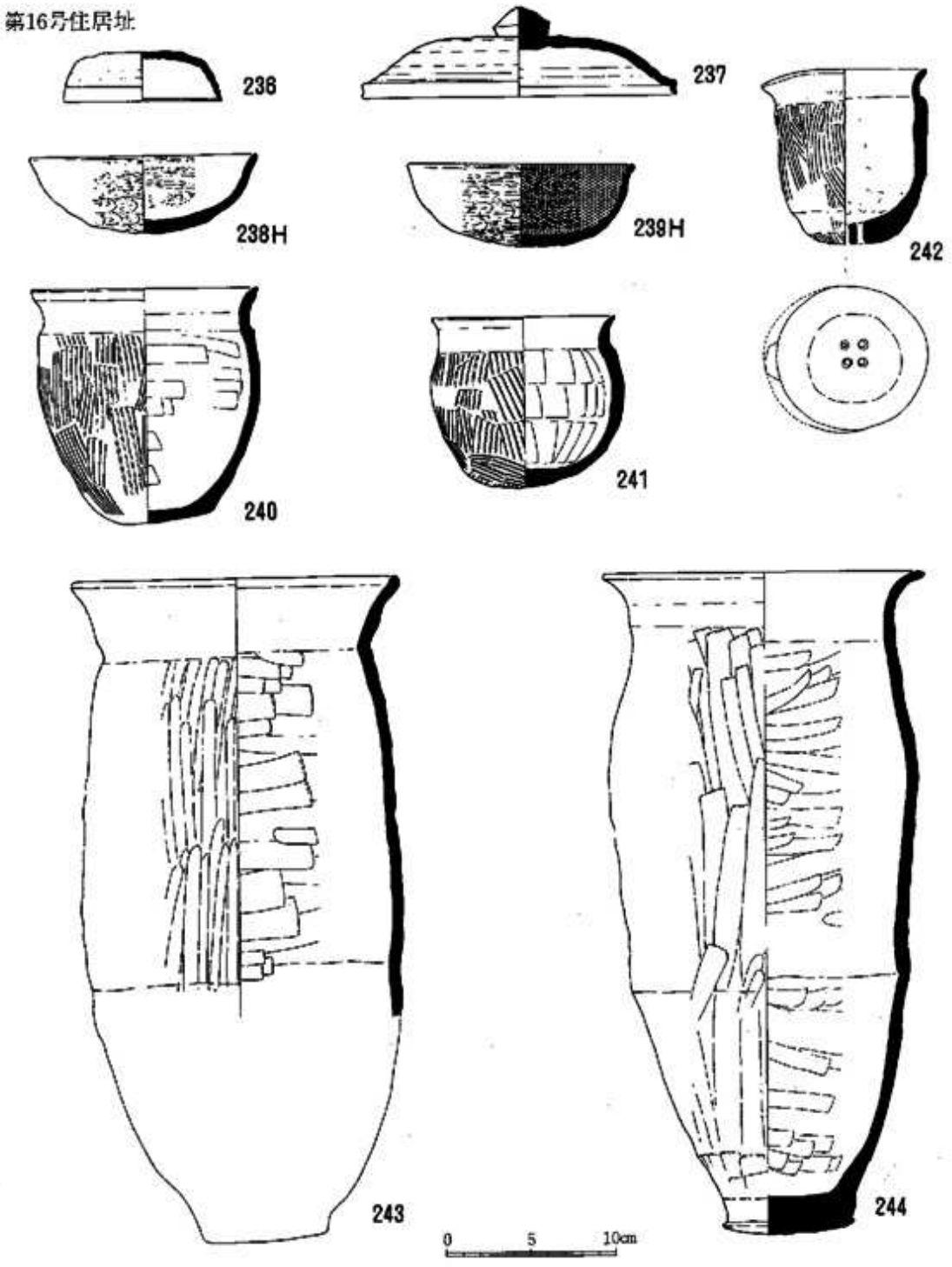
232

233

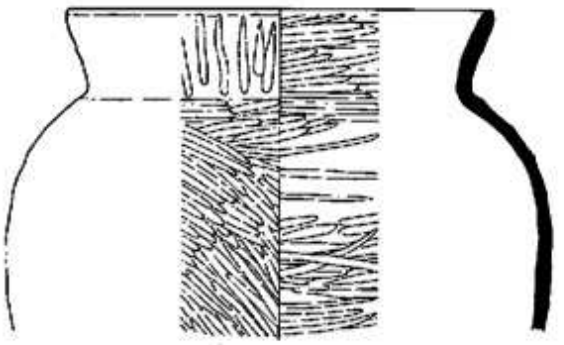
234

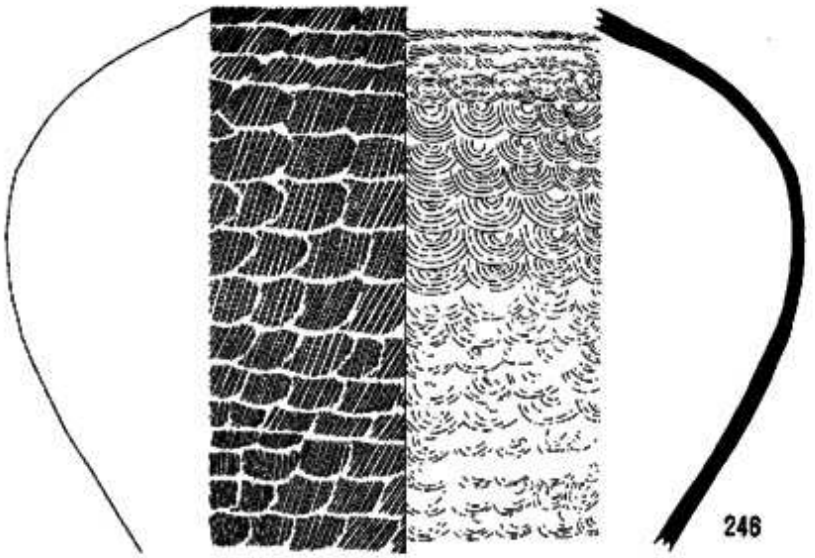

235

第54図　土器実測図(15)

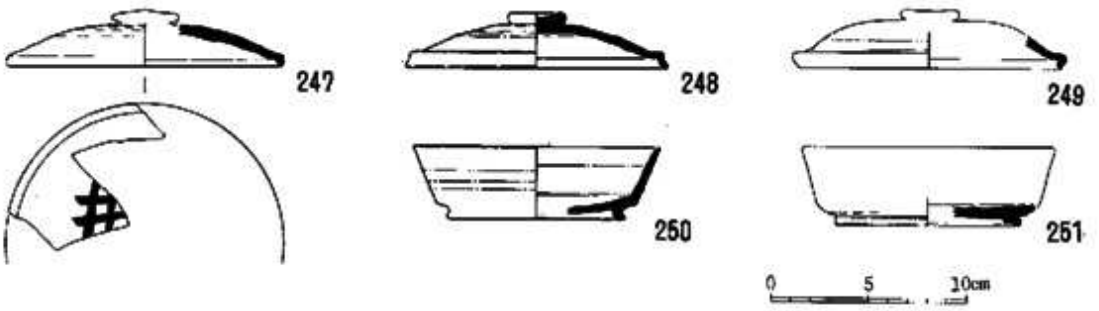


第55図　土器実測図(16)

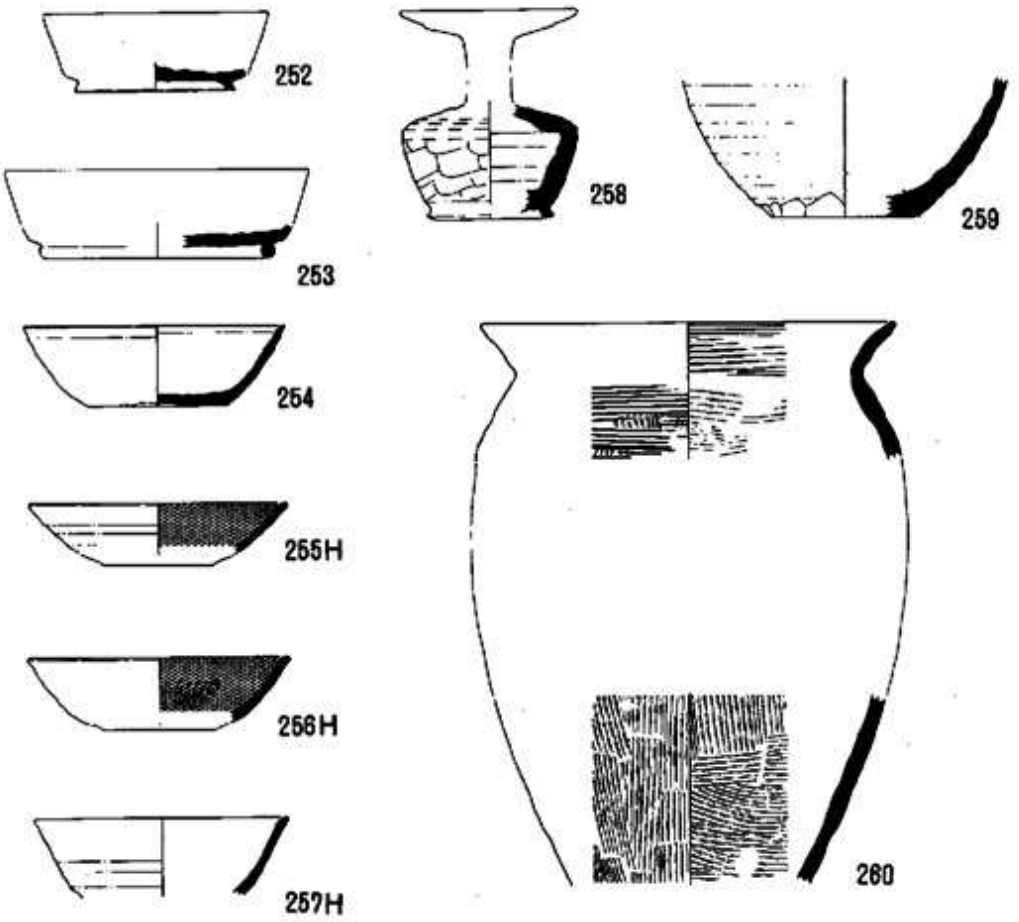




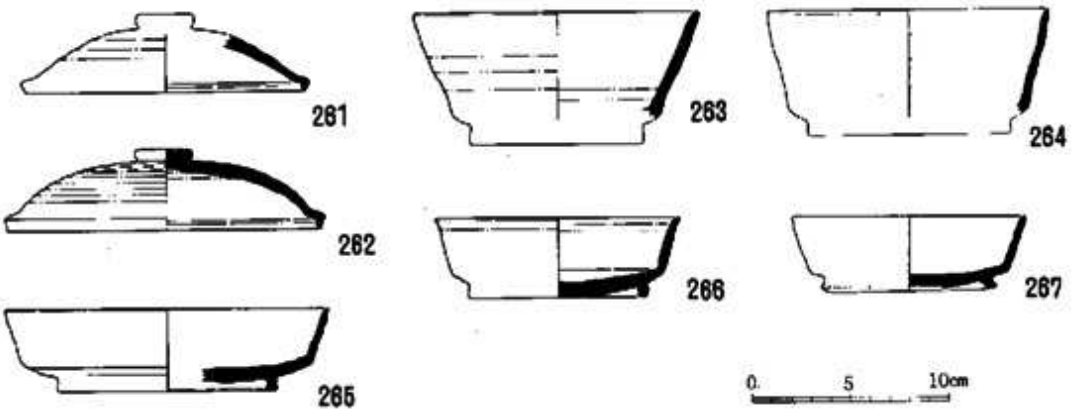
第17号住居址



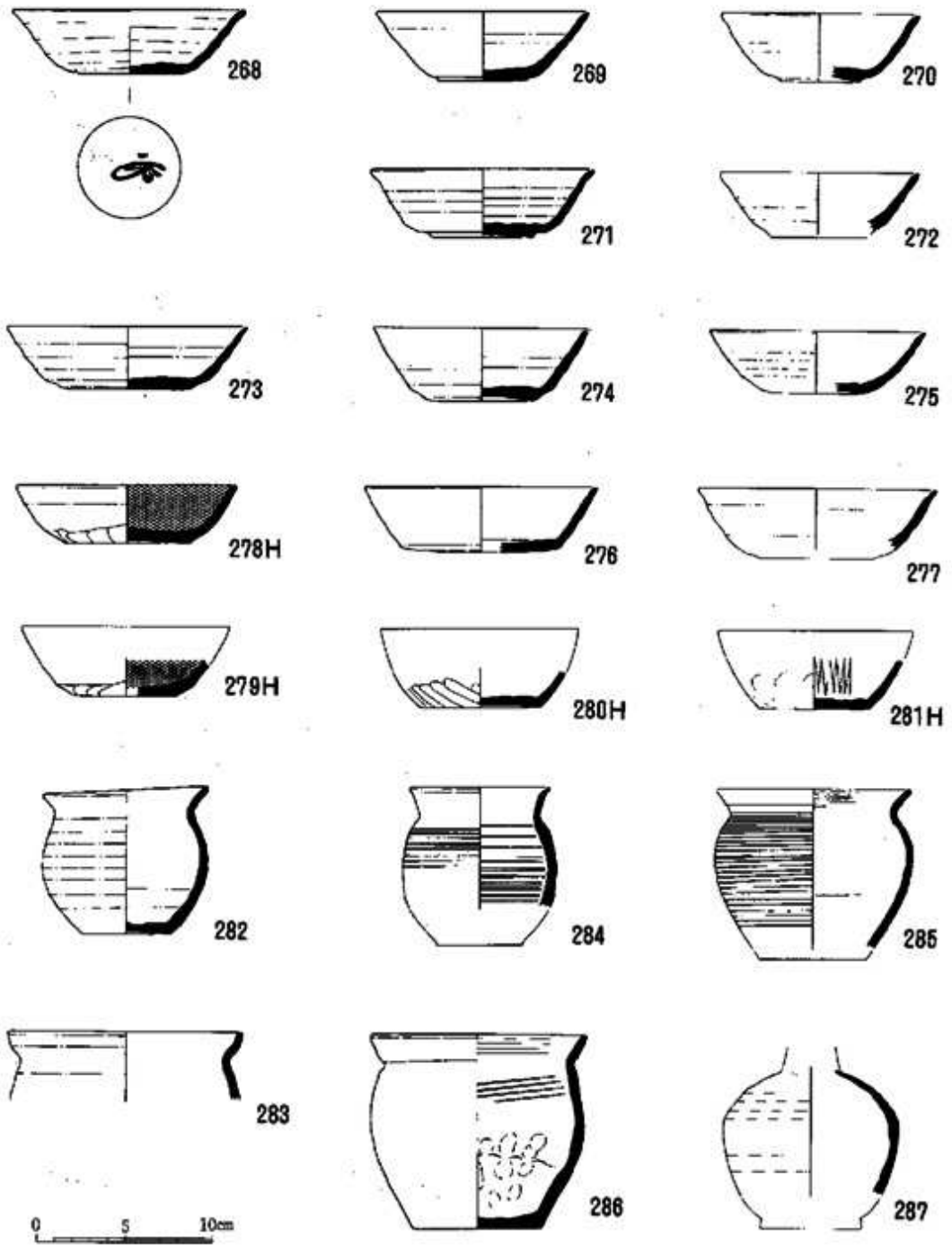
第56図　土器実測図(17)



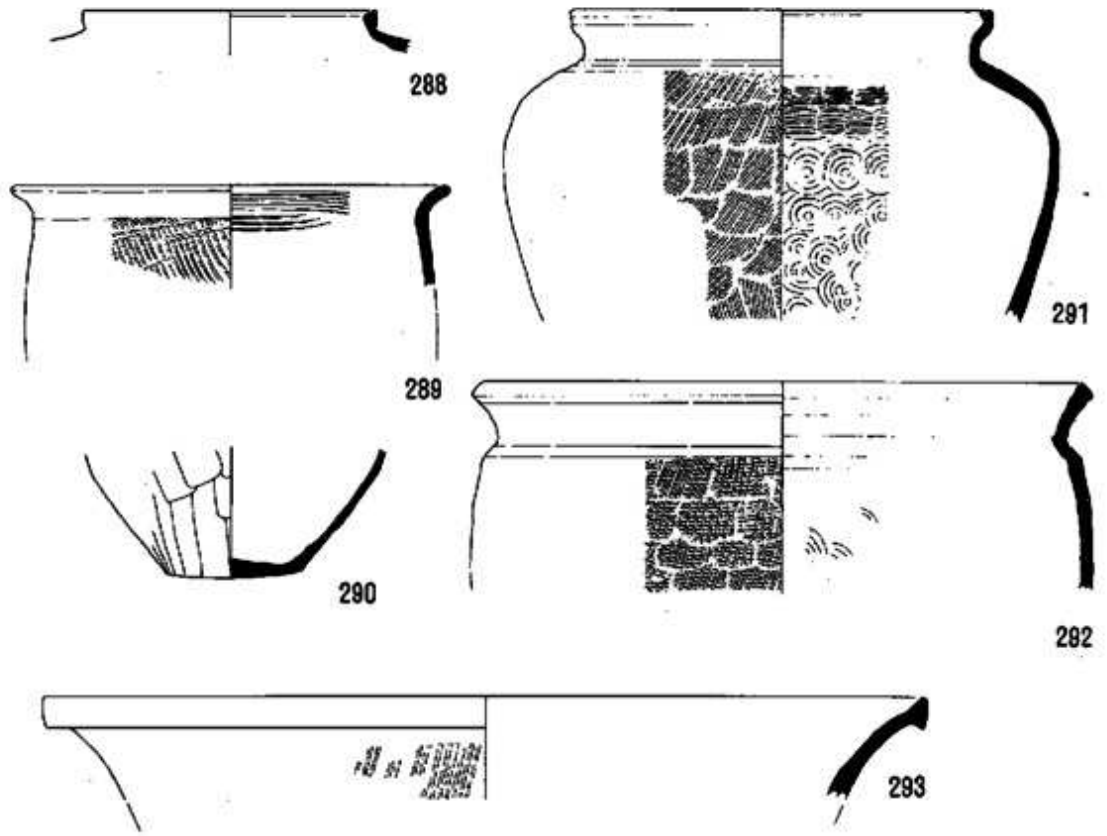
第18号住居址



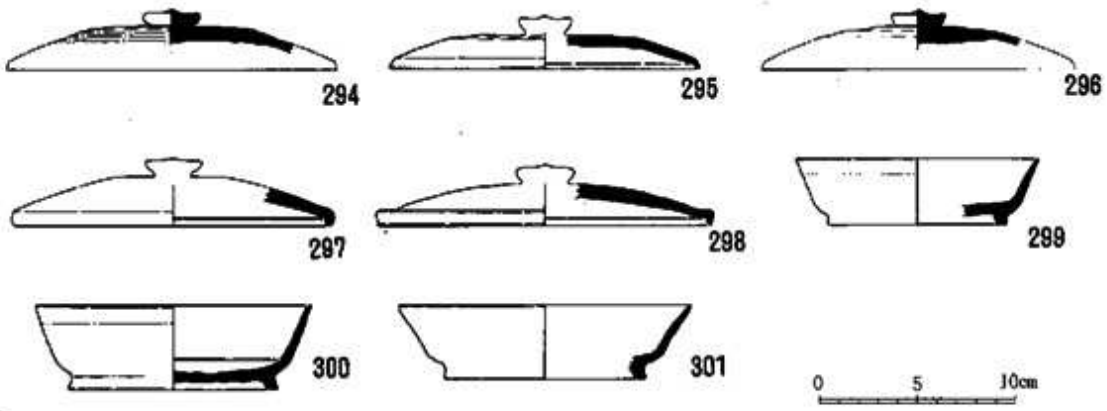
第57図　土器実測図(18)



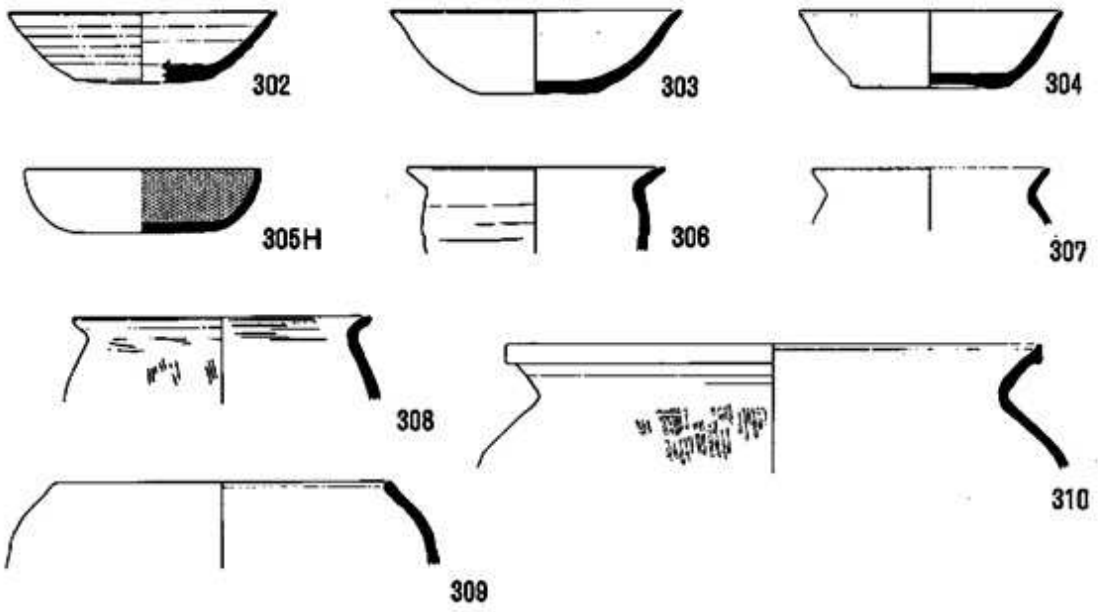
第58図　土器実測図(19)



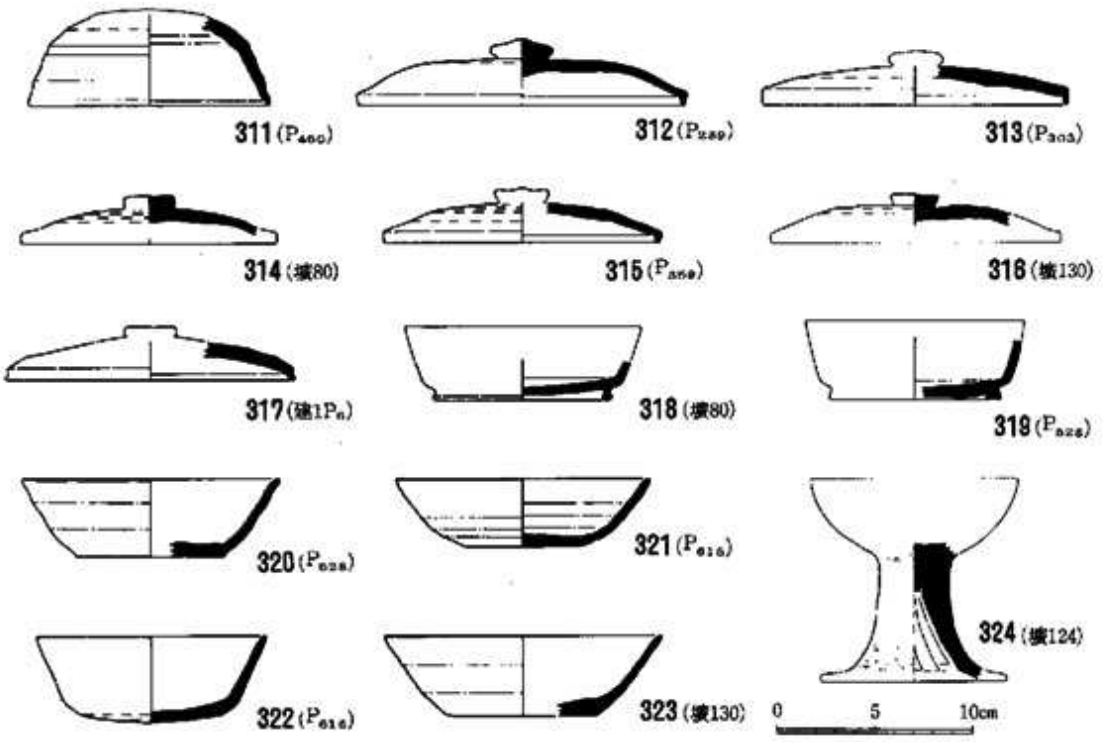
第19号住居址



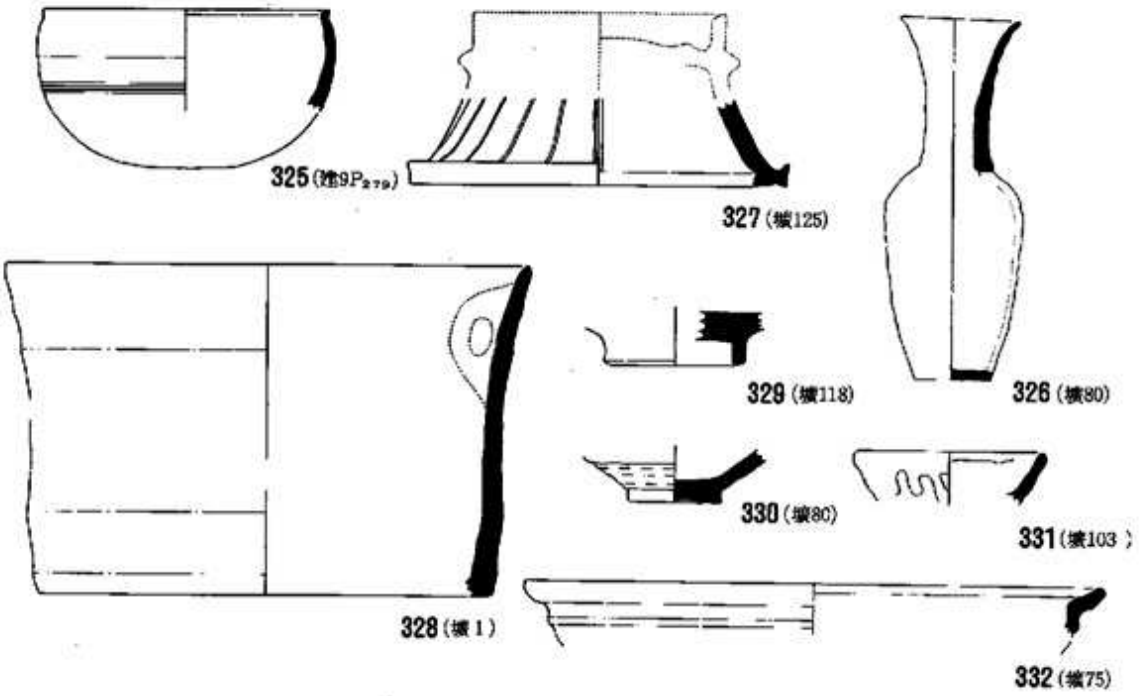
第59図　土器実測図(20)



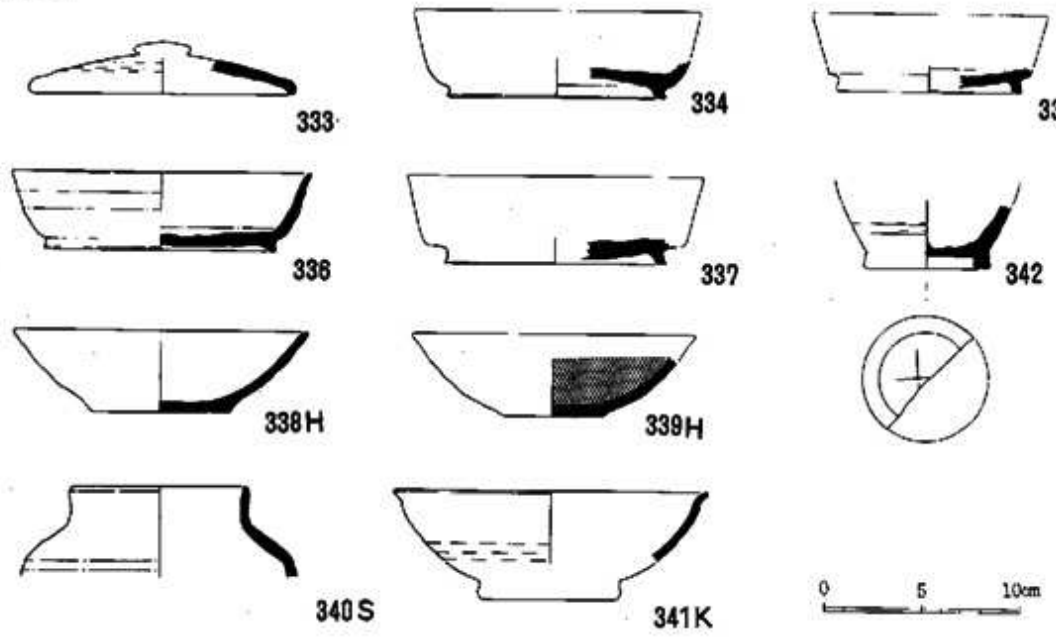
建物址・土壙・ピット



第60図　土器実測図(21)



検出面



第61図　土器実測図(22)

2　銅製品・鉄器・銭

今回出土した銅製品は3点である。いずれも10号住居址より得られたものである。このうち1は2ヶの小さな凹・凸部をもつ2片が剝落したと思われる。2、3は緑錆が激しく周縁が摩耗しており欠損部、全体形も分からないがあるいは同一個体であったかもしれない。1と共に帯金具の一部なのだろうか。

鉄器類は64点あり、内訳は鉄器51点、鉄滓、溶滓等が13点である。これらのうち類例に種別を求める事ができたものは9種24点であり他のものは薄い板状のもの、断面楕円形の棒状のもの等小片で種別不明として扱っている。遺構毎に大別すると住居址から29点、建物址1点、土壙14点、ピット、柵列、溝より計5点、近世近代遺構10点、他5点である。以下図掲載のものを中心に遺構毎に見てゆく。

9号住居址からは良好な遺物が出土した。6の斧は大きさから見て木材伐採用より伐採後材の面を削る手斧としての機能を考える方が妥当である。7は鉄鏃であろう。上部には鈕と思われる穴が見える。他例(註1)では舌の上部を加工したものもあるが本資料には舌がなく身の上部を利用して鈕の部分を鍛り出しているようである。又完形の刀子もやはり9号住居址から得られている。

10号住居址には前記銅製品の他針と思われるもの（4）があり、片端を欠するがもう一方の側はやや太くなり止まっている。火打（鎌）金具（10）は中世土壙出土の12や、検出面からの15とも異なっており装着部側にかなりのバラエティーがあるようだ。いずれも使用部は斜めに磨耗（？）しており16も同種として扱った。

5、11～14は中世土壙から得られた遺物である。このうち81号土壙からは2点あり、5は字の両脇に2ヶづつ計8個の小穴を穿った永楽銭、14は緑錆が付着している刀子の一部である。小柄、あるいは鞘の一部と思われるが両者共かなり異質な祭祀的遺物と思われる。13はのみの一部らしい。12の火打金具と共に80号土壙から出土した。なお今回の住居址からのものを概観してみると昨年は鎌、鋤頭等農具中心であったが、今回は手斧、のみ、刀子等工具が主体となっているようであるが資料も多くない為断定はできない。

銭は銭種判別できるもので13種23点、他に不明品5点がある。これらはすべて渡来銭で検出面からの1点を除き土壙から出土している。多出した土壙は80、108が各5点、2、23が4点、42が2点他は1点づつとなっており、これら多数出土する土壙でも不明品はあるが同一銭ではなく各種の銭を入れているようである。火葬墓である23と108からは3枚、あるいは2枚が密着して出土した。

（高桑俊雄）

註1　「くまのかわ遺跡」例、「長野県茅野市御狩野遺跡」例では舌の上部を加工してあり、「日光男体山一山頂遺跡発掘調査報告書」例では身の上部を加工している。

参考文献

神沢昌二郎「鉄鏃の新資料について　一松本市横賀くまのかわ遺跡出土遺物――」『長野県考古学会誌』50、1986年

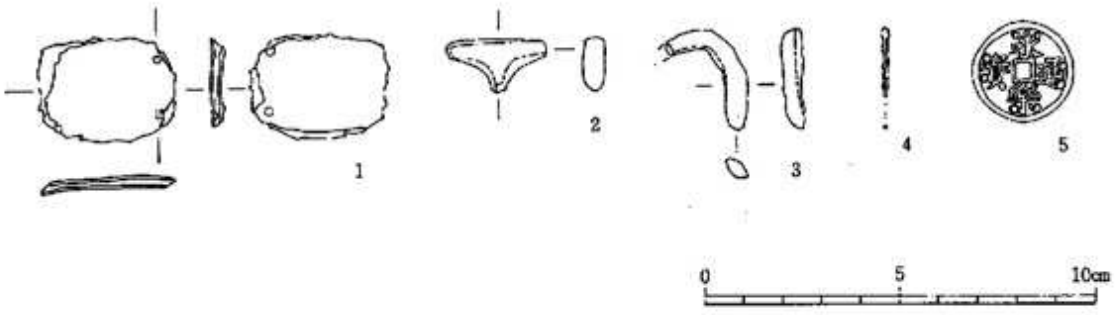
表5　鋼製品・鉄器一覧表

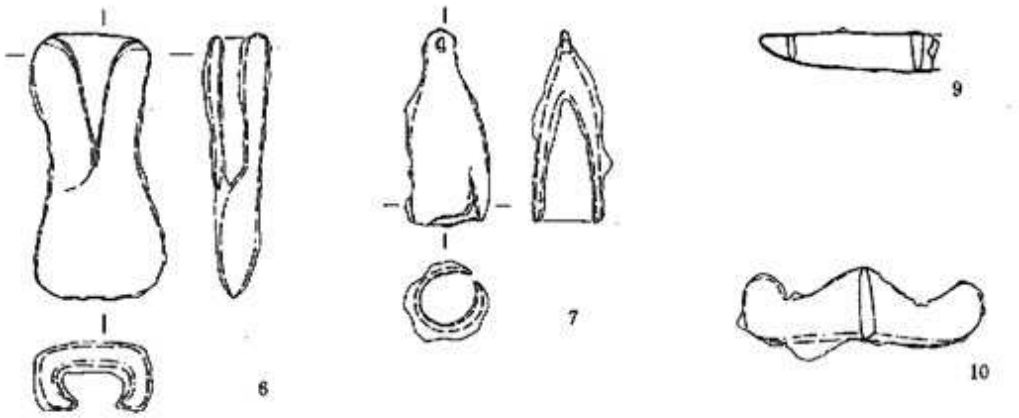
番号	出土遺構	図番号	種別	長さ (cm)	幅(径) (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	10 住	1	不明	35	27	4	7.75	鋼製品　2枚に剥離　周囲破損
2	〃	2	不明	25	14	6	5.71	〃　T字状
3	〃	3	不明	26	7	6	3.19	〃　J字状　片端欠損
4	3 住		鉄滓 1				44	
5	5 住		鉄滓 2				29	
6	5 住		不明	36	14	—	7.61	
7	〃		不明	43	12	9	3.9	
8	〃		鉄滓 2				493	
9	〃		溶滓 1				18	
10	7 住		鉄滓 1				17	
11	9 住	8	刀子	195	19	13	27.91	完形
12	〃	6	斧	99	49	26	202	完形
13	〃	7	鉄鏃	75	31	—	79	
14	〃		不明	52	11	6	4.53	
15	〃		不明	78	42	45	157	鍋の一部様
16	〃		不明	67	25	21	37	製品か
17	〃		鉄滓 2				298	
18	10 住	9	刀子	66	17	7	10	刀部 1/2 のみ残
19	〃	10	火打金具	95	38	14	49	
20	〃	4	針か	16	2	—	0.06	
21	〃		角釘	52	9	—	5.25	
22	〃		不明	28	19	14	8.42	
23	〃		不明	38	24	9	10.84	板状片
24	〃		不明	80	15	12	10.26	木質付着
25	〃		不明	22	18	—	0.51	
26	〃		不明	54	28	18	23	製品か
27	〃		不明	52	16	—	14.48	太い棒状
28	18 住		釘か	33	9	6	2.16	一部
29	〃		不明	62	16	12	11.02	
30	〃		不明	68	10	8	7.68	
31	〃		不明	21	15	11	3.34	
32	19 住		不明	67	16	13	3.99	工具か
33	建物址2(P11)		鉄滓 1				19.95	
34	柵列2 (P430)		不明	32	3	—	1.25	板状片
35	P194		溶滓 1				1	
36	P255		溶滓 1				12.37	
37	P364		鉄滓 1				22.27	
38	土壙 7		鉄滓 1				18.68	
39	土壙 19		鉄滓 1				24.11	
40	土壙 26		不明	25	7	—	1.89	丸釘か，一部
41	土壙 23		不明	30	14	25	2.06	角釘か
42	土壙 34		角釘	28	13	—	3.08	
43	土壙 43	11	不明	42	15	14	7.28	工具か
44	〃		不明	75	35	12	20	製品か
45	土壙 61		鉄滓				30.77	
46	土壙 75		角釘	53	10	—	5.19	
47	土壙 紀	12	火打金具	73	30	13	25.95	
48	〃		角釘	25	11	9	3.37	一部
49	〃	13	のみ	59	11	8	6.00	
50	土壙 81	14	刀子	87	27	14	23.54	
51	〃	5	不明	—	25	1.5	1.95	銭，永楽通宝に8ケの穴
52	溝 1		不明	23	18	13	5.67	板状片
53	近世近代遺構		丸釘	72	10		5.2	

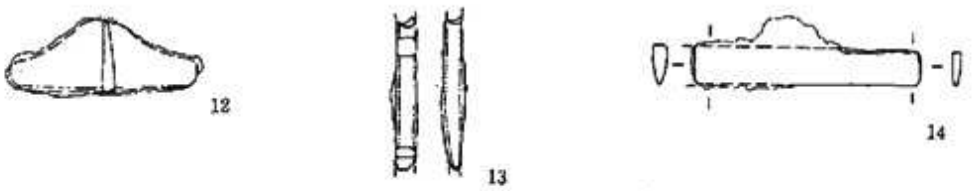
表	出土遺構	図番号	種別	長さ (cm)	巾(径) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
54	近世近代遺構		丸釘	87	8	—	10.6	頭部欠損
55	〃		丸釘	69	10	—	7.51	L字形
56	〃		丸釘	62	10	—	4.69	
57	〃		丸釘	36	6		1.30	J字形
58	〃		丸釘	58	9	—	4	
59	〃		角釘	23	9	4	1.27	脚部欠損
60	〃		ボルト	28	16	—	10.4	
61	〃		不明	53	14	—	8.84	片端欠損
62	〃		不明	37	25	—	10	板状の一部が鉄状に付着
63	1地区検出面	15	火打金具	53	44	6	21.16	片端欠損
64	〃		不明	28	13	—	4	
65	2地区検出面		不明	33	9	7	3.21	基部か
66	〃		不明	15	13	4	1.43	小片
67	表採	16	火打金具	36	18	8	10.91	頭部欠損

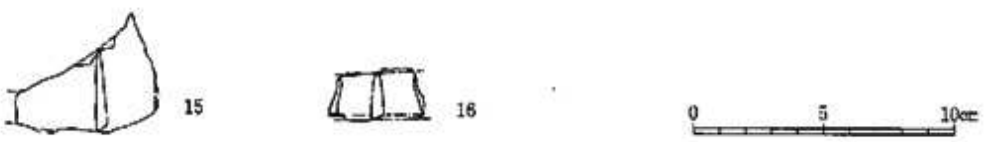
表6　銭一覧表

表	出土地	名称	初鋳年	径 (mm)	重量 (g)	拓本番号	備考
1	土壙 2	開元通宝	621	23.5	2.50	1	
2		景祐元宝	1034		1.23		
3		皇宋通宝	1038	24.0	1.96	2	
4		永楽通宝	1411	25.0	2.61	3	
5	土壙 7	永楽通宝	〃	26.0	3.88	4	
6	土壙 13	皇宋通宝	1038	24.0	1.74	5	
7	土壙 23	不明	—	23.0	2.22		○○元宝，又は○元○宝か？ 腐蝕すすむ
8		政和通宝	1111	25.0	2.31		
9		不明	—	—	2.55		腐蝕激しく銭名判読出来ず ｝二枚付着の状態で出土
10		景(祐)元宝	—	—	(1.09)		〃
11	土壙 39	不明	—	—	(0.81)		1/3 量残　腐蝕激しく銭名判読出来ず
12	土壙 33	天禧通宝	1098	23.0	1.73	6	1/4 量残　腐蝕激しい
13	土壙 34	不明	—	—	1.12		腐蝕激しく銭名判読出来ず
14	土壙 42	熙寧元宝	1068		1.23		
15		元祐通宝	1086	24.0	1.60	7	1/8 欠損
16	土壙 61	洪武通宝		23.5	1.99	8	
17	土壙 79	永楽通宝	1411	25.5	2.87	9	1/8 欠損
18	土壙 80	祥符通宝	1008	26.0	1.86	10	
19		天禧通宝	1098	26.0	2.69	11	
20		政和通宝	1111	24.5	2.79	12	
21		元祐通宝	1086	25.0	2.18	13	
22		不明	—	—	(0.7)		貫の字のみ
23	土壙 108	開元通宝	621	23.5	3.29	14	腐蝕激しい ｝二枚付着の状態で出土
24		元豊通宝	1078	24.0	3.03	15	〃
25		熙寧元宝	1068	24.0	2.09	16	〃
26		大中通宝		23.5	1.99	17	〃
27		永楽通宝	1411	25.0	3.49	18	
28	検出面	皇宋元宝	1101	—	(1.27)		

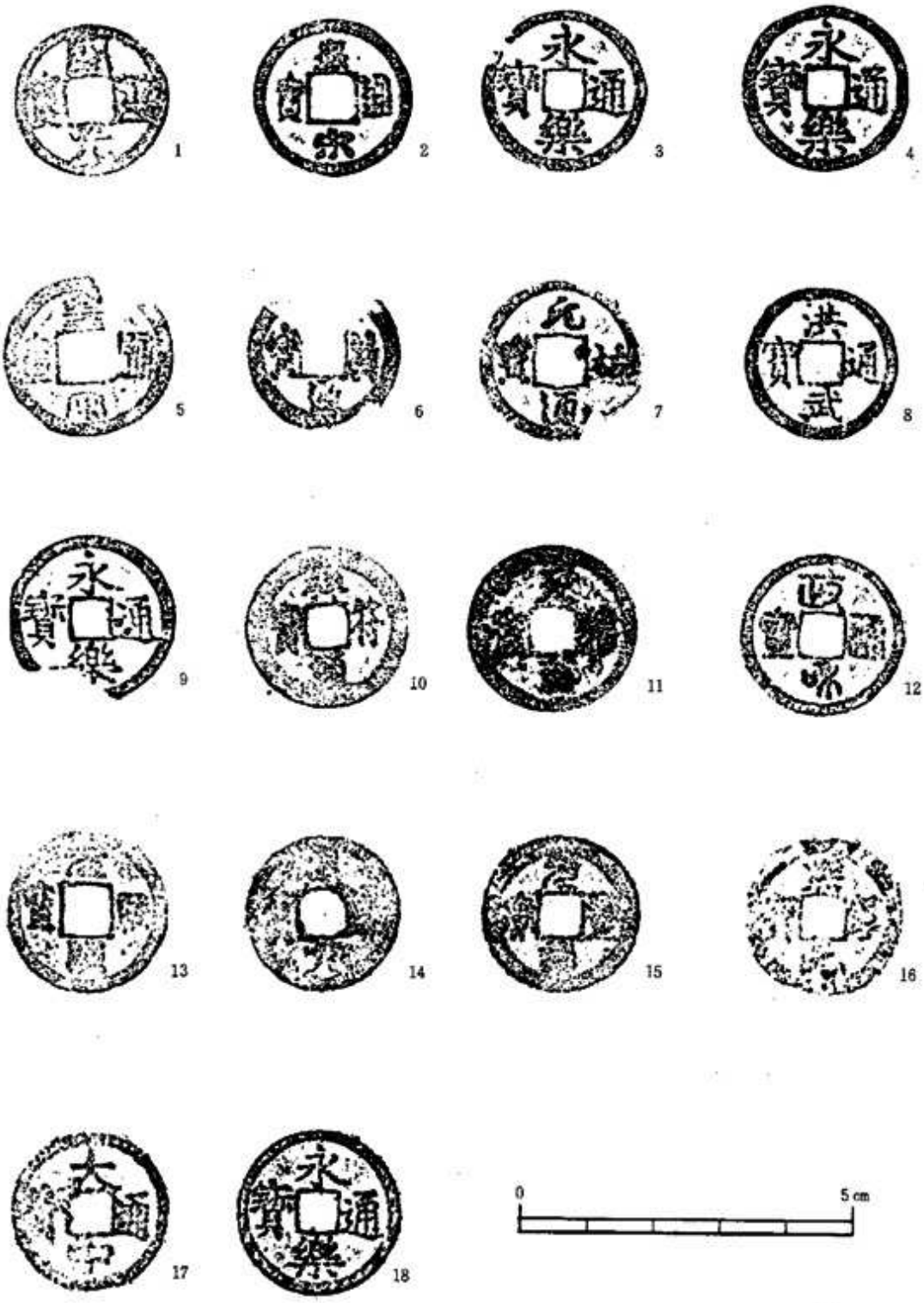








第62図　銅製品・鉄器


1
2
永通寶
3
永通寶樂
4
5
6
元通寶
7
洪武通寶
8
永通寶樂
9
10
11
12
13
14
15
16
太通
17
永通寶樂
18
0
5 cm

第63図　銭

3　土製品・石器・石製品

土製品には住居址から紡錘車(錘部)、土錘、羽口と、土壙からの土製円板等がある。遺物面にみると、かなり大形の紡錘車に比べ、唯1点の土錘は非常に小さいものである。6住出土の羽口は全体の¼程度しか残存せず3片に割れていた。5は内耳土器の底部を利用したものであり周囲は丁寧に擦ってある。6も同様であるがハケ目が見られ、甕頸部片を利用している。7は火葬墓である土壙23から出土した。須恵器の一部で片面を擦っており周囲は故意に打ち欠いたものと思われる。丁度銭とほぼ同程度の大きさであり、出土した脇からは銭が3枚附着したまま出土しており銭として埋めたものだろうか。類例を待ちたい。

石器、石製品としては砥石、石臼等がある。砥石は計11点と多く6住3点、12生2点、6、10、18生各1点、土壙3点、他1点であった。石材は粘板岩（6点）と砂岩（5点）でその石質より荒・中砥、上砥として使い分けているものであろうか。鉄器との関係では良好な刀子、鉄斧を出土した9生からの出土はなく鉄器の見られない12生から2点の砥石を得ている。又住居址に砂岩製のものの比率が中世土壙に比べやや高いが、いずれも資料が少ない為断言できない。

石臼（挽臼）は5点あり、安山岩、輝石安山岩製で上臼（通常回転させ作業する側）だけであり、下臼（固定してある側）は見当らない。土壙42からの2点は上部に大量の煤と炭化物が付着し土壙80からの3点は上部周縁をほとんど欠している。15は30m程離れた1地区の検出面上のものと接合する事ができた。

なお11生からは網物用石錘が22点出土した。長さは6.6～15.3cm、重さは136～698gで平均約12cm、413.5gという数値でありこの類の石ではやや小型のものである。

最後に17の遺物について若干触れておく。これは輝石安山岩を加工したもので規模、特徴は別表の如くである。縦に2つに割れた状態で出土した。外側口縁直下に曲線的な梵字らしきものが2ヶ所、対をなして刻んである。底面中央部は火熱を受けたように焼けているが内面は全く何の変化もない。戸隠神社ではこれと類似するものを護摩鉢としているとの事であるが器形からすると杵使用の臼あるいはこね鉢、手洗鉢の方が適しているようにも思える。だが日常雑器にしては横に文字文様のようなものを刻むのは普通的でなく祭器として考える方が妥当であろう。一歩すすんでこれを梵字として解釈するならば江戸時代のもので護摩釜（炉）の蓋に阿弥陀三尊の種子を配したものがありそのうち脇侍の観音、勢至の種子サク（𑖦）サ（𑖧）がこれによく似るが模写した字が変化した為なのか石材の起伏も手伝い明瞭には分らない。なお奈良正倉院内持仏堂、奈良新薬師寺、吉野喜蔵院などで石製の護摩炉がある（註1）が器形はかなり異なるようである（註2）　（高桑俊雄）

註1　石田茂作「密教法具」奈良国立博物館　昭和43年

2　名古屋大学教授宮坂宥勝氏、神奈川県立金沢文庫専門学芸員真鍋俊照氏御教示による

表7　土製品一覧表

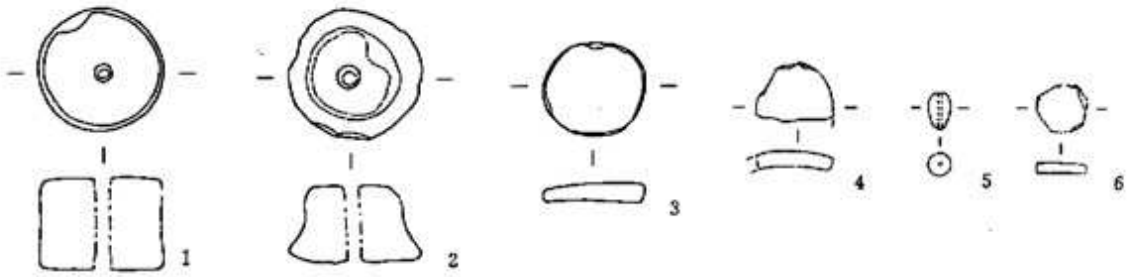
番号	品名	図番号	出土地	最大径 (cm)	穴径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	紡錘車	1	5住	6.3	0.9	4.6	240.0	完形
2	〃	2	9住	6.7	1.2	4.0	165.0	縁辺小欠損
3	土錘	5	6住	1.2	0.2	(長さ)1.9	2.43	完形
4	羽口		6住	(7.0)	(2.0)	—	(139.5)	小片
5	土製円板	3	土壙 118	5.2		1.0	29.6	ほぼ完形
6	〃	4	ピット 160	(3.9)		0.8	(1.3)	半欠損
7	土製品	6	土壙 23	2.6		0.6	5.1	模造品か？

表8　石器・石製品一覧表

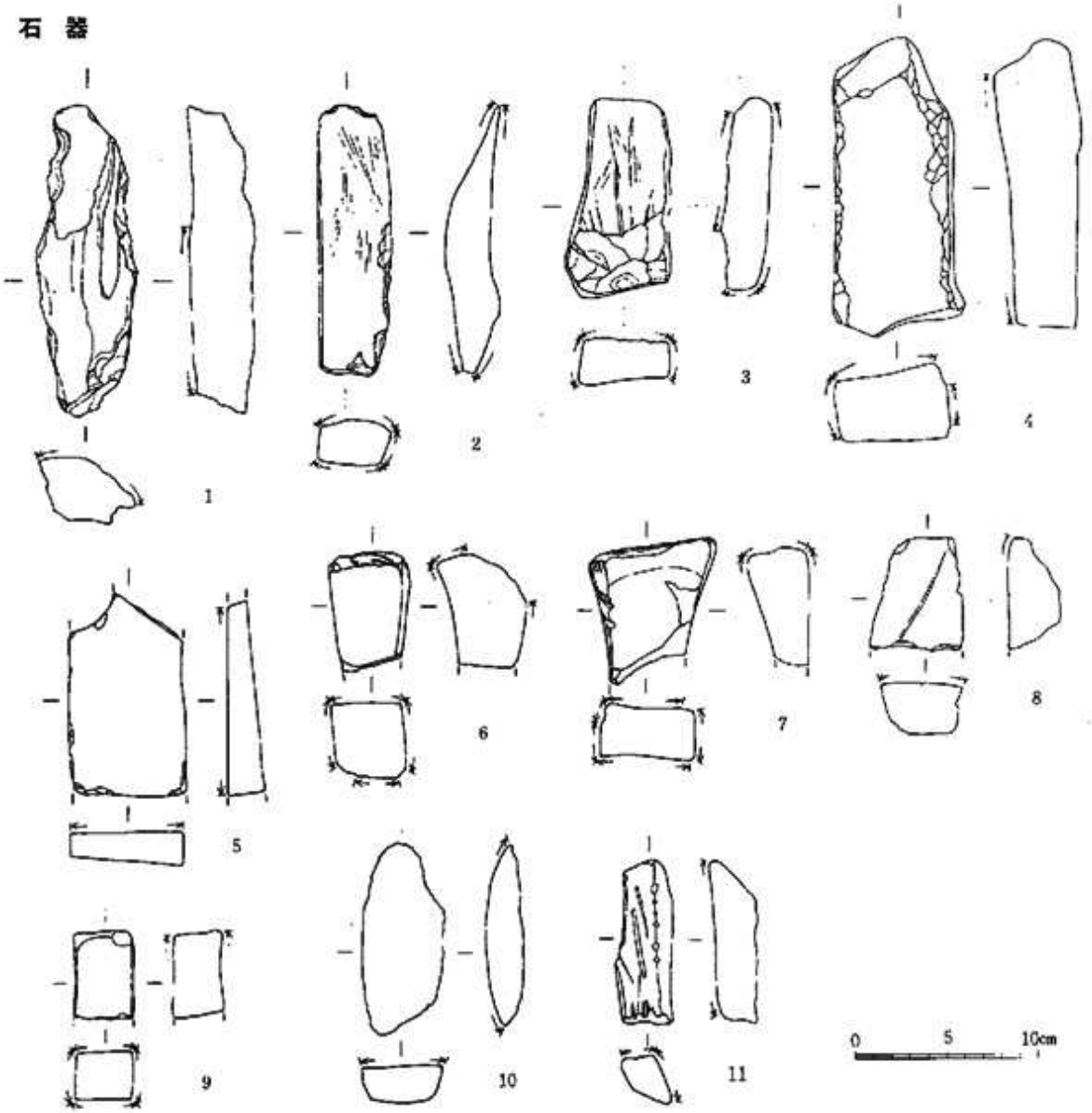
番号	品名	図番号	出土地	長さ (cm)	軸 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	磨石	1	6住	17.1	5.5	3.5	373	粘板岩	使用歴少，痕跡面状　使用面 1面
2	〃	2	〃	14.9	4.1	3.0	225	粘板岩	調整痕多，使用痕面・線状　〃 3面
3	〃	3	〃	11.0	5.8	2.8	228	砂岩	使用痕面・線状　〃 5面
4	〃	4	10住	16.5	7.3	4.8	777	砂岩	調整痕多，使用痕面状　〃 2面
5	〃	5	12住	(10.6)	6.4	1.9	(228)	砂岩	使用痕面状　〃 1面
6	〃	6	〃	(5.6)	4.5	5.0	(170)	粘板岩	片端欠損，使用痕面・線状　〃 4面
7	〃	7	18住	(8.1)	7.0	3.4	(216)	砂岩	片端欠損，使用痕面・線状　〃 5面
8	〃	8	土壙 1	(6.3)	5.1	3.0	(106)	粘板岩	片端欠損，使用痕　〃 1面
9	〃	9	土壙 5	(5.0)	3.3	2.8	(80)	砂岩	片端欠損，使用痕面状　〃 4面
10	〃	10	土壙 6	10.6	4.5	2.2	115	粘板岩	使用痕面状，手持用　〃 1面
11	〃	11	排土中	9.1	3.2	2.8	84	粘板岩	使用痕面・線状　〃 3面
12	石臼	12	土壙 42	(径) 27.3		10.4	8,000	安山岩	上面一部欠損炭化物付着，外面に2穴
13	〃	13		〃 (30.6)		10.2	(3,200)	安山岩	上面炭化物付着，破損面磨耗
14	〃	14	土壙 80	〃 32.2		(11.0)	(9,000)	輝石安山岩	挽面磨耗大，上面周縁欠損・炭化物付着，遺構内接合
15	〃	15	〃	〃 (28.5)		10.2	(6,100)	安山岩	挽面磨耗大，1地区検出面のものと接合，周縁炭化物付着
16	〃	16	〃	〃 (28.8)		(9.2)	(4,300)	安山岩	挽面磨耗大，上面縁辺と 2/3 を欠く
17	石製鉢	17	〃	(口径)29.3	(底径) 24.3	(高さ)19.2	10,600	輝石安山岩	破損して出土，口縁一部欠損，胴部に穴？底部に炭化物付着

石臼の直径（　）分は復元して測る

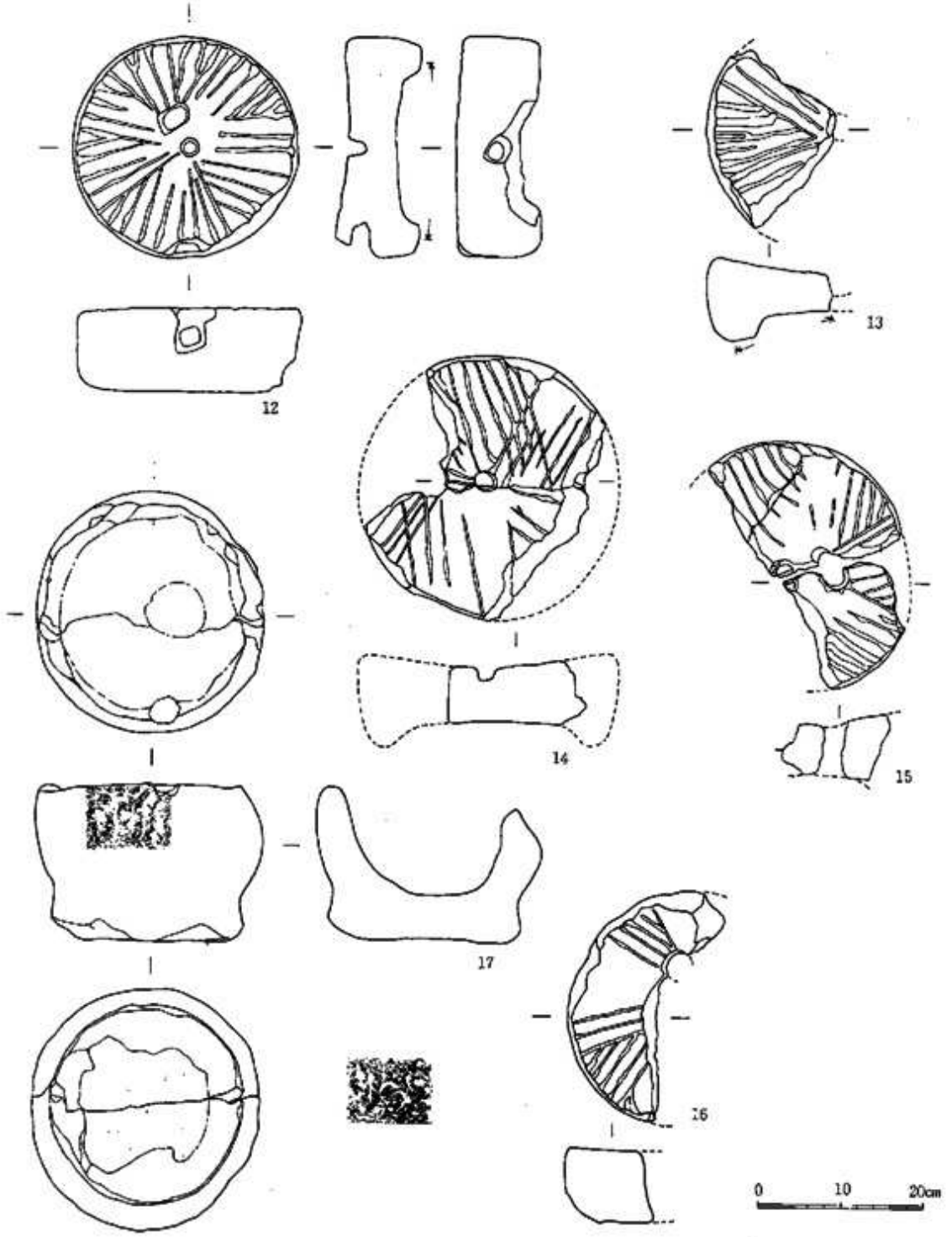
土製品



石　器



第64図　土 製 品・石 器



第65図　石　製　品

第4章　調査のまとめ

今回は駐場整備予定地内で最も堀川に近い場所（4000 m²）を調査した。このすぐ東の馬橋付近、堀川を隔てた林氏宅地内から、縄文土器が出土している事を見聞きした為である。結果は古墳～平安時代までの住居址18、建物址11、中世を中心としたピット530、柵列２、礎石１、土壙130、古代を前後する溝９等を検出し、縄文時代の遺構、遺物は全く見当たらなかった。地質的にもここは、南にある鎖川の影響を受けており、その為に流失してしまったものか、或は適地ではなかったものと思われる。遺構はほとんど全面より検出したが、２地区南部が疎となるようである。以下遺構別に見て行くと下記のようになる。

住居址ではこの北側を調査した昨年に比べ、今回はやや古い時期のものが主となる。５住を除きそれらの主軸方向はN－82°～90°－E（W）と一つの傾向があり、これは昨年も同様であった。規模は盛り土下になる19住を除くと最大の12住で6.6×6.4 m、最小の７住で3.5×3.5 m、上限に近い11、12住は大型であるが、時期による明らかな差異はない。周溝は２、５、６、17住に見られる。いずれも隅を中心に一部施しているのみである。カマドは西壁（５基）或は東壁（11基）に位置し（５住のみ南西壁）、多くが長い煙道をもっていたものと思われる。最長は５住の２ｍである。ただ15住は煙道が途中で滞っており理解し難い。又袖などの施設をもたないものは12基、袖を有するものが５基、石組（粘土）カマドだったと思われるもの１、石芯石組（粘土）カマド１という割合であった。ピットは（主）柱穴と認められるものは３～５住に見られた。他に屋内施設としては11住に方形の張り出しがあり、19住には南にベット状の段があるが、どのような性格をもつものかは分からない。出土土器の総量は18基合計で143.6 kg を計る。12住からの24 kg を筆頭に６住がこれに次ぎ、非常に浅い２住が１ kg であった。９住ピット内、16住南西部床面上から得られた遺物は、出土状況からして良好な一括資料を提供する。又同じく９住出土の鉄斧、鉄鏃は加工用具、祭祀用具を知る上で貴重なものである。これらの遺物より住居址の時期的な集落状況を見ると、７世紀後半～８世紀前半頃は１．２地区の中央部から東へ集落が続いていたものと思われ、９世紀初頭になると、２地区の中央から西側へ集中し、10世紀中頃以降となると、それが北西側へ移って行ったように推量される。これは昨年のＩ地区の傾向とも相似た様相である。

掘立柱建物址について見ると、総柱は１棟のみで側柱は10棟である。８、９を除き棟方向は南北にとっている。柱間は１×２間と２（３）×３間で後者が多い。すべて古代のもので、住居址の時期範囲内にとどまる。このうち切り合いから４～６、８・９は建て直しがあったものと理解されよう。

柵列は２あり、両者とも東西に長い。１はその位置より溝１が利用されていた時に使用されたものと考える。２は中世以降であろうが、柱間は不規則でピット中に石が詰まっており、杉材も残っ

ている。

ピットは非常に多数である。古代と中世以降のものは土色で明瞭に分けられるが、中世のものは切り合って頭初より組合わせとして捉えにくく、結果的には単独の扱いとなってしまった。又、中世のものはかなり小形が多い。

土壙は規模・遺物等により、そのほとんどが中世の墓壙と思われる。このなかには3基の火葬墓を含んでいる。検出面からは総じて浅いが、当時の生活面は30～40 cm 程上部にあり、更にその上に封土があったものと考えられる。ただ土壙80は他の土壙とは趣を異にし、規模は大形のものであるが、深い落ち込み内部では多量の石が入り込み、梵字らしきものが書かれた石製の鉢を出土した。又、124、125、135などは古代の土壙である。特に円面硯を出土した125は14生程の大きさで、竪穴状遺構、或いは大形の土壙として分類すべきものであろうか。

溝は9本検出した。すべての遺構に先行する砂礫の入った溝のうち、7の底面からは古墳時代に属する壺の口縁片を見る事ができる。粘質土を覆土とする溝は、竪居址を切っているものがある。このうち1は中世頃より管理され、現在に至っているものと考えられる。

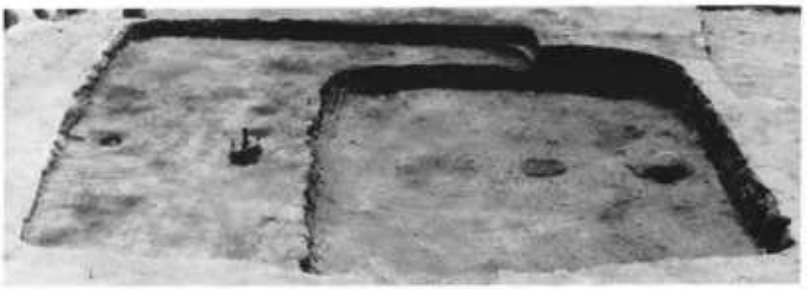
又、今回の調査は小字名で屋敷添に当たり、西には東小路、中小路など古い地名も見えており、中世頃から大規模な集落となった事をうかがわせている。

出土土器について個々にみると、第一の成果として奈良時代以前に遡る資料がある程度まとまって得られたことが挙げられる。具体的には蓋受けをもつ須恵器坏Aと、それに組合わさるつまみのない蓋A、内面端にかえりを持つ蓋B、ロクロ使用のない土師器坏Aなどがそれにあたる。これらを出土したのは、第11．12．15．16号住居址で、この時期の遺構がまとまって存在していたのを確認したのは非年度に続く成果である。次に8世紀末から9世紀前半に比定される資料が多く得られたことも成果として挙げられる。供膳形態で須恵器がほとんど占めている土器の組成がよく窺われる。第二には供膳形態の土器が、ほとんど内黒の土師器で占められる時期（10世紀）の良好な資料が得られた（第6．7．9号住居址）ことである。特に第9号住居址のピットからは、皿・坏・塊の一括遺物があり、当時の供膳形態土器の組み合わせがよくわかる。最後に特殊な土器の出土について触れたい。その1は土壙125と第9号住居址から出土した円面硯の破片が挙げられる。僅かな破片ではあるが、松本市内では初めての出土で、古代における奈良井川西岸地区の重要性を一層強調するものといえる。その2は、第9号住居址床面から出土した不明土製品（151）で、どのような器形になるのか、用途は何かまったくわからない。笹沢浩氏の教示によると、長野県内に他に3例あるということであるが、いずれも何か判明しない。今後の究明の待たれる遺物である。

今次発掘調査は種々の制約はあったが、その結果はそれなりの成果があったものと判断している。これには県関係機関をはじめ、地元南栗公民館、土地改良区他多くの方々にお力を戴いて完了したものである。衷心より謝意を表して結語とする。（神澤昌二郎）

図　　版

第1号住居址

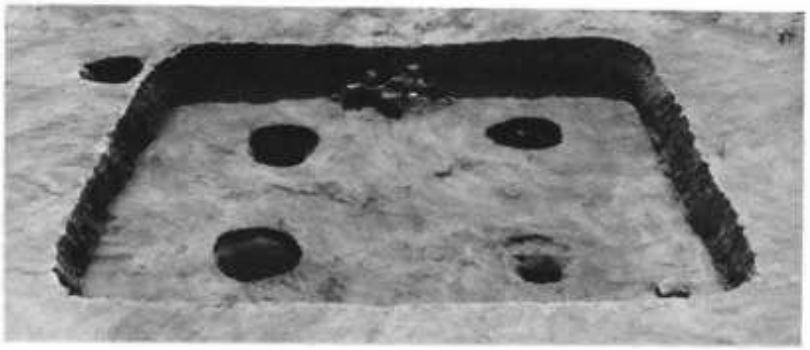


第1号(右)・2号住居址

第3号住居址

第4号住居址

第1図版　住 居 址 1



第5号住居址

同 上 カマド

第6号住居址

第7号住居址　カマド

第2図版　住 居 址 2

第8号住居址

第9号住居址

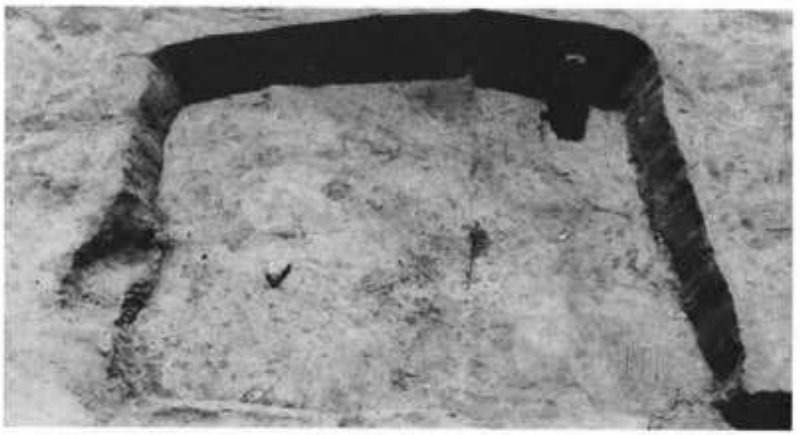
同 上 ピット内遺物出土状況

第10号住居址

第3図版　住 居 址 3

第11号住居址

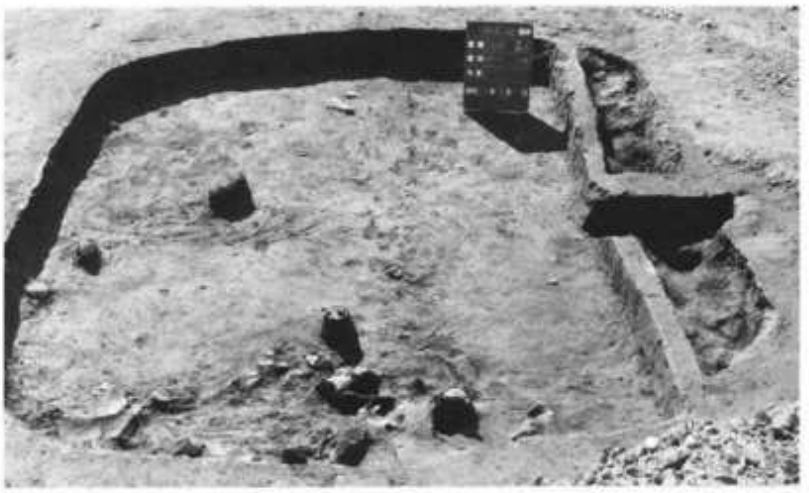
第12号住居址



第14号住居址

第15号住居址

第4図版　住 居 址 4



第16号住居址
溝6

第18号住居址

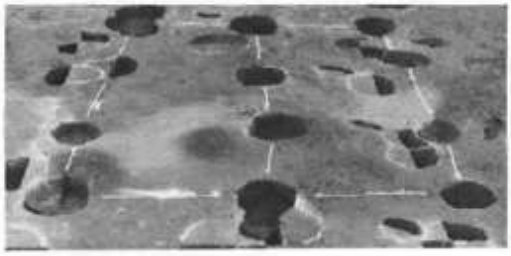
第19号住居址

第5図版　住 居 址 5

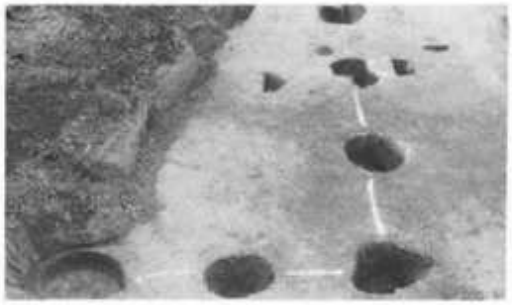
建1

建2

建3



建4－6



建7

建9

柵　列

第6図版　建物址・柵列

礎石

(左) 土壙23

(右) 土壙81出土遺物

土壙80

土壙103

第7図版　礎石・土壙

溝 3

溝 4

溝 5

溝 7

第8図版　溝　　址

11住
189

1住1

5住
26

1住6

16住
236

16住
237

16住242

16住241

16住240

第9図版　出土遺物 1

16住 243

16住 244

18住 287

18住 286

9住 157

6住 75

6住 47

16住 54

9住 140

土壙80 326

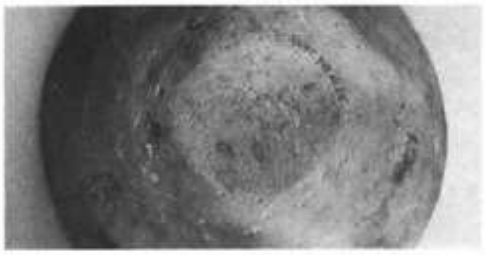
20住 27

第10図版　出 土 遺 物 2

151 (外)

151 (内)

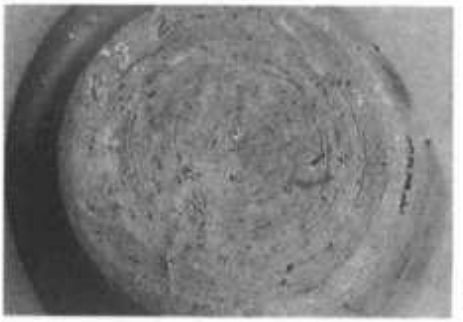
278



130

217

236



97

16

267

181

176

第11図版　出 土 遺 物 3

17

12

14

15

第12図版　出 土 遺 物 4

松本市文化財調査報告No.38

松本市島立南栗遺跡

昭和61年3月20日印刷
昭和61年3月30日発行

発行　長野県中信土地改良事務所
　　松本市教育委員会
印刷　電算印刷株式会社